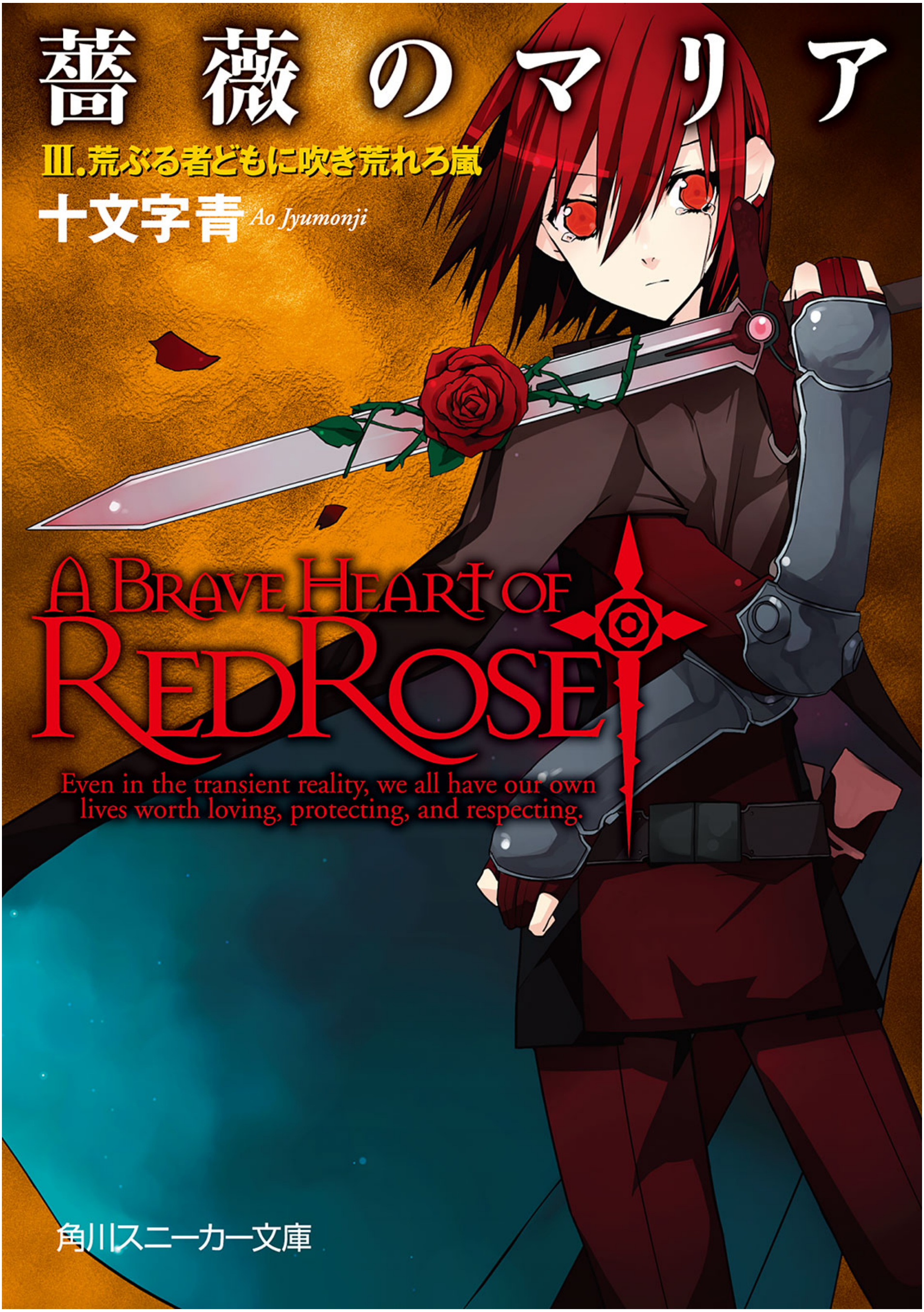

薔薇のマリア
Ⅲ.荒ぶる者どもに吹き荒れろ嵐
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

Ⅲ.荒ぶる者どもに吹き荒れろ嵐




サンランド無統治王国
首都エルデン第八区
東部風料亭〝泉里(センリ)〟
トマトクンが、負ける……？
アジアンに？
嘘だ。トマトクンが誰かに、何かに負けるなんて、今まで一度も考えたことがなかった。トマトクンだって人間だから、勝つこともあれば負けることもあるはずなのに。不思議と、そういう次元を超越した存在なんじゃないかと思わせるところが、トマトクンにはあった。いつからか知らないが、何の抵抗感もなくそう信じこんでいた。
間違いだったのか？ それとも、あの鬼畜変態のアジアンは、そのトマトクンをも超えるほど、実はとんでもなく強かったのか？ それこそ信じられない。
アジアンはさらにトマトクンを痛めつけようと動きを速める。移動が。断末魔の剣が。時折、放たれる暗器による牽制が。どんどん速度を増してゆく――



無数の白い管のような物が、互いに絡みあいながら壁や床をうねうねと上を目指して延び、高さ五メーテルはありそうな天井の中央で、球形の装置に繋がってたばねられている。よく見ると、すべての管には文字か紋様のようなものがびっしりと刻まれていた。

それらの形は一定ではない。絶えず変化しているようだ。色も変わる。かなり淡い色だが、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫。まるで虹みたいだ。

この空間にいるのは僧服を着た大男一人だけだった。

いや、あの球形の装置の中に、もう一人いる——

薔薇のマリア

III．荒ぶる者どもに吹き荒れろ嵐

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ⅲ
— Blow, storms, and crack their fury —
Ao Jyumonji

First published 2005 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

A BRAVE HEART OF RED ROSE III

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE

III

MAIN CHARACTERS



SIX
シックス

クランSMC首領。



Azian
アジアン

クラン《昼飯時（ランチタイム）》の頭領（マスター）。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者（クラッカー）。



Molly Lips
モリー・リップス

アサイラムの医術士。



Denis Sunrise
デニス・サンライズ

《秩序の番人（モラル・キーパーズ）》総長。



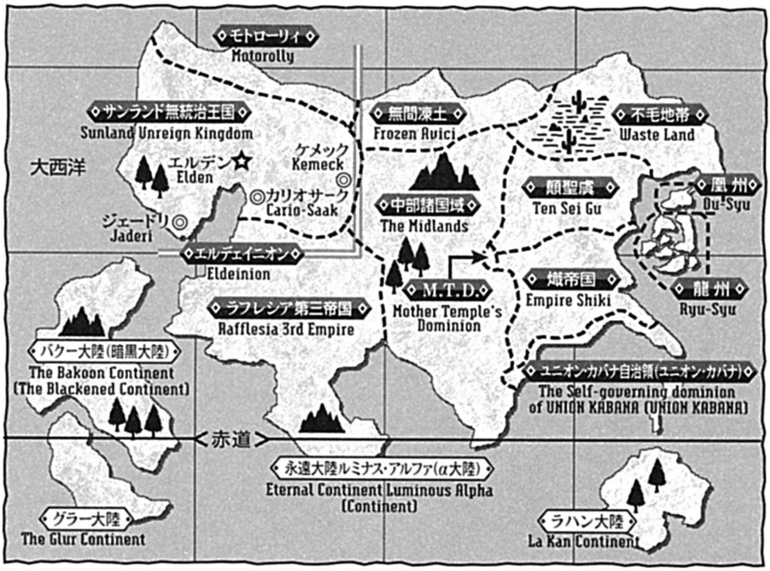
Tomatokun
トマトクン

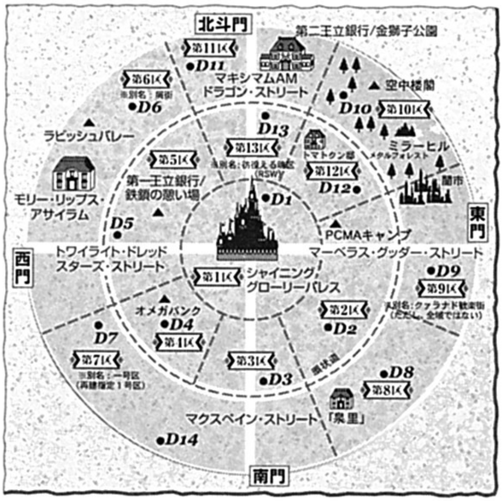
クランZOOの園長（マスター）。

and the others

Johann Sunrise ヨハン・サンライズ
Fall 琺瑠 & Rasa 羅叉
Beatrice ベアトリーチェ
and“ZOO”

The World of “A BRAVE HEART OF RED ROSE”





Elden:the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作 On Graphics

Omenage 897 9th revolution 13th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

〝銀の砦(シルバリイホールド)〟

chapter.1

でも、生きてる。

　鐘かねが鳴る。重くしめやかに鳴り響ひびく。銀の砦シルバリイホールド第四支塔の天頂部で鐘が哭ないている。

　九巡じゅん月げつ半ばの泣きだしそうな曇くもり空に、無数の真っ白い花弁が舞まった。

　花々は地に落ちて踏ふみしだかれ、やがて無残な姿をさらすのだろう。

　そして、いつか朽くち消えてなくなる。

　死。

　悼いたんでも、惜おしんでも、恋こうても、汚けがしても、おとしめても、永遠の死者は二度と決して還かえらず、時が忘ぼう却きゃくのみを生者にうながす。あるいは、強制する。

　だから、心配しなくていい。今は涙なみだを流せばいい。その棘とげは少しずつ鈍にぶくなってゆき、死はついに単なる薄うすっぺらな事実と化す。

　次にきみが胸を痛めるのは、彼や彼女の死に対してではない。

　彼や彼女の死に慣れ、かつての痛みが薄らいでいることに、きみは傷つけられる。

「我らが義のもとに剣けんを振ふるい、剣に斃たおれし勇ゆう敢かんなる同志たちに──」

　銀の砦中庭でとりおこなわれた葬そう儀ぎは、質しつ実じつ剛ごう健けんを旨むねとする秩序モラルの番人・キーパーズにふさわしく簡素なものだった。慰い霊れい碑ひの前に骨壺を並べ、列席者が次々と白しら菊ぎくをそなえたあと、総長デニス・サンライズの号令一下、全員で無言の祈いのりを捧ささげる。それだけだ。

「黙もく禱とう」

　白菊の花弁が少し湿しめった強い風に舞い上げられ、空で踊おどっている。

　マリアローズの真しん紅くの頭とう髪はつも、風になぶられて乱れた。

　胸に手をあてて死者に語りかけようとしたが、祈りの言葉なんて一つも知らない。

　死んだ者に何を言っても、どうせ届かないだろう。

　中庭につどった番人は、銀の軍団ザ・シルバリイの通常任務についている者をのぞいた百数十名。それに、マリアローズをふくめたＺＯＯズーの六人と、生前、死者とつきあいのあった外部の人間若じやつ干かん名めい。

　ベアトリーチェが皆みなから離はなれてひとり立ちつくし、両の拳こぶしをきつく握にぎりしめて、うつむいている。

　デニス・サンライズが解散を告げるまで、マリアローズは彼女のことばかり見ていた。

「マリアローズ」

　肩かたを叩たたかれて振り返ると、カタリが似合わない沈ちん痛つうな面おも持もちで鼻をこすっていた。

「わしらも」

「あ……うん」そう返事をしたものの、紺こん色いろの平服に身をつつんだ番人たちが粛しゆく々しゆくと中庭をあとにするなか、ベアトリーチェは動く様子がない。「──ごめん、僕、ちょっと」

「ん？」カタリはマリアローズの視線の先に目をやって、「ああ……」頭をかきながら、後ろのトマトクンとユリカ、サフィニア、ピンパーネルをちらりと見た。

「じゃあ……」ユリカの眼まな差ざしは気づかわしげで、あったかくて──そのぶん、今のマリアローズにとっては痛かった。「わたしたちは先しやきに行って、門のところで待っているから」

「うむ」トマトクンはうなずきはしたものの、何を考えているのかうかがいしれない。ピンパーネルはいつもどおりの無表情だ。サフィニアはこの世の無常をぜんぶ自分の責任だと思いこんでいるかのように、唇くちびるを噛かんで下を向いている。

「──ごめん、そんなに待たせないから」

「アホ、何べんも謝んなや。そないなこと気にせんでええわ。どうせみんな暇ひまやしな」

「そっか」

「せや。ほな、行っとるで」

　カタリが去り、ユリカとピンパーネルがそれにつづいて、サフィニアは何か言いたそうにしていたが、結局、口を開かなかった。トマトクンはマリアローズの頭に手を置いて、髪かみの毛をくしゃくしゃにしていった。

　ベアトリーチェは、まださっきと同じ姿勢のままでいる。

　近づいてゆこうとすると、足がすくむ。

　深呼吸をしていたら、デニス・サンライズがすぐ前を通りすぎていった。髭ひげの〝太たい陽よう鬼き〟に付き従うは、外見は凡ぼん庸ような冷たい理り屈くつ屋の副長ヨハン・サンライズ。そして、左頬ほおと右の眉まゆ尻じり、顎あごに薄い傷きず痕あとのある物ぶつ騒そうな容よう貌ぼうの、同じく副長〝死神〟羅ラ叉サ。まっすぐな黒髪をまんなかで分けた東方系美女の琺瑠フオール副長は、マリアローズに軽く会え釈しやくしていった。

　こころなしか、銀の軍団の重じゆう鎮ちんたちも、今日は精せい彩さいを欠いていた。

　あの分からず屋のヨハンだけは別で、銀の砦を押しつつむ深い悲しみも、彼には何の影えい響きようも与あたえていないようだったが。

　でも──と、マリアローズは思う。僕だって、あの男と大差ない。僕は悲しんでいるわけじゃないんだから。

　いつの間にか、ベアトリーチェのそばに、小こ柄がらだが俊しゆん敏びんそうな体つきのまだ若い番人がいた。

　黄土色の短髪と、よく動く暗い緑色の瞳ひとみに見覚えがある。

　秩序の番人七番突とつ撃げき隊隊長補チェス・ピード。いや、元

隊長補、か。

　死んだ元隊長のあとを継ついで、現在、七番突撃隊は彼が率いているらしい。

　チェスはベアトリーチェに何か声をかけている。「……のせいじゃない。そんなに自分を責めても……」慰なぐさめているのか。ベアトリーチェが首を振った。「わかっています」「わかっているようには見えないから、総長も原隊復帰を認めないんでしょう」「わかっています。わたしがいくら後こう悔かいしても、焔ホムラは生き返らない。あなたたちの隊長を、わたしの不注意で奪うばってしまった。ちゃんとわかっています」「それが違ちがうというんです」チェスが声を荒あらげかけてあたりを見回し、マリアローズと目があった。「あ──」

「どうも」

　マリアローズが先に挨あい拶さつすると、チェスは深々と頭を下げた。

「どうも、今日はわざわざお越こしいただいて、ありがとうございます」

「いえ……」

「隊長も喜んでいると思います。あの人、ああ見えて寂さびしがりで、にぎやかなのが好きでしたから。我が隊の者たちも隊長に感化されて、非番のときは皆でよく騒さわいだものです。本当は、酒盛りでもしてやるのが一番の供く養ようだと思うんですが、あの人だけの葬儀じゃないし、団のしきたりもあるので、そうもいかなくて」

　チェスは一つ息をついて慰霊碑の方へと視線を転じた。

　中庭を埋うめていた人々は、すでに大半がひけていたが、慰霊碑の前には二十名ばかりの番人がかたまって、ある者は隣となりの者と何やら話しこみ、またある者は押し黙だまって瞑めい目もくしている。

　だが、その中に、明らかに番人ではない者が一人だけ交じっていた。

　体格からして、たぶん子供だろう。白いシャツに黒い上着をはおり、下は同じく黒い半ズボンをはいて、白い靴くつ下したに黒い革かわ靴ぐつをあわせている。鳶とび色いろのやわらかそうな頭髪を丁てい寧ねいに横分けにし、金持ちの子し弟ていを思わせる整った顔立ちの、十二、三歳くらいに見える男の子だ。

　ただし、彼が両手で抱かかえているのは酒さか瓶びんだった。

「ああ、あの子は──」マリアローズの訝いぶかしげな表情に気づいたのだろう。チェスが男の子の正体を教えてくれた。「シデオですよ。あのとき、下水道で案内役をしてくれた溝鼠族ブラウニグの」

「へ？」

　嘘うそ。

「私も驚おどろきました」チェスは苦く笑しようしている。「でも、間違いないです。声が同じでしたし。何でも、隊長に一いつ杯ぱい奢おごると約束していたとか。酒を飲むような年格好には見えませんけどね」

　酒もそうだが、下水道の中で、報ほう酬しゆうをもらったら女を買うとか言っていたような気が。

　呆あつ気けにとられていると、シデオはやおら酒瓶の蓋ふたを開けて、ぐびりと一口あおった。

「──や、約束、し、したんだぞ、あとで一いつ緒しよに酒飲むって！　約束は、ちゃんと守らないと、だ、ダメなんだ。お、俺は一人でも約束守るからね。酒、も、持ってきた。俺は、飲んだ。お、お前も、ちゃんと飲め……！」

　シデオはそう叫さけんで酒瓶を地面に叩たたきつけ、上着の袖そでで顔をゴシゴシぬぐいながら走り去っていった。

　その後ろ姿を見送っていたチェスが、遠い目をして「焔ホムラ隊長は──」と呟つぶやくように言った。

「どういうわけか、とにかく他人に好かれる人でした。実は、葬そう儀ぎにきていただいた方々だけでなく、花を届けてくれたり、個人的に喪もに服してくれている方がたくさんいるんです。私もあの人の下にいるのが誇ほこらしかった。いい上官でしたし……やっぱ

り、あの人のことが好きだったんだと思います。根こん拠きよもなく、殺しても死なない人だと思っていました。それが、いきなり死ぬんだもんなあ……」

　そんなことを言われても、マリアローズは「そうですか」と返すくらいのことしかできない。焰とは一度、行動をともにしただけなのだ。たったそれだけの薄うすい縁だ。

　だとしても、口調が投げやりになりかけた自分は最低だ。

「何だか愚ぐ痴ちみたいになっちゃいましたね。申し訳ありません」

　そうして、チェスに謝らせて。彼は悪くないのに。

　チェスはベアトリーチェに向きなおった。

「とにかく、君はもう少し休んだ方がいい。落ちついたら、復帰を許可してもらえるよう、私からも総長と副長に頼たのんであげるから」

「わたしはもう落ちついています」

「そう言い張って、たとえばあのヨハン副長に納なつ得とくしてもらえると思いますか？」

「それは……」

「こういう言い方はしたくないけど、あまり団の任務を甘く見ない方がいいです。ベアトリーチェ、君が今のような中ちゆう途と半はん端ぱな状態で復帰しても、何かしくじって死ぬのがオチだ。そんな結果になってしまったら、誰だれよりも隊長が喜びませんよ」

「──わかって、います……でも、わたしは！」

「わかっていないよ。わかっていたら、そんなことは言わないでしょう」チェスはそこでふっと表情をゆるめた。「隊長は君を大事に思っていた。隊長の奥方もそうでした。君は特別扱あつかいされているようで嫌いやかもしれないけど、人の気持ちは大切に受けとっておくべきものじゃないですか。だから、今は休養してください。いいね」

　さすがにベアトリーチェもチェスの情理をつくした説得にあらがえず、かすかにうなずいた。

　それを見たチェスは、立ち去る間ま際ぎわ、ベアトリーチェの肩かたに手を置こうとしたが、やめた。

　いや、やめたというより、ベアトリーチェが少しあとずさって逃にげたのだ。

　チェスは一いつ瞬しゅん、目を瞠みはったが、すぐに何か察したようにゆっくりとまばたきをした。

「──すまない。それじゃあ」

　ベアトリーチェは無言だった。軽く手を挙げてみせてからその場を離はなれたチェスの方を見ることもしなかった。マリアローズは迷った。何を言えばいいのだろう。そもそも、何か言うべきなのか。ベアトリーチェは、あのときみたいに自分で自分を抱だきしめて震ふるえている。何もかもを拒きよ絶ぜつして、自分を守ろうとしている。そんなきみに、僕が何をしてあげられる……？

「……笑え」

　やがて、ベアトリーチェが先に口を開いた。

　その瞬間、重苦しすぎる沈ちん黙もくに耐たえかねていたマリアローズは、ほっとした。

　安あん堵どした自分が心底嫌きらいだった。

「わたしを、笑え、マリアローズ。わたしは無む駄だだ。わたしほど無駄な存在はない。焔ホムラ、それに七番突とつ撃げき隊の五人、サックドールの制圧で四人、今日までの掃そう討とう戦で三人死んだ。十三人だ。わたしがヘマをしたせいで、十三人も。十三人が命を犠ぎ牲せいにしてくれたおかげで、わたしはこうして生きてる。それなのに、わたしは……こう思ってるんだ。助けて欲しくなんてなかった。助かりたくなかった──死ねばよかった」

　そんなふうに思うものじゃない。

　言うのは簡単だ。だが、本当にそうだろうか。マリアローズがベアトリーチェの立場だったらどうだ。間ま違ちがいない。ベアト

リーチェと同じことを考える。それでも、言えるか。

　──言えない。

　マリアローズは、こんな状じよう況きようでいけしゃあしゃあともっともらしいことを言えるほど図太くないし、やさしくもない。そして、何より、マリアローズには言う資格がない。

「いったいどうしてだ？　誰がどう勘かん違ちがいしたんだ……？　わたしなんかを助けだすために、そんな危険を冒おかすなんて正気の沙さ汰たじゃない。なあ？　教えてくれ、マリアローズ。ずっと訊ききたかったんだ。お前に訊きたかった。だって──」

　そうだ。

　ああ、ベアトリーチェ。そのとおりだ。

「お前なんだろう？　お前が」

　ベアトリーチェはものすごい目つきでマリアローズを睨にらみつけ、奥歯を嚙かんだ。

　ギリリ、と音がした。

「お前が、総長に話を持っていったんだ。わたしを助けろと。そうだろう？　尋たずねたら、当事者には知る権利があるといって、ヨハン副長がぜんぶ教えてくれたんだ。お前が。お前が。お前が。お前が。お前が。お前が。お前が。お前が。お前が！　お前が……！　お前が……わたしがＳｍＣにつかまっていることや、サックドールのことを、お前が言わなければ、誰も──誰も、死ななかった。わたし以外、誰も。焔ホムラは、死ななかったんだ」

「そ……」その先が出てこない。声が出ない。

　嘘うそだ。

　わかっている。僕は卑ひ怯きようなだけ。どんな言葉もおそらく今は無力だから、言わないだけだ。

「なぜ放ほうっておいてくれなかった……？」見捨てられないと思った。「わたしが死ねばよかったんだ」そうは思わなかった。「わたしだけでよかった」あのときは、ベアトリーチェのことだけ

で。「──でも、わたしは生きてる」たしかに、そのために何人も死んだ。

　でも、それは結果論だ。

　すべて間違っていたとしても、あのときは正しいと思った。それ以外、考えられなかった。

　これは単なる言い訳だろうか？

　自分は結局、正解に見える不正解を選んだ大おお馬ば鹿か者にすぎないのか？

「何でわたしは生きてるんだろう」

　そんな悲しいことを言わせるために、僕はきみを助けたかったわけじゃない。

　けれども、そうなってしまった。

「わたしはまだ生きてる。大好きだった人が、仲間たちが死んで、傷ついたのに、生きてる。辱はずかしめられて、汚けがされて、憎にくしみだけを植えつけられて、それでもわたしはまだ、生きてる。どうしてだろう……？　わたしなんかに生きる価値があるとは、どうしても思えないのに」

「それでも──」マリアローズは拳こぶしを握にぎりしめて、自分を奮いたたせようとした。負けてしまいそうだ。目をそらしたい。

　ベアトリーチェ。

　くすんだ金きん髪ぱつを顎あごのラインで切り揃そろえ、思いつめたような深い青の瞳ひとみが印象的で、境きよう遇ぐうが自分とちょっと似ていて、アサイラムで育ったからモリーの子供で──出会って間もないけれど、赤の他人とは思えない。十分にかわいらしいといえる彼女の顔が、ゆがんでいる。ひどくゆがんでしまった。

　ベアトリーチェは徹てつ底てい的に傷つけられたのだ。心身ともに痛めつけられ、苦しみと悲しみと後こう悔かいと憤いきどおりの虜とりこになっている。きっと、今にも噴ふきだしそうで、堅けん牢ろうな銀の砦の中でずっと我が慢まんしていて、ようやくぶつける場所を見つけたのだろう。

　ああ──僕は間違っているかもしれない。またあやまちを犯おかすのかもしれない。おかしなことを言おうとしているのかもしれない。

　だが、マリアローズはつらいのだ。どうか「何で生きているんだろう」なんて言わないで欲しい。だって、マリアローズもそう思ってきたからだ。何度も、何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も、数えきれないくらいそう思った。

　僕はどうして生まれてきたんだろう？

　なぜ、こんな僕が生きていかないとならないんだろう？

　それは絶望と闇やみしかもたらさない問いだ。

　ダメだ、ベアトリーチェ。いけない。そっちは暗い。暗すぎる。

　戻もどっておいでよ。お願いだから。

「それでも、僕は──きみを助けることができてよかったって、そう思ってる」

「お前は……！」飛んできた。怒ど声せいと拳が同時だった。ガゴン、とすごい音がした。顎の骨がはずれたかと思った。頬ほおを殴なぐられたマリアローズは、地面に倒たおれこんで、瞬しゅん間かん、見当識を失った。「お前は、何も知らないで！　わたしが焔ホムラを好きだったことを、大好きだった気持ちを知らないから！　わたしが七番突とつ撃げき隊にいたころ、よくしてくれた仲間が、わたしのせいで、何人も死んだんだ！　それなのにお前は、よくもそんなことが……！」

「僕に──僕に言う資格がないなら、モリーに言ってもらう！　死んだ人たちだって、きっと言ってくれるよ！」

「母様や死者の言葉を、お前ごときが語るな！」

「じゃあ！」マリアローズは地面を思いきり叩たたいた。まずい。何かが溢あふれてくる。そんなものは必要ない。しかし、抑おさえられそうもなかった。「……じゃあ、どうすればいいんだよ？　きみに生きてることを肯こう定ていしてもらうためには、どうすればいい？　何も方法はないの？　せっかく、生きてるのに。きみはずっと、何で自分なんかが、自分なんかがどうしてって思いつづけ

るつもりなの？　それって……よくない。ベアトリーチェ、すごくよくないよ。僕は」

「──マリアローズ……」

「信じてくれなくてもいいけど、僕にもわかるんだ。何で自分は生きてるんだって思う気持ちは、わかる。だから、僕のことを責めてくれていい。僕を恨うらむなら恨んでもいい。でも、自分を殺さないでよ。自分が生きてることは、認めて、許してあげて欲しい」



　ベアトリーチェは血がにじんでいる自分の拳を見つめ、それからマリアローズに目を移した。

　たぶん、手加減なしだったのだろう。殴られた頰が、ジンジン疼うずく。女の子とはいえ、ベアトリーチェは番人としての訓練をずっと受けてきて、実戦も経験しているのだ。痛い。当然だ。

　そして、殴ったベアトリーチェもまた、傷ついていた。

　いや、それ以前に彼女は傷だらけだった。

　その痛みを一人でひたすらこらえていたのだろう。

　ベアトリーチェは崩くずれ落ちるように地面に膝ひざをついて、胸のまんなかをかきむしるように両手で押さえた。

「……大事なものが……なくなったんだ……もう、とりもどせない……」

　異様だった。

「──つらい……息をしているのが、つらい……生きていると思うことが、つらい……今が一番つらいって、どこかでわかってる……そのことが、つらい……」

　無表情なのに、涙なみだがこぼれている。

　とめどもなく流れている。

「すまない……マリアローズ……お前のせいなんかじゃない。お前を責めて……お前を傷つけて……わたしは……自分を罰ばつしたかっただけだ。自分は生きているに値あたいしない人間だと思いたかった……最低の屑くずになりさがりたかった……そのために、お前を利用したわたしは……何もしなくたって……最初から──最低の屑だ」

　八つ当たり。悪口雑言。重ねれば重ねるほど、自分が醜みにくくなって、嫌きらいになり、苦しくなる。

　そういう日々がマリアローズにもあった。

　それどころか、つい最近までそうだった。

「それなら、僕だって同じだ。僕も最低の屑だよ。でも……」

「生きてる」

　ベアトリーチェは胸の前で広げた両の掌てのひらに目を落とした。

「──生かされてる。わたしを救ってくれた人がいる」

　そして、握りしめた。

　握りつぶすように。

「ただでは死ねないな。無む駄だ死にはできない……マリアローズ、覚えてるか。前に、わたしの命にはきっと使い途みちがあると、お前は言った」

「言ったかな、そんなこと」

「ああ、たしかに言った。わたしは探そうと思う。わたしの命の使い途を」

　ベアトリーチェは袖そでに涙をしみこませると、そっと微笑ほほえんでみせた。それは決して好ましい種類の微び笑しようではなかった。かといって、これ以上、マリアローズがどうこうできるとも思えない。あとは時間が解決してくれることを祈いのるしかない。

　ベアトリーチェがおずおずと手を伸のばし、マリアローズの頰に触ふれ、「痛いか」と訊きいてきたとき、祈るべき神もいない曖あい昧まいな祈りは明めい瞭りような願望となって、信じたいという気持ちに変わった。

「たいしたことないよ」

「嘘うそつけ。腫はれてる」

　ちょうどそのころ、身よりのない目の不自由な幼女の手によって、一通の書状が銀の砦シルバリイホールドに届けられたことをマリアローズとベアトリーチェが知るのは、しばらくしてからだった。

　その書状は、紙ではなく薄うすくのばして四角く成形した人間の顔面の皮ひ膚ふに血で書かれていて、ＳＩＸの名で秩序モラルの番人・キーパーズ総長デニス・サンライズに宛あてられていた。

　皮膚は、いくつかの特とく徴ちようにより、昨日から行方ゆくえ不明になっていた番人のものと判明した。

一号区会戦が行われるのは、その五日後のことだ。

Omenage 897 9th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第七区
〝二号区〟

chapter.2

旧き友よ

かつて、初代キング・グッダー子飼いの黄昏のトワイライト・魔術士団ドレツドスターズをたばね、自ら〝∞インフイニテイ・Ｆ〟を名乗った一人の魔ま術じゆつ士しがいた。

彼の名はフレディ。

フレディが百年に及およぶ忠誠をかなぐり捨て、主君に反旗をひるがえしたのは、オーメネイジ三十年代初頭のことだといわれている。

だが、キング・グッダーは「君臨すれども、統治せず。支配すれども、関知せず」の原則を曲げなかった。フレディが第七区を占せん拠きよしておのれの宮きゆう殿でんを築いても関心を示さず、魔導兵団を動かすことすらしなかった。

焦じれたフレディは、シャイニンググローリーパレスに使者を送った。

禅ぜん譲じようか、戦いくさか。

魔術戦争の舞ぶ台たいとなれば、エルデンは市内全域が焦しよう土どと化すであろう。

ところが、キング・グッダーはこれも無視した。

フレディは激げき怒どしたという。

当時、初代キング・グッダーはいまだ健在だったが、〝古代九頭竜の呪のろい〟と魔導兵団の制せい御ぎよに持てる魔ま力りよくのすべてをそそぎこみ、もはや人前に姿を現すこともなかった。エルデェイニオン制圧戦に、〝原子のアトミツク・極大マキシマム・魔術士ドレツドスター〟の片かた腕うでとして付き従ったフレディにしてみれば、主君に昔日の面おも影かげすでになく、気力、体力、魔力ともに盛さかりを迎むかえた自分の敵ではないと見たのかもしれない。

ただ──実は、フレディの行こう為いは反乱などではない。むしろ、父に対する子の反はん抗こうに等しい、とする向きもある。

実際、フレディは、第七区の居城キャッスルオブインフィニティ

で開戦の準備を整えながら、黄昏のトワイライト・魔術士団ドレツドスターズの魔術士百名を動員して、壮そう大だいな呪じゅ破は魔術の儀ぎ式しきに着手した。

　その対象は〝古代九頭竜の呪い〟だ。

　フレディは、キング・グッダーの巨きよ大だいな呪いを打ち破ることで自らの力を証明し、父のごとき主君を精神的に乗り越こえようとした──というわけだ。

　結果的には、それが悲劇を引きおこした。

　呪破魔術の失敗。

　反作用。

　破は滅めつ。

　大だい破は壊かい。

　第七区は∞・Ｆの野望もろとも、一いつ瞬しゆんにして灰かい燼じんに帰きした。

　のちにキング・グッダーは、第七区を「再建指定一号区」とする異例の声明を出したが、八百年以上の時を経てなお、この地は当時の姿のままだ。

　見み渡わたすかぎり大小の瓦が礫れきと土ど砂しやに埋うめつくされて、住む者もほとんどおらず、風が吹ふけば砂さ塵じんと亡ぼう霊れいどもの怨えん嗟さの声に満たされる。

　サンランド無統治王国首都エルデン第七区、再建指定一号区。

　一号区、と呼ばれている。

　今、マリアローズはその地に足を踏ふみ入れていた。

　マリアローズだけではない。トマトクンもいる。カタリも、ユリカもいる。サフィニアも、ピンパーネルもいる。もっと、もっと、たくさんいる。一号区の中に設けられた、三百メーテル四方ほどのロープで仕切られた空間を囲んで、実に多くのエルデン市民が集まっている。

　おそらく、数百ではきかないだろう。千人はゆうに超こえている。観衆はこれからもどんどん増えつづけるに違ちがいない。

　皆みな、エルデンの各所に掲けい示じされた「果たし状」を見て、また、加虐的サディスティック殺戮・マーダーズ・愛好会クラブ、通称ＳｍＣの宣伝部隊による喧けん伝でんに誘さそわれ、今日、甘い蜜みつに群がる蟻ありのように、この場にたかってきたのだ。

果たし状

　秩序の番人総長デニス・太陽鬼・サンライズ馬鹿殿

　拝はい啓けい

　先日は我わが輩はい等らのアジトを急きゆう襲しゆうしてくれてどうもありがとう。我輩至し極ごく吃驚びつくり恐きよう悦えつ至し極ごく強きよう烈れつ激怒につき、このたび貴様どもに正々堂々決けつ闘とうを申しこみ早そう漏ろう野や郎ろう死に腐くされ。

　思えば貴様等糞ふん尿によう臭くさい銀ぎん虱じらみどもとはただならぬ悪あく縁えんあり。そろそろ互たがいのために決着をつけといた方がいいと我輩賢かしこくも思う。いいから文句等一いつ切さい言わねえで黙だまって受け給え。

　ちなみに本決闘はあくまで我輩等と貴様等との間の一対一の血みどろ決戦である。玉を殺とった方が即すなわち勝つ待ったなしの真しん剣けん勝負である。余人の介かい入にゆうはチ×滓かすほども不要也なりと超絶偉えらい賢けん人じん我輩は思う。無論、太陽鬼馬鹿殿も我輩と同様に愚ぐ考こうすることと確信している。何も、我輩等にケチョンケチョンにされる前に、その汚お物ぶつまみれのひび割れ看板にゲロ塗ぬりたくって愚ぐ民みんどもに罵ば倒とうされるお笑い道を選ぶことはあるまいよ。

　貴様等の海綿体頭でも理解できるよう、超大親切なる我輩が繰くり返す。

　我輩等は加虐的殺戮愛好会の御み印しるしを持つ者のみが本決闘に参加する。貴様等もゆめゆめ部外者の手を借りようなんてチキン臭いことはするんじゃねえ。

　ついでに我輩本決闘までの期間、戦闘行動の一いつ切さい停止を

提案する。みみっちい野暮なことはするなという訳である。

以下に本決闘の日時場所を指定する。

時　オーメネイジ八九七　九巡じゅん月げつ十八番日おやつの時間（十五時）

所　一号区特設会場（※）

※心配無用来りゃわかる

我輩貴様等の死体を死し姦かんする粋ＣＯＯＬな野郎女め郎ろうどもを多数用意して悠ゆう然ぜんと待つ。

尚なお、本果たし状はエルデン市中百二十四箇か所しょにも併あわせて掲示するもの也なり。あしからず。

敬具

加虐的殺戮愛好会首領Ｓ．Ｉ．Ｘ様より　愛をこめて

　現在、十四時二十七分。

　ＳｍＣは三日前には特設会場の東側に布ふ陣じんを終えていたらしく、秩序モラルの番人・キーパーズは二日前から西側に陣地の設営を進めていた。

　事情通の予想によると、おのおのの兵力は、ＳｍＣが刺いれ青ずみ組と焼印組をあわせた約七百名。対する秩序の番人は、各拠きよ点てんの防衛にあたる人員をのぞいた三百名足らず。

　ＳｍＣはキャッスルオブインフィニティ跡あとだとされる高い瓦礫の丘おかにＳＩＸの玉座を置き、その周りを鉄てつ条じよう網もうや屑くず鉄てつの柵さくでめちゃくちゃに囲んでいる。

　各所に配された人員は、普ふ段だんのような思い思いの服装ではなく、黄と青と紫むらさきを組みあわせた甲かつ冑ちゆう、装そう甲こう服、ボディスーツを身にまとっているため、悪党バスターどもというより、兵士という印象が強い。話によると、この装備は、ＳＩＸが私財を投じてかねてから準備していたものだという。性的倒とう錯さく者の絶大な支持を集め、メインデザイナーのリチャード・〝ディック〟・コックはＳＩＸと個人的に親交があるらしい、M□手淫せよ、Ｓ□ねじこめ、Ｒ犯れ製だ。

　一方、秩序の番人は整然とした塹ざん壕ごうと木の柵の列を作り、最さい奥おう部に司令部を置いて、知ったかぶりかもしれないが、訳知り顔のカタリ曰いわく「正規軍の仕事と変わらん」陣地を築いている。

　たしかに、純血のピユア・ブラツド司祭・プリーストの鎧よろいプロヴィデンス・シリーズを身につけ、プロティション・シリーズの盾たてを構え、モトロール刀を持った番人たちの配置はきれいだ。

　特設会場の西側、番人の陣地のそばで仕切りのロープに手をかけているマリアローズが素人しろうと目で見ても、バランスがとれていて隙すきがないように見うけられる。

「デニスは──」トマトクンはさっきからずっと番人の司令部に黄玉トパーズの瞳ひとみを向けたままだった。その視線の先には、直立不動の太陽鬼がいる。「もともと、ファー・セルジナ王国の名門オ

ルブレイアン家の嫡ちゃく男なんだ。政変で国を追われてサンランドにくる羽目になったが、正規の軍事教育を受けているし、軍務に就ついていたこともあるらしい。剣も破天一流免めん許きよ皆かい伝でんで、あれだけ実戦をこなしていながら、乱れも濁にごりもない。世が世なら王軍元げん帥すいになっていたかもしれん男だ。むしろ、ファー・セルジナの王は、デニスを追いだしたことを悔くやむべきだろう」

　そういえば、銀の砦に直じか談判に行ったときも、デニスは騎き士しみたいに優ゆう雅がな仕草でユリカの手の甲こうに接せつ吻ぷんしてみせた。

　それにしても、そこまでべた褒ほめするデニス・サンライズとトマトクンとは、いったいどのような間あいだ柄がらなのか。何らかの褒つながりがあることはまず間ま違ちがいないと思うし、そのことの方が気になる。

「何だ」トマトクンがマリアローズの視線に気づいて顔をこちらに向けた。「俺の顔に何かついてるか」

「あ、いや……」

　実は、ついているのだが。

　思考が横道にそれるので嫌いやだったが、マリアローズは後ろに控ひかえていたサフィニアを引っぱりだしてきて、「ほら」と背中を叩たたいてやった。

　まったく、いい大人がご飯つぶを顔にくっつけてるなんて。放ほうっておいてもいいのだけれど、サフィニアが何度もトマトクンの顎あごを見て、注意したそうにもじもじしていたのだ。

「……あ、の、その……ご、ご飯の……」

「む？　何だ、サフィニア？　声が小さくて聞こえんぞ」

「ご……ごめんなさい……」

　何とも焦じれったい。あまり他人にやさしくなれる気分ではないマリアローズは、いきなり後ろからサフィニアの手をとって、無理やりトマトクンの顎に近づけさせた。

「あ、あ、そ、あ、こ、マ、マリアさん、そ、それは……」サフィニアは耳まで真っ赤になっているが、いいかげん観念したようだ。マリアローズが途と中ちゅうで手を放しても、サフィニアは自力でトマトクンの顎についていたご飯つぶを見事、指でつまんだ。
「……こ、これが……！」

「おお。すまんな。全然気づかなかった」

　トマトクンはそう言うと、身をかがめて──

　サフィニアの指に食いついた。

「……は……う……」

　サフィニアは不意の強すぎる刺し激げきに目を回してふらふらしている。倒たおれそうになったので、マリアローズとカタリとユリカとピンパーネルが、四人がかりでとっさに支えなければならなかった。

　ご飯つぶを回収してもとの姿勢に戻もどったトマトクンは、不思議そうに首を傾かしげているが──無自覚らしいとはいえ、その行こう為いはひどい。重罪だ。



「食べるかな、普ふ通つう？」

「だが、もったいないだろう。農家が丹たん誠せいこめて作った米だぞ」

「そういう問題じゃないでしょ……」

「じゃあどういう問題だ。だいたい、何でサフィニアはあんなふうになったんだ？」

「逆に訊きくけど、どうしてきみはそんなに超ちよう鈍どん感かんなの？」

「鈍感だと？　俺はピンパーネルほどじゃないにせよ、目も耳もわりといい方だし、鼻も利きくと思うが」

「だからそういう問題じゃないって──」

　いけない。このままでは永久ループに陥おちいりそうだ。第一、本当にそういう気分ではないのだ。トマトクンのボケにつきあってじゃれあっているだけで、ひどく疲ひ弊へいする。

　これから始まろうとしている秩序の番人とＳｍＣとの決けつ闘とうに、自分がまったくの無関係だと思えない。

　それゆえに参加したいとか、するべきだとか考えているわけではない。

　一傍ぼう観かん者。

　所しよ詮せん、そんな役回りがマリアローズにはお似合いだ。それなのに、たまたまＺＯＯに入って、周りに力のある者がいるものだから、調子に乗って厄やつ介かい事に首を突つっこんだ。結果、いろいろな運命がマリアローズの足に絡からみついて、何か自分が当事者になったような気がしている。

　しかし、結局、マリアローズはマリアローズでしかない。

　ちっぽけで、何も持たず、貧ひん弱じやくで、矮わい小しような、侵入者クラツカーもどき。それがマリアローズだ。

　滑こつ稽けいじゃないか。自分の行動が、もともと敵対関係にあった秩序の番人とＳｍＣとの正面決戦を引きおこしてしまった、なんて考えるのは、馬ば鹿かげている。

　仮に、そういう側面がわずかばかりあったとしても、それが何だ？

　義を振ふりかざして悪を討うつ秩序の番人と、悪徳の体現者Ｓｍ

Ｃ。誰だれが強制したわけでもない。お互たがいやりたくてやっていることだ。勝手に殺しあえばいいのだ。

　どのみち、ＳｍＣが望んで、秩序の番人が受けて立つことに決めたこの果たしあいに、部外者が介かい入にゅうする余地はないわけだし。

　いろいろあって、深く関かかわりすぎて、単なる赤の他人とは思いにくいベアトリーチェも、任務復帰を認められはしたが、この場にはきていない。十七番警けい邏ら隊に編入された彼女は、今ごろアサイラムの警備にあたっているはずだ。

　──つまり、僕は……ただの野次馬で。この決闘は、たまに目をふさいだり、悲鳴を上げたりしながら、楽しむべき娯ご楽らくで。

　番人とＳｍＣ、どちらかといえば、それはもちろん、番人に肩かた入いれしてしまうけれど。

　観客の中には無責任に「どっちが勝つか」を賭かけの対象にしている者もいる。マリアローズだって、立場は彼らと大差ない。そのはずなのだが、何だか割りきれない。

「この勝負、どっちが有利なのかしらね」ユリカは完全に番人を応おう援えんしているようだが。「わたしはこういうのって、よくわからないから、単純に統とう率しよちゆがとれている番人が絶じえつ対たいに勝ちゅと思っているけど」

「せやなあ……」カタリは男の子らしく、この百人単位同士の戦闘という状じよう況きよう自体に胸を躍おどらせているといったところか。「ＳｍＣが何や妙みような細工でもしてへんかったら、間ま違ちがいなく番人が勝つやろ。ＳｍＣが装備を整えてきたっちゅうても、やっぱり純血のピユア・ブラッド司祭・プリーストはええ仕事しよるしな。個々の戦闘能力、集団での戦闘能力も番人に分があるはずや。番人の数が半数以下っちゅうても、まともにぶつかったら、おそらくＳｍＣに勝ち目はない。ただ、それはＳｍＣもわかっとるはずやからな。必ず何か考えとるはずやで」

「とりあえず、あの死霊術士ネクロマンサーか」トマトクンが顎を撫でながらサフィニアに顔を向けた。「俺も聞いたことはあったが、あれはいわゆる普通の魔ま術じゆつじゃないな。サフィニア、魔術士のお前から見て──む？　大だい丈じよう夫ぶか？」

「は……は、はい……」そう答えながらも、サフィニアはぜんぜん大丈夫そうではなかった。トマトクンの視線を受け止めるだけで、湯気が出そうなくらい赤面している。「……死霊術ネクロマンシーは……一いつ般ぱん的な魔術とは違います……魔力の多た寡かさえも問題ではなく……そのための特別な素質がない者には、決して使えないといいますし……お姉様が仰おつしやるには、念動力テレキネシスに近い、と……」

「ふむ。ということは、死体以外の物も動かせるのか」

「……それは、どうでしょう……人間以外の、生き物の体であれば、あるいは……生体は、その仕組みを熟知していれば、わずかな力で動かすことが可能らしいので……ユリカなら、そのあたりのことは、わかると思いますが……」

「しょうね──わじゅかな電気的な刺し激げきを神経系に与あたえるだけで、人間の体を動かしゅことは、たしかにできるでしょうね。ただ、持じ続じよく的てきな運動となると、どうかしら。しょう簡単にはいかないと思うけど」

「要するに、よくわからんということだな」

　トマトクンが大おお雑ざつ把ぱにまとめると、サフィニアが申し訳なさそうに体を縮めた。

「……すみません……死霊術ネクロマンシーは比ひ較かく的新しい魔術のようですが……大半の魔術士にとっては価値のない魔術……というより、特とく殊しゆ技能のため、資料が極きよく端たんに少ないのです……」

「まあ、この際、仕し掛かけはどうでもええやろ。肝かん心じんなんは──」カタリが、生意気にもしかつめらしい魚顔で腕うで組ぐみをした。「あの死霊術士ネクロマンサーがおれば、ＳｍＣは死体から戦力を補ほ充じゆうできるっちゅうことや。しかも、殺した敵を自分らの味方にできる。番人にしてみたら、いくら死んどっても、味方や。蘇そ生せいやて可能かもわからん。当然、剣けん先さきも鈍にぶるっちゅうもんや。ゆうても、番人の側も死霊術士ネクロマンサーのことは知っとるはずやし、そのへんは考こう慮りよに入れとるやろけどな」

　そこまで聞いていて、マリアローズはふと思いだしたことがあっ

た。

「そういえば、あれはどうなのかな。回転式ラニング連発弩フアイヤ。七番突とつ撃げき隊が、下水道でかなりやられたよね」

「うむ」

　トマトクンが片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつり上げ、口をへの字に曲げた。

　こうして考えてみると、番人に有利な材料はあまりないように思える。

　ユリカが心配そうな眼まな差ざしで番人の陣じん地ちを見た。

「もし、ＳエしゆｍエムＣシーが勝ったりしたら……」

「ええことは一つも起こらんやろな」

　カタリなんかの言葉に同意するのも腹立たしいことだが、まったくもって同感だ。

「だが、少なくとも」トマトクンの口調はやけに確信めいていた。少なくとも、マリアローズにはそのように聞こえた。「デニスは並なみ大たい抵ていじゃない。もう若くはないが、年を食ったぶんの時間は無む駄だにしなかったようだ。あいつは世間一般が思っているより遥はるかに高みに達してる。ＳＩＸが少しでもデニスを侮あなどれば、この勝負はおそらくそれだけで決まるだろう」

「ねえ、トマトクン、きみとデニス・サンライズって──」

　いい機会だと思った。けれども、結局、トマトクンは多くは語らなかった。答えは短く、どこかそれ以上の問いを許さない雰ふん囲い気きがあった。

「仲間だ。昔の、な」

　昔っていつだろう。

　デニス・サンライズと仲間だったといい、剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟とも知りあいらしく、ＳＩＸとも何か因いん縁ねんがあったようで、妙に物知りだったり、意味不明なことを口

走ったり、それでいて、そばにいると安心できたり──不思議な男だ。

　ＺＯＯの皆みなはどれだけこの男のことを知っているのだろう。

　つきあいが長いぶん、きっとマリアローズよりは知っていると思うが、何となく、実はたいして変わらないのではないかという気もする。

　誰だれだって、心の中に秘めて、そっと抱かかえているものがある。それを無理やり引っぱりだされて、晒さらしものにされたくはない。そんなことをしなくても、いたわりあって、助けあうことはできる。仲間でいられる。だから、マリアローズはここにいることができる。

「仲間、か……」

　マリアローズは右手を胸にあてて、番人の陣地とＳｍＣの陣地を交こう互ごに見た。

　抗こう争そう。殺しあい。今や千人単位にふくれあがった観衆の前で、見世物みたいに決けつ闘とうする。経けい緯いがあって、対立して、こうなって、仕方ないのかもしれないが、何だか馬ば鹿かみたいだ。

　だが、ＳｍＣは番人を、番人はＳｍＣを殺し、互たがいに殺され、殺しあってきた。

　きっと、ベアトリーチェはアサイラムで悔くやしがっているだろう。一号区で一人でもＳｍＣを殺し、あわよくばＳＩＸを討うちとって、焔ホムラの仇かたきをとりたいと願っているはずだ。それが許されないことに憤いきどおり、今ごろ、あの思いつめたような深い青の瞳ひとみで、一号区の上の空を睨にらんでいるかもしれない。

　マリアローズだって、仲間や大事な人を殺されたら、傷つけられたら、同じことを思う。

　悲痛。喪そう失しつ感。怒いかり。憎ぞう悪お。殺意。復ふく讐しゆう心しん。当然の帰結としての戦い──決闘。

　十四時四十三分。

　開戦を十七分後に控ひかえて、異変が起こった。

「どけ！　道を！　道を空けろ……！」一号区の悪路を疾しつ駆くしてくる騎き馬ばがあった。一騎ではない。異なる方向から二騎。ともに、馬上にあるのは間ま違ちがえようもない銀の軍団ザ・シルバリイの番人だ。観衆は蹄ひづめにかけられてはたまらないとばかりに、左右へ分かれて二筋の道を作った。騎馬はその道を突つっ走り、仕切りのロープに行きあたると、その外側を回って番人の首脳らがつどう司令部に迫せまった。

　嫌いやな感じがした。

　手た綱づなが引かれ、馬が竿さお立だちになって止まり、騎手の番人が転げ落ちるように下馬してロープを飛び越こえる姿を見ていると、胸むな騒さわぎしかしなかった。

　二人の番人は司令部に飛びこむなり、デニス・サンライズや三人の副長の前にひざまずくような姿勢になった。何か叫さけんでいるようだが、司令部はマリアローズたちのいる場所から三十メーテル以上離はなれている。はっきりとは聞きとれない。ただ、司令部が騒そう然ぜんとする気配は伝わってきた。

「何かあったみたいやな」

　カタリが言わずもがなのことを言った。そんなことは誰でもわかる。しかし、あえて口に出したくなる気持ちも理解できる。マリアローズはロープから身を乗りだして目を凝こらした。

「デニス・サンライズが命令を出そうとして、それをあのヨハンが止めてるみたいだね……この前と同じだ……でも、みんなで話しあってる。あ──」

　すぐに動きがあった。司令部の周囲に配置されていた番人たちが、一いっ斉せいに司令部の後ろへ移動しはじめたのだ。その数、五、六十人はいるだろうか。デニス・サンライズが彼らの前に立って、何やら指示を出しているようだ。

　もっとも、それから一分もしないうちに、彼らは二手に分かれて司令部から離れた──離れた？　これからＳｍＣと正面からぶつかりあうという、今、このときに、五十人もの戦闘要員が戦場をあとにするなんて、どういうことだ？

「……そうか」トマトクンの声は苦々しげだった。「ＳＩＸめ、デニスをまんまと嵌はめたな」

「嵌めた、って……？」

「罠わなともいえん罠だ。ＳＩＸなら、当然、この手に出てくる。これは想定しておくべき事態だった。いや、デニスもある程度は考えていたんだろう。だから、百人ばかり、そっちの対策に割さかざるをえなかった。だが、足りなかったんだ」

「対策？　足りない……？　いったい、何のこと……？」

「この決闘に参加するのはＳｍＣと番人だけだ。それは事実だろう。しかし、ＳｍＣには別のクランの看板を背負しよった、いわば別働隊がいる」

「別働──」一いつ瞬しゅん、アジアンのことが頭をよぎった。アジアンは言っていた。いろいろあって、今はＳＩＸに飼われている身だ、と。ＳｍＣに与くみしているが、ＳｍＣではない。そういうことか。

「ただし」トマトクンは苛いら立だちを抑おさえつけるように、そこで一呼吸置いた。「──そいつらは、この決闘には参加できない。違うな。する必要がない。やつらの仕事は別にある」

「銀の砦シルバリイホールドやな」

　カタリが精せい一いつ杯ぱいの努力で大おお真ま面じ目めな半魚人顔を作ってそう言ったが、トマトクンはあっさり否定した。

「銀の砦シルバリイホールドには価値がない。あそこには非戦闘員がいないからな。極きょく端たんな話、仮に襲しゅう撃げきされて、奪うばわれても、また奪い返せばいいだけのことだ。どうせ資産は王立銀行とオメガバンクの中だろうし、何なら捨てたって構わん。だが、そうもいかん場所がある。一つは、番人にとって一番のスポンサーで、つきあいも長い、泉セン里リ。そして」

「──アサイラム……」

　誰の声だろう。

　自分か。自分が言ったのか。

　マリアローズはうなずくトマトクンを見た瞬間、頭が真っ白になった。

　アサイラム。正式名めい称しようはモリー・リップス・アサイラム。あそこには当然、モリーがいる。

　モリー・リップス。いつもマリアローズを医術式で治してくれた。もしかしたら、今、生きている人間の中で、モリーほどマリアローズのことを知っている者はいないかもしれない。モリーは、だが、それがどうしたという態度でマリアローズに接してくれる。モリーはさりげなく自分の心を開いて、マリアローズを楽にしてくれる。

　モリーはやさしい。弱い者、誰にでもやさしい。モリーは強い。とても強い。

　でも、モリーは医術士だ。

　強い心を持っていても、剣けんは似合わない。攻こう撃げき的な魔ま術じゅつも使えない。医術士だ。

　それに、アサイラムには、ベアトリーチェもいる。

　大事なものを失って、傷つけられて、自分は何で生きているんだろうと自問し、その答えを見つけられずにいたベアトリーチェ。

　それでも、自分の命の使い途みちを探して生きるのだと、どうにかそこまで言ってくれたベアトリーチェが、アサイラムの警備についているはずだ。

　命の使い途を、探して。

「行かないと」マリアローズは第六区にあるアサイラムの方へと向かう番人たちの一隊を追おうとした。カタリに「待てや！」と腕うでをつかまれたが、乱暴に振ふり払はらった。カタリはしつこかった。しがみついてきた。どうして止める？　止めるな。僕を止めるな。何の権利があって僕を止めるんだ、魚さかな野や郎ろう。「行かないとダメなんだ！　モリーが……ベアトリーチェが！」

「せやかて、一人で行ってどないすんねや！」

「うるさい黙だまれ！　そんなの関係ない！　モリーが死んだらど

うするんだよ！　モリーは、モリーが死んだら……僕は、だから、行かないとダメなんだ！」

「アホンダラ……！　そないな事情やったら、何でわしらに一いつ緒しよにきてくれへんかて一言頼たのまんのや！　お前じぶん一人ノコノコ行ったかて、大事なモン守れるんか！　マリアローズ、お前じぶんはいっつもそうやな！　ええかげん、もうちょいわしらのこと信じて、アテにしてくれたってもええんちゃうか！　それともアレかい、わしらはいっつもお前じぶんが何して欲しがってるんか、考えて考えて先回りして行動せなあかんのか！　アホさらせ！　そんなんやってられんわ！」

　頭をはたかれたような感じがした。

　カタリの表情が必死そうで、悲しそうで、苦しそうだったのが、余計、こたえた。

「──ご、ごめん……僕……」

「ええい！　謝んなや、ボケ！　わしも今のは言いすぎたわ、すまん！　ほれ！　急がなあかんのやろ、さっさと行くで、おっしゃ──ッ！」

　カタリはマリアローズを置いて先に走りだした。それをユリカが猛もう然ぜんと追い、サフィニアが少し遅おくれてついていったが、そのあとがつづかなかった。

　見れば、誰だれよりも俊しゆん足そくなはずのピンパーネルが、その場にとどまって、主人の動向をじっとうかがっている。

　彼の主人たるトマトクンは、番人の司令部を凝ぎよう視ししていた。

　少しだけ眉まゆをひそめ、唇くちびるを若じやつ干かん右にゆがめて、どのような感情がこめられているとも判断しがたい、複雑きわまりない表情だ。

「──デニス……」

　だが、トマトクンは小さくそう呟つぶやくと、踵きびすを返してマリアローズに「行くか」と言った。マリアローズはうなずいたあと、何か気になって一度、司令部にちらりと目をやった。

　そのとき、デニス・サンライズがこちらに顔を向けていたように見えたのは、気のせいだったのだろうか。

Omenage 897 9th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区・東部風料亭

〝泉里（センリ）〟

chapter.3

汚れ仕事

　灯とう籠ろうや木々、砂じや利りや苔こけ生むす石に至るまで、明らかに贅ぜいがつくされているし、蓮はすの花咲く池は典てん雅がなことこの上ないのだが、どこか寂さびしげなのだ。

　東部風の庭園には、目で見ただけではわからない、何か不可思議な仕し掛かけが施ほどこされているに違ちがいない。

　池のふちで手て頃ごろな大きさの石に腰こしを下ろしたアジアンは、表屋の方から歩いてきた仲間を見ずに訊きいた。

「時間は」

「十四時五十九分だ」ロイヤル・ガールの朱しゆと白の重装甲ヘヴィメタル鎧兜アーマーで全身をかため、同じ配色の円形盾を左手に、右手に明けのモーニング明星・スターをぶらさげた昼飯時ランチタイム名物の粉ふん砕さい女は、かなり不ふ機き嫌げんそうな声で応じた。「戦いとしても面おも白しろ味みがない、糞くそ忌いまくいましい仕事だ。もっと胸むな糞くそが悪いのは──アジアン、お前がさっぱり働かないで、こんなところで遊んでることだ！　粉砕されたいか！」

「べつに遊んでいるわけじゃないヨ」

「じゃあ、何してるんだ」

「休んでる」

「疲つかれるようなことはたいしてやってないだろうが！」

「体はネ。心はヘロヘロだヨ」

「アジアン、お前──」粉砕女はさらに声の音量を上げかけて、やめた。ゆっくりと近づいてくる。彼女は盾と明けのモーニング明星・スター、脱ぬいだ兜かぶとを砂利の上に置き、アジアンの隣となりに座った。

「アジアン。その……あたしはベティとかナツコみたいに口が達者じゃないし、頭もよくないから、うまく言えないが……一人でためこむのはやめろ」

「ためこんでなんかないサ。心配してくれるのはありがたいけどネ」

「しっ、心配とか、そういうことじゃなくてだな。いや、もちろん、心配してないわけじゃないが、それは何ていうか、あたし個人としての心配じゃなくて──ああ、くそ、お前はあたしより百万倍狡ずる賢がしこいんだから、あたしが何を言いたいかくらい、わかるだろ！」

「ああ」アジアンは立ち上がり、微笑ほほえんで、粉砕女の頭にぽんと手を置いた。「キミは同じクランの仲間として、ボクのことを気にかけてくれている。そうだろう、カァイ？」

「──そ、そうだ。そういうことだ！　わかってるんじゃないか」

　猫ねこみたいなつり上がり気味で大きい目をしたカイの顔は真っ赤だ。

　仲間として。

　それでいい。その方がいいのだ。

「ボクは疲れてなんかいないヨ。ただサボってただけサ」

　アジアンは表屋に向かった。三メーテルほど離はなれてカイがついてくる。おそらく、これくらいが適切な距きょ離りなのだろう。カイは直情径行で、複雑な思考には向かないが、愚おろかではない。勘かんはいい。だから、あまり近づきすぎれば、遠ざけられることを知っている。アジアンがそうせざるをえないことを、カイはたぶん察している。それで、野生の獣けものみたいに、おっかなびっくりアジアンとの距離をはかっている。

　その臆おく病びような心が、少しだけアジアンと似ている。

　しかし、あの真しん紅くの薔ば薇らはもっと似かよっていた。魂たましいの共鳴があった。運命だった。

　それを口にして振ふり向かせることをためらってしまうほど繊せん細さいで、はかなくて、それでいて苛か烈れつで、今にも自分で自分を壊こわしてしまいそうで──守りたくて、つつんであげたかった。できなかった。

　薔薇よ。

　アジアンは口の中でそっと呟いた。

「──夜ごと夢に見るキミはいつも後ろ姿だ。駆かけても、駆けても、キミの背中は小さくなるばかりで……」

　だが、おのれのあやまちと罪を悔くいる前に、失った、いや、自らの過失で殺した友──そう、今こそ友と呼びたい、彼との誓ちかいを果たさなければならない。

　クラニィ。不実なボクを許して欲しい、とは言わない。

　ボクは卑ひ怯きよう者だ。死んだキミになら、ボクは何もかも話せる。キミを友と呼ぶこともできる。おそらくキミは、死者としか語らえないボクを哀あわれと思うだろう。哀れんでくれていい。ボクはちっとも悔くやしくない。

　キミは死んでしまったからだ。

　キミはもういない。ただ一つ、キミに罪があるとするなら、そのことだけだ。それは最大の罪で、ボクが背負うべき咎とがだ……。

　アジアンはカイを従えて表屋に入った。

　表屋は、泉セン里リの広い敷しき地ち内に点在して回かい廊ろうで結ばれている建物の玄げん関かん部分で、そこを抜ぬければ母おも屋やと呼ばれるホールに出る。

　本来、表屋の下足場で靴くつをあずけるべきだが、アジアンは土足で母屋に侵しん入にゅうした。

　母屋には、後ろ手に縛しばられた仲居や料理人、他ほかの従業員たちが、六十人ほども集められていた。昼飯時ランチタイムの十名ばかりが、彼らを取り囲んで睨にらみをきかせている。

「これで全員かい？」

「まだ奥にいるわ」唇くちびるをぺろりと舐なめてから、肩かたをすくめてそう答えたのは、胸元が大きく開いたサン・ティエンヌ・ドゥ・シボーの魔ま術じゅつ士し衣で、それほど豊かではない胸を──いや、とにかく、二十代にも見え、十代の小こ娘むすめにも見え

る天才魔導士ウイザード〝垂れ目ベテイ・ザ・のベドウルーピティングアイズ〟だ。「厨ちゆう房ぼうに監かん禁きんしてるはずだけど、あっちにはダリエロが行ってるから、どうなってるかわからないわよ。一応、あの馬ば鹿かを何とか抑おさえておくように、リキエルに頼たのんではあるけどね」

「あたしが様子を見てくる。おかしなことをしでかしてたら、粉ふん砕さいしてやる」

　カイが小走りで母屋を突つっ切って、回廊の向こうへと姿を消した。

「……何かあったの？」

　ベティは鋭するどい。ときに嫌いや味みなほどだ。

「べつに何もないヨ」

　けれども、今回は本当に何もなかった。普ふ段だんと変わらない。カイの態度だって、とりたてておかしいというほどのことはない。カイが何を感じて内心どう思い、どう考えているかなんて、わかりはしないが。

　アジアンが自分のことを信じていないのと同程度に、ベティも疑わしげだ。

「どうだか」

「突っかかるネ。何か根こん拠きよがあって疑っているのかい」

「最近のあんたを見ていれば、ね。状じよう況きようが状況だし、多少憂ゆう鬱うつになるのもしょうがないのかもしれないけど、とばっちりでカイをいじめるのはよしなさいよ」

「どうしてボクがカイをいじめなきゃならないんだ。言いがかりはよせ」

「だったら、もう少しやさしくしてあげたらどう？」

「冷たくしているつもりはないヨ」

「でしょうね。アジアン、あんたはむしろ、カイにはやさしいわ。

でも、中ちゆう途と半はん端ぱなのよ。それって誠意のあるホントのやさしさじゃないし、変に期待を持たせて、ぬか喜びさせるのは罪悪だとあたしは言ってるの。甘い線引きは結果的に誰だれのためにもならないわよ」

「そうかもしれないが──」アジアンは前まえ髪がみをかき上げ、唇の端はしだけで笑ってみせた。「こんな場所で話すことじゃない、と、ボクは思うネ」

「まったくだわ」ベティも腰こしにつるした魔術士ドレッドスターズ・の剣・フアング〝グリギュエンル〟の柄つかに手をかけ、くすりと笑った。それでいて、もう一ひと刺さし言葉でチクリとくるのがベティらしいところだ。「逃にげ口上の上手うまい男は最低ね」

「たとえ最低だとしても、最低限の責任は果たすべく、近ごろは努力しているつもりだヨ」

「まあ、腐くされ縁えんだし、つきあうわよ」

「キミも物好きだな」

「たで食う虫も好き好きというでしょう」

「ボクはたでみたいに辛からくて不味まずいってことか」

「美味おいしいわよ。あたしにとっては」

　ベティは意味深な微笑ほほえみを浮うかべてみせたが、彼女の遊ゆう戯ぎはいつもここまでだ。その本心はうかがいしれない。また、もし探さぐろうとしたところで、胸のうちを明かすような女ではない。

　ベティはあの閃せん光こうの魔女マチルダに天才と称しようされた魔術士であり、本人曰いわく、非常に魔術士的な頭脳を持っていて、太古の失われた魔術に思いをはせながら、生命の神秘に酔よいしれ、人間の感情の仕組みを探究しつつ、人生に苦く悩のうし、究極の悟さとりについて考察する。そういう女だ。

「しかし──」アジアンは不安そうにこちらを見ている仲居や従業員たちを一いち瞥べつした。「呆あっ気けないものだネ。天下の秩序モラルの番人・キーパーズがかためているというから、もうちょっと歯ごたえがあるんじゃないかと予想していたんだけど」

「もともと、守るより攻せめる方が得意なんでしょう」ベティが軽く応じた。「番人の持ち味は息をあわせた集団突とつ貫かん攻こう撃げき。何人か突出した剣けん士しもいるようだけど、基本的には訓練である程度、均質化した個を集中運用して、効率よく撃破、蹂じゅう躙りん、掃そう討とうするために、戦法が単純に様式化されてるわ。でも、そのぶん受け身になると、処理すべき情報が多くなりすぎて、対処しきれなくなる。ましてや、あたしたちみたいに、個人個人が変則的な戦い方をバラバラにしかける相手は、そうとう苦手でしょうね」

「ウチに死人は出ていないんだろう」

「ゼロよ。三人ばかり死にかけて、ヴィクトリアとその下品な妹が、他の負傷者もろとも治ち療りよう中だけど」

「番人の死体と重傷者は、ボクの命令どおり、全員ちゃんと外に放ほうりだしておいたかい」

「ええ。ついでに、あたしが把は握あくしてる範はん囲いでは、番人以外はまだ一人も殺してないわ」

「上出来ブラーヴオ」

　アジアンが手を広げてみせると、一人の従業員がおそるおそるといった感じで前へにじり出てきた。渋しぶい色の小こ袖そでに打うち袴ばかまをあわせた、五十年配の上品そうな男だ。

「……あ、あの……お話し中のところ、申し訳ありませんが──」

「何？」

　見れば、男は引きつった顔中に汗あせをかいて、それでも愛あい想そ笑いらしきものを浮かべている。従業員一同を代表して、決死の覚かく悟ごといった様子だ。

「わたくし、当泉セン里リの番頭を務めさせていただいております、ルオ・妙ミヨウ玄ゲンと申します。わたくしどもは、これからいったい……」

「それは番人次し第だいということになるネ」アジアンは薄うすく笑った。「そのうち番人の増ぞう援えんがくるだろう。ボクは彼らに取引を持ちかけるつもりだ。キミらの身み柄がらと引き換かえ

に、泉セン里リから手を引くように、とネ。もし増援がこなければ、キミらは見殺しにされたということだ。かわいそうだから、そのうち逃がしてあげるヨ」

「で、では……この店は……」

「まあ」アジアンは肩かたをすくめてみせた。「気の毒だけど、命あっての物種と思って、あきらめてもらうしか──」そこまで言ったときだった。

　アジアンは振ふり返って身構えかけた。表屋の向こうだ。石いし畳だたみの道を歩いてくる。まさか、と思った。ＳｍＣは今、一号区で秩序の番人と対たい峙じしている。いや、時間からすると、もう戦いは始まっているだろう。であれば、ここにやつがいるはずはない。こんなとき、やつは必ずＳＩＸのそばにひかえているはずだ。それなのに、なぜだ。

　ガルベル・ダのスーツを着て、灰色の頭とう髪はつをきっちり後ろに撫なでつけ、醜しゆう悪あくな鉤かぎ鼻ばなと、酷こく薄はくそうな唇くちびると、削そぎ落としたような頰ほおが、老いた鷲わしを思わせる──

「……ジェイ」

　どうしてやつが、ここに。

「ファハ」表屋に足を踏ふみ入れたところで、ジェイは、笑った。アジアンを驚おどろかせたことが愉ゆ快かいでたまらないとでもいうように、目を見開き、口を大きく開けて、短く嗤わらった。「アジアン。どうした、アジアン。俺がここにいちゃおかしいか」

「……少なくとも、意外ではあるネ」

「何が意外なものか。考えてもみろ、アジアン。貴様らみたいな、厄やつ介かいで、何を企たくらんでいるのかわからん連中の……だよ。監かん視しだ。場合によっては制裁も加える。その役を、俺以外の誰がこなせるというんだ。貴様だって感じていたろう。危険を。脅きよう威いを。殺気を。その正体が俺だったからといって、何を驚くことがある。そう、正解はこれだよ。俺だ、アジアン」

「馬ば鹿かな──」

　たしかに、ジェイの言ったような事実はあった。

　身にまとわりつくような視線。意思と感情。悪意。殺意。アジアン自身ならば、その気になれば、それを振り払はらって逃のがれることくらいできたが、仲間一人一人はどうかわからない。

　逆らえば、そむけば、誰かを殺す。ＳＩＸが明言せずとも、それは明々白々な脅おどしだった。

　たぶん、噂うわさに聞く、ジェイ率いる殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスの精せい鋭えい隠おん密みつ部隊〝ＥエＳス〟が、その任務にあたっているのではないか。ジェノシドマックスなど、一部の装備をのぞけば、チンピラよりいくらかマシという程度でしかないが、その名の陰かげに、アジアンでさえ軽視できないＥＳがいる。アジアンはそう見当をつけていた。

　それがジェイだったのか。いや、この男の言葉をまともに信じるのは危険すぎる。しかし、アジアンは知っていた。

　ジェイはアジアンに特別な感情を抱いだいている。もちろん、負の感情だ。ジェイはアジアンを毛け嫌ぎらいしている。ＳＩＸが執しゆう着ちやくを示しているアジアンに、嫉しつ妬としている。憎ぞう悪おし、あやしみ、疑っている。アジアンに対すると、ジェイは感情的になる。その判断を狂くるわせる。

　──脅威は、ジェイ。

　むろん、依い然ぜんとして謎なぞは残る。

　ジェイはＳＩＸの右腕だ。唯ゆい一いつの腹心といってもいいだろう。実際、アジアンがＳＩＸと接せつ触しよくするとき、ジェイはいつもそこにいる。ただし、ＳＩＸは何しろ目立つから、基本的にあまり動きまわれない身だ。そこで、ジェイがＳＩＸの分身として動くことも多い。

　いずれにしても、ジェイがずっとアジアンに、昼飯時ランチタイムに貼はりついていられるとは思えない。

　ジェイ一人ではないだろう。やはり、ＥＳもいる。

　だが、思い出せ。ときおり感じる、飛び抜ぬけて強きよう烈れつな、身に迫せまる殺気は、一つ。一つだ。

　ジェイ──そう、ジェイだ。あれは間ま違ちがいなく、ジェイだ。

　今、すぐ近くにいるこの男だ。

「……にわかには信じがたい話だネ……」アジアンは笑いだしそうだった。こらえた。懸けん命めいにこらえて、驚きよう愕がくの表情を保った。「キミに着がえをのぞかれていたかもしれない、なんて考えるのは、正直、おぞましい」

「のぞいていたのは着がえだけじゃないかもしれないよ」

「ますます反へ吐どが出そうだ」

「前にも似たようなことを言ったが、アジアン、今度は本当だ。返答次第では、反吐のかわりに血反吐を吐はかせてやる」

　ジェイは、わざとだろう、ゆっくりと表屋と母おも屋や、回かい廊ろうを見まわしてから、目をすぼめた。

「これはどういうことだ。従業員どもを殺さず、虜とりこにして──さっき貴様は言っていたな、番人に取引を持ちかける、と。番人の増援がこなければ、そいつらを逃にがすだと？　しかも貴様は、番人の死体と重傷者を泉セン里リの外に放ほうりだしておけと、部下どもに命じた。頭を潰つぶし、蘇そ生せい不能にしてからそうするなら、まだ話はわかるよ。だが、違う。このままでは、あの番人どものうち何人かは回収されて蘇よみがえり、また俺たちに剣けんを向けるだろう。こんなふざけた話があるか。いいか、アジアン。貴様のやっていることは、言い逃れできない、これは、利り敵てき行こう為いだよ」

「どうしてそうなるのか──」

「とぼけても無む駄だだ」

「ジェイ」アジアンはありったけの親しみをこめて、彼の名を呼んだ。「ボクは、ネ……」

　そしてゆっくりと、挑ちよう発はつするように、時間よ止まれと念ずるように。

　深々と息を吸いこんで、もったいぶった挙句、伝家の宝刀を抜いた。

「□□ＳＩＸだ。ＳＩＸの命令で動いている」

「そんなことは言われなくてもわかっている！」

　案の定だ。ジェイは、アジアンがＳＩＸの名を口にしただけで気分を害している。

　ずいぶんとまあ、憎にくまれたものだが、ああ—ジェイ。

　キミは正しい。まったくもって、完全に正しい。ボクを生かして飼おうなんて、所しよ詮せん、愚おろかな思いつきだ。

　だが、今はまだそのときじゃない。

　クラニィ。もう誰だれもキミと同じ目に遭あわせはしない。ボクはタイミングを間違えない。

「わかっている？　本当に？　そうかな？　そうは思えないな。だって、ボクはＳＩＸにこう命じられた。九巡じゅん月げつ十八番日十四時に泉セン里リを襲しゆう撃げきし、可か及きゆう的すみやかにこれを制圧しろ、とネ。ボクはそのとおりにした。ボクはそむいてなどいない。ＳＩＸの前でもボクは正々堂々と言えるヨ。我が主マイ・ロード、仰おおせのままにいたしました、どうか頭を撫なでてください、ってサ」

「貴様……戯ざれ言ごとを！」

「やるのかい？　いいヨ。キミがＳＩＸから、ちゃんと命令に従った、何の非もない、利口な飼い犬を殺せと命じられているというのならネ。でも、これは一億ダラー賭かけてもいいが、ＳＩＸはそんなことをキミに命じてはいない。いいかい？　ジェイ、キミのしようとしていることは、言い逃れできない、それは、命令違反だヨ」

「□□□□×××……！」

　ジェイが何か聞いたことのない言葉を低く吐き捨すてた。発音も聞きとれず、意味もわからなかったが、間違いなくそれはアジアンを呪のろうための言葉だろう。それだけはわかった。

　そして、ジェイは自ら釘ネイルと呼ぶ自じ慢まんの得物を隠かくし持ったまま、呪いの言葉を吐かざるをえなかったのだ。

「アジアン、我が主マイ・ロードへの裏切りは許さん。決してだ」

　そう言い捨てた灰色の目には、狂きよう気きの炎ほのおすらともっていた。

　だが、ジェイ。悪いが、痛くも痒かゆくもない。去りゆくキミが発している殺気は、たしかにすさまじい。凄せい絶ぜつですらある。それだけに、はっきりとわかる。

　━キミだ、ジェイ。

　ボクを、ボクの昼飯時ランチタイムを狙ねらっていたのは、キミの釘ネイルだ。

　今も、他ほかにもたくさんの気配がまとわりついて、本当にうざったいことこの上ないが、ボクが真に恐おそれていたのは、ただキミの釘ネイルだけだ。

「ベティ、手て筈はずどおりにいこう。予定どおりにネ」

　声がわずかに弾はずんでしまった。ベティは聞き逃のがさなかった。何か気づいたようだが、少し柳りゆう眉びをひそめただけで、余計なことは言わなかった。

　ただ、彼女と他数名には、そろそろ伝えておくべきかもしれない。

　いざというとき、すぐさま適切な行動をとれるようにしておくべきだ。

　そのときはきっと、そう遠からずやってくるはずだ。

Omenage 897 9th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.4

絶叫が呼ぶ火

十五時十三分。

何度も抵てい抗こう線を張って時間を稼かせぎつつ、どうにかたどりついた、宿舎棟とう。

閉じた隔かく壁へきに背をあずけて、ベアトリーチェはせわしなく懐かい中ちゆう時計を見た。

──十五時十四分。

胸が痛い。息が切れている。まるで剣の柄つかが右手に貼はりついてしまったかのように離はなれない。剣身はこびりついた血ち脂あぶらでぬめっているだけでなく、右側に曲がっている。相手が装そう甲こう服を着こんでいたせいか。自分の腕うでが未熟なだけか。

丈じよう夫ぶなモトロール刀が、これではもう、敵を斬きれない。

「被ひ害がい報告！」ベアトリーチェのすぐそばで、兜かぶとの面めん頬ぽおを上げてそう怒ど鳴なったのは、黒い肌はだ、黒い目のフレデリック・イヌテロだ。十七番警けい邏ら隊隊長。今のベアトリーチェにとっては直属の上官にあたる。彼の剣や盾たて、鎧よろいも血で汚よごれているが、負傷はしていないようだ。

「ベアトリーチェ、大丈夫か」

「はい」

「そうか」イヌテロはベアトリーチェの剣けんをちらりと見た。「それでは戦えんな。盾もどこかで落としたか。俺の脇わき差ざしを使うか」

「それでは、隊長が」

「素す手ででうろちょろされるよりはいい」イヌテロは脇差を鞘さやごと抜ぬいてベアトリーチェに差しだした。「使え」

「……お借りします」

「マーロン・ロドニーの作だ。斬れるぞ。俺には少し短いが、お前にはちょうどよかろう」

　ニヤリと笑ってみせたイヌテロは、いわゆる十年戦士だ。〝死神〟の異名をとる羅ラ叉サ副長や、今は亡き〝女め夜や叉しや〟釈シヤク拿ナのように派手な活かつ躍やくはないが、市中巡回と拠きよ点てん警備で数えきれない実戦を経験している。豪ごう放ほう磊らい落らくな人ひと柄がらで、人望も厚い。

　だが、さすがのイヌテロも、隊長補モルグレーの報告を聞いて、表情を曇くもらせた。

「──八名不明か……敵は龍りゆう州しゆう人、骨こつ龍りゆうのようだが、生半可な相手ではないな」

　今日、アサイラムの警備にあたっていたのは、十七番警邏隊の十六名だけではない。十六番守護隊隊長李イ童ドウ晏アン以下十六名、及および二十四番後備隊の十四名、あわせて四十六名がつめていた。後備隊は、十六番、十七番隊が待合室や受付のあるＡ棟の正面玄げん関かん、さらにはＡ棟につづく病棟で敵を食い止めている間、入院者の避ひ難なん支援に回っていたので、この場にはいない。が、それにしてもずいぶん減った。

「李イ童ドウ晏アン、そっちはどうだ」

「不明十」

　熾しき帝てい国こく出身、糸目の李イ童ドウ晏アンは寡か黙もくだ。普ふ段だんは無気力にも見えるが、やる気のない者が秩序の番人で隊を任せられるはずがない。単に感情を表に出さない男なのだ。

「十八名……」イヌテロが低く唸うなって面頬を下ろした。「半減以下だな」その呟つぶやきには、しかし、もう事実の確かく認にん以上の意味はなさそうだった。悲ひ嘆たんに暮れている場合でもなかった。

　宿舎棟は四階建ての堅けん固ごな建物で、どの階も長い廊ろう下かの両側に大小の部屋が並ぶ造りになっている。今、ベアトリーチェたちがいるのは、一階の廊下の端はしだ。病棟と宿舎棟との連結部分を隔壁で閉へい鎖さし、迫せまりくる敵を視界から追いだす

ことに、ひとまず成功したわけだが、あくまでひとまずだった。

　くぐもってはいるものの、硝子ガラスの割れる音が聞こえた。廊下に隣りん接せつしている部屋からのようだ。宿舎棟の窓は耐たい衝しよう撃げき硝子製だが、何をどうやっても絶対に割れないという代しろ物ものではない。敵にしてみれば、鉄骨＋強化骨材製の隔壁をぶち破るより、いったんＡ棟の外に出て、窓から宿舎棟に侵しん入にゆうする方法を選びたくもなるだろう。

「退ひくぞ」イヌテロが盾を振ふって合図した。ベアトリーチェも、イヌテロから借りうけたマーロン・ロドニーの脇差を手に走りだそうとしたが、李イ童ドウ晏アンが動かない。イヌテロもそれに気づいたようだ。「──李イ童ドウ晏アン、何をしている！」

「廊下が狭せまい」李イ童ドウ晏アンは剣を抜いて首をふった。「うぬらが先にゆけ」

「だが」

「ゆけ」

「お前……」イヌテロは言葉をつごうとして、やめた。

　李イ童ドウ晏アンの十六番守護隊は、十七番警邏隊に比べて不明者──おそらくは死者が多いだけではない。負傷者も多かった。

　見れば、李イ童ドウ晏アン自身の足あし許もとにも血だまりができていた。

　腹部、鎧の隙すき間まから血が流れ落ちている。かなりの量だ。

「走るより斬る方が楽だ」

　李イ童ドウ晏アンは盾を捨て、兜をも脱ぬいで床ゆかに放ほうり、脇差を抜いて左手に持った。

　それから、双そう剣けん鬼きと化したおのれを楽しむように、細い目をさらに細めて笑ってみせた。

「ゆけ」

〝小しよう羅ら刹せつ〟。李イ童ドウ晏アンをそう呼んだのは、デ

ニス・サンライズ総長だ。

　何でも、秩序の番人草創期に、李イ童ドウ晏アンと同じ熾帝国出身の李イ鄭ジヨウ嘉カという剣達者がいて、悪党どもに〝羅刹〟と恐おそれられていたらしい。十年近く前に、まだ今のベアトリーチェと同じくらいの年だった李イ童ドウ晏アンの剣捌さばきを見た総長が、彼こそ李イ鄭ジヨウ嘉カの再来、小羅刹よ、とたたえたのだという。

　それを名めい誉よに思ったのだろう。以来、李イ童ドウ晏アンは鎧の右みぎ腕うでと剣に《小羅刹》の文字を刻んでいる。ベアトリーチェは見たことがないが、背中に羅刹の刺いれ青ずみもあるという。今回にかぎらず、彼と彼の率いる隊は負傷率が高いようだが、それはその戦いぶりがあまりに峻しゆん烈れつだからだ。

「うぬらは邪じや魔まだ」

「……わかった」イヌテロは迷いを断たちきるように、自ら先頭きって駆かけだした。「十七番警けい邏ら隊、俺につづけ！　後ろを振り返る必要はないぞ、しんがりは小羅刹だ！」

　左側のドアを蹴け破やぶって、龍州人が廊下になだれこんできたのは、それから間もなくだった。

　だが、イヌテロに命じられたとおり、ベアトリーチェは後ろを見なかった。ただ走った。剣けん戟げきの音。龍州語の怒ど号ごう。共通語の雄お叫たけび。苦鳴。それらに耳を傾かたむけず、ひたすら走った。前だけを見ていた。廊下の突つきあたりまであっという間だった。いや、実際はやけに長く感じられる時間だったが、終わってみると一秒はいつも一秒で、一分は一分だ。変わらない。時は重さが違ちがうだけで、長さはいつだって同じだ。

　ベアトリーチェは振り向きたい気持ちをこらえて、突きあたりを右に曲がった。

　その七、ハメーテル先はもう、地下待たい避ひ壕ごうの入口だった。

　入口の前には、合金製の骨組みと特とく殊しゆ材のクッションでバリケードが築かれ、二十四番後備隊の者たちがそこを守っている。

「避難は終わったか！」イヌテロが怒鳴るように訊きくと、二十四番後備隊隊長ダミアン・マーソローが進みでてきた。

「ああ、終わった。しかし──」

「しかし？」イヌテロが問い返したときだった。

　バリケードの向こうから、誰だれかが飛びだしてきた。団の者ではない。白い女性用ナース・医術士服ユニを着て、えらく女性的というか、肉感的な体つきをしている。

　モリー・リップスだった。

「母様……！」ベアトリーチェは周りの目を気にすることも忘れた。モリーはバリケードから出てきただけでなく、ベアトリーチェたちが今きた道を行こうとしている。かなり急いでいるというより、焦あせっている様子だ。「母様、何してるんです！」ベアトリーチェはモリーの行く手をさえぎって兜かぶとの面めん頬ぽおを上げた。「危ないですよ！　待避壕の中に戻もどってください！」

「リーチェ」モリーはベアトリーチェを認めると、一応、足を止めたが、構っていられないというふうだった。「どきなさい。わたしは行かなければならないのよ」

「こんなときに、どこへ！」

「避難しそびれた子がいるの。友ユー花フアとピノアがここにいないとしたら、Ｘ棟とうの温室しかないわ。あの二人はいつもあそこだから」

「友ユー花フア……？」

　ピノアの方は知らないが、友ユー花フアならベアトリーチェも知っている。薄うすいピンク色の髪かみを、足首に届きそうなくらいまで伸のばしている女の子だ。ベアトリーチェがまだアサイラムにいたころ、精神障害者として街で保護され、連れてこられた。外見もふくめて、いろいろな意味で特殊な子だったので、よく覚えている。

　モリーの見立てによると、友ユー花フアはどうやら、魔術士として養成される過程で壊されたらしい。頭とう髪はつだけでなく、眉まゆ毛げや睫まつ毛げ、目までピンク色なのも、薬物の副作用のよ

うだ。

　その影えい響きようは友ユー花フアの心にまで及およんでいる。彼女は言葉を話すことができないし、その他の手段による感情表現もかなりとぼしい。なぜか髪の毛を切られることだけは強く拒きよ絶ぜつするのだが、それ以外はまるで植物みたいな印象の子だった。

「ピノアは半年くらい前、ここにきた子で、友ユー花フアと仲がいいのよ。まだ十三歳だけれど、ひどい目に遭あってきたせいでしょうね。わたしにもなかなか心を開いてくれないわ。ピノアが一いつ緒しよにいて安心できる相手は友ユー花フアだけなのよ。でも、今日はたまたまＸ棟の研究室は誰も使っていなくて──」モリーは苛いら立だたしげに頭を振ふってベアトリーチェを押しのけようとした。「とにかく、おどき！」

「ダメです！　危ないって、わからないんですか！　だいたい、母様が行かなくても──」

「わたし以外の誰が、あの子たちのために命を張れるのよ！」

　頬をぶたれたような心ここ地ちがした。

　そうだ。アサイラムにやってくるのは、世界から見捨てられた者たちだ。ベアトリーチェもかつてそうだった。そんな孤児みなしごたちを、モリーは全面的に受けいれてくれる。最初はモリーを信じられなかった者も、徐じよ々じよに気づいてゆく。モリーだけは絶対に自分を裏切ることも、見捨てることもないと。モリーは決して自分を忘れないと。

　ベアトリーチェは思わず棒立ちになってしまった。

　モリーはその隙すきを見み逃のがさず、ベアトリーチェの横をすり抜ぬけていった。

「待避壕は閉へい鎖さなさい！　誰もついてこないで！　かえって目立つわ！　いいわね！」

「か、母様……！」ベアトリーチェはモリーを追った。が、速い。愛用のハイヒールをさっと脱ぬいで手につっかけると、どんどん速度が上がってゆく。後ろでイヌテロ隊長が指示を飛ばす声がした。「マーソロー、後備を下げて待避壕は隔かく壁へき閉鎖しろ！　我

が隊はモリー殿どのを！」十七番警邏隊の皆みなはきてくれるようだ。正直、心強い。だって、ベアトリーチェ一人では無理だ。

　大切な人を守るだけの力が、ベアトリーチェにはない。

　でも、そばにいて、守りたい。

　母様。

　わたしは復ふく讐しゆうのために剣をとり、あなたのために銀の軍団の一員になりました。

　いつか、研とぎすまされた一振りの剣となりたかった。

　あなたの子供ではなくて、あなたを守る刃やいばになりたかった。

　昔、わたしが一人、見よう見まねで剣の練習をして、怪け我がをすると、いつもあなたが治してくれました。あなたはそのたびに、わたしを抱だきしめて叱しかってくれました。実の母と同じやわらかさで。あなたはわたしの頭を撫なでてくれました。

　母様。

　話したいことがたくさんあります。大好きな人が死にました。いっぱい汚けがされました。大事な何かを奪うばわれました。ベアトリーチェはもう少女でいられなくなってしまいました。

　わたしは、怖こわい。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。まだ怖い。

　心のどこかが痺しびれていて、おかしくなっている。

　本当は母様、あなたにあのときの傷をふさいで欲しかった。

　だけど、できなかった。

　あなたを心配させたくありませんでした。だから、嫌いやだったけど、屈くつ辱じよく的だったけど、団が契けい約やくしている他の医術士に治ち療りようを頼たのみました。

「母様……！」

　モリーは振り返らない。さっき十七番警けい邏ら隊が直進してきて突つきあたった角を、曲がらずにそのまま進む。そっちには二階へ上がる階段がある。階段？　Ｘ棟へ行くのに？　ベアトリーチェは角のところで、十六番守護隊がいるはずの廊ろう下かにちらりと目をやった。足を止めなかったのでよく見えなかったが、まだ彼らは健在のようだった。少し安あん堵どした。

　しかし、アサイラムの建物の中で、Ｘ棟は唯ゆい一いつ、どの棟とも褒つながっていない。位置的には、中庭をはさんで宿舎棟と向かいあう場所にあるが、モリーはどうやってあそこまで行くつもりなのか──と、思ったときには、モリーは階段を駆かけ上がり、踊おどり場の窓に手をあてていた。

　あっさり割れた。

　耐たい衝しよう撃げき硝子ガラスが粉々になって、外側に飛散した。

　それは手品などではない。医術式の応用だ。ベアトリーチェはくわしく知らないが、医術式も魔ま術じゆつの一種で、実は一いつ般ぱん的に考えられているよりも、ずいぶんさまざまなことができるのだという。流派の掟おきてに縛しばられてさえいなければ、だが。

　モリー・リップスはとうに流派を捨て、大Ｐ陸医Ｃ術士Ｍ会Ａにも属さず、自己流を確立している、おそらくエルデン一の医術士だ。

　そんなモリーにとって、硝子一枚割る程度のことは宴えん会かい芸レベルなのかもしれない。

　というか、実際、モリーは以前、秩序の番人の力ちから自じ慢まんと煉れん瓦が割りの勝負をして、見事勝利を収めてみせた。たしか、ベアトリーチェがアサイラムにいたころ、その場面をこの目で見た。

「母様、待って……！」

　モリーは少しもためらわず、窓から外に飛びだした。ベアトリーチェもすぐにあとを追った。踊り場から地面までは一・五メーテルといったところだ。芝しば生ふとはいえ、重装備だし、着地の衝撃

はそこそこあったが、気にしていられなかった。イヌテロ隊長以下、十七番警邏隊の皆がついてきているかどうかも確かめなかった。

　Ｘ棟とうへ。

　中庭を三十メーテルばかり突っ切れば、研究用の植物を育てるための温室や、高等医術式の研究室などを備えたＸ棟がある。

　ただ、頭の隅すみで、まずい、という思いはあった。だって、ここは中庭だ。宿舎棟の隔壁を閉鎖したあと、龍州人たちはいったん中庭に出て、窓を割って建物の中に侵しん入にゅうしてきたのだ。敵に見つかりでもしたら──

　しかし、考えても仕方ない。それよりも、走らないと。

　ベアトリーチェは懸けん命めいに足を動かした。三十メーテル。裸足はだしで軽装のモリーは速い。やはり、追いつくのは無理か。もうモリーは、Ｘ棟の約半分を占しめる硝子張りの温室直通の通用口にたどりついている。その手が通用口の扉とびらを開けた。モリーが中に滑すべりこんでから数秒遅おくれだった。ベアトリーチェも温室に飛びこんだ。しっとりと湿しめったなまあたたかい空気。青あお臭くさい、生っぽい匂においにおい。そして、奇き妙みような形の葉をつけた背の高い樹木が、視界を遮さえぎった。

「母様！」ベアトリーチェは木々の合間の舗ほ装そうされた道を進んだ。道はぐねぐね曲がっている。だが、ベアトリーチェの記き憶おくによると、温室はそう広くないはずだ。「ピノア！　友ユー花フア！」どこかでモリーの声がした。それほど遠くない。気のせいだろうか。前方、木立の向こうに、白い人ひと影かげがちらりと見えた。ベアトリーチェは道を無視することに決め、巨きよ大だいな葉をかきわけて直進した。「母様！　どこです……！」

　いた。

　そこは温室内の開けた場所で、鉢はち植うえの植物を並べた棚たなや、ベンチが設しつらえられていた。

　モリーは棚の前で地面に膝ひざをつき、黒くろ髪かみの少女をひっしと抱きしめている。

　そのすぐそばに突っ立って、色つきの硝子玉めいた目をベアト

リーチェに向けたのが友ユー花フアだ。相変わらず、薄うすいピンク色の髪の毛が長すぎて、異様といえば異様だが、不思議と違い和わ感はあまりない。どこか、彼女はそういうものなのだと納なつ得とくしてしまうところがある。

　ともあれ、あの黒髪の少女がピノアか。きっと、外の異変を察知したものの、逃にげるに逃げられず、ここで不安に震ふるえていたのだろう。ピノアは「怖かった」とか「きてくれると思わなかった」とか言いながら泣きじゃくっている。

「馬ば鹿かね」モリーはピノアの背中や頭をこするように撫なでていた。「わたしがあなたたちのことを忘れるとでも思ったの？」

「……ごめんなさい」

　ピノアが謝った気持ちは、ベアトリーチェにも何となくわかる。

　たぶん、ピノアは思っていたのだろう。自分は忘れられているに違ちがいない、と。

　自分は見捨てられた。また見捨てられた。結局、自分は見捨てられつづける。どうせこんなものだ。生きていたって、何もいいことなんてない。それは、アサイラムにきて間もない子供には珍めずらしくない考え方だ。

「馬鹿」モリーはもう一度そう言って、友ユー花フアを引きよせ、ピノアもろともぎゅっと抱だきしめた。抱ほう擁ようは短かったが、力強かった。「さあ、立ちなさい。研究室に地下があるわ。ここにいるよりは──」

　モリーはピノアと友ユー花フアを抱かかえるようにして立ち上がった。そのころには、イヌテロ以下十七番警邏隊の者たちもこの場に到とう着ちゃくしはじめていて、モリーはベアトリーチェと目があうと、しょうがないわね、という顔を一いつ瞬しゅんだけしてみせた。そう。それはほんの一瞬だった。

　もう耳慣れてしまった。

　盛せい大だいに硝子の割れる音がした。

　だが、今度は上だ。頭上から硝子の破は片へんが大量に降ってくる。硝子の屋根が破られたのか。

でも、なぜ、どうして、誰だれがそんなことを、何のために──ベアトリーチェは混乱しそうになりながらも、とっさにモリーや友ユー花フア、ピノアを庇かばうべく身を投げだした。が、三人に対して一人では無理だ。足りないぶんを補ってくれたのは、イヌテロと隊長補のモルグレーだった。さらにイヌテロは、盾たてで硝子ガラスの雨を防ぎつつ叫さけんだ。「敵だ！　モリー殿どのを死守しろ……！」

敵。

たしかに、それ以外にありえない。

敵は、硝子の雨の大きすぎる一ひと粒つぶとなって、落ちてきた。

白い人骨の紋もん様ようが刺し繍しゆうされた藍あい色いろの袖そでなし袍パオを身につけ、剝むき出しのやたらと太い腕うでや顔面が刺いれ青ずみだらけで、とにかく全身これ筋肉といった体つきの男が。

骨こつ龍りゆうの頭目の一人だ。

名は、呉ウー戒ジエ。

やつは着地するなり、モリーに、つまり、ベアトリーチェの方に飛びかかってこようとした。ただ、十七番警けい邏ら隊の皆みなは、イヌテロ隊長の声を聞いて身構えていた。イヌテロ自身も、隊長補モルグレーも、むろんベアトリーチェも、白はく刃じんを抜ぬきつらねてただちに呉ウー戒ジエに殺さつ到とうした。したのだが。

呉ウー戒ジエは怪かい物ぶつめいていた。

やつは、十七番警邏隊士たちの盾を足場にして、歩いた。

もっと正確にいえば、呉ウー戒ジエは非常識な動体視力で押しよせる剣けんを見切って、尋じん常じようではない身体能力でこれをかいくぐり、いくつもの盾の上を飛び移るように蹴け飛とばすことによって、次々と隊士たちを弾はじき飛ばしたのだ。

「──うっ！」ベアトリーチェも、盾は持っていなかったが、イヌテロや隊長補モルグレーに巻きこまれて尻しり餅もちをついた。イヌ

テロは、しかし、すぐに態勢を立てなおした。「──ヌゥ、何糞ダミツト！　怯ひるむな……！」

　指揮官にはいろいろなタイプがいるが、十七番警邏隊隊長フレデリック・イヌテロは、まず自分がなすべきことを行い、部下に道を示そうとする。戦えと命じる前に自ら戦う。進めと号令をかけるときにはもう、おのれは進んでいる。イヌテロは誰よりも早く立ち上がって盾で体の半面を覆おおい、剣を突つきだして呉ウー戒ジエに突とつ貫かんした。

　だから、彼が犠ぎ牲せいとなったことは、必然だった。

「グ……オォッ……」

　呉ウー戒ジエは左右の手に一本ずつ、横手のついた棒状の武器を持っていた。

　それが、貫つらぬいていた。

　装そう甲こうを貫かん通つうして、一本はイヌテロの左ひだり脇わき腹ばらに、もう一本は腹のまんなかに突き刺さり、尖とがった先せん端たんが背中に抜けている。

　呉ウー戒ジエは、無造作にさえ見える回し蹴り一発でイヌテロの盾を吹ふっ飛ばし、あっさり懐ふところに入りこんで、二本の武器をぶちこんだのだった。

「……しゃ、しゃらくさい……！」

　イヌテロはそれでも剣を振ふり上げようとしたが、果たせなかった。

　呉ウー戒ジエが両りよう腕うでを左右に押し広げた。金属と人体が、一いつ緒しよくたに引きちぎれる音がした。

　割かれた。

　イヌテロは剣を取り落とし、あとずさりながらおのれの腹を両手で押さえた。腸がこぼれていた。血が、得体の知れないもろもろの構成物が、あふれていた。イヌテロは立っていられなくなって、倒たおれた。それも道理だった。イヌテロの上半身と下半身を褒つないでいるのは、もはや背骨と一部の内臓のみだった。そんなもので

体重を支えられるはずがない。

「……な、何を……している……」だが、イヌテロは意識を保っていた。まるで残ざん骸がいのように成り果てようとも、彼は依い然ぜんとして十七番警邏隊の隊長であり、秩序の番人の一隊をあずかる者として命を下した。「──我らの義を……示、せ……！」

　であれば、十七番警邏隊は従わねばならぬ。

　ゆかねばならぬ。

　たとえ、いかに相手が圧あつ倒とう的な敵でも、他の龍州人たちの足音が近づいてきていても、情勢がきわめて不利でも、手が震ふるえても、膝ひざが笑っても。

　いやしくも銀の軍団の一員を名乗る者であれば、おのれがなすべきことはなさねばならぬ。

「おお！　おおおおおッ……！」先せん陣じんをきったのは隊長補モルグレーだった。ベアトリーチェもモルグレーにつづこうと、イヌテロから借りうけたマーロン・ロドニーの脇わき差ざしを正眼に構えた。何かに取り憑つかれたようだった。十七番警邏隊の生き残りは、がむしゃらに呉ウー戒ジエに突っこんでいった。そのたびに、塵ごみ屑くずのようにはね返された。あるいは、一ひと殴なぐり、一蹴りで致ち命めい傷しようを負わされた。ベアトリーチェも、一度目は足あし払ばらいをかけられて転てん倒とうした。二度目はあの棒状の武器で剣を叩たたき折られ、剣身が半分の長さになった。

　だが、それでも、退ひくわけにはゆかない。退けないのだ。退路なんてどこにもない。

　ベアトリーチェは気づいていた。龍州人の増ぞう援えんがきた。呉ウー戒ジエだけでも手に負えないのに。

　さすがに挫くじけてしまいそうになったが、ちらりと振り返ってモリーとピノアと友ユー花フアの姿を見ると、気合いが入った。まだだ。まだがんばれる。母様。どのみち、わたしにはがんばる以外にできることなんて、何もない。

　でも、あの女は──と、龍州人の一団に目をやったときだった。

　両側に深いスリットの入った、黒地に紅くれないの髑どく髏ろ柄がらの旗チー袍パオを着て、髪かみをドレッドロックスにし、黒い口紅を塗ぬり、　　眉まゆを剃そり落として、　　　目の、周、りに不気味、な、刺青、を、施ほどこした、　　　　あ、の、おんな、は、

　──あ　れ？

　こえ　が　でな　い。

　うごかない。

　わたしは、どうして……？

「呉ウー戒ジエ、お遊びはそのへんにしておきなさい」

　ドレッド女は、今やベアトリーチェの視界一いつ杯ぱいに広がっていた。

　目。

　あの黒い底のない目が、ベアトリーチェの中心だった。

「さあ、秩序の番人、あんたたちも無む駄だな争いはやめたらどう。あたしたちは別に、あんたたちを殺しにきたわけじゃない」

　それにしても、そのあまりに場ば違ちがいな落ちつき払った口調と停戦の呼びかけが、まさか罠わなだったなんて、誰だれも気づかなかったに違いない。

　骨こつ龍りゅうのもう一人の頭目、媚メイ婁ルー。

　あのドレッド女は魔ま性しようの目の持ち主で、あやしげな妖よう術じゆつを使う。思い出した。あの目を見てはいけないのだ。今さらだった。遅おそすぎた。

　もう戦いは完全にやんでいる。皆みな、見てしまったのだ。媚メイ婁ルーの目を。

　動けない。

「断っておくけど、嘘うそはついてないわよ？」媚メイ妻ルーは少し顎あごを上げて嗤わらった。「あたしたちの仕事は、ここを襲しゅう撃げきして制圧すること。あたしの故国くにに将棋ジアンキという遊ゆう戯ぎがあってね。盤ばん上じように並べた駒こまをとりあって、王将をとった方が勝ち。王将以外の駒はいくらとっても勝ちにはならない。ここはモリー・リップス・アサイラムというのでしょう。王将は？」

　媚メイ妻ルーが歩いてくる。ベアトリーチェは微び動どうだにしていないから、当然、媚メイ妻ルーが近づいてくるに従って、互たがいの位置関係が変わってゆく。位置関係が変化すれば、ベアトリーチェの視界の中で、媚メイ妻ルーの目も移動する。

　それてゆく。心からも、離はなれてゆく。

　──動く。

　体が、動く。呪じゆ縛ばくが解けつつある。

　媚メイ妻ルーがすぐそばを通り抜ぬけていった。ベアトリーチェは飛びかかろうとした。だが、ダメだった。媚メイ妻ルーは、揃そろいの黒っぽい装そう甲こう服を着て、頭部を保護する籠かご状の防具までかぶった龍州人たちを引き連れていた。ベアトリーチェは彼らに取り押さえられ、あっという間に組み伏ふせられた。ベアトリーチェ以外にも、呪縛から解き放たれた十七番警けい邏ら隊の者が、何人か同じように抵てい抗こうを封ふうじられた。

　もっとも、その数は多くなかった。

　呉ウー戒ジエの手によって、すでにほとんどの隊士が戦せん闘とう不能に陥おちいっていたからだ。

「王将は」

　今、媚メイ妻ルーのそばには呉ウー戒ジエがいる。

　その前には、友ユー花フアとピノアを背中に庇かばう格好で、全身を硬こう直ちよくさせているモリーがいる。

「あんたでしょう。モリー・リップス」

「……くっ！　やめろ！　母様に──」ベアトリーチェは龍州人を振

ふりほどこうとしたが、肩かたを極きめられている。力が入らない。かえって髪の毛をつかまれ、顔を地面に押しつけられる始末だ。「よせ！　やめろ！　やめてくれ！　母様には手を出すな……！」

「ああ、やっぱり──」

　媢メイ妻ルーがモリーから目を離さずにそう言った瞬しゅん間かん、ベアトリーチェは頭の中で何かが壊こわれるけたたましい音を聞いた。

　そうか。そうだ。媢メイ妻ルーは知らなかった。そういうこともありうる。特とく徴ちょうくらいは伝え聞いていても、面識がなければ、確証は持てないものかもしれない。はからずも、ベアトリーチェの反応が媢メイ妻ルーに確信させたのだ。

「この女がモリー・リップスなのね？」媢メイ妻ルーは腰こしにつるしていた鞘さやからナイフを抜いた。髑どく髏ろの意い匠しょうが禍まが々まがしい、反りの強いナイフだ。「──正直、あまり気乗りのしない仕事でね。あたしもやりたくてこんなことをやってるわけじゃないから、さっさと終わらせたいのよ。王将、とらせてもらうわ。恨うらむなら、ＳＩＸを恨むことね」

　ナイフの刃はがモリーの首筋に押しあてられた。ベアトリーチェは何か自分でもよくわからないことをわめいた。媢メイ妻ルーがナイフに力をこめようとしている。

　その、右手を。

　モリーの右手がつかんだ。

「……あまり……わたしを、舐なめないことね……！」

　媢メイ妻ルーの呪縛が解けていたとは考えづらい。実際、モリーの声は切れ切れだったし、動きもぎこちなかった。

　ただし、ひとたび手を触ふれてしまえば、モリー・リップスは超ちょう高速で正確な施術系オペレーションズを行う稀き代たいの医術士だ。医術士は人体の構造を知り、その精査と操作によって損傷を治ち療りようする。理論的にはその逆も可能だが、厳格な師し弟てい制に支えられた数多あまたある流派の大多数で、医術式の応用による破は壊かいは禁じられているという。しかし、モリーはとう

に流派を捨てた身だ。



　治療も手早ければ、当然、破壊も迅じん速そくだった。

　媚メイ妻ルーの右手が、爆はぜた。

「□□吱アイ呀ヤア呀呀呀呀呀呀呀ァァァッ……！」

　皮ひ膚ふが限界まで膨ぼう張ちようして破れ、皮下脂し肪ぼうが飛びだし、筋肉がめくれ上がって弾はじけ飛び、腱けんが剝はがれ、破は裂れつした血管からおびただしい赤い液体が撒まき散らされて、媚メイ婁ルーの右手は一瞬のうちに血まみれの骨だけになっていた。

　もちろん、そんな有様でナイフを持っていられるはずがない。モリーに対する呪縛も完全に解けたようだ。

　媚メイ婁ルーはよろめいてあとずさった。返り血を体中に浴びたモリーが、さらに手を伸のばそうとした。狙ねらうは媚メイ婁ルーの首か。モリーはしとめる気だ。手が、届きそうだった。あと少しだった。いずれにせよ、すべてはごくごく短時間のうちに進行した。ベアトリーチェはただ見ていることしかできなかった。龍州人たちの拘こう束そくが甘くなったことにも気づかなかった。ベアトリーチェは何もできず、ただ見ていたのだ。

　媚メイ婁ルーの前にすっと割りこんできた呉ウー戒ジエが、十字を描えがくように、凶きよう猛もうな二本の武器を振るうさまを。

　モリーは、あるいは、とっさに身をよじってかわそうとしたのかもしれない。

　呉ウー戒ジエの武器は、一本がモリーの胸と胴どうの間を横に、もう一本が左肩から股ももまでを縦に切り裂さいた。

　十字がゆがんでいる。まっすぐではない。斜ななめの十字だ。

　母様が。

「──ああ……」

嘘うそだ。

嘘だと言ってください。誰だれか、嘘だと言って。

呉ウー戒ジエの武器でさらに頭部を殴おう打だされ、それはとっさに手を出して防いだものの、完全には防ぼう御ぎよできず、その勢いで膝ひざをついて白目を剝むきそうになっているあの人が、母様だとはどうしても信じられない。わたしは信じない。母様。どうか違ちがうと言ってください。母様は、だって、モリー・リップスじゃないですか。強くてやさしくてあたたかくて、少し下品だけど、やっぱり気高い母様。わたしの母様。みんなの母様。母様。母様。母様──それなのに。

「ああ……！」

「あっははは……！」呉ウー戒ジエに支えられた媚メイ妻ルーが、右手を左手で押さえながら高笑いした。「ざまあないよ！　何てことをするんだ、痛いじゃないか、この女、淫売インマイ女医術士ヌウイシユシ！　ざまあないね！　あはははははは っ……！」

笑うな。

笑うなんて許さない。何がおかしいっていうんだ。何もおかしいことなんて、ない。

だけれど、泣いても。叫さけんでも。暴れようとして、龍州人たちに押さえこまれても。

母様は倒たおれる。母様が死んでしまう。ピノアは泣き崩くずれる。目がくらむ。何かがはらわたの中でのたうち回っていて、それはとてもとても熱いのに、体の力が抜ぬけそうになる。世界が回る。「かあさま……？」声がする。これは、誰の声？　自分の声？　ピノア？　違う。初めて聞いた。「か・あ・さ・ま！」友ユー花フアがモリーに、母様に手を伸ばそうとして、頭を抱かかえ、悲鳴を上げた。魔ま術じゆつ士し養成の過程で壊されてしまったはずの少女が、声にならない声で泣き叫んだ。

「────────────────────────ッ！」

その絶ぜつ叫きようが呼びよせたのか。

友ユー花フアの薄うすいピンク色の髪かみの毛が、突とつ風ぷう

に吹ふき上げられたように逆巻いた。

　彼女の体を取り巻くようにあらわれた赤っぽい燐りん光こうは、魔力、というやつなのか。

　それが、友ユー花フアの中に集束した。

　集中して、結実し、あふれだしたのは、火だった。

　何本もの炎ほのおの帯が渦うず巻まいて、乱れ、媚メイ婁ルーを叩たたこうとした。

　だが、紙かみ一ひと重えだった。呉ウー戒ジエが自分の身を盾たてにして媚メイ婁ルーを守った。その呉ウー戒ジエは、体の一部と衣類を燃え上がらせたまま、媚メイ婁ルーを抱えて退ひこうとしている。龍州人たちはパニックに陥おちいっていた。ベアトリーチェを押さえつけていた龍州人も逃にげだした。それも無理はなかった。炎の帯は依い然ぜんとして暴れまわっていて、植物にも引火していた。熱い。煙けむりが目にしみる。火だ。あちこちに火の手が上がっている。火事。火事だ。燃えていた。何もかもが燃えようとしていた。

Omenage 897 9th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.5

涙をふかないで

アサイラムは、鉄てつ条じよう網もうで保護された高さ五メーテル近くの分厚い壁かべに囲まれている。門も頑がん丈じような開閉式の鉄てつ柵さくで封ふう鎖さできるようになっているが、どうやら襲しゆう撃げきは弩いしゆみの一いつ斉せい射撃で始まったらしい。

そこらじゅうに散らばる、矢、矢、矢。

倒れ伏ふしている番人たちも、大半が射殺されたようだ。

正面玄げん関かんや受付カウンター、待合室などがあるＡ棟とうの被ひ害がいもひどかった。割られた硝子ガラスの破は片へんが飛び散り、ソファは叩き壊こわされ、カウンターの上には女の事務員が、ほとんど全ぜん裸らで、血だらけで、足を開いた格好で横たえられていた。

外来の患かん者じやとおぼしき者たちの死体がいくつもあった。女は乱暴された上で息の根を止められていた。男は無残に傷つけられ、殺されていた。武装していない者を庇かばうような体勢で死んでいる番人がいた。番人と重なりあうように倒れている龍りゆう州しゆう人らしき死体もあった。

Ａ棟を抜けて病棟に入っても、そこかしこに激しい戦いの痕こん跡せきが残っていた。

ただ、このあたりでは、黒い装そう甲こう服を着て籠かご状の頭部防具をかぶった龍州人の死体が、番人のそれよりも多かった。一いつ般ぱん人や非戦せん闘とう員の姿は見あたらなかった。おそらく、アサイラムの警備にあたっていた番人たちは、混乱のさなかＡ棟でだいぶ時間を稼かせぎ、その間に子供たちをはじめとする入院者の避ひ難なんがわりあい整然と行われたのだろう。そんなふうに想像される光景だった。

しかし、もっともすさまじかったのは、一度閉へい鎖さされてから開けなおされたらしい隔かく壁へきを越こえた先の宿舎棟だ。

「これは──」

アサイラムに駆かけつけたのは、秩序の番人十二番遊ゆう撃げき隊隊長シャルロット・リンデ以下十六名と、二十三番後備隊の十六

名。それに、マリアローズをふくめたＺＯＯの六人だ。

　シャルロットは女性用のプロヴィデンスＧＤＳを身にまとい、羽根付きの兜かぶとで顔を覆おおって、小型の円形盾と、幅はば広ひろのモトロール刀を腰こしにさげている。女の番人はきわめて少ないという話だが、一隊を任されているくらいだから、並みではないのだろう。

　そのシャルロットが、兜の面めん頬ぽおを上げて、思わず立ち止まるくらいの惨さん状じようだった。

「李イ童ドウ晏アン……」

　その番人は、何本もの刀とう剣けんで壁に縫いつけられていた。

　ただ、彼が左右の手に持つ剣も、龍州人を一人ずつ串くし刺ざしにしていた。

　さらに、彼の足あし許もとには龍州人と番人の死し屍しが累るいゝるいと横たわっていた。

　おぞましいほどの血けつ臭しゆうだ。シャルロットに李イ童ドウ晏アンと呼ばれた番人は、あえてここにとどまって龍州人たちと斬きりあい、壮そう絶ぜつな死を遂とげたのか。

　不可解なのは、李イ童ドウ晏アンが兜をかぶっておらず、その死に顔がどこか満足げなことだ。

　李イ童ドウ晏アンはまるで、勝ち誇ほこっているかのように見える。そして、顔面をふくめた彼の頭部には傷一つない。これでは本当に、死にながらも殺しまくって、結果的には勝利したようなものだ。

「まさしく……」シャルロットの口調も呆あきれ半分だった。「李イ童ドウ晏アンの死にざま、小しよう羅ら刹せつにふさわしくあったと、あとで総長に申し上げておきましょう。それとも、蘇そ生せいしてから己おのが口で言いますか。いいえ、貴公のことです。口で語るより剣に物言わす方が得意でしょうね」

　それからシャルロットは、部下数名に命じて李イ童ドウ晏アンの遺体を床ゆかに寝ねかせた。どのみち、今、それ以上の措そ置ちをとることは無理だ。先を急がなければならない。

　だが、この廊ろう下かの先を右に曲がれば待たい避ひ壕ごうがあるはずなのに、やけに静かだ。戦闘の気配がない。いったい、どういうことだろう。

「──む」

　と、番人たちが再び前進しはじめるなか、トマトクンが足を止めて片方の眉まゆをつり上げた。

　左を見る。

　廊下に面して並ぶ部屋のドアが開きっぱなしだった。

　トマトクンは無言で部屋に入っていった。ピンパーネルが条件反射のように主人のあとを追い、カタリ、ユリカ、マリアローズ、サフィニアの順でそれにつづいた。

「トマトクン、どうしたのさ！」

　部屋の中にはベッドや机、椅い子すなどの生活用具が揃そろっていて、荒あらされた様子はなかったが、土足で踏ふみにじられ、汚よごされていた。

　堅けん牢ろうそうな二重窓が割られている。

　襲撃者は窓を破って外から部屋に入り、さっきの廊下で李イ童ドウ晏アンたちと戦ったのか。だが、それならどうして、宿舎棟の廊下に敵の姿がなかったのか。まさか、敵はすでに撤てつ退たいしたのか。

　その答えを見つけたのはトマトクンだ。

「外だ」トマトクンは短く言うなり、窓から中庭に飛びだした。ピンパーネル、カタリの次に窓まど枠わくに足をかけたとき、マリアローズはトマトクンの行動の意味を理解した。Ｘ棟だ。なぜかわからないが、Ｘ棟に龍州人たちが群がっている。胸むな騒さわぎがした。

　──モリー。

　いや、でも、どうしてモリーがＸ棟なんかに？

マリアローズが知っているかぎりでは、Ｘ棟といえば、温室と研究室があって──モリーがたまたま研究室にいて、逃にげ遅おくれたとか？

そうかもしれない。ありえない話ではない気もする。でも、モリー・リップスだ。このアサイラムの代表者だ。誰だれも彼もがモリーを一番最初に逃がそうとするはずだ。モリー自身は違ちがうだろうけど。

そう、モリーは違う。モリーは自らを犠ぎ牲せいにしてでも、自分の被ひ保護者たちを逃がそうとするだろう。

Ｘ棟とう。

あんな場所にはいないと思う。いないと思いたい。いるはずがない。モリーはちゃんと待避壕に避難しているはずだ。

その待避壕は、四年前に悪党どもの大集団に襲しゆう撃げきされたあと、宿舎棟増改築とともに建造されたもので、そうとう堅けん固ごな造りだと聞いたことがある。アサイラムでは避難訓練も定期的に実じつ施しされているし、毎回タイムアタックを行い、少しでも時間を縮めようと努力しているはずで、病棟に非戦闘員の死体が見あたらなかったのは、その努力の賜たま物ものだろう。

今ごろ、モリーは待避壕にいる。きっと、不安がる被保護者たちを慰なぐさめて回っているはずだ。目を閉じれば、瞼まぶたの裏側にその姿が浮うかぶ。

だが、しかし、目を閉じている場合ではないことは明白だった。マリアローズは中庭に出て芝しば生ふの上を走りながら、行く手のＸ棟に龍州人の群れ以外の異変があることを見てとった。

煙けむりだ。

Ｘ棟のほぼ半分を占しめる硝子ガラス張りの温室の屋根から、煙が立ちのぼっている。

ということは、屋根に穴があいているということか。いや、そんなことはたいして重要じゃない。火のないところに煙は立たない。つまり──

「火事……！」

　もうわけがわからない。何で火事が？　襲撃して壊こわして犯おかして殺して火をつけるなんて、戦争じゃあるまいし──戦争、そうだ──戦争。これは戦争なのか。

　もともと、秩序の番人とＳｍＣは激しく対立していた。きっかけは、ベアトリーチェがとらえられたことだとしても、秩序の番人がサックドールを奇き襲しゆうした。一号区で陣じん地ちを双そう方ほう設営して向かいあう、秩序の番人とＳｍＣ。そして、おそらくＳＩＸの指図で、アサイラムが骨こつ龍りゆうの龍州人たちに現在進行形で襲おそわれている。

　まぎれもなく、これは戦争だ。

　国と国が衝しよう突とつするような規模ではもちろんないが、戦争としかいいようがない。

　しかも、マリアローズもまったくの部外者ではない。無関係と言い張るには、関かん与よしすぎている。事実関係もそうだし、感情面でもそうだ。

　事と次し第だいによっては、この対立構造にもっと深くとりこまれてしまうかもしれない。

　そうなって欲しくない。モリー。番人たちの死体の中に、ベアトリーチェはたぶんいなかったと思う。ちゃんと確かく認にんしたわけではないが、他の番人に比べると、ベアトリーチェはやはり小こ柄がらだ。二人とも無事でいるといい。ひどい話かもしれないが、口をきいたこともない番人たちがいくら死んでも、友人知人だけは生きのびていて欲しい。

　それはだいそれた願いなのか。

「あれは──」前を行くトマトクンが背中から大たい剣けんを抜ぬいた。「サフィニア、魔ま術じゆつであの建物の火を消せ！　中に敵以外の人間がいるかもしれんから気をつけろ！　できるな！　ユリカはサフィニアをカバー、あとは俺についてこい！」「……はい！」サフィニアが魔術を準備するために足を止めた。ユリカは立ち止まってサフィニアの前で棍こんを構えた。速度を上げたピンパーネルはトマトクンの右やや前に出て、マリアローズはトマトクンの左斜ななめ後ろに、カタリは右斜め後ろについた。

Ｘ棟までは、二十五メーテルといったところか。

トマトクンは何も気分で皆みなに号令をかけたわけではなかった。動きがあったのだ。

これまではＸ棟につめかける一方だった龍州人たちが、火災に気づいて退ひきはじめた――だけではない。中から出てくる者までいた。おまけに、そいつの姿には見覚えがあった。ドレッド女を抱だきかかえている、筋肉のかたまりみたいな男。やつらには一度、世話になった。否いな。ベアトリーチェと一いつ緒しよにつかまったときと、下水道で出くわしたとき、あわせると二度か。

名前はたしか、男の方が呉ウー戒ジエで、女は媚メイ婁ルー。

むろん、アサイラムを襲撃したのが骨龍だとすれば、その頭目であるあの二人がここにいてもおかしくない。おかしくはないが、Ｘ棟に放火するため、わざわざ頭目が出向くのが龍州人の流りゆう儀ぎだとも思えない。

だいたい、呉ウー戒ジエも媚メイ婁ルーも怪け我がをしている。呉ウー戒ジエは身体中に火傷やけどを負い、媚メイ婁ルーは右手を負傷しているようだ。放火しておいて、自分で火傷するというのも間ま抜ぬけな話だが、見たままの印象では、呉ウー戒ジエは手傷を負った媚メイ婁ルーを抱かかえ、慌あわててＸ棟から脱だつ出しゅつしてきた……？

やはり、Ｘ棟には何かある。トマトクンも同じ判断を下したのだろう。

だが、龍州人たちもこちらに気づいたようだ。媚メイ婁ルーが呉ウー戒ジエの腕うでの中で何か指示を出している。龍州語なのでよくわからないが、呉ウー戒ジエはそのまま正門の方へ向かおうとしているから、手下どもに自分たちを守るよう命じでもしたのか。ぜんぶで三十人近くいるだろう、黒っぽい装そう甲こう服に、籠かご状の頭部防具をつけた龍州人が、思い思いの得物を振ふり上げて押しよせてくる。

マリアローズはハーレム・ゴードン入りの小こ瓶びん、爆ばく弾だんを投げてやろうと思い、ベルトのホルダーをまさぐったが、それより早くトマトクンがぐんッと前に躍おどりでた。それがもう、とんでもない大おお股またただった。何て長い足だ。そうしてあっと

いう間に距きよ離りをつめたトマトクンは、龍州人たちの先頭集団と衝突する寸前で急停止し、琥こ珀はく色いろの剣身波打つ大剣を振りまわした。

　足を止めても、勢いは殺さずに、一回転。

　しかし、殺すものは殺し、軸じくをずらし、また一回転。

　空気を叩たたき斬きる音と、人体をまっぷたつにする音がごちゃ混ぜになった。旋せん回かいしつつ飛散する血と肉がそれにあわさって、何か一つの物体と化し、二重の輪花となって、咲さいた。

「死にたくないやつはどけ！」

　骨龍の龍州人たちが、どの程度、共通語を解するのかは知らない。ただ、言葉は理解できなくても、トマトクンに立ち向かえばどうなるか、そのことはわかったはずだ。

　龍州人たちは明らかに怯ひるんだ。さすがに退きはしなかったが、腰こしはひけていた。どうせなら、尻尾しっぽを巻いて逃にげてしまえばよかったのだ。トマトクンは非情でも残ざん忍にんでもないけれど、敵に情けをかけるほど甘くはない。

「殺せ、ピンプ！」

　けしかけられた砂色の元アッサシンは、刺し突とつ斬ざん撃げき両用短剣、雄おすのグレアデと、斬撃兼解体用短剣、雌めすのリレッザを手に、飛ひ翔しようし━龍州人の群れの中心を、もっとも密集度が高い場所を、あえて着地点に選んだ。

　たぶん効率のためだろう。

　最小の身のこなしで、突つき入れる。斬る。剝はぐ。削そぎとる。抉えぐり、かき回す。絶つ。殺す。

　ピンパーネルはただ一点を見ている。いちいち雄のグレアデと雌のリレッザの切っ先を目で追うつもりはないらしい。その必要もないのかもしれない。彼の雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣は、彼の神経がかよっている、殺しに長たけた彼の手の延長なのかもしれない。彼の一部なのかもしれない。あるいは、彼のすべてなのかもしれない。

　ものの数秒だった。

　ピンパーネルは解体し終えた数人、もはや数えることもできないほどバラバラになった死体、肉につ塊かい、骨、皮、内臓、血液、脳のう漿しようのただなかに、ひとり超ちよう然ぜんとしてたたずんでいた。

　これが決定打となった。骨龍は崩くずれに崩れた。色めきたって隊たい伍ごを乱し、おのおのが好き勝手な方向に逃げてゆく。マリアローズが左右の手で抜きとったそれぞれ二本ずつ、計四本の爆弾を順次、投とう擲てきしたのはそのときだった。

「他人ひと様さまの家をいいだけ荒あらしといて、無事で帰れると思ったら──」右手の二本は遠くへ。できれば、呉ウー戒ジエと媚メイ婁ルーに届くほど遠くへ。左手の二本はその手前へ。こちらに被ひ害がいが及およばない範はん囲いで、できるだけ多くの骨龍に被害を与あたえられるように。「大おお間ま違ちがいだ、クソ野郎モウフオ……！」

　マリアローズの叫さけびをかき消す爆音は、間違いなく四度起こったが、順番は不明だった。どうでもよかった。閃せん光こうにも、爆ばく炎えんにも、爆風にも、どれくらい敵を吹ふき飛ばしてやることができたかも、実はあまり興味がなかった。

「ＥｌｅＥｌｅ慈羅極度ＮｅＬｅＭｅＬ蒙園堂ＡｌｅＬ因浄土１４８９５７天」

　サフィニアの魔ま術じゆつが発動し、ＬＥＰより召しよう喚かんされた水霊Ｃｙｄと気霊Ｕｙｅが無数の水球を作った。

　サフィニアの杖つえの導きに従って、Ｘ棟とうの屋根から温室内に侵しん入にゆうしたそれらは、思うさまに火を喰くらうだろう。

　閃光の魔女マチルダの弟で子し、〝世界をザ・デスト滅ぼす者ロイヤー〟のサフィニアにしてはやさしげな魔術だが、過不足のない規模の魔術を適切に使うのが優ゆう秀しゆうな魔術士というものだ。それに、ただぶっ放すだけの魔術よりも、緻ち密みつな制せい御ぎよを要する魔術の方が、扱あつかいは難しい。ほとんど生まれつき決まっているという魔力の絶対量がショボければ、扱いもクソもあったものではないが。

いずれにしても、サフィニアによる消火活動が始まったＸ棟だ。

マリアローズはＸ棟へ走った。ピンパーネルはトマトクンの指示を受けて、呉ウー戒ジエと媚メイ妻ルーを追うようだ。Ｘ棟温室直通の通用口。トマトクンが先行して中に飛びこんだ。爆弾を投げたせいで、カタリに先を越こされたのが何だか悔くやしい。半魚人につづいて温室に入ると、一面に霧きりのようなものが立ちこめていた。「うは、何やねんこれ」「邪じや魔ま！　止まるな馬ば鹿か魚！」「魚ゆうなや！」「うっさい！」これは、サフィニアの魔術が引きおこしている現象か。どうやら、水球が火元に食くらいつくたびに、大量の水蒸気が発生するらしい。あとは、煙けむりか。それで、こんな有様に。視界が悪すぎる。

「モリー！」

彼女が絶対ここにいるという確信はなかった。むしろ、否定したかった。いない。いるはずがない。いてたまるか。それなのに心のどこかで、もしかして、と疑っている。

「モリー……！」

水蒸気のせいで顔がべたべたする。こげくさい。吸いこんだ空気がたまたま煙まじりだった。マリアローズは少し噎むせた。咳せきこみながらモリーの名を何度か呼んだ。途と中ちゆうでユリカとサフィニアが追いついてきた。カタリはすぐそばにいる。トマトクンは？　あの独特な嗅きゆう覚かくを頼たよりにして、どんどん先へ進んでいるのか。

「誰だれか！」

と、女の声が聞こえた。あれは──ベアトリーチェ？

嫌いやな予感がしまくりだった。だって、やけに切せつ迫ぱくした声こわ音ねだった。マリアローズは急いだ。声のした方へ向かおうとしたが、どっちだったか。わからない。わかるはずがない。耳のいい犬や猫ねこじゃないのだ。苛いら々いらして近くの樹木を蹴けると、カタリが「こっちや！」と先導役を買ってでてくれた。ユリカが手を引いてくれた。サフィニアに「マリアさん……！」と叱しつ咤た激げき励れいしてもらった。情けないったらないが、マリアローズはひどく動転していた。何だかとても嫌なことが起こるんじゃないか。そんなことばかりが頭の中を駆かけめぐって、足がも

つれそうになる。息苦しい。水蒸気や煙のせいではない。僕は──進みたくない。行きたくない。恐おそろしい。何かとんでもなくおぞましい姿をした化物が、前方で手招きしているようで。

　でも、行かないと。ここで足を止めても、逃にげられるわけじゃない。

　たぶん、もう遅おそいのだ。

　僕は遅すぎた。

「誰か、味方なら手を貸してくれ……！　母様を……！」ベアトリーチェの声は近かった。すぐそこだった。数秒でたどりついた。そこは開けた場所だった。ちょうどこの上の硝子ガラス屋根が破れているせいもあってか、煙や水蒸気も薄うすい。おかげで、状じょう況きようはすぐにわかった。

　ある番人は、上半身と下半身が背骨だけで褢つながっている状態で絶命していた。首があらぬ方向へねじれて死んでいる番人がいた。銀色の胸きよう甲こうのまんなかに穴をあけられ、そこから血を流して息絶えている者もいた。生きて動いている番人も何人かいる。

　そのうち一人は、兜かぶとを脱ぬいでいたから、すぐに彼女だとわかった。

「ベアトリーチェ……」

　呼ぶと、彼女は振ふり返った。

　くすんだ金きん髪ぱつが、煤すすや、血や、いろいろなもので汚よごれた顔に貼はりついている。

　泣き顔だった。

　マリアローズも、できれば泣いてしまいたい。

　だって、ベアトリーチェが地面に突つっ伏ぷすようにしてとりすがっていたのは、モリー・リップスだった。

「マリア……ローズ──」

　ベアトリーチェの顔が、ゆがんだ。

　もう涸かれようとしている涙なみだを、もっと、さらにしぼりだそうとでもするように。

　モリーは━目は閉じていたが、頬ほおがゆるんで、口が力なく半開きになっていた。

　真っ白だったはずの女性用ナース・医術士服ユニが、左ひだり肩かたから縦に、それから腰こしのあたりを横に切り裂さかれて、
真っ赤に染まっている。

　深い。かなり深い傷だ。切ったというより、突き刺さして、抉えぐりながら引き裂いたような傷に見える。

　それだけではない。

　頭。

　何てことだろう。頭だ。モリーは右の側頭部からも出血している。

　モリーに駆けよって、その首筋や胸に手をあてたユリカが、悲痛な表情で首をふった。

　死んでいた。

　もう息をしていないモリーを、ベアトリーチェやユリカ、マリアローズたちに先んじてこの場に到とう着ちゃくしていたトマトクン、それに、モリーの被ひ保護者だろうピンク色の髪かみが異様に長い女と黒髪の少女が囲んでいる。

　葬そう式しきみたいに。

「あ━」膝ひざの力が急に、いっぺんに抜ぬけ、マリアローズは地面に座りこんでしまった。立ち上がろうとしたが、この手では体を持ち上げられそうもない。筋肉や骨がトーフになってしまったかのようだ。地面が綿わた菓が子しみたいだ。僕は今、どんな顔をしているんだろう。マリアローズはふとそんなことを思い、またモリーを見て、不意に、終わった、と感じた。

　何が終わったのかよくわからないが、とにかく終わった。終わり

だ。もうイヤだ。僕は屑くずだ。ひどい役立たずだ。何もできない。無力だってわかっていたけど、ここまでとは。本当に、呆あきれる。呆れ果てて物も言えない。体に力も入らない。ああ──僕はもう、ダメかもしれない。

　だったら、いっそ笑おうか。

　それは脈みやく絡らくのない思いつきだったが、実際、マリアローズの胸が、肺が、引きつるように震ふるえだした。喉のどから妙みような音がもれた。目頭が熱くなって、声が出そうになった。マリアローズは笑う寸前だった。

　違ちがう。

　泣きそうだった。いや、もう頰を一筋の涙が伝い落ちた。しゃくりあげた。本気で泣いてしまいそうだ。恥はずかしい。だけど、いい。構うもんか。泣け。泣いちゃえ。そう思った。

　だが、つかつかと歩みよってきたユリカに、いきなり胸むなぐらをつかまれた途と端たん、あふれだしかけていたものが一気に引っこんだ。

「しっかりしなしゃい、マリア」

　押し殺したような声だった。ユリカの目はつり上がっていた。誤解しようがない。

　ユリカは激しく怒おこっていた。

「あなたの大たい切しえつなお友だちが死んだ。ショックでしょう。泣きたい気持ちもわかるわ。でも、泣いてどうなるの？　泣いていたって、何がどうなるわけでもないわ。しょんなことより、あなたにはやるべきことがあるでしょう？」

「……やる……こと……」

「しょうよ。まだやれること、やるべきことがあなたにはある。いい？　頭を怪け我がしていても、脳の損しよん傷しようが小しゃければ可か能のう性しえいはぜじえロじゃない。でも、ここで泣いているだけじゃ奇き跡しえきも何も起こらないわ。しゃあ、わかったら、立って、マリア！　立ちなしゃい！　モリーしゃんをトマトクンの家まで運ぶの！　トワニングに蘇しよ生しえい式しきを施ほど

こしてもらうのよ！」

「──そ……そっか」

　そうだ。泣いていたって仕方ない。ユリカの言うとおりだ。まったく、自分は腑ふ抜ぬけの間抜けだ。どうしようもない愚ぐ図ずだ。モリーが死んだことで、まともな思考能力が消し飛んでしまい、何もかもが終わりみたいな気分になって、常識的な知識さえも忘れていた。

　蘇生式。人間は死んだからといって、必ずしもそれで終わりというわけじゃない。しかも、ＺＯＯには腕うでのいい専属の坊ぼう主ずがいる。トマトクンの家には、彼専用の祭さい壇だんまで設置されている。

「ごめん、ユリカ、僕……」

「わかればいいわ」ユリカは、だが、表情をゆるめなかった。当然だ。この状じよう況きようだ。医術士のユリカには、それこそできること、やるべきことが山ほどある。「怪我をしている人！　自力でこられる人は、わたしのところへ！　無理なら声を出して！　カタリとサしやフィニア、あなたたちは負傷者と死者の確かく認にんを！　トマトクンはマリアと一いつ緒しよにモリーしゃんをお願い！　他ほかに手のあいている人がいたら、カタリとサしやフィニアを手て伝ちゆだって！」

「よっしゃ！」「……はい……！」ユリカの指示に従って、カタリとサフィニアがそれぞれ動きだした。マリアローズも涙をふくことすら忘れ、モリーの遺体に近づいた。

「トマトクン、ベアトリーチェ！　モリーを！」

「ああ」トマトクンは手を貸そうとするベアトリーチェとマリアローズを制し、一人で軽々とモリーを抱かかえ上げた。「行くぞ」

「うん」マリアローズはうなずいてから、ベアトリーチェと顔を見あわせた。ベアトリーチェは不安そうで、唇くちびるが震えていて、顔中が汚よごれていた。マリアローズは背負い袋ぶくろに右手を突っこみ、とりだしたタオルでその顔をふいてやった。

「モリーは……きっと、大だい丈じよう夫ぶだから」

　ほうけていたところを、ユリカに叱しつ咤たされて我に返ったマリアローズが、そんなことを言えた義理ではない。それはわかっているが、ベアトリーチェの表情を見ていると、言わずにはいられなかった。はっきりとそう口にして、その言葉を信じきっているふりでもしないことには、マリアローズ自身も不安で不安でたまらなかったからだ。

Omenage 897 9th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第七区

〝二号区〟

chapter.6

太陽鬼

「九番突とつ撃げき隊、やや前に出すぎる傾けい向こうがあるようだ。気をつけさせろ。敵右う翼よくが漸ぜん進しんしつつある。十番遊撃隊を左翼へ」

　ヨハン・サンライズや琺瑠フオールが下す命令を前線に伝えるため、司令部付きの者たちが走る。伝令にあたっているのは、二十五、二十六、二十七番隊だ。普ふ段だんからヨハンと琺瑠フオールのもとで地道な諜ちよう報ほう任務に従事している彼らは、同じことの繰くり返しにも倦うむことがない。

　だが、開戦の十五時を三十分すぎても、戦局に目立った動きはない。黄と青と紫むらさきのＳｍＣが前進してきて、弩いしゆみを放ち、退ひいて、秩序モラルの番人・キーパーズがそれを追い、深追いをさけて戻もどる、といった展開に終始している。ヨハンにはどうでもいいことだが、集まった観衆はそろそろ飽あいてきているようだ。

　その間、総長デニス・サンライズは、愛用の豪ごう刀とう、名めい匠しようダグラス・トゥースの傑けつ作さく「日にち輪りん」の柄つか頭がしらに両手を置いたまま、不動。

　太陽鬼の赤せつ褐かつ色しよくの目は、二百数十メーテル先のＳＩＸを凝じつと見み据すえている。

　ただ静かに。恐おそれはもちろん、過か剰じような気負いもなく。

　太陽鬼の姿勢を映したかのように、誉ほまれある銀の軍団ザ・シルバリイは落ちついている。

　開戦前に、四隊六十名ばかりをアサイラムと泉セン里リの救きゆう援えんに割さかざるをえず、特に司令部周りの戦力が心こころ許もとなくなったという事態も、さほど負の影えい響きようを及およぼしているようには見えない。

　もっとも、ヨハンはいまだに心底から納なつ得とくはしていない。アサイラムはまだしも、泉セン里リは見捨てるべきではなかったかと思っている。むろん、アサイラムに援えん兵ぺいを送り、泉セン里リには送らず、という対応は後々問題になるだろう。だが、

泉セン里リは間に合わない。伝令からの詳しよう報ほうを聞いたかぎりでは、そう判断せざるをえなかった。であれば、後備隊の半数を形ばかり行かせて、状況を確認し次し第だい、早さつ急きゅうに戻らせる。それでよかったのではないか。

　そもそも、この決けつ闘とうに応じる必要さえなかったというのが、ヨハンの立場だ。

　むろん、受けて立たねば、番人は臆おく病びよう風かぜに吹ふかれたと、エルデンの民たみに嘲ちよう笑しようされることだろうが、それがどうした。

　我らが義を貫つらぬかんとするは、名や体面のためか。否いなだ。違ちがうはずだ。我らは我らの義のためにのみ、剣けんを振ふるう。余人には笑わせておけばいい。ＳｍＣのごとき害虫は、正面きって剣をあわせる必要など微み塵じんもなく、絶対有利の状況で奇き襲しゆうをかけ、皆みな殺ごろしにしてやればいいのだ。むしろ、決闘を蹴けって相手をいい気にさせ、調子に乗らせて油断を誘さそうくらいでちょうどいい。

　おれならば、そう決断する。

　しかし、おれのやり方では、秩序モラルの番人・キーパーズはいずれ瓦が解かいするだろう。人間を頭数以外で勘かん定じようするすべを知らぬ我が身であれば、下の者に畏い怖ふされ、総長に重く用いられはしても、人をたばねることはできない。所しよ詮せん、器うつわではないということだ。

　しかし、ヨハンは信じていた。

　おれは必要だ。養父ちち上うえに足りぬ部分を補うことが、おれにはできる。おれはそのために生きてきた。養父上はあたたかいと感ずればおれは冷たくなろうとした。養父上が甘ければおれは辛からくなろうと思った。養父上が右と言えば、あえて左と言った。

　養父上の手は、顔は汚させぬ。おれは汚れていい。おれは燦さん々さんと輝かがやく太陽が作る日ひ陰かげで闇やみの業わざを行う。情報漏ろう洩えい者や公金横領者、任務怠たい慢まん者の処断を具申し、自ら手を下すのはおれの役目だ。おれの得意技わざだ。

　人は言う。「冷れい徹てつ非情の副長、あれは血が通っていない

から影かげが薄うすいのだ」「やつの腰こしの物は、鞘さやを払はらえば剣でなく抜ぬき身の悪意と陰いん険けんがあらわれるらしいぞ」と。

　おれは冷笑をもってこれを受けとめる。否定はしない。すべて諒りよう解かいの上だ。おれはそのような人間であり、そのようにふるまい、彼らはそのとおり受けとった。それだけのことだ。

　養父上、おれは平気だ。

　あなたという太陽をこの距きょ離りで仰あおいでいられるかぎり、おれは寒くなどない。

「ヨハン」その養父ちちが──いや、総長デニス・サンライズが、久しぶりに口を開いた。「山が動くぞ」

　デニスの口調が、むしろ穏おだやかだったためか、驚おどろきは微塵もなかった。

　時計を見る。十五時四十五分。双そう眼がん鏡きようを使ってキャッスルオブインフィニティ跡あとに目をやると、瓦が礫れきの丘おかの上に設しつらえられた禍まが々まがしき玉座の前にＳＩＸが立って、右手を天にかざしていた。

　ＳＩＸは、黄色の稲ライ妻トニン模グパタ様ーンが悪あく趣しゅ味みな黒いボディスーツで首から足までを覆おおっている。両手首のあたりから、すだれのように何本もの長い物体が垂れさがっていて、それがまた、何ともいえず不気味だ。

　その右みぎ脇わきにひかえているのは、スーツ姿のジェイ。左脇には、灰色と黒の魔ま術じゆつ士し衣を身にまとい、黒い杖つえを持った白はく髪はつの死霊術士ネクロマンサー。さらに、殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスとおぼしき、揃そろいの黄と青と紫の鎧よろいを着こんだ者どもが、玉座の周囲をかためている。

　ＳＩＸは彼らをぐるりと見回してから、右手を振り下ろした。

「──あれは何だ」ヨハンは誰だれに訊きくでもなく呟つぶやいた。「玉座を据すえ付けるために、瓦礫を補強しているだけかと思っていたが、違ったようだな」

「檻おり……？」琺瑠フオールの声がした。彼女と羅ラ叉サも司令

部につめている。羅ラ叉サは太陽鬼のもう一ひと振ふりの剣と化したように、殺意を押し殺して抜かれるときを待っているだけだが、そのぶん、ヨハンと琺瑠フオールはこまごまと働かなければならない。しかし、それも適材適所というものだ。

「中から何か━━やはり、檻のようね。出てくるわ」

「猛もう獣じゆうでも連れてきたか」ヨハンは息をのみかけた。「いや……」

　玉座のある瓦礫の丘の麓ふもとに並べられた、四つの巨きよ大だいな金属製の箱が━━その側面は柵さく状の扉とびらになっていたようだ━━それが、ＳｍＣ兵どもの手によって、次々と開け放たれた。

　そして、琺瑠フオールの言葉どおり、箱の中からやつらが出てきた。

　観衆がどよめく。

　大きい。意い匠しよう化した《ＳｍＣ》の文字を、これ見よがしに刻みまくった黄と青と紫むらさきの甲かつ冑ちゆうを着て、戦せん槌ついを持っている。巨漢だ。

　だが、訂てい正せいすべきか。あれを巨漢と呼んでいいものかどうか。双眼鏡越ごしなのでしかとはいえないが、近くのＳｍＣ兵と比ひ較かくすれば、身の丈たけも横よこ幅はばも、その倍はある。それ以上かもしれない。たしかに、姿は人間に似ているものの、あれは違う。

「巨人族ギガント……かしら」

「そのようだな」ヨハンは琺瑠フオールに同意を示しながら、巨人族ギガントらしい生き物から目を離はなさなかった。「地上であれほど大型の亜あ人じんとなると、巨人族ギガントくらいしか思いあたるものはない。一説によると、神の落とし子だというが」

「この目で見るのは初めてだわ」

「私は一度だけ見たことがある」

　ずいぶん昔の話だ。エルデンに見世物の一座がきた。その中に巨人族ギガントもいた。足あし枷かせをつけられ、いかにも鈍にぶそ

うな目をしていたが、おとなしく、まだほんの子供だったヨハンを肩かたにのせてくれた。あれは、そう、メロンクンが――今はトマトクンか。見世物の噂うわさを耳にしたヨハンが、今は亡なき実父のカレル・シュペクナーに駄だ々だをこねたが聞き入れられず、結局、あの男が連れていってくれたのだった。どうでもいいことだが。

「人には馴なれるらしいが、臆おく病びようで、人里離れた山奥に棲せい息そくしていると聞いた。しかし、やつらはずいぶんと勇ましいな。というより――」ヨハンの視線の先では、一体の巨人族ギガントが戦槌を振ふりまわし、瓦礫もろとも二人か三人のＳｍＣ兵を吹ふき飛ばしていた。観衆がドッとわく。すぐ別のＳｍＣ兵が巨人族ギガントの前に出て、どうにか誘ゆう導どうしようとしているが、あまりうまくいっていないようだ。「凶きよう暴ぼうそうだ」

「薬物を用いているのかもしれないわ」

「いずれにしても、厄やっ介かいだな」

　さすがはＳＩＸというべきか。

　第三者を排はい除じよし、正々堂々決けっ闘とうしようと持ちかけておいて、傘さん下かのクランにこちらの防衛拠きよ点てんを襲おそわせる。それでまんまとこちらの戦力を削そいだあと、今度は明らかに部外者の巨人族ギガントに、これ見よがしに自分たちとお揃いの鎧など着せて、前面に押し出してくる。

　人を小こ馬ば鹿かにした、ふざけた、卑ひ怯きようなやり口だ。

　どれも、いかにもＳＩＸがやりそうなことではないか。

　――我々は、甘い。だから、後手後手に回ることになる。

　ヨハンは、巨人族ギガントたちがＳｍＣの陣じん地ちを踏ふみつぶし、かきわけながら、ゆっくりと移動している姿を見ていた。やつらを先導するＳｍＣ兵も、徐じよ々じよにコツがのみこめてきたのかもしれない。このぶんだと、巨人族ギガントたちはそのうちＳｍＣの陣地を出て、こちらへ向かってくるだろう。

「総長」考えはまとまった。ヨハンは双眼鏡を下ろしてデニスに向きなおった。「全軍による突とつ撃げきを進言します。我が方の陣地で、あの巨人族ギガントの突進は防ぎきれないでしょう。ただ

守っていては、蹂じゆう躙りんされかねません。もとより我が団が得手とするは集団突とつ貫かんによる一撃粉ふん砕さい。この際、足を止めずに突つき進み、一気にＳＩＸを討うちとるが唯ゆい一いつ至上の策かと」

「ヨハン副長の提案を支持します」琺瑠フオールがすぐにそう表明し、羅ラ叉サも「同じく」と短く言った。

　太陽鬼は重々しくうなずいて、日輪の柄つかに右手を、鞘さやに左手をかけた。

「刻とき、まさに至れり……」

　日輪が、すらりと鞘から抜ぬかれる。

　丈、約一・二メーテル。拵こしらえは実用一点張りの黒一色。地味だが、存在感は圧あつ倒とう的だ。刀身は肉厚で、幅広く、刃は文もんはわずかに乱れ、ある種の妖よう気きを宿したように地金が青々としている。

　その刃が、まばゆいばかりに陽光を照り返した。

「ヨハン、羅ラ叉サ、琺瑠フオールよ、剣けんをとれ」太陽鬼の声には鬼き気き迫せまる殺気がこめられていた。だが、聞く者を総毛立たせるのと同時に、ひどく昂たかぶらせた。「──我に従え。我を見失うな。我とともに進め。我らはこの一戦で必ずやＳｍＣを、ＳＩＸを討ち果たす。我が子らよ、己おのが身を一本の鋼はがねとなし、研とぎすまし、我が刃やいばとなれ」

「はっ」「承知」「御ぎよ意いのままに」

　司令部を出たデニス・サンライズを、ヨハン、羅ラ叉サ、琺瑠フオールの三副長が追う。司令部の周りをかためていた一番総長直属隊、二番親衛隊、三番ヨハン隊、四番羅ラ叉サ隊、五番琺瑠フオール隊も動いた。

　陣地の各所に配置された銀の軍団の勇士たちも、彼らが父と仰あおぎ英えい雄ゆうと尊そん崇すうする太陽鬼が歩を進める姿を見て、わいた。

　それはほとんど熱ねつ狂きように近かった。高まる士気は天てん井じよう知らずだった。熱き血潮のかわりに水銀を血管に流してい

ると陰かげ口ぐちをたたかれるヨハンですら、昂こう揚ようを抑おさえるのに苦労した。抑える必要などないのではないかとさえ思った。

　この雄おゝおしく猛たけゝだけしく高貴な、誇ほこらしい養父ちち、太陽鬼が歩くだけで作りだす大いなる流れに乗るだけで、この戦い、勝利を収めることができるではないか──いや。

　余人はどうあれ、おれだけは氷水を飲みくだしたように腹ふつ腔くうを冷やし、百年生きた老人のように静かにこの戦場を見み渡わたさねばならない。養父ちち上うえの影かげにじっと身をひそめたまま、どこからか忍しのびよる危険な刃がないか、見きわめねばならない。

　そう自じ戒かいすれば、太陽鬼デニス・サンライズの存在には功罪あることがわかる。

　功はむろん、そのカリスマだ。太陽鬼が立つところ、たちどころに常勝不敗の気配がただよい、味方は皆みな、百人力をえたような心ここ地ちになる。

　だが、罪もある。正面から剣と剣を打ちあわせ、力と力、技わざと技の真っ向勝負をするのならば問題ないが、相手はＳｍＣだ。巨人族ギガントを連れこんできたように、どのような小細工をしてきてもおかしくない敵だし、その場合、前がかりになりすぎることが、かえって足をすくわれる原因になりかねない。

　魂たましいは火を噴ふくほどに燃ねん焼しようさせても、頭は流水のごとく熱しない状態を保っておかねばならないのだ。

　そのことをしかと心にとめておかなければ、負ける。

　少なくとも、ヨハンはそう考えておく必要がある。

「ヨハンよ」

　と、養父が、すぐ後ろのヨハンや羅ラ叉サ、琺瑠フオール以外には聞きとれないだろう小声で言った。

「我の後背はお主に任す。全軍の統とう率そつもお主に頼たよりきることとなろう。こたびの戦いくさ、我はただ一人の剣士として、我の信ずる義のために剣を振るおうと思う。お主には──」

「何も申されますな」

　不要です、養父上。要いりませぬ。言葉など、何ほどの価値もない。養父上、あなたはいてくれるだけでいい。

　そうして輝かがやいていてくれれば、おれは耐たえられる。

　友がなく、恋こいもできない孤こ独どくにも。あらゆる心の痛手にも。

　母は知らず、ずっと年の離はなれた兄のようだった男が失うせ、実父を失ったあと、おれにはあなたがすべてだった。おれは子供ながらに偏へん屈くつで、融ゆう通ずうがきかず、理り屈くつ屋で、嘘うそと不実を許さず見抜き、なじる性質だったから、誰だれとも馴なれあえなかった。

　あなただけだった。あなたはまっすぐおれを見た。おれを受けとめ、ためらうことがなかった。おれを抱かかえて、あなたは笑った。おれを我が子のように扱あつかってくれた。

「銀の軍団の全軍、一糸乱れぬ己おのが手足のごとく、私が采さい配はいしてごらんにいれます。総長は心おきなく剣士として剣を振ふるい、どうか日輪に一いち日じつ百人斬ぎりの栄えい誉よを」

「けしかけるか、我を」

「その必要があるとも思えませんが」

「そのとおりだ」

　デニス・サンライズが低く笑って足を止めた。陣じん地ちの最前線まで達したのだ。

　前方、ＳｍＣの陣地でも、三匹びきとやや遅おくれてもう一匹の巨人族ギガントが前列に達しようとしている。

　ＳＩＸはキャッスルオブインフィニティ跡あとで肩かた幅はばに足を広げて立ち、少し強まってきた風に髪かみをなびかせ、首をゆっくりと回しながらこちらを見下ろしていた。

　いよいよ本格的に始まろうとしている。

策略と前ぜん哨しよう戦を経て、今、戦機が熟そうとしている。

「同志たちよ──」

そして、大だい音おん声じようが一号区特設会場全域に響ひびき渡わたった。

太陽鬼が豪ごう刀とう日輪を蒼そう天てんにかざす。

静まりかえった。

観衆も息をつめて太陽鬼の声に聞き入っている。

「この期ごに及およんで我らの奉ほうずる義について言を費ついやすことはすまい。我らはただ鍛きたえられたる鋼、この剣を手に、悪と信ずる者どもを討つ。情状酌しやく量りよう容よう赦しや一いつ切さいなくこれを斬る。同志たちよ。我らが振りかざす刃やいばに栄光なきを知れ。我らが振り下ろすは凶きよう刃じんである。悪を討つ我らもまた悪あつ鬼きである。我らはそれを是ぜとする。同志たちよ。我が子らよ。我はあえて求む。今日、我らの義にその命を捧ささげよ！」

「応！」「応！」「応」「応！」「応！」「応」「応！」「応」「応」「応！」「応……！」

「──同志たちよ！　今こそ剣を振り上げて突つき進み、決して恐おそれず、怯ひるまず、退ひかず、悪を討うつ刻ときだ！　我らが往ゆくは修しゆ羅らの道である！　涯はてなき血の道である！」

「我は修羅なり！」「修羅なり！」「血を！」「我は修羅なり！」「血を！　血を！」「我は修羅なり！」「血を、血を！」「我は修羅なり！」「修羅に血を……！」

「──修羅よ！　修羅どもよ！　敵を悪を討つべし！　悪を殺して殺しつくし敵を滅ほろぼせ！　悉ことごとく殺してみせい！　我らの義を示すのだ！」

「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」「義を！」

「剣けんを抜ぬけ！　盾たてを構えよ！　我より前に出ることは許

さぬ！　だが我に遅れることも罷まかり成らん！　全軍、前進……！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォ……！」

　秩序の番人の二百二十余名がひとかたまりとなって上げた雄お叫たけびは、大おお袈げ裟さでも何でもなく、天地を揺ゆるがした。

　総員一いつ斉せいの前進がはじまった。が、全力の疾しつ走そうではない。小走りですらない。太陽鬼の足どりは早歩き程度の速度だ。日ひ頃ごろより鉄の規律で慣らしている秩序の番人には、いくら頭に血がのぼろうとも、総長の命令にそむく馬ば鹿か者はいない。皆、太陽鬼に従い、太陽鬼の一歩後ろにまっすぐな列をなして、むしろ静かに進んでゆく。胸きよう甲こうの奥の心臓を戦意で燃やし、兜かぶとの奥の瞳ひとみに狂きよう気きの輝きを隠かくして、剣の切っ先に殺意をほとばしらせ、整然と行進している。

「羅ラ叉サ副長は直属隊とともに右う翼よくへ、琺瑠フオール副長は同じく直属隊を率いて左翼へ回ってくれ。巨人族ギガントの対応を」

　ヨハンの要よう請せいを受けて、羅ラ叉サと琺瑠フオールが両翼へ移動した。

　これで陣じん容ようは整った。死神と畏い怖ふされる羅ラ叉サも、亡なき女め夜や叉しやの実じつ姉しであり、美び貌ぼうと知ち謀ぼうだけでなく剣技も卓たく越えつしている琺瑠フオールも、ヨハンと違ちがって、いるだけで周りの者に力を与あたえる。軽装の二十五、二十六、二十七番無名隊が絶えず動きまわり、逐ちく次じ、細やかに連れん絡らくを入れてくるのも満足のゆく状じよう況きようだった。副長職について以来、専門的に情報を収集し伝達する無名隊の育成には、心血をそそいできたのだ。

　それが、よもやこのような形で活いかされることになるとは、予想だにしていなかった──とはいわない。

　必然だった。

　加虐的サデイスティツク殺戮・マーダーズ・愛好会クラブ。

　ＳｍＣ。

□□ＳＩＸ。

いずれ決着をつけなければならないだろう。その思いは、ずいぶん前からあった。

エルデンには、ギャプ・ド・レエ、赤子同盟ＢＵ、ＤＩＥなど、有力な悪党クランはいくつもあるが、ＳｍＣは異質なのだ。

ＳＩＸの圧あつ倒とう的な力を背景に、ジェイを中心として精せい鋭えい部隊を養成。闇やみ市いちのドンとして君臨し、意い匠しよう化した《ＳｍＣ》の刻印を知らしめ、Ｍ□Ｓ□Ｒやガルベル・ダをはじめとするいくつかのブランドと接近して、「スキャンダリ・ヴァイス」と称しようするファッション、ライフスタイルを確立。ＳｍＣに加わることが、何か一種のトレンドでもあるかのように錯さつ覚かくさせるイメージ戦略を展開。さらに、他クランを併へい合ごう、吸収することで、急激な拡張を遂とげた。

ＳｍＣは今や、エルデンにおける悪徳の代名詞となりつつある。

そして、ヨハンの考えでは、この一連の動向は自然のなりゆきなどではない。計画的だ。ＳＩＸは「ベラドリア惨さん劇げき」で闇市を手中に収めて以降、ＳｍＣがこの地位を手に入れるにいたるまでの道筋を、あの気色の悪い頭の中に、ある程度までは正確に描えがいていたのではないか。

危険な敵だ。

ただ強いだけの敵より、狡こう猾かつな敵の方が何倍も恐ろしい。

現に、秩序の番人は、こうしてＳＩＸが用意した舞ぶ台たいの上に立たされている。そして、この舞台上の出来事も、すべてＳＩＸにとっては想定内なのではないか？　すでに、奴やつの想定外のことが起こる要素は徹てつ底てい的に排はい除じよされており、我々は奴の脚きやく本ほんどおりに踊おどるしかない愚おろかな三文役者なのではないか……？

おそらく、現時点でそのような消極的ネガテイヴな思考に取り憑つかれているのは、ヨハン一人だろう。もし、この考えを開かい陳ちんすれば、何を臆おく病びような、士気を削そぎ敵を利する行こう為いだとなじられるに違いない。

　だが、ヨハンは捨て去らない。おのれの心にとめておく。勝負に勝敗があれば、勝利のみならず、敗北した場合も頭に入れておくのは当然だ。勝ったら勝ったで、用心しなければならないことはたくさんあるが、負けたときは想像を絶する困難と苦難があろう。我が団は、局地戦で敗れることはあっても、全体として見れば、劣れつ勢せいに立たされた経験もないのだ。

　そうはいっても、養父ちちさえ健在であれば、我が団は容易に再起しうる、との思いがヨハンにはあった。

　また、養父の背中を見ていると、太陽鬼が先頭に立つかぎり、我が団が一敗地にまみれることなどありえないのではないか。ヨハンでさえ、ついついそのような考えに流されてしまいそうになる。

　デニス・サンライズは、純血のピュア・ブラッド司祭・プリーストが自ら最高傑けつ作さくと謳うたうプロヴィデンス・シリーズの最上位モデル──といっても、量産はされない、いや、多数を製作するのは不可能な一品物のプロヴィデンスＷＸ￼Ｐを身につけている。

　別名は〝有翼天将〟。

　名の由来は、ＷＸ￼Ｐの背に折りたたまれた八枚の羽だ。それがいかような働きをするのか。ヨハンも知らないが、魔ま導どう王おう時代の秘宝〝守護者ジグラド〟を搭とう載さいしているとの噂うわさもある。ただの飾かざりではあるまい。さらに、他のプロヴィデンス・シリーズに採用されている浮ふ遊ゆう接合を一段進めた浮遊均きん衡こうと呼ばれる技術が導入され、可動性がだいぶ増しているという。

　手にする大刀は、名めい匠しようダグラス・トゥースの傑作、一・二メーテルの肉厚な日輪。

　腰こしの脇わき差ざしは、同じくダグラス・トゥースの打刀、妖よう艶えんとも評される刃文を持つ月げつ明みよう。

　盾は持たない。

　ＷＸ￼Ｐには兜が備わっていないため、太陽鬼はこの戦場の風に、惜おしげもなく素す顔がおをさらしていた。後ろに撫なでつけた亜あ麻ま色いろの頭とう髪はつには、一本の白髪も混じっておら

ず、髭ひげはきれいに整えられ、赤せつ褐かつ色しよくの双そう眸ぼうにはその太た刀ち筋すじ同様、あくまで力強く鋭するどい眼光を宿している。

　彼は、義の体現者である。

　彼は、義の守護者である。

　彼は、義の執しつ行こう者である。

　彼こそが、秩序の番人である。

　太陽鬼、デニス・サンライズ。

　──おれとしたことが。

　負ける気が微み塵じんもしない。

　何を愚かな、とは思う。しかし、ＳｍＣ陣じん地ちを出た巨人族ギガントの一匹ぴきが、地じ響ひびきめいた足音を立てて、太陽鬼めがけて駆かけてきた──その後の顚てん末まつを目もく撃げきするにいたって、ヨハンは自分の信しん仰こうめいた信しん頼らいが、決して根こん拠きよのないものではないことを、あらためて知った。

　身の丈たけ四メーテルはあろうかという、薬物か何かの影えい響きようで猛たけり狂くるっている巨人族ギガントに対して、だ。

　さすがに足をゆるめかけた団員たちを尻しり目めに、太陽鬼は特別に気合いを入れるでもなく、腰を低めてすっと距きよ離りをつめた。

　そうして巨人族ギガントの右足の手前で跳とぶように向かって右側に踏ふみこみ、日輪を左下から右上にすくい上げた。

　斜ななめに斬きれた。

　巨人族ギガントの右足は、膝ひざの下あたりで両断された。

　しかも、それだけでは終わらなかった。

　巨人族ギガントが半ばを失った足の側にのめり、倒たおれると、

太陽鬼は跳ちよう躍やくした。高い。高すぎる、後方宙返りだった。これが齢よわい五十をすぎた男の身のこなしなのか。観衆が「おお」とどよめいたのも、むべなるかな。太陽鬼は着地と同時に日輪を振ふり下ろし、巨人族ギガントの首を俎まな板いたの上の大根のように断たつと、悠ゆう然ぜんと血ち振ぶるいをした。

「物の数に入らぬ」

　そして、また歩きはじめた。

　秩序の番人の同志たちに、よりいっそうの熱ねつ狂きようをもらたして。

　━━養父ちち上うえ。

　あなたは。

　あなたという人は。

　最高だ。

「総長につづけ！」

　思わずヨハンは、そんな無意味な命令を下した。まったくもって、不必要だった。

　ヨハンに言われずとも、皆みな、わかっている。我らの戴いただく総長は、強い。誰だれよりも、信じがたいほどに強く、我らを導いてくれる。我らはただひたすら総長についてゆけばいい。置いてゆかれぬよう、奔はしればいい。

　右う翼よくに巨人族ギガントが二匹、左翼にも一匹、行った。

　激げき突とつ。我らが軍列の両翼に太陽鬼はいないが、右翼には死神がいて、自ら一匹を屠ほふり、もう一匹は多数の犠ぎ牲せい者しやを出しながらも、どうにか押し倒し、よってたかって息の根を止めた。左翼では琺瑠フオールがうまい用兵を見せて、少ない損害で巨人族ギガントを撃退することに成功したようだ。

　この結果、両翼は中央に比べ、わずかにおくれた。何番隊何名死傷の模様。何番隊一名死亡確かく認にん。無名隊の者たちが次々と挙げてくる報告を聞きながら、ヨハンはうなずき、羅ラ叉サと琺瑠

フオールに中央に足並みをそろえるよう伝えさせる。同時に、前方の状じよう況きようを確認。巨人族ギガントをあっさり一いつ掃そうされたＳｍＣ側は、だが、それほど動どう揺ようはしていないようだ。陣地から飛びだしてくる様子もない。守りきるつもりなのか。ＳｍＣ陣地まで、そろそろ百メーテル。連中が得意としている弩いしゆみは、どのタイミングで撃うってくるだろう。

「いつ斉せい射しやがきてもいいように、盾たては下ろすなよ！」

　秩序の番人は、精神的な理由と、戦術的な理由で飛び道具を使っていないが、弩が有効な武器であることは間ま違ちがいない。ただ、プロヴィデンス・シリーズの装そう甲こうを貫かん通つうするには、そうとう強力な機構を持つ弩でなければ無理だ。加えて、こちらにはプロテクション・シリーズの盾もある。

　もっとも、殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスの一部が装備しているという、回転式ラニング連発弩フアイヤだけは別だ。サックドール襲しゆう撃げき戦では、焔ホムラの七番突撃隊があれでずいぶん死んだ。

　実は、あのあと、敵が放ほう棄きしていった回転式ラニング連発弩フアイヤ七挺ちようを接収したのだが、試射してみたところ、その威い力りよくはすさまじいものだった。かなり大型のため、運用方法は限定されるものの、うまく集中的に用いれば、一つの決め手になりうるだろう。

　今回の決けつ闘とうで、陣地最前列に回転式ラニング連発弩フアイヤを設置する案も、ヨハンは考えていたのだ。

　結局、総長と羅ラ叉サ副長の反対に遭あい、また、十分な数の専用矢を確保できず、この案は見送ったのだが、ＳｍＣは違う。ぜんぶで何挺か知らないが、回転式ラニング連発弩フアイヤを所有しているはずだし、矢も多く用意していることだろう。

　さらに、前々から噂うわさになっていて、七番突撃隊が実際に遭そう遇ぐうした、死霊術ネクロマンシーを操あやつる面めん妖ような魔ま術じゆつ士しの存在もある。

　やはり、油断は禁物。だが、ここまできてしまえば、小心は勢いを止める棘とげにしかなるまい。

　ヨハンは些さ細さいな動きも見み逃のがすまいと目を凝こらした。指揮をとる都合上、視界を広く保つため、兜かぶとは腰につるしたままだ。鎧よろいは隊長補以上の上級モデル、プロヴィデンスＯＦ。盾はプロテクションＭ７。剣けんにこだわりはないので、切れ味だけは素晴らしい無む銘めいのモトロール刀を二振り選んで持っている。己おのが手で剣を振るう気はさらさらないが。おれが戦わねばならなくなったらしまいだ、と思っている。

　戦わせてくれるな。おれは剣など嫌きらいだ。剣で人を斬り、血を流して昂たかぶるおのれには虫むし酸ずが走る。どうせおれは、養父上のようには斬れない。おれは太陽にあこがれて闇やみに飛ぶ小こ賢ざかしいだけの羽虫であり、それで十分なのだ。

「──くるか」

　と、距離、約七十メーテル。ＳｍＣ陣地がにわかに殺気だった。不細工な柵さくから半身を出した黄と青と紫むらさきのＳｍＣ兵どもは、揃そろって弩を構えている。

「盾構えェェェェイ……！」

　そして、ヨハンが号令をかけた瞬しゅん間かんだった。空を切る音が無数にした。矢が盾に弾はじかれる音もまた、無数だった。ヨハンの前を行く太陽鬼は、身をかわすでもなく、先ほどまでと変わらない歩調で足を進めている。ＷＸ□Ｐに鎧よろわれている箇か所しよはまだしも、顔面は無防備なのに、矢があたるとは露つゆとも思っていないようだ。事実、矢は太陽鬼をさけて飛び、装甲に傷一つ負わせることさえできない。

　が、不意に太陽鬼の足が止まった。ヨハンもそのときには気づいていた。

　ぬかるんでいる。

　瓦が礫れきとその欠片かけらが堆たい積せきしたこの一号区は、足場としては安定しないが、水はけはいい。降雨があったとしても、地面がゆるんで泥でい濘ねいと化すことはまずない。それなのに、なぜ？　黒ずんだ、泥どろ。この臭においは？　嗅かいだことのない種類の、刺し激げき臭しゅう──

「総長、突とつ撃げきを……！」

「全軍全速突撃！」デニスがヨハンの声に半ばかぶせて大声でそう命じるなり走りだした。むろんヨハンもつづいた。他の者たちも総長の命令に即そく応おうしたようだ。ただ、少しばかり気づくのが遅おそかった。キャッスルオブインフィニティ跡あとに、十名ばかりのＳｍＣ兵が進みでてきて、弩ではなく弓で矢を放った。

　火矢だ。

　それが山なりに飛んできて、秩序の番人の軍勢とＳｍＣ陣じん地ちの中間くらいの位置に落ちた。

　着火した。

　その場所が中心となって、あっという間に燃え広がった。

　さながら赤い波だ。猛もう速度でゴゴゴゴウと押しよせてくる。秩序の番人全軍はその波にまともにぶつかってゆく格好となった。炎ほのおだ。地面から噴ふき上げる炎が、瞬またたく間に全軍をつつんだ。

　当然、熱い。鎧は金属だから、熱されるだけでそう簡単に溶とけたりはしないが、顔は保護されていない。装甲の隙すき間まから侵しん入にゅうしてくる熱もある。だが、禍まが々まがしい死肉食ぐらいの怪かい鳥ちようのようにヨハンの心をついばもうとしているのは、実際の熱さ以上の恐きよう怖ふだった。

　そう━おれは怯ひるんでいる。たしかにおれは特別勇気のある男ではないが、だからこそ、普ふ通つうの人間の怯きよう懦だがわかる。普通の人間は、養父上や羅ラ叉サ、あるいは死んだ焔ホムラのように、いつも勇ゆう敢かんではいられないのだ。

「恐おそれるな！」口の中に熱気が入りこんでくる。肺が痛い。ヨハンはたまらず腰こしにつるしていた兜をかぶった。しかし、今は大声を張り上げねばならない。ヨハンはおのれが剛ごう胆たんではなく、どちらかといえば臆おく病びようだと知っているが、人間には恐怖をねじ伏ふせる力があると信じていた。

　その力の源となるのは、鋼はがねの理性である。

　あるいは、知性である。

　さらには、強きよう靭じんな意志である。

　黒い液体。ある外げ道どうの錬れん金きん士しが、燃える黒い液体を生成するらしいと、以前、聞いた。ひょっとして、何かに利用できるのではないかと手の者に探さぐらせたが、結局、実物を入手することはできなかった。何でも、錬金士Ａ組合Ｇの取り締しまりを警けい戒かいし、その外道錬金士が行方ゆくえをくらましたとか。ＳｍＣはそんな物まで手に入れて、周しゅう到とうに準備を整え、我らをこの一戦で殲せん滅めつしようとしている。

　させるものかよ。

「総長に遅おくれをとるな！　進め！　敵てき陣じん地ちはすぐそこだ！　炎は敵陣には及およんでいない！　疾とく駆かけて突つっ切り、突とつ貫かんせよ……！」

　もっとも、この混乱のさなか、ヨハンの叱しつ咤た激げき励れいがどの程度、味方の耳に届いたものか。やや心こころ許もとなくはあったが、ヨハンもこれ以上、叫さけんでばかりもいられなかった。いつの間にか、太陽鬼の背中は五メーテルも先にある。遅れをとるなと言ったそばから、自分が遅れていた。ヨハンは害虫の糞ふんほども役に立たない矜きよう恃じなど持ちあわせていないが、副長職にある者として、下に示しがつかないのはまずい。

　ヨハンはだから無心に駆けた。どうせこの炎に巻かれた状じよう況きようでは、ろくに指揮もできまい。この身が焼け焦こげようとも、走れ。走れ。走れ。七十メーテルが五十メーテルとなり、三十メーテルとなって、あと二十メーテル。もうすぐ黒い液体が撒まかれた圏けん内ないを脱だつしそうだ。敵は装そう塡てん済みの矢を撃うちつくしたのか、飛んでくる矢はない。

　そこでヨハンは炎えん熱ねつに目をすぼめながら、左右と後ろをちらりと確かく認にんした。

　□□ＳｍＣ……ＳＩＸめ。

　乱れに乱れ、ずいぶん薄うすくなったこの軍列をどうしてくれる。

　ヨハンは兜の奥で舌打ちをして、右手を振ふり上げた。

　それから、炎の壁かべを抜ぬけた直後に振り下ろした。

「突破しろ！」

黄と青と紫むらさきの軍勢が、ぞくぞくと行く手の塀へいを乗り越こえ、もしくは不格好な塀と塀の合間を通って躍おどりでてきたのは、まさにそのときだった。

両軍はその数秒後に衝しよう突とつした。それはまったくもって衝突というしかなかった。鉄と鉄、肉と肉がぶつかりあい、グシャリと潰つぶれる音がして、そこかしこで相倒たおれる者がいた。敵を突き倒した勢いで自らも倒れ、そこから起き上がる者がとりあえずの勝者となった。その勝者に飛びかかる者がいた。しかしその彼に誰だれかが横合いから突きかかった。それは断じて斬きりあいではない。双そう方ほう防具で身を鎧っていれば、多少斬ったくらいでは死ぬものではない。盾たてで、肩かたで吹ふっ飛ばし、蹴け倒たおし、とにかく思いきり深く突き刺さすのだ。秩序の番人では、体をぶちあてて相手の体勢を崩くずしたのち、刺して殺す方法を徹てつ底てい的に教えこんでいるので、誰にも戸と惑まどいはなかった。ＳｍＣもまた、喧けん嘩か慣れした者たちで、剣けん術じゆつごっこを挑いどむ気などさらさらない様子だった。お互たがい、本気で相手を殺す気だった。殺す以外のことは考えていないようだった。

だが、ＳｍＣ陣地の手前五メーテルくらい地点で、そうした見境のない、両軍相混じりあう、どちらが有利とも不利ともつかない殺しあいが演じられるなか、明らかな勝者もいた。

いうまでもなく、それは太陽鬼デニス・サンライズに代表される、達人級の剣達者たちだ。

先天的な才能によるとしても、努力と研けん鑽さんによるとしても、彼らは選ばれた人種だった。彼らはこの戦場においても人を斬り殺すことができる、特異な存在だった。

常人は死ぬ思いで一人一殺を達成しているのに、彼らはまるで次元が違ちがう。彼らはまるで刈かりとるように人を殺した。彼らは人を人と思っていないようだった。少なくとも、人を人として扱あつかってはいなかった。仮に、人は蠅はえを掌てのひらで叩たたき殺すことができ、蠅一匹ぴきではどうやっても人を殺せないという事実をもって、人を蠅の上位者とするなら、彼らはまさしく人の上位に立っていた。彼らは別格だった。彼らにとって、これは殺しあいではなかった。殺すこと。ただそれだけだった。

もちろん、そうした者は秩序の番人側のみに存在していたわけで

はない。ただ、偏へん在ざいしていた。ＳｍＣの側には異様に人を殺し慣れた根っからの殺人者が多くいて、その中の何割かは実際に腕うでも立ったが、やはり割合からいっても、絶対数からいっても、選ばれし強者は秩序の番人の方に多かった。そして、ヨハンの見み渡わたせる範はん囲いでは、何といっても図抜けていたのはデニス・サンライズだった。

　かつてエルデンで悪を恣ほしいままにしたという、クラン・インモラルを打ち破り、秩序モラルの番人・キーパーズを創設。

　以来、「義」の旗の下もとに、自らの手でも数えきれぬ悪を討うってきた、秩序の番人総長。

　太陽鬼。

　──養父ちち上うえ。

　その手で血の曲線を描えがく日輪は一つの奇き跡せきだった。太陽鬼が膝ひざを曲げ、伸のばすと同時に斬ざん撃げきを放てば雷らい光こうがほとばしった。足捌さばきは流れるようで、この足場の悪いなか、舞ぶ曲きよくにあわせて踊おどってでもいるかのようだった。当然だ。

　ヨハンの養父ちちは、いまだに破天一流の伝統的な表型七十四通りと、裏型八十三通りの練習を毎日欠かさない。その風景をヨハンは幼き日からずっと見てきた。驚きよう異い的だった。むろん日々というほどの頻ひん度どではないが、一年前──否いな、一巡じゅん月げつ前、養父の剣はあれほど鋭するどかったか？　あれほどに無む駄だがなかったか？　あれほどまでに力充みち満ちた型をこなしていたか？

　驚おどろくべきことに、養父はいまだに成長していた。

　齢よわい五十二、そろそろ太陽鬼も衰おとろえる頃ころ合あいよ、と人は言う。

　愚おろかなり。

　まこと、愚かなり。

　このヨハン・サンライズが保証する。太陽鬼は、今が全ぜん盛せい期だ。今が一番強い。すでに常人にとっては、仰あおぎ見ように

も目を焼かれて直視することさえ叶かなわない激げき烈れつなる太陽だが、これからも強くなる。どんどん輝かがやきを増して、誰の手も届かなくなる。

　ＳＩＸよ。悪あく辣らつの王を気どる醜しゆう怪かいな魔ま人じんよ。お前もだ。お前も養父上にはとうてい及ばぬ。

　見るがいい。

　十、二十のＳｍＣ兵を何気ないふうに屠ほふった太陽鬼の周りに、空くう隙げきができていた。

　誰も近づこうとしない。味方は太陽鬼に支し援えんなど不要だと悟さとっているし、敵は彼の前に出て無事でいられるとは思っていないのだ。

　それは奇き妙みようですらある光景だった。一秒たりとも気を抜けないはずのこの戦場で、太陽鬼は悠ゆう然ぜんと三百六十度を見回し、ヨハンと目があうと、髭ひげに笑えみを刻んで「往ゆくぞ、ヨハン」と言った。「我についてこられるか」

「むろん」ヨハンは思わず抜くまいと心に決めていた無む銘めいの剣を抜いた。途と端たんに気き恥はずかしさが襲おそってきたが、もう養父はヨハンに背を向けて歩きだしていた。

　だとしたら、従わないわけにはゆかない。

　ＳｍＣ陣じん地ちの最前部に張り巡めぐらされた塀へと足を進める太陽鬼に、どこまでも寄り添そい往くのが彼の養子たる自分の役目だ。

「無名隊、羅ラ叉サ副長と琺瑠フオール副長に伝令。両りよう翼よくより敵てき陣じん地ちに侵しん入にゆうしてのち、中央に進路をとりつつ、キャッスルオブインフィニティ跡あとを目指すように」

　ヨハンの後ろについていた無名隊の数人が、素す早ばやく復唱して走り去る。各隊隊長からの伝令もいくつかあり、ヨハンはそれに対して指示を与あたえながら、養父の背中を追った。養父の足どりはむしろゆるやかだったため、すぐ二メーテル後方につけることができた。その間に、相手が太陽鬼でないのならと考えたらしいＳｍＣ兵を二名斬った。愚かなことだった。いくら滅めつ多たに剣を抜かぬとはいえ、秩序の番人の副長職にあるこのおれが、むざむざと

雑ぞう兵ひようごときに遅おくれをとるものか。仮にもサンライズの名を戴いただく身だ。その名に恥はじぬだけの鍛たん錬れんをしてないと思うか。

　しているとも。

　人知れず、陰いん険けん副長にふさわしく夜の闇やみに隠かくれて、血のにじむような修練をしている。

　ただ、おのれの剣を見せびらかす趣しゅ味みはない。毎日、養父のすさまじい剣技を目にしていれば、それと比べれば児じ戯ぎに等しいおのれの剣など、恥ずかしくて人前で振ふるえるものではない。

　まったく──

　養父は異なる領域にいるとしか思えなかった。もはや養父を阻はばもうとする者はおらず、誰だれも彼もがすすんで道を譲ゆずる始末だった。その道を養父は滑すべるように進み、鉄てつ条じよう網もうを巻きつけた不格好な塀へいの前までくると、日輪を右から左へ斜ななめに振り下ろした。そこで剣を返し、左斜めに斬きり上げた。ヨハンは剣の切っ先で塀にあいた逆三角形の穴を示した。

「全軍、敵陣地へなだれこめ！　狙ねらうはただ一人、ＳＩＸだ！　ＳＩＸを討て！」

「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」

　そこかしこでこたえる声が上がった。養父が作り上げ、ヨハンが研ぎ上げた秩序の番人は有言実行の軍団だ。応と言えばただちに動く。まず養父が先に塀の向こうへ乗りこんで、それにヨハンがつづくと、一番総長直属隊、マシュー・シュナイデル率いる二番親衛隊、ヨハンの直属隊、さらに周辺でＳｍＣ兵と激しく斬り結んでいた者たちもついてきた。ＳｍＣ兵どもがこれに追いすがってこようとしたとき、ヨハンは振り向いて叫さけんだ。「──三番隊、親衛隊、反転逆撃！　雑ざ魚こを血祭りにあげろ！」

　この命令にいち早く反応したシュナイデルは、現在の秩序の番人では最古参の部類で、皆みなの個性をよく承知している男だ。当然、ヨハンの性質も理解している。このタイミングも予測していた

のかもしれない。彼の親衛隊は、ヨハンの直属である三番隊とともにーいつ斉せいに踵きびすを返すと、敵軍の一角に揃そろって突とつ入にゅうし、確実に一人一殺を遂とげて即そく座ざに戻もどってきた。

　鮮あざやかな手並みというしかないが、彼らの仕事を見届けている暇ひまはなかった。ヨハンはもう養父に従って先に進んでいた。

　ＳｍＣ陣地の深さは、およそ三十メーテル。ＳＩＸは約三十メーテル先のキャッスルオブインフィニティ跡から、ヨハンらを見下ろしている。ここともあの場所を隔へだているのは、距きょ離りの他ほかに、四つか五つの塀と、さして深くない壕ごう、それに多数のＳｍＣ兵どもだ。

　もう決して遠くはない。

　無名隊の者が、羅ラ叉サと琺瑠フオールが敵陣地侵入を果たした旨むねの報告を、立てつづけに挙げてきた。

　黒い液体の件があったので、死傷者は正確に把は握あくしきれていないが、現時点では隊長、隊長補をともに失った隊はまだない。戦力は、悪くて半減。おそらく、損害は五分の二程度か。

「──憤フンッ……！」養父ちちがさらに一つの塀を軽々と斬り倒たおし、その後ろに身を隠していたＳｍＣ兵三人を己おのが手で撫なで斬りにして、残り二人の処理をヨハンに任せた。

　日輪は斬っても斬っても刃はこぼれするどころか、血ち脂あぶらで曇くもることすらない。

　その妙たえなる刃の切っ先が、キャッスルオブインフィニティ跡に突つきつけられた。

「ＳＩＸ！　そう長くは待たせぬ！」

　キャッスルオブインフィニティ跡は六、七メーテルばかりの高さがある。本来、構造物の基き礎そ部分に瓦が礫れきが積み重なっただけの丘おかだが、例の巨人族ギガントの檻おりや多数の鉄骨で補強され、また、正体不明の物体をゴテゴテと並べた上に、ところどころを光こう沢たくのある黒い布で覆おおったり、各所に奇き怪かいな文字や紋もん様ようを描えがいたりしているため、それ自体がＳＩＸにお誂あつらえ向きの禍まが々まがしく巨きょ大だいな玉座

のようだった。もちろんその頂上部には、邪じや悪あくな形の背もたれと手すりを持つ、黒々としたいわゆる玉座も据すえ付けられていた。

　そこに浅く腰こしかけて足を組んでいるＳＩＸには、当然、日輪の照り返す陽光が届いたはずだ。

　だが、ＳＩＸは無言だった。ただゆっくりと首を回して、ゆったりと足を組みかえ、左右に大きく裂さけた唇くちびるを嘲あざ笑わらう形にゆがめて、右手の人差し指をクイッと曲げてみせた。

　──誘さそっている……？

　何か暗い疑ぎ惑わくのしみが、ヨハンの胸の隅すみを汚よごしかけた。もとより、自ら指定したこの一号区特設会場に秩序の番人を誘いこみ、さまざまな罠わなを仕し掛かけ、陥おとしいれ、これを討うち滅ほろぼそうというのがＳＩＸの企たくらみではある。それは承知しているし、実際にいくつもの陥かん穽せいによって、秩序の番人は少なくない損害をこうむった。しかし──

　と、ヨハンにとっては友に等しい猜さい疑ぎ心しんとの語らいは、急きゆう遽きよ、中断を余よ儀ぎなくされた。

　今や秩序の番人は、十箇か所しよ近くからＳｍＣ陣地に侵しん攻こうしているはずだが、その各所でほぼ同時に悲鳴や応戦を指令する声が上がったのだ。ヨハンのいる中央部分一帯に同様の異変が起こらなかったのは、ひとえに養父のおかげだった。どこからか躍おどりでてきたそれは、日輪の一いつ閃せんによって、たちどころにまっぷたつにされていた。

「獣けものだと……？」

　巨人族ギガントが出現した折、猛もう獣じゆうでも連れてきたかと半分冗じよう談だんで言ったが、どうやらあれもまた正解だったらしい。しかも、頭から尻しりまでを縦に両断されてなお、養父の足あし許もとでぴくぴくと全身を蠢うごめかせているそれは、単なる獣ではなさそうだ。第一、大きい。一・八メーテルを超こえる養父と同じか、それ以上の体格だ。毛むくじゃらで、尻尾しつぽがあり、犬のような顔をしているが、体つきも一いつ般ぱん的な四足獣とは少々違ちがう。前ぜん肢しが腕うでのように発達していたし、後肢も直立歩行できそうな形だ。

「ぬう……夜ナイト魔メア・犬ハウンドとは！」

「ナイトメア・ハウンド──」ヨハンは養父の呻うめくような呟つぶやきを聞いて、大急ぎで記き憶おくを漁あさってみたが、該がい当とうするものはなかった。だからどうということもない。ヨハンが知っていようが知らなかろうが、現実にこのような生き物がいて、秩序の番人の軍列を食い破ろうとしている。その厳然たる事実だけが今は重要だった。養父が大声で注意を呼びかけた。

「こやつらは痛みを感じぬ！　体内に毒虫を飼っているゆえ、吐はく息に目くらましの効果もある。殺し損そこねるな！　脳を断たたねばどこまでも襲おそってくるぞ！」

「無名隊！　他の者も、総長の言を各隊に──」

　言いかけて、はっとした。

　そのときはヨハン自身、おのれがなぜ、その気配を察したのか不明だった。だが、とにかくある予感に駆かられて、キャッスルオブインフィニティ跡あとを振ふり仰あおいだ。

　玉座の前だった。

　黒い布が取り払はらわれ、そこに並んでいた。

　回転式ラニング連発弩フアイヤ。

　四十か、五十挺ちようばかりあるだろうか。回転式ラニング連発弩フアイヤは、持つというより、両腕で抱かかえなければならないほどの重量がある。携けい帯たい性はひどく悪いが、ああして鉄骨で設けた台に据え付けておけば、レバーを回すだけで誰だれでも撃うてる。

　その一つ一つに黄と青と紫むらさきのＳｍＣ兵がとりついていた。

　ジェイが彼らの後ろに立って、高々と右手を挙げた。

「撃て」

　その声が聞こえたわけではないが、たぶん、ジェイはそう言ったはずだ。ヨハンはそれより早く周囲に警けい戒かいをうながしたつ

もりだった。しかし、どうだったかわからない。自分が何と言ったのかも判然としない。とりあえず、自分の体は盾たてに隠かくして手近な塀へいに身をよせたが、周りの動きは遅おそかったように見えた。ヨハンは繰くり返し叫さけんだ。「回転式ラニング連発弩フアイヤだ！　盾構えェェイ！　体勢を低くしろ！　養父ちち上うえ……！　回転式ラニング連発弩フアイヤが！」ダダダダダンダダンダンダンダダダンという音の洪こう水ずいはその最中に始まった。ヨハンの目の前にある塀を貫かん通つうしてくる矢がたくさんあった。盾にも矢があたっている手て応ごたえがあった。

　これほどのものなのか。こんなにすごいのか。

　殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスの回転式ラニング連発弩フアイヤは、かねてより存在が知られていたし、いくつかの抗こう争そうで何度か使用されたこともあった。ただし、接収した物がすべてだとすればの話だが、サックドール襲しゆう撃げき戦で七挺使われた例が、規模としては最大だった。それでも何人もが犠ぎ牲せいになった。今回はおよそ五十挺、数にして七倍だ。だが、数以上だった。相乗効果がものすごい。

　何しろ隙すき間まなく矢が飛んでくる。絶え間なくつづく矢音が思考能力を奪うばう。本当にあっさり奪われてしまう。終わりの見えない恐きよう怖ふが恐慌状態パニツクを導こうとする。目も耳もふさいで伏ふせてしまいたくなる。実際、それを実行に移した者もいたかもしれない。ヨハンには勇気がない。だから、怖こわくて怖くて怖くてたまらなくて、逃にげだしたくて、挙げ句の果てに逃げるより簡単なあきらめを選び、自殺行こう為いに走る者の気持ちも理解できる。

　だが、慣れる。人の心は恐怖に慣れて麻ま痺ひする。最初は途と方ほうもない悪行に思えた人殺しも、正しき義のためという信念さえあれば、そのうち何ということもなくなる。それが人だ。

「──耐たえろ！　耐えろ！　耐えろ！　今を耐えろ！　いずれ矢はつきる！　それまで、糞ふん尿にようを垂れ流してでも耐えろ……！」この声は味方に届くのか。定かではないが、ヨハンにはその程度のことしかできなかった。それに、もっと気がかりなことがあった。養父上。養父は盾を持っていない。大だい丈じよう夫ぶなのか。養父の無事を確かめたい。いや、何とかして確かめなければ。

　ヨハンは二度、深呼吸をした。息を止めて、一気に塀から飛びだした。むろん盾で身を庇かばったままだが、その必要はなかった。

　養父はちょうど塀の陰かげから出たヨハンの前に立ちふさがり、キャッスルオブインフィニティ跡を真正面に見み据すえていた。

　降りそそぐ矢の雨など物ともせず、立っていた。

　完全に、完かん璧ぺきに、防いでいる。

　有翼天将━プロヴィデンスＷＸ□Ｐの背に生えた八枚の銀色に輝かがやく羽が、大きく展開されてデニス・サンライズの体をすっぽりと覆おおい、すべての矢を弾はじいていた。

　やがて回転式ラニング連発弩フアイヤの斉せい射しやがやむと、有翼天将の羽が音もなく広がり、バサリと羽ばたいた。

「□□ＳＩＸ、猪ちよ口こオざいなり。意志なき矢など我には通じぬ。たとえ百万本の矢を費ついやそうとも、このデニス・サンライズを討うちとること能あたわずと知れ」

　一いつ瞬しゆん、ＳＩＸが玉座から腰こしを浮うかしかけたが、また座りなおした。

「Ｋｕ□Ｋｕｋｕ……」

　嗤わらう声には、しかし、まだ余よ裕ゆうがあるか。

　ＳＩＸはわざとらしく手を打ってみせた。

「デニィィィス・サフランラァァイス。更こう年ねん期き障害にききそうで黄色く着色されちまいそうな名前のお前さんだが、手品師としてはなかなかグッドだねえ。その髭ひげもナァァイス。俺が思うに手品師に髭はツキモノだ。その髭のおかげで手品が十倍素す晴ばらしゅう見えるよ。Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕ……いいよ。いい。お前は楽しいナッツなヤツだ。俺は楽しいヤツが大好きだ。愛してる。大大大大ダァァイナマァァイツ愛してる。こいよ。ここまできてみろ、デニィィス。ここまでこられたら、この俺が！　ＳＩＸが！　愛してやるよ？　目一いつ杯ぱいだ。フ×××オでもイ×××オでもシ××ス××ンでもフィ××フ××クでもどの穴でもどんなプレイでも、俺はバキュンバキュンいけるからねえ！　Ｈｉ□Ｈｙａｈａｈａｈａｈａｈａｈａ……！」

「貴様のごとき魔ま人じんが、たわむれに愛を口にするものではない。概がい念ねんが汚けがれるわ」

　養父が再び、静かに前進しはじめた。

　ヨハンも遅おくれずについてゆきながら、立ち止まらずにちらりと後ろを振り返った。従う者は決して多くない。回転式ラニング連発弩フアイヤは、一番総長直属隊、二番親衛隊、三番ヨハン隊以下、このあたりにほとんど密集していた秩序の番人に、甚じん大だいな被ひ害がいを与あたえていた。ついでに、ＳｍＣ兵も多数、死傷したはずだが、そんなことを気にするくらいなら、最初からここまで引きつけて撃ったりはしないだろう。

　ＳＩＸは敵だけでなく、味方に対しても残ざん虐ぎやくだ。

　目的を達するためには、どのような手でも、一いつ切さいの躊ちゆう躇ちよなく用いる。

　だが、我が秩序モラルの番人・キーパーズは、その極ごく悪あく卑ひ劣れつな相手に、正面から挑いどみかかって、打ち砕くだく。

　これこそが我らの義であるといわんばかりに。

　──おれには考えもつかない。

　真ま似ねもできない。やろうとも思わない。けれども、あなたがいれば。

　養父上、あなたがいるから、そのような無理も通るのだ。

　秩序の番人とは、あなたのことだ。

「己おのが足で立って歩ける者はこい。動けぬ者はせめて剣けんをかかげよ。無名隊、羅ラ叉サ副長と琺瑠フオール副長に合流を急ぐように伝えい！　全軍、キャッスルオブインフィニティ跡あとへ……！」

　ヨハンは同志たちにそう命じながら、ふと、十四のときに秩序の番人の正式な団員となり、総長直属隊に配属され、初めて市中巡じゆん回かいに出た日のことが頭をよぎった。

　あの日、養父の背中を追いかけて誇ほこらしかったこと。剣を振

るい、悪漢を斬きり殺し、息を荒あらげていると、養父に褒ほめられた。思わず「養父上」と口走ってしまい、恥はずかしい思いをした。あれ以来、他人の前では養父を養父と呼んだことはない。トマトクンと会談した折には、懐なつかしさのあいまった複雑な心情のせいで養父と呼んでしまったが、あのときは仕方なかった。泉セン里リからの帰りに、珍めずらしく少々酔よった養父が言った。「ヨハン、我も老いたとは申さぬ。だが、いずれ我も老いる。総長の職から退く日もくるであろう。そのときは—」

　無理だ、養父上。

　おれにはできない。おれにはその才覚がなく、資格もない。

　だいたい、当分はその必要があるとも思えない。

　養父は左右の壕ごうから猛もう然ぜんと飛びだしてきた二匹ひきの夜ナイト魔メア・犬ハウンドを、蚊かでもはたき落とすように斬った。二匹とも首を落とされていた。夜ナイト魔メア・犬ハウンドは恐おそろしいことに生首となっても生きていたが、これは後続のヨハンとマシュー・シュナイデルが頭を割ってとどめを入れた。

　怯おびえながらも、十人ばかりがひとかたまりになって、養父ちちに突つっかかってきたＳｍＣ兵がいた。彼らは、だが、勇ゆう敢かんというよりも無む謀ぼうと称しようすべきだった。養父はすうっと速度を上げ、三、四人の間を駆かけ抜ぬけざまに斬り捨てると、さらに二人を一挙に日輪で串くし刺ざしにし、そのまま脇わき差ざしの月明を抜き放って、別の一人の頭を兜かぶとごと断たち割った。ヨハンも二人斬ったが、これはおまけのようなものだった。ヨハンや他の者が斬らねば、養父が斬っただろう。

　一つの信しん仰こうが生まれようとしていた。

　日輪と月明の双刀を手に、有翼天将の羽を展開した太陽鬼がいるかぎり、我らの義に敗北はない。

　塀へいなどは飛び越こえ、粉ふん砕さいするための物でしかなかった。

　両翼の部隊も夜ナイト魔メア・犬ハウンドの脅きよう威いを押しのけ、中央の部隊に合流しつつある。

　今やＳｍＣ陣じん地ちは、太陽鬼を天てつ辺ぺんとする三角の形

に侵おかされ、蹂じゅう躙りんされていた。

　━だが、だからこそ、危あやうい。おれがＳＩＸであれば、このときを狙ねらう。

　ヨハンは気を引き締しめて目を凝こらし耳を澄すませた。おかげですぐに察知することができた。

　キャッスルオブインフィニティ跡まであと二十メーテル。

　ＳＩＸの玉座の脇から進みでてくる者があった。

　黒い杖つえを持って、灰色と黒のぴったりした魔術士衣を身につけ、ひどく痩やせていて背の高い、白はく髪はつでのっぺりした顔の死霊術士ネクロマンサーだ。

　死霊術士ネクロマンサーは両手で握にぎった黒い杖をかかげた。白髪がざわざわと波立って揺ゆれた。ヨハンは魔術の素養がまったくないが、その総身からおぞましい気配がたちのぼりはじめたように感じた。

　魔術。

　天てん賦ぷの才に依い存ぞんしすぎるそのあやしい業わざが、ヨハンは嫌きらいだった。

　第一に、実戦で有用なレベルの魔術士が少なすぎる。第二に、ごくごく少数の天才的な魔術士は、あまりにも危険すぎる。医術士や機術士、錬れん金きん士したちは掟おきてを設けて厳しく自分を律しているが、魔術士は違ちがう。連中はかつて恐怖のドレツド操り手スターと呼ばれた魔術士たちのおぞましき正統な後こう継けい者しやであり、力を制限することを知らず、むしろ濫らん用ようすることこそを本分としている。

　それゆえに、このような忌いまわしい所業をなしうるのだろう。

　起き上がった。

　回転式ラニング連発弩フアイヤで蜂はちの巣にされて死んだはずの同志たちが。夜ナイト魔メア・犬ハウンドに腕うでを引きちぎられて失血死したはずの同志が。日輪に胸を貫つらぬかれて息絶えたはずのＳｍＣ兵が。物言わぬ屍しかばねと化していたはずの秩序の

番人の同志たちが、ＳｍＣ兵どもが、ゆらりと立ち上がって武器をとった。

　生前、敵味方に分かれていた彼らは、一いつ緒しよくたになって明確な敵に回った。

　その事実を頭で理解はできても、気持ちの上で認めることは難しい。まして、やや緩かん慢まんに見える動作で襲おそいかかってくる彼らを、この手で排はい除じよしなければならないのだ。排除するための方法も問題だ。盾たてをぶつけて追い払はらう？　蹴けって突き飛ばす？

　ヨハンも後ろから不用意に──といっても、彼らにまともな注意力が備わっているのか不明だが、ノロノロ突っこんできた同志の動く死体リビング・デッドに盾の一いち撃げきを見み舞まい、転てん倒とうさせた。その拍ひよう子しで兜が外れた。知っている顔だった。ヨハンはできるだけ団員の姓せい名めい、容姿、性格、行状を把は握あくするようつとめている。一番総長直属隊のマァク・エヴァンズ。ハッツフォー独立軍領出身。二十一歳。快活明朗、敵を作らない性質で、珍しくヨハン・サンライズ副長にも好意的。その一点のみで変わり者と見なされることもあるが、要するに明るい好青年だ。

　エヴァンズはのっそりと立ち上がった。

　再び剣を拾い、盾を持って、ヨハンに向かってくる。

　ヨハンは戦せん慄りつした。冷血のおれでさえこうだ。相手が知った顔だというだけで、これほどためらっている。仲間思いの、人間としてはおれよりもよほど出来がいい連中はどうなる。どう感じている。平然と斬れるか。斬れまい。おれとて平気ではない。だが、おれだけは斬らねばならない。それがおれの役回りだ。マァク・エヴァンズ──おれを、呪のろえ。

「何をしている！」ヨハンは兜が脱ぬげて無防備になっていたエヴァンズの首を無む銘めいの剣で斬り飛ばした。その瞬しゆん間かんも、首のないエヴァンズの体を蹴け倒たおしたときも、心は微み塵じんも痛まなかった。

　あたりを見回した。案の定、皆みな、動く死体リビング・デッドにもみくちゃにされている。ひとり養父だけは有翼天将の羽で群が

る動く死体リビング・デッドどもを振ふり払い、弾はじき飛ばしているが、あれは誰だれにでも可能な芸当ではない。副長たるヨハンは、常人にも真ま似ねしうる方法を示さねばならないのだ。

「手向かう者は何なん人ぴとだろうと容よう赦しゃなく斬れ！　死した同志が生きた同志を妨さまたげたとあっては、冥めい府ふでも形見が狭せまいというものだ！　これを斬るは、死した同志の体面を守ることに他ほかならない！　すなわち同志の魂たましいを安んじる行こう為いである！」

　ヨハンはあえて、死した同志たちの中には、蘇そ生せい可能な者もふくまれていることを無視した。感情的に受けいれがたい論理であろうことも承知していた。これでまた、おのれに対する不満、不信、何より嫌けん悪おが高まるだろうことも覚かく悟ごの上だった。

　だが、おれを憎にくむことで皆の良心の咎とがが減り、それでこの状じよう況きようを乗り越えることが叶かなうなら、おれの評判など安いものだ。もともと地に落ちている。今さら回復しようとも思わない。

　ヨハンはさらに一人の動く死体リビング・デッドに襲いかかり、盾でぶち倒して即そく座ざに兜を剝はぎ、首を落とした。ヨハンの無銘の剣けんは太陽鬼の日輪と違うので、プロヴィデンス・シリーズの装そう甲こうごと斬きろうとすれば、刃はこぼれが生じかねない。相手はノロマだし、こうするのが最善だった。

「諸君が斬らぬのなら、私が斬るまでだ！」

　ここまでやってみせれば、銀の軍団の同志たちも黙だまってはいなかった。あちこちでやけくそに近い雄お叫たけびが上がり、はねのけられ、押し倒された動く死体リビング・デッドが、次々と戦せん闘とう能力を奪うばわれた。

　ただ、いくら相手の動きが鈍どん重じゆうでも、数は多く、鎧よろいも着ている。首を断てばさすがに動きは止まるようだが、死者は容易に死になおしてくれない。

　手こずった。気持ちの面を抜きにしても、これはとてつもなくタチの悪い敵だ。進軍が止まった。両翼の部隊は中央に迫せまりつつあるものの、彼らの前にもそれなりの障害がある。合流まで、まだ

多少は時間がかかるだろう。

　一人だけだった。

　養父だけは、動く死体リビング・デッドを払いのける仕事を八枚の羽に任せ、日輪、月明の双刀をぶらさげるように構えたまま、キャッスルオブインフィニティ跡あとへと着実に近づこうとしていた。

「──総長！　お一人では……！」

　ヨハンだけではない。一番総長直属隊の者たちや、マシュー・シュナイデル率いる二番親衛隊も、何とかデニス・サンライズに追いつこうとしたが、そのときにはまた新たな困難が行く手に立ちはだかっていた。

　さっき回転式ラニング連発弩ファイヤを撃うった一団が、キャッスルオブインフィニティ跡を下りて、左右から殺さつ到とうしてきたのだ。あれは殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスか。さらに、夜ナイト魔メア・犬ハウンドの大群がこれに加わっていた。

　夜ナイト魔メア・犬ハウンドどもは、最初、ジェノシドマックスの後方に位置していたが、すぐに追い抜ぬいて前に出た。養父を先頭に置いて、扇おうぎ状に展開している秩序の番人中央部隊は、内に動く死体リビング・デッドを抱かかえたまま、左右から挟きよう撃げきされる形となった。束つかの間、ヨハンはおのれの胸のうちに弱気を見た。これは支えきれないと思った。今さらながら、兵が足りない。繰くり言ごとだとわかっているが、せめてあと五十いれば。いや、やはり百は欲しかった。個人の力では、自分の進む道を切り開くことはできても、全体の局面を打開しうるとはかぎらない。数が足りないために、肝かん心じんなところで押しきることができないのだ。出足はよくても、持続力がなく、迫はく力りよくに欠けて、威い力りよくは先細りする。

「おのれ……！」

　しかし、もう、指揮だの命令だのでどうこうできる状況ではなかった。ヨハンも、まずはおのれの身を守らねばならなかった。右から躍おどりかかってきた夜ナイト魔メア・犬ハウンドの額に一撃浴びせようとしたが外され、とっさに盾たてでやつの突とつ進しんを受けとめてはね返し、長い牙きばが生えそろっている口から脳ま

で剣を突つっこみ──兜かぶとにカツンとあたったのは矢か、と思う間もなく、引き抜いた剣を今度は別の夜ナイト魔メア・犬ハウンドの横よこ面つらに叩たたきこんだ。矢は、弩いしゆみを持って突撃してきた一部のジェノシドマックスが放ったものらしかった。連中は器用に走りながら射撃したのち、弩を投げ捨てて接近戦用の武器に持ちかえ、一いつ斉せいに「イチバァァンイチバァァァンッ」と奇き妙みような声を上げながら駆かけてくる。中には片手で武器を振り上げ、もう片方の手は人差し指を立てて空に突き上げている者もいる。イチバン。イチバン。一番。一番？　意味不明だが、夜ナイト魔メア・犬ハウンドの相手をしながら、あの狂くるった連中を迎むかえ撃たなければならないのは脅きよう威いだった。

　羅ラ叉サは。琺瑠フオールはまだか。同志たちはどのくらい生き残っているのか。勝てるのか。負けるのか。それ以前におれが死ぬか。死んであの死霊術ネクロマンシーに操あやつられるのか。

　思考は途と切ぎれて途と絶だえた。あとからあとから敵が現れた。斬らねば死ぬ。剣に集中しなければ、反応が遅おくれる。この戦場についてゆけなくなる。もはや秩序の番人も動く死体リビング・デッドも夜ナイト魔メア・犬ハウンドもジェノシドマックスも入り乱れていた。生と死も交こう錯さくした。ヨハンは無我夢中で剣を振るいながら叩き殺し身を守り斬り払はらい背中を斬られ装甲で弾き返し反撃して殺した。頭の芯しんが焼き切れてどうかなってしまいそうだったが、前へ。前へ。少しでも前へ。養父上。有翼天将をまとったデニス・サンライズのあとにつづかなければならない。この混こん沌とんとした一号区で、唯ゆい一いつ、それだけが信じるに値あたいする真理だった。

　だからヨハンは求めた。すがった。懸けん命めいについてゆこうとした。実際、ついていった。もうヨハンの前には養父以外の味方はいなかった。だが、この足が。「ＧｕｕｕｕＲｕｕｕｕ」死にかけた夜ナイト魔メア・犬ハウンドにとらえられて。「ヒギヒャヒャヒハヒィ」腰こしに瀕ひん死しのジェノシドマックスが絡からみついてきて。どけ。おれはゆかねばならない。放せ。ヨハンは剣の柄つかをジェノシドマックスの頭頂部に叩きつけて振ふり払う。夜ナイト魔メア・犬ハウンドの顔面を蹴け飛とばしてさらに進もうとする。そこで足が止まった。なぜ？　視界の隅すみに、しかし、かなりの至近距きよ離りに、白はく刃じんのきらめきを見たからだった。しまった。おれは──

「ヨハン……！」

そのときだった。養父の声が飛んできた。いや、養父そのものだった。飛ぶがごとく駆け戻もどってきた養父は、今まさにヨハンを殺そうとしていた、やたらと体のでかいジェノシドマックスを日輪で一刀両断して、反転し、そして。

それから見たものを、ヨハンは生しよう涯がい忘れないだろう。

「──のけい、ヨハン！」

ヨハンは養父に命じられるまま、一も二もなく横に転がった。

キャッスルオブインフィニティ跡までは、十二、三メーテルといったところか。



養父は日輪と月明を頭上で交差させ、体を伸のび上がらせて、反り返らせた。

有翼天将の八枚の羽が、一いつ杯ぱいに広がった。

青白く輝かがやいて限界まで広がった末に、射出された。

羽が。

飛んで、まるで、それぞれが、意思あるもののように──

　それらは回転して、刃やいばとなった。

　四枚の羽は切り刻んだ。五匹ひきか六匹の夜ナイト魔メア・犬ハウンド、それに十人かそこらのジェノシドマックスどもをズタズタにしたあと、地面に突き刺さった。

　残り四枚の羽はキャッスルオブインフィニティ跡を猛もう襲しゆうした。その前面に一枚がめりこんで、二枚は黒い玉座をかすめてゆき、あと一枚はＳＩＸの首めがけて飛んでいったが、これは魔ま人じん自身の手によってはたき落とされた。

　それから養父が日輪と月明を同時に振り下ろした瞬しゆん間かん、両軍、観衆をあわせた誰だれも彼もが息をのんで動きを止めた。あるいは、養父以外の時間が本当に停止していたのかもしれない。

　養父の体がやけに大きく見えた。空気が張りつめていた。重くなっていた。何か空間自体が割れるような、バシャアアアアンともギシャアアアンともいいがたい音がした。それは何かがねじ切れる音だった。大おお袈げ裟さにいえば、世界の法則がゆがめられる音だった。しかし、ヨハンの養父はそれくらいのことをしてのけたのだ。

　振り下ろされた日輪と月明が描えがいた軌き跡せきは、そのまま空気を白く切り裂さく衝しよう撃げき波はとなって突き進み、キャッスルオブインフィニティ跡あとにぶちあたった。壊こわし、圧あつ砕さいし、崩くずし、掘くつ削さくした。衝撃波は縦三メーテル、横二メーテルほどの巨きよ大だいな×印を刻みこんだ。それは深い、深い疵きず痕あとだった。キャッスルオブインフィニティ跡全体が震ふるえた。そのせいで、ＳＩＸも玉座から立ち上がったくらいだった。

「……破天一流天てん技ぎ〝残ざん空くう〟」

　養父は日輪の切っ先をキャッスルオブインフィニティ跡のＳＩＸに突きつけた。

「ＳＩＸ。茶番に飽あいたわ。我は貴様との一いつ騎き打ちを所しよ望もうする。そこから下りてくるがいい。下りてこねば、我が手で引きずり下ろしてくれる」

「━デニィィィィィィィィィィィィィィス…………」

　ＳＩＸは両目を一杯に見開いた。

「デニィィス・サァァァンライズ……Ｈｙｙｙｙすげえ！　お前は予想以上だ、そこまで高めたか！　ただの単なる糞くそ虫むし同然・人間の分際で！　やりすぎだよ、お前はまったくクレイジィだ、デニィィス！　その闘気オウラァッ！　ラヴリィ・ヒゲダァァァンス！　本当に人間なのか？　疑わしいくらいだ、いや実際、ズキュウウンとキたよ！　惚ほれちまいそうだ！　貴様とラァヴラァヴデート即そくベッドインしてもいいくらいの気分だよ！　その超ちよう技わざＡＡ！　絶ぜつ技ぎＹＹ！　すげえ！　よォし━いいだろう」

　かたわらのジェイが止めようとするのも聞かず、ＳＩＸはキャッスルオブインフィニティ跡のへりまで進みでてきた。ジェイはまだ納なつ得とくいっていない様子だが、ＳＩＸに「何だ、ジェイ。お前はいつから俺に意見できるほど偉えらくなったんだ？」と睨にらみつけられると、一礼して引き下がった。

　まさかこのような展開になろうとは、ヨハンも予想していなかった。

　秩序モラルの番人・キーパーズの太陽鬼デニス・サンライズ

　　　　　　×

　加虐的サデイステイツク殺戮・マーダーズ・愛好会クラブの魔人ＳＩＸ

　戦いが完全にやんだわけではない。いつの間にか動く死体リビング・デツドはもとの動かぬ死体に戻り、ジェノシドマックスは二人の決けつ闘とうが気になって仕方ないようだったが、夜ナイト魔メア・犬ハウンドどもはお構いなしに暴れているし、秩序の番人はそれに対応しなければならない。

　ただ、ようやく羅ラ叉サの右翼部隊と琺瑠フオールの左翼部隊がきた。

　これを見て、ジェノシドマックスはキャッスルオブインフィニティ跡方面へ退ひきはじめた。

　夜ナイト魔メア・犬ハウンドどもは集団に押しつつまれて次から次へと駆く逐ちくされてゆく。

　それらすべての動静が、一事でもって締しめくくられようとしていた。

　これから始まる太陽鬼と魔人の決闘によって、何もかもが決する。

　そのときが訪おとずれようとしている。

「デニィィィス。殺したお前を、思いつくかぎりのいろんなやり方でぞんぶんに犯おかしてやるよ。俺の愛をありがたァァァァく頂ちよう戴だいするがいい。さあ、殺やろうか……？」

　ＳＩＸがキャッスルオブインフィニティ跡からふわりと飛び降りた。

　誰もが理解していた。ＳＩＸが着地した瞬間だ。それが合図だ。

　日輪と月明を開き気味に構え、すうっと腰こしを落として背を丸め、いつでも飛びだせる体勢でいる太陽鬼も、当然、そのことはわかっているだろう。

　漆しつ黒こくのボディスーツに黄色い稲ライ妻トニン模グパタ様ーンのＳＩＸが、空に放ったあやしい花みたいにひらひらと舞まい落ちてくる。

　だが、どういうわけか、やけにゆっくりだ。

　キャッスルオブインフィニティ跡は、たかだか七メーテルかそこらの高さしかないのに。

　遅おそい。遅すぎる。

　ひょっとしたら、そのときは永遠にやってこないのではないか。

　そんなはずがなかった。

　ＳＩＸは膝ひざを曲げてその怪かい異いな巨きょ軀くの体重を吸収させ、そっと瓦が礫れきの地面に降り立った。

　それと同時だった。

　太陽鬼が疾しつ駆くした。

　両者の距きょ離りは十メーテルあまりしかない。まばたきほどの時間もかからなかった。

　何かものすごい轟ごう音おんとともに、太陽鬼が突とつ如じょとして──

　消えた。

「□□Ｋｕ……」

　ＳＩＸが両りょう肩かたを震わせた。大口を開けた。目を細めた。体を折って腹を抱かかえた。やつはいったい何をしているんだ。ヨハンにはわからなかった。まったくわからなかった。何が起こったんだ。これは何だ。どういう事態だ。養父は？　養父上はどこへ？

「Ｈｙａａ……Ｈｙａａ……Ｈｙａａａ……」

　何だ、あの声は。

　ＳＩＸは、笑っているのか。

　なぜ？

「Ｋｕｕｕ□Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……ゲラゲラゲラゲラゲラレゲラゲラゲレラゲラ！　こいつは傑けつ作さくだ！　超大大大大大傑作だよ！　デニィィィス！　このバァァ───カ！　一騎打ちだって？　俺がそんなメンドクセエことをしなきゃならない義理がどこに？　ナァ───イよ。そんなものはどこを探したってナァ───イ！　ありゃしねえ！　ホンンンンットウにお前は救いようのないお気楽天然馬ば鹿か髭ひげ野や郎ろうだねえ！　ＧＹａａａｈ！　Ｈ

ａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａ！　Ｈａａａｈ……！」

　ヨハンはＳＩＸの馬鹿笑いを聞きながら、ほとんど放心していたが、今日この日まで鍛きたえつづけてきた理性が行動を要求していた。

　確かめるのだ。おのれが目にしたことを否定するな。おれは見たはずだ。ああ。見た。そうだ。わかっている。本当はわかっているのだ。何が起こったのか。そんなことは起こらなかったと思いたがっているだけだ。それだけだ。

　ヨハンは無む銘めいの剣けんを鞘さやに戻もどし、兜かぶとを脱ぬいで腰につるして歩いた。

　たどりついたその場所で、盾たてを置いて地面に手をつき、のぞきこんだ。

　それは縦七メーテル横七メーテルほどの長方形の穴だった。

　落とし穴だ。

　深さは十メーテルほどもある。その底に、三、四メーテルはあると思われる尖とがった金属の棒が、びっしりと並んでいた。

　養父ちちはやや前のめりになった姿勢でその中にいた。何本もの棒に体を貫つらぬかれていた。腕うで。肩けん甲こう骨こつのあたり。背中のまんなか。腰。尻しり。太ふと腿もも。膝。脹ふくら脛はぎ。そして、恐おそろしく先の尖った棒は、養父の後頭部からも突つきだしていた。

　ぴくりともしない。

　即そく死しのようだった。

　あの音は、開閉式らしいこの落とし穴が作動した際のものだったのかと、ヨハンは思った。不思議とそんなことを考えていた。悲しくも何ともなかった。きわめて冷静だった。落ちついて養父の死を受けいれている自分が奇き妙みような生き物に思えた。少なくともおれは人間ではないのだろう。だが、ふと、自分の呼吸がやたらと乱れていることに気づいた。耳の後ろのあたりがぼんやりと痺しびれて、目の周りも同じ感じだった。鼻の奥がツンとした。胃が痛い。心よりも身から体だの方が先に反応するのか。養父上。こんな

おれを許してください。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。おれは。

　ヨハンは盾を持って立ち上がり、兜をかぶりなおした。まだ笑いつづけているＳＩＸの方は見なかった。ヨハンは叫さけんだ。大声で叫んだ。

「秩序の番人！　全軍ただちに北へ進路をとれ！　一号区を離り脱だつし銀の砦屯所に帰投する！」

　命じるなり、ヨハンはもう北へ向かって歩きだした。惚ほうけたように突っ立っている同志たちを見ると苛いら々いらした。「どうした！　一号区を離脱だ！　早くしろ！」それでもぼけっとしている同志の一人の肩を盾で殴なぐってやった。「命令に従え、莫ば迦か者め！　私はこの戦いくさにおいて指揮の全権を総長から委い譲じようされている！　私の命令は総長の命令だ！　従わない者は斬きる！」

　そこへ立ちふさがったのは、右う翼よく部隊を引き連れて、ＳＩＸと養父の決けつ闘とう開始前にはほぼこの場所一帯を制圧していた羅ラ叉サだった。

「待て、ヨハン、貴様──」

　だが、羅ラ叉サも愚おろかだ。まだ状じよう況きようを把は握あくしていないとでもいうのか。何が起こったのか、武芸に長たけたこの男の目に見えなかったはずはないのに。だいたい、落とし穴はすぐそこだ。ＳＩＸも発はつ狂きようしたように笑っているだけだ。ＳｍＣはなぜか知らないが、動かない。行ってのぞいてみれば、すべてはっきりすることではないか。

　もっとも、この場でその一言を口にすれば、どうなるか。

　ヨハンは沈ちん着ちやくに判断していた。言ってはならない。この場では頭で理解するだけにとどめておかねばならない。言葉にしてしまえば終わりだ。崩くずれる。二度と立ち上がれない者が大勢出る。ここで、それはまずい。ヨハンは小声で言った。

「羅ラ叉サ副長、君からも命令を。我々はもう戦えない。今は無理だ。退ひくのが最善だ」

「……貴様、自分が何を言っているのか──」

「承知している。私の考えが間ま違ちがっていると思うか」

「当たり前だ……！」

　羅ラ叉サが激発して太い眉まゆをつり上げた。そのころには琺瑠フオールも近くにきていた。彼女は部隊を撤てつ退たいさせようとしてくれているようだ。ありがたい。副長たる者、こうでなくてはならない。

「琺瑠フオール副長、先行してくれ。私はしんがりにつく。さあ、羅ラ叉サ副長。君も先に行け」

「誰だれが！」

　羅ラ叉サは吐はき捨てるようにそう言うと、振ふり返ってＳＩＸを睨にらみつけた。

「やつを殺す！　必ず殺す！　今、ここでだ！　退くなら勝手に退け！　俺は一人でもやつを殺す！」「羅ラ叉サ！」琺瑠フオールが羅ラ叉サを抱だくようにして止めた。羅ラ叉サはあらがう。だが、本気で突き放そうとすれば、簡単なはずだ。これはそれこそ茶番だ。見ろ。ＳＩＸもこちらを指さして愉ゆ快かいげに笑っているではないか。「放せ、琺瑠フオール、放せ！」「羅ラ叉サ、ダメよ、そんなことをしても何も……」「黙だまれ！」しかし、仲のいいことだ。羅ラ叉サと琺瑠フオール、それに死んだ釈シヤク拿ナと焔ホムラは凰おう州しゆう難民で、子供のころから一いつ緒しよだ。ヨハンも昔は少しだけ羨うらやましかった。彼らのような結びつきを、ヨハンは誰とも持っていない。だが、それは自ら選んだ道であり、後こう悔かいはなかった。なかったはずだった。今はともかく、悔くいている暇ひまがない。

「いいかげんにしろ、羅ラ叉サ副長。君は秩序の番人が健在であるかぎり、一人の戦士ではいられない。我が儘ままはよしてもらおう」

「健在、だと……？　健在だと、貴様！」

　羅ラ叉サはヨハンに食ってかかってこようとした。ヨハンはむろん、一寸たりとも怯ひるまなかった。

「そうだ。見るがいい。まだ大勢の同志たちがいる。秩序の番人は健在だ。我々が潰つぶすわけにはゆかない。我々の義は死んでいない。そして、我々を立てるものは義のみだ」

　羅ラ叉サがその言葉で納なつ得とくしたかどうかは知らない。あとは同志たちの指揮を優先した。これで勝手な行動をとるのなら、本当に死んでしまえ。そう思った。

　けれども、ヨハンは卑ひ怯きようで悪あく辣らつで下げ劣れつでいくら恨うらんでも呪のろっても憎にくんでも足りないＳＩＸに、今だけは感謝していた。やつはもう完全に勝った気でいる。だからＳｍＣの手の者どもをけしかけてこない。観衆から罵ば声せいを浴びせられ、屈くつ辱じよくと認めたくない喪そう失しつ感に打ちのめされ、すごすごと逃にげてゆくしかない我々の情けない姿を見て、ＳＩＸは狂きよう喜きしている。

　たしかに、これ以上の見物はないだろう。我々には玉ぎよく砕さい全ぜん滅めつして散る無残だが美しい敗北さえも与あたえられない。敗残者として、嘲あざけりと侮ぶ辱じよくを受けてみじめに生きのびるしかない。昨日まで銀の軍団ザ・シルバリイを畏い敬けいしていたエルデンの住人たちが、今日からは掌てのひらを返して嘲さげすみの目で見るだろう。

　だが、我らの義は死んでいない。

　おれはまだ負けていない。負けるわけにはゆかない。この敗北に屈くつして負けてしまえば、何も残らない。養父ちちが作った秩序モラルの番人・キーパーズが不ふ名めい誉よだけを残して消え去ってしまう。

　ヨハンはすでに頭を巡めぐらせはじめていた。何が必要か。何をすべきか。そもそも、養父の遺体を目にした次の瞬しゆん間かんからそうだった。遺体の回収をあきらめたのも、ＳＩＸもそれは許さないだろうと思ったからだ。

　もっとも、考えることで、胸にあいた穴を埋うめようとしているのでは決してなかった。

　そんなことは不可能だ。埋まるはずがない。

　養父上。

あなたをなくしたおれはすでに、もう以前のおれではない。

そうして悲しむことさえ拒こばんで生きてゆく弱いおれを、ただどうか、許して欲しい。

Omenage 897 9th revolution 18th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

〝トマトクン邸〟

chapter.7

小さな勇気とちょっとの強さ

無数の白い管のような物が、互たがいに絡からみあいながら壁かべや床ゆかをうねうねと上を目指して延び、高さ五メーテルはありそうな天てん井じようの中央で、球形の装置に褒つながってたばねられている。

よく見ると、すべての管には文字か紋もん様ようのようなものがびっしりと刻まれていた。

それらの形は一定ではない。絶えず変化しているようだ。色も変わる。かなり淡あわい色だが、赤、橙だいだい、黄、緑、青、藍あい、紫むらさき。まるで虹にじみたいだ。

球形の装置をぐるりと取り囲むようにして、十二の座席と机のようなものが設置されていたが、この空間にいるのは僧そう服ふくを着た大男一人だけだった。

いや、あの球形の装置の中に、もう一人いる。

──モリー。

マリアローズはベアトリーチェと小さな窓の前で額をよせあって、この奇き妙みようで厳げん粛しゆくでどこか異界めいた空間をのぞいていた。

祭さい壇だんをこの目で見たのは初めてだ。

マリアローズは高層寺院の屋上に住んでいるから、これと似たような物の上で寝ね起おきしているわけだが、僧そう侶りよ、神官にとって祭壇は秘ひ儀ぎを行う場所だ。外部の者を出入りさせることなど普ふ通つうはありえない。それどころか、神に仕える者たちの中でも、本物の祭壇に近づくことが許されるのは、蘇そ生せい式に関かかわることのできる高位者だけなのだという。

だが、正直、かなり意外というか、まさかこんな物だとは思っていなかった。

祭壇の外観は、神だの信しん仰こうだのより、むしろ機術士が製作する機械に近いものを感じさせる。近いといっても、同じではぜんぜんなく、かけ離はなれているような気もするが、少なくともこれから行われるのは、神の奇き跡せきなんかではない。とてつもな

く複雑難解で、想像を絶する困難を伴ともなうにしても、それはある理論に基づき、法則に則のつとって実じつ施しされる技術なのではないか。

　モリーは裸はだかにされ、冷水できれいに全身を清められて、最初は床の近くにあったあの球形の装置に収納された。球形の装置はその後、何らかの操作によって天井まで上じよう昇しようしたのだった。

　それらを一人でぜんぶ行い、これから何もかもを独力でなしとげようとしているのは、ＺＯＯ専属の僧侶トワニングだ。

　愛あい称しようは、髭ひげ。

　もちろん、厳いかめしい髭ひげ面づらだからだ。ついでに、何とトマトクンより大おお柄がらで、暗青灰色スチールブルーと黒の僧服を着ていても胸や肩かた、腕うでの逞たくましさは隠かくしようがない。また、その体は決して見かけ倒だおしではないようだ。髭はもともと港町ジェードリで大海王神オストロスに仕える僧正だったが、何かの事情で悪漢十人だか数十人を一人でぶち殺し、見事に破門されたのだという。

　もっとも、髭はただの髭でもなければ、単なる怪力破は戒かい僧そうでもない。

「始まる……のか」

　ベアトリーチェがそっと言った。

　マリアローズは生なま唾つばをのみこんでかろうじてうなずいたが、声は出なかった。

　それまで祭壇内の各所を点検して回っていた髭が、十二ある座席のうち、球形の装置にもっとも近く、他と比べてひときわ大きな椅い子すに腰こしかけた。

『遺体の状態、祭壇の性能、拙せつ僧そうの技量を鑑かんがみれば──』

　と、どこからか声がした。マリアローズとベアトリーチェは、トマトクンの家の地下に設置された祭壇の周りを囲む廊ろう下かのような場所にいる。声は天井から響ひびいてきたようだ。

『この蘇生式が成功する可能性は、正直、七割といったところであろう。ゆえに心配無用とは申さぬが、拙僧の仕える大海王神オストロスは、ときに荒あら々あらしく厳しくも基本的には穏おだやかで寛かん大だいだ。拙僧もできうるかぎり力をつくそう』

「……髭」髭の声は何らかの仕組みで聞こえるものの、こちらの声が髭に伝わるのかどうか。よくわからないが、マリアローズは頼たのまずにいられなかった。「モリーをお願い」

『これより蘇生式に入る』

　窓の向こうの髭が、椅子の背もたれから突つきだしていたヘルメットのようなものを引っぱって動かし、自分の頭にかぶせた。

『□□M.T.D.-Altar-　Supernova-XX-877

-Ultra-Custom-originel-code-

Zephillious　-startap……』

　髭の手が机の上を高速で移動している。椅子もそうだが、あの机も普通の物ではない。机の上には四角や丸のボタンのようなものがたくさん並んでいて、髭はそれらを触さわったり押したりしているようだ。

『mast'a-pass-XXXXXXXXXXXXX-c'all-program-

T-Dummies -com'an-sam'on-die'amons.』

　それにしても、髭が低く、歌うように口ずさんでいるのは上古ハイロ高位語メオンの一種だろうか。

　だとすれば、蘇生式とは魔ま術じゆつに近いのか。

『sam'on- G'abrel. Ud'eal. Od'eal. R'afel. M'ichel.

Adnael. Ipc'el. K'umael. Edel. Lydel. J'udel. 』

　その部分はややゆっくりだった。発音もはっきりしていたので、マリアローズもわりあいきちんと聞きとれた。

　サモン━ガブレル。ウデアル。オデアル。ラフェル。ミケル。アドナエル。イプセル。クマエル。エデル。リデル。ジュデル。

　すると、驚おどろくべきことが起こった。今まで祭壇の中には、モリーをのぞけば髭一人しかいなかったのに、いきなり増えた。十二ある座席すべてに人が座っている。

　しかも、その全員が髭だ。髭が十二人もいる。祭壇の中はもう、髭だらけだった。

　だが、目を凝こらして見れば、最初からいた髭以外はヘルメットをかぶっていないし、その姿がうっすらと透すけていることがわかる。透けている？　幽ゆう霊れい？　いや、髭は生きているので、生き霊りよう……？

『com'an-chenjin-tang-to-dyfind-“LOWER-”SUBROMEON.』

　マリアローズが呆あつ気けにとられている間も、髭は蘇生式を進めている。いったい何があったのか、そのあたりから急に聞き慣れた言語に変わった。

『ガブレル、ウデアル、オデアルはアガナウ・コンダクト七式改、八式改を装そう塡てんし完全三さん位み一体連れん携けい配置でマグニデア・プールに潜せん入にゅう、該がい当とうアニマを捜そう索さくし確保。ラフェル、ミケル、アドナエルは攻式ゲヘナ・ロンデニオン改、攻式アグニ・マハテュールII改、守式レナン・ゼダン改を装塡し潜入支し援えん。イプセル、クマエル、エデル、リデルはアルター内にてミラーリング及およびマテリアル・ボディ再構築準備。ジュデルはバックアップ』

『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』『ies-m'asta.』

　たぶん、命じたのが本物の髭で、返事をしたのが十一人いる偽にせの髭だろうか。

　そういえば、蘇生式には十人以上もの坊ぼう主ずが必要だと聞いたことがある。髭はそれを一人でまかなっているが、やはり完全無欠に一人きりというわけにはゆかないのかもしれない。きっと、あの偽の髭たちは、本物の髭を補ほ佐さするための──何か、としかいえないが、とにかく、そういう存在なのだろう。

　だいたい、髭たちが忙いそがしく机の上で両手を動かしている意味も、歌うように呟つぶやいている言葉も、マリアローズにはさっぱりだ。当然のことだろうが。

　もし、わかってしまったら、大変だ。マリアローズも僧そう侶りよになれる。なりたくなんてないけれども、何となく、こうして蘇そ生せい式を目まの当たりにして初めて理解したことがあった。

　これは、普ふ通つうじゃない。

　サフィニアの使う強力な魔術も十分普通ではないが、蘇生式はもっと異形の業わざだ。

　高層寺院の坊主どもが蘇生式にやたらと高い金をとる理由も、少しわかる気がした。

　死んだ人間が生き返る。何だか当たり前のように感じていることではあるが、それってやっぱりとんでもなく異常な現象なのだ。

　現に、魔導王たちが世界を分割統治していた時代でも、どんなに軽い死だって永遠のものだったらしい。そもそも、蘇生式が誕生する前は、どんな死もぜんぶ同じ死で、死に方による重いも軽いもなかった。魔導王時代と比ひ較かくして、蘇生式は現代の人類が唯ゆいーいつ、優ゆう越えつしている点だという言われ方をすることもあるみたいだが、たぶんそのとおりなのだろう。

　マリアローズは最初、蘇生式は神の奇き跡せきというより、ある理論に基づき、法則に則のつとって実じつ施しされる技術なのではないかと思った。しかし、その感想は撤てつ回かいしなければなら

ない。

　これは奇跡だ。神の奇跡を地上にたぐりよせ、実現させる技術こそが蘇生式に違ちがいない。

　僧侶、神官たちは、だからこそ神に仕えているのかもしれない。自らが奇跡を行うことについて、その力を神のおかげだと讃たたえたり、あるいは神に許しを請こわなければ、彼らは不安なのかもしれない。それは破は戒かい僧そうの髭ひげですら例外ではないのかもしれない。

　髭が蘇生式を進行させてゆくごとに、祭さい壇だん内の壁かべをほとんど隙すき間まなく覆おおっている白い管に刻まれている文字や紋もん様ようの変化、明めい滅めつが激しくなっていった。

　さらには、そのうち、球形の装置がゆっくりと回転しはじめた。

『──マグニデア・プール表層部１サーフエスワン到とう達たつ』

　と、突とつ然ぜん、祭壇の中の光量が落ちて暗くなり、光の線が縦じゅう横おう無む尽じんに走って重なりあう多種多様な図形を描えがきだした。その図形は絶えず変化して、何かの状じよう況きようを示しているようだが、もちろんマリアローズにはちんぷんかんぷんだ。

　しかし、髭たちはさっきよりもいっそう緊きん張ちよう感をみなぎらせ、慌あわただしく手を動かしたり声を出したりしている。『──層突破……防ぼう壁へき展開……』『──層到達……今だ、サーチ』『sarchin.』『sarchin.』『sarchin.』『巡じゆん回かい接近』『redi-for'atakin.』『redi-for'atakin.』『redi-for'difendin.』『サーチ続行』『sarchin.』『sarchin.』『sarchin.』その一方で、球形の装置はぐるんぐるん回っていて、白い管それ自体は動いていないのだが、文字や紋様のせいで不気味に蠢うごめいているように見える。

　マリアローズはその模様をただただ固かた唾ずをのんで見守るしかなかった。次し第だいに、あれは何だろうとかこれは何だとか考えることもやめ、いつの間にかベアトリーチェときつく手を握にぎりあい、まばたきをすることも忘れて待っていた。そう。どうせ待つことしかできないのだ。

強く願って。

真しん摯しに祈いのって。

──モリー。

僕は待ってる。モリーが戻もどってくるのを、ベアトリーチェと一いつ緒しよに、ここで待ってるから。

首都エルデン第十二区には、ちょっとした要よう塞さいみたいなお屋や敷しきが何軒けんもあって、トマトクンの家もその中の一つだ。

トマトクンの家は高さ五、六メーテルほどもある合成骨材製の土台の上に建っている。トワニング専用の祭壇は、ちょうどこの土台の中に埋うまっているわけだ。敷地の正確な広さはわからないけれども、十人か二十人は楽に住めそうな邸てい宅たくと、立派な庭があり、それらが見るからに頑がん丈じようそうな鋲びようつきの塀へいに囲まれて、がっちりと守られている。

こんな家に、トマトクンとピンパーネル、それにトワニングの三人＋謎なぞの生物一頭だけで住んでいるなんて、マリアローズの感覚からすると、かなりもったいない。

マリアローズは邸宅の強化硝子ガラス張りの廊ろう下かから出られる庭に面した板敷──何でも縁えん側がわというらしいが、そこに謎の生物と並んで腰こしかけていた。

もう陽は沈しずみかけていて、西の空はマリアローズの髪かみの毛と瞳ひとみを溶とかしあわせたような色に染まっている。

ふと、板敷から投げだしていた右足をぶらぶらさせてみた。

すると、隣となりの謎生物もマリアローズの真ま似ねをする。

──しかし、こいつって。

「きゅう？」

「いや……きゅう、じゃなくて」

　謎生物は、マリアローズより大きい。白くて、ふかふかした毛に全身が覆われていて、尻尾しつぽがあり、手足もある。手足の指は四本のようだが、わりと器用そうだ。器用なだけでなく、こいつは平気な顔をして二本の足で歩いてみせる。

　その顔は、猫ねこに似ているといえば似ている。

　三角で大きい耳とか、黒い鼻の頭とか、髭とか、口の形とか。

　ただ、目は瞳どう孔こうの形に特とく徴ちようのある猫とはぜんぜん違い、馬ば鹿かでかい黒くろ真しん珠じゆみたいだった。

「てゆうか、きみさ……もしかして、僕の言ってること理解してない？」

「くう」

　謎生物はうなずいた。驚おどろきはなかった。やっぱり、という感じだ。

「だけど、喋しやべるのは無理なんだね」

「くう」

「それで、きみは何？　異界生物フリークス？」

「……きゅう？」

　謎生物は首を傾かしげている。質問の意味がわからない、というよりは、どう返事をしていいものか困っている、という表情と仕草だった。

「ま、いーや」

　本当に、どうでもいい。トマトクンの家に住みついているくらいだから、危険な生き物ではないだろうし、警けい戒かいする必要がないのなら、余計なことは考えたくない。今日は何だか疲つかれた。身体的にではなく、精神的に。いろいろあって、ありすぎて、ぐちゃぐちゃ考えたり、ショックなことがあったり、泣いたり、叱しかられたり、不安だったり──ほっとしたりして。

本当に、もしモリーの蘇そ生せい式が成功していなかったら、「何だか疲れた」ではすまなかっただろう。

今、モリーはまだ邸宅内の一室で眠ねむっていて、ベアトリーチェが付き添そっているので、まずは一安心といったところだ。

ちなみに、マリアローズの左太ふと腿ももの上には、別の生物の頭がちょこんとのっている。

まあ、本当に精も根もつき果てているのは彼女だろう。

彼女は板敷に小さな体を横たえ、マリアローズの太腿を枕まくらにして、静かな寝ね息いきを立てている。

アサイラムでさんざん医術式を使って、使って、使い倒たおしたあと、ふらふらの状態でカタリとサフィニアに半ば担かつがれるようにしてトマトクンの家までたどりつき、モリーの蘇生成功を知った途と端たん、ここで意識を失ってしまった──ユリカ・白雪スノーホワイト。

もちろん、ユリカの方からマリアローズの太腿を枕にしたわけではない。ユリカが寝入ってしまってから、カタリに毛布を取りに行かせている間に、マリアローズがユリカの軽い、軽すぎる体を持ち上げて、そのちっちゃい頭の下に自分の足を差しこんだのだ。

マリアローズの足は細いし、いい具合でユリカの枕になってくれたようだ。

でも、カタリはどこまで毛布を探しに行ったのか、まだ戻もどってこない。

で、あの馬鹿半魚人のかわりに毛布を持ってきたのが、今、隣にいる謎生物だった。

「よく眠っておるようだな」

「──って」

マリアローズはユリカを起こさないように振ふり返った。見上げると、首が痛い。暗青灰色スチールブルーと黒の僧そう服ふく、巨きょ体たい、髭ひげ面づら。いつの間にか、茶ちゃ碗わんを右手に持ったトワニングが背後に立っていた。

「び、びっくりさせないでよ。何で気配消して後ろから人に忍しのびよるわけ？」

「鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術〝絶ゼツ気キ〟。拙せつ僧そうは日常生活においても常に鍛たん錬れんを怠おこたらぬようにしておる」

「だからってさ──あれ？　鵺流……？」

「ユリカに鵺流古式戦闘術を教えたのは拙僧だ」

　髭は目を細めてユリカを見つめている。かなりいかつい顔をした男だが、その眼まな差ざしにはどことなく父の子に対するような慈いつくしみがにじんでいるように思えた。

「どうしてもと、せがまれたのでな。鵺流古式戦闘術は名の知られておる流派だが、タイ＝ザンの師し範はん代だい以上の者によってのみ伝授される。拙僧は行状、精神に問題ありと御おん山やま主ぬしに判定され、流派内では無む階かい梯ていの身ゆえ、本来、余人に教えを与あたうる資格などない。僧としての領分を超こえて医術式を学び、悪漢とはいえ人を打ち殺し、この身を捧ささげた寺院を破門され、流派の掟おきてを破り……」髭はそこで息をつき、かすかに首を振った。「いや、今さら懺ざん悔げをしても始まるまいな」

「少なくとも──」

　マリアローズが髭と話をするのは、これが何度目か、という感じだ。だいたい、この髭はとてつもなくつきあいが悪くて、動物園事務所にもまず滅めつ多たに顔を出さない。かといって、無愛想かというとそんなこともなく、意外と口数が多いので、何だかわけがわからない。

「僕の前で懺悔するのはお門かど違ちがいじゃないの。僕はきみの神様じゃないしね。てゆうか、きみって、医術式もできるの？」

「Ｍ．Ｔ．Ｄ．にて僧学、蘇生式を学んでおった頃ころより、ひそかに医術式にも親しんでおった。僧が魔ま術じゅつを学ぶは禁きん忌きだが、拙僧が医術式を修めておらなんだら、ユリカは今、ここにこうしていまい」

「ユリカが……？」

髭は答えずに茶碗の中身をすすり、謎なぞ生物に目を向けた。
「きゅー、いつまで油を売っておる。まだ掃そう除じが残っておるのではないか」ほとんど鳴き声そのままの名前で呼ばれた謎生物は、特に不満そうな様子もなく、「きゅう」と一声鳴いて立ち上がった。

きゅーはマリアローズに手を振って、縁えん側がわから廊ろう下かに入り、歩き去ってゆく。

あいた場所に髭が腰こしを下ろし、あぐらをかいた。

「……あいつ、掃除担当なわけ？」

「うむ。掃除洗せん濯たくはきゅーがすべて行っておる。無理強じいしたのではないぞ。あやつの方から何か仕事はないかと言ってきたのだ」

「言ってきたって。どうしてわかるのさ。こっちの言ってることは理解してるみたいだけど」

「トマトはあやつの申しておることが何とはなしにわかるようでな」

「ふうん」

そのトマトクンは、モリーを運んでくれたあと、一号区が気になるとか言って飛びだしていったきり帰ってこない。骨こつ龍りゅうの媚メイ婁ルーと呉ウー戒ジエを追ったピンパーネルも、結局、二人を取り逃にがしたようで、一度、帰宅したのだが、トマトクンがいないと知ると、サフィニアと一いつ緒しょにまた出ていった。

一号区の決闘はどうなったのだろう。マリアローズだって、気になってはいる。しかし、何がどうしてどうなったとか、今は知りたくないし、深く考えたくもない。そんなふうにも思う。

モリーを助けることはできたのだから。

──でも。

僕が助けたわけじゃない。僕は何もできなかった。助けてもらったのは、僕だ。

　トマトクン。ピンパーネル。カタリ。サフィニア。ユリカ。そして、髭。皆みながいなかったらと思うと、ぞっとする。

　そういえば、カタリに怒おこられたっけ。「そないな事情やったら、何でわしらに一緒にきてくれへんかて一言頼たのまんのや！　お前じぶん一人ノコノコ行ったかて、大事なモン守れるんか！」

　守れない。守れるはずがない。「ええかげん、もうちょぃわしらのこと信じて、アテにしてくれたってもええんちゃうか！」

　あてにしている。しすぎている。頼たよりきっている。それがわかっているから、自分からは言いだしづらい。「それともアレかい、わしらはいっつもお前じぶんが何して欲しがってるんか、考えて考えて先回りして行動せなあかんのか！」

　─ああ。

　たしかに。カタリ。ご名答。僕はたぶん、そう思ってる。

　こっちから何か言わなくても、察してくれて、手を差し伸のべてくれれば、その手を握にぎることくらいはできる。

　けれども、ああして欲しい。こうして欲しい。手伝ってください。助けてください。お願いします。それが当たり前だろうに、僕にはできない。

　無力な自分が恥はずかしくて。

　みじめさを味わうのが嫌いやで。

　─拒こばまれるのが怖こわくて。

　ＺＯＯの皆は、おそらくきっと、拒きょ否ひしたりしないと、頭ではわかっているのに。

「ユリカと初めて会ったのは……」

　不意に髭が口を開いた。

　見ると、髭は暮れなずむ西の空にじっと視線を注いでいた。

「─雪の日であった。ユリカの姓せいは白雪スノーホワイトだ

が……あの日の雪は純白ではなかった。白いはずの雪が、赤く染まっておった。

　妹いもうと御ごと二人でな。行方ゆくえ知れずの父親を求めて、エルデンにきたのだという。

　だが、この国を知らぬ、しかもたぐいまれなほど見目麗うるわしいおなご二人にとって、エルデンはあまりに危険すぎた。

　彼女らは餌え食じきとなったのだ。

　悪党どものな。

　姉はさんざん慰なぐさみものとなった挙句、全身を切り刻まれ、焼かれた。

　幼い妹は、売りものにしようとでもしたのか、陵りよう辱じよくは免まぬかれたが、激しく抵てい抗こうしたため、頭を割られて殺された。

　トマトと拙せつ僧そう、ピンパーネルがそこを通りがかったのは、そのときであった。

　拙僧は一目で二人とも手て遅おくれだと判断した。だが、そのような蛮ばん行こうを働いた悪党どもを手をこまねいて見み逃のがすほど、拙僧らとて世せ俗ぞく離ばなれしてはおらぬ。彼らに情けをかける義理もなかった。拙僧らは彼らを粉殺し、そして──せめて手厚く葬ほうむってやろうと抱かかえ上げた姉妹を見て、拙僧は思いついた。それは驚おどろくべき思いつきであった。再び同じ状じよう況きように置かれたとしても、まったく同じことを思いつくものか否いなか。拙僧にもわからぬ。

　姉の脳は無事であり、妹の体はほぼ無傷であった。

　拙僧には医術式と蘇そ生せい式の知識と技術とがあった。

　加えて、霊れい感かん。左様。霊感としか申せぬ。しかし、それはおぞましき霊感であった。あるいは、地じ獄ごくの帝てい王おうが拙僧に囁ささやきかけたのかもしれぬ。少なくとも、神の囁きではなかった。

　拙僧はトマトの反対を押しきって医術式を駆く使しし、姉の脳を

妹の体に移植したのだ。

　それよりのち、祭さい壇だんにて姉のアニマを――いや、この先は蘇生式を知らぬ者には意味不明であるがゆえ、くわしくは申さぬが、ともあれ変則的で非常に困難な蘇生式を行った。

　むろん、初めての試みであった。蘇生式の総本山であるＭ．Ｔ．Ｄ．においても、このような生命倫りん理りに反する蘇生式の実じつ施し例は皆かい無むであろう。成功の見込みすらまったく不明であった。あえて申せば、五分と五分。成功か、失敗か。当然ではあるが、二つに一つしかない。

　結果は、今、ここにおるユリカが示しておる。

　姉は蘇生した。

　心は姉のままで。

　妹の体で、だ。

　拙僧は、な……正直、恐おそろしかった。恐ろしいなどと思ったのは、あとにも先にもあのときのみだ。すべてが終わってから、自らの所業にあらためて慄りつ然ぜんとし、おのれの驕おごりに寒気を覚え、悔くいた。心底から悔いた。彼女が目を覚ますときが怖かった。

　だが、気がついた彼女は何も言わなかった。

　言えるはずもなかった。

　彼女は無理な施式の後こう遺い症しようで、ほとんど体を動かせぬどころか、口もきけず、目もろくに見えておらぬようで、音への反応も鈍にぶかったのだ。

　彼女がその間、何に苦しみ、何を恨うらみ、何を呪のろったのか、今もってわからぬ。彼女は語ろうとせぬ。拙僧も訊きかぬ。とうてい訊けぬ。

　ただ、彼女はやがて生きることを選せん択たくしたようだった。少しでも手を動かそうとした。喋しやべろうとした。食べ物を口へ運べば咀そ嚼しやくしようとし、嚥えん下かしようとした。水を飲んだ。拙僧はつききりで彼女の世話をした。彼女を手助けするの

は、拙僧の義務であった。また、卑ひ劣れつきわまりないことに、拙僧にとっては救いでもあった。

　ユリカが常人とさほど変わらぬ立ち居振ふる舞まいができるようになるまで、一年かかった。

　鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術を習いたいと拙僧に申し入れてきたのは、そのあとだ。

　拙僧は断れなかった。

　結局、ユリカは恨み言めいた一言すらも、拙僧にもらさなかったのだ。せっかくこうして生きている、これからはおのれの身はおのれで守りたい、ユリカはそう言った。断れるはずがないではないか。どうして断ることなどできよう」

　マリアローズは髭ひげの話を黙だまって聞いていた。というか、そうすることしかできなかった。

　ユリカ。

　小さいユリカ。

　そんなことがあったのか。彼女が舌足らずなのも、もしかしてそのせいか。

　マリアローズはユリカのくすみのないブロンドに触ふれようとしたが、手が震ふるえて、思いとどまった。

「──何でそんなこと、僕に」

「ＺＯＯの者は皆みな、知っておることだ。マリアローズ、お前は知らなんだろう」

「それは……いつか、ユリカが自分から……」

「ユリカは言うまいよ。つきあいや信しん頼らいの深さの問題ではない。ユリカはおのれの痛みや悲しみを口にはしたがらぬ」

「だったら、余計──本人が言いたくないことなら、知らない方が」

「そうかもしれぬな」

　髭は茶をすすった。もう冷たくなっていたのだろう。渋しぶい顔をした。

「だが、知ることで見えてくるものもあろう。見えたものをどう判断するかはおのれ次し第だいだ」

「判断なんて言われても……」

　よくわからない。

　経歴から考えても、髭はたぶん、マリアローズなんかには想像もつかないくらい頭がいい。きっと、今してくれた話にも、何らかの意味やメッセージがこめられているのだろうが、難しすぎて解読不能だ。

　ただ、ぼんやりと、動けなかったユリカは、どんな思いで毎日をすごしていたのだろう、とか。すごくつらかったに違ちがいない、とか。

　無力で。圧あつ倒とう的に無力で。殺されてしまった妹さんだけでなく、自分のためにさえ、何もできなくて。



　だからユリカは、あのときマリアローズに怒おこっていたのか。

　マリアローズにはちゃんと動く手足があって、モリーにしてあげられることもあった。それなのに、しようとしなかった。何もできなかった。それは、でも、何て便利な言い訳だろう。何もできなかった、ごめんなさい、もう手て遅おくれです、何もできません。

悲しい。苦しい。つらい。泣いて。泣いて。涙なみだで心を洗おうとして。それで楽になろうとする。

──ユリカ。

かわいいユリカ。実は年上で、とてもお姉さんなユリカ。強いユリカ。

僕は非力だし、体も貧ひん弱じゃくで、何かの飛び抜ぬけた才能もない。でも、ユリカ。きみをまた怒らせてしまわないように、もうちょっとだけ強くなりたい。肉体的には無理かもしれないけど、せめて心だけはもっと頑がん丈じようにしたい。

「ごく一部の例外的な天才をのぞいて、人は一足飛びには進歩できぬ」

髭がマリアローズの頭の中を見み透すかしたようなことを言った。

もちろん、マリアローズは天才なんかではありえない。だったら、一歩一歩、少しずつ少しずつ進んでゆくしかないのだ。思えば、ＺＯＯに加盟して仲間ができたことだって、マリアローズにとっては進歩だったはずだ。僕は決して止まったままでいるわけじゃない。変わっている。少しずつだけど、ちゃんと変わっている。それが小さな勇気になって、またちょっとだけ進むことができそうな気がする。

「でも、ホントにちょっとだ……」

自分の歩みの遅おそさに嫌いや気けがさしながらも、少しだけ笑いがこぼれた。

庭の向こうの門に、トマトクンとピンパーネル、それにサフィニアの姿が見えたのはそのときだった。どうやら、ピンパーネルとサフィニアはうまくトマトクンと合流することができたようだ。まあ、彼らはマリアローズとは違う。心配はしていなかったが、三人揃そろって無事で帰ってきて、やはりほっとした。

だが、門をくぐって邸てい宅たくの方へと歩いてくるトマトクンの様子が、どうも変だった。

珍めずらしく、ずいぶん冴さえない、というか暗い表情で、やけ

に重苦しい空気をその長身にまとわりつかせている。

　あれは疲つかれたとか、気分が悪いとか、機き嫌げんが斜ななめだとか、そんな程度ではなくて──落ちこんでいる？　あのトマトクンが？

　マリアローズは、何となくだが、秩序の番人が敗北したことを察した。

　ただ、間の抜けたことに、その事実が何を意味し、これから何が起こるのか、この時点ではまるで予想がついていなかった。しかし、それは大変な事態だったのだ。だって、秩序の番人が負けたということは、勝ったのはＳｍＣで、骨こつ龍りゅうにアサイラムを襲おそわせ、マリアローズの大事な友人であるモリーを一度、殺したのが、他ほかならぬＳｍＣなのだから。

　しかも、マリアローズはあとで知ることになるが、デニス・サンライズが死んだ。

　ＳＩＸが仕し掛かけた罠わなによって殺された。

　そのデニス・サンライズについて、トマトクンはこう言ったのだった。

「仲間だ。昔の、な」と。

Omenage 897 9th revolution 21st day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

“銀の砦(シルバリイホールド)”

chapter.8

剣は誰が継ぐ

　以前の銀の砦は常に張りつめた空気が立ちこめていて、規律正しい生活の場であり、たゆまぬ自己鍛たん錬れんの場であり、一身一命を義に捧ささげる心構えを日々あらたにするための場だった。

　むろん、怠たい惰だをむさぼる者、規律違い反はんを犯おかす者も中にはいた。だが、それとて、冷血の副長が自室に呼びだして叱しつ責せきすれば、たいてい改善した。改善する気配がいっこうにない者は厳しく処断した。

　ヨハン・サンライズは、ぴんと張った一本の糸のように緊きん張ちよう感のある銀の砦を愛していた。

　ゆえに、今の銀の砦は論外だった。

　──喪そう神しん街オレストロか、ここは。

　生気がない。覇は気きがない。現在、アサイラムの警護と銀の砦の守衛は一応、行われているが、それ以外の任務は中断している。だから暇ひまだとでもいうのか。第三支塔の訓練場をのぞいたら、剣の訓練どころか、酒盛りをしている愚おろか者どもがいた。叱責するより早く平謝りに謝って逃にげていったが、ヨハンの背中にむかって舌打ちをした者がいた。中庭で大の字になって寝ねている莫ば迦かがいた。中庭の慰い霊れい碑ひの前にずっと座りこんでいる者も多い。第四支塔地下の納骨堂には引きも切らず団員が押しよせ、情けないことに、いまだに号ごう泣きゆうする者も少なくないという。

　そんな中で、無名隊の者たちは、ＳｍＣ関連の諜ちよう報ほう活動や団内の情報収集に明け暮れている。

　彼らにしても、職務に精せい励れいすることで、何かを忘れようとしている気配がうかがえるが、それが健全な姿というものだろうとヨハンは思う。

　いつまでも悲しみに、喪そう失しつ感に、痛みにひたっていて、どうする。どうなる。

　惜おしんでも、悔くやんでも、たとえこの胸を切り開いて心の臓をとりだして捧げても、失ったものは還かえらない。

　であれば、前だけを見て生きるしかない。簡単なことではないか。なぜそれがわからない。

「阿あ呆ほうどもめ」

　ヨハンはあの日以来、日課としている銀の砦内の見回りをおおかた終え、主塔五階の総長室の前まできていた。警備は総長が在りしころと同じく、二人。二番親衛隊隊長のマシュー・シュナイデルに聞いたところによると、総長室の警備には志願者が続出しているらしい。今や無人の総長室の前に突つっ立っていて、何が楽しいのかとヨハンなどは思うが━感傷、か。

　くだらぬ。

「あの……」と、扉とびらに手をかけようとしたヨハンに、警備の一人が硬かたい声で言った。「今、中に琺瑠フオール副長がいらっしゃいます」

「あの、とは何だ」ヨハンは警備の者を睨にらみつけてから、首を傾かしげた。「琺瑠フオール副長が？　用向きは何か告げていたか」

「い、いいえ、申し訳ありません」

「そうか」

　ヨハンは扉を開けて総長室に入った。平服姿の琺瑠フオールは執しつ務む机の前にいた。当然、ヨハンが入ってきたことには気づいているはずなのに、こちらを見もしない。琺瑠フオールは執務机を右手の指でなぞりながら、その上の刀とう剣けん置台に視線をそそいでいるようだ。

　総長が健在だったころは、執務机の向こうの棚たな台だいに設置していた二本掛がけの刀剣置台だ。

　下の段には豪ごう刀とう「日輪」が、上の段には妖よう艶えんなる刃やいば「月明」が掛けられている。

　一号区会戦で非ひ業ごうの死を遂とげた翌日、鉄てつ鎖さの憩いこい場に遺体をさらされ、名実ともに汚けがされて汚され抜ぬいた、デニス・サンライズの遺品ということになるだろう。

　実はヨハンも、この二刀に用があって、総長室まで足を運んだのだが。

「何をしている」

　近づき、そう声をかけると、琺瑠フオールはようやく振ふり返った。

　その寸前に、黒くろ髪かみをかき上げるふりをして、目め尻じりのあたりをぬぐう仕草をしたように見えた。

　泣いていたのか。

「……何、ということもないのだけど」

「用もなくここにくるほど、君は暇なのか」

「じゃあ、ヨハン、あなたは何か用があってここにきたの」

「むろんだ。今、我が団はずいぶんたるんでいるのでね。せめて私くらい真ま面じ目めに働かなければ、我らの義はここでついえてしまう」

「ヨハン。皆みな、たるんでいるわけじゃないわ。悲しんでいるのよ」

「悲しんで何かいいことがあるのなら、私も悲しむが」

「いいことがあるとか、ないとか、そうやって割りきれる問題じゃないでしょう。わたしたちは、百五十六人もの同志を永遠に失ったのよ。そして──総長まで」

「だからこそ余計に、いっそうの規律と団結をもってこの難局にあたらねばならない。私はそう考えている」

「人は理り屈くつだけでは動けないわ」

「それでは、感情に流されるまま、悲ひ嘆たんに暮れて滅ほろびを待つのが正しい道なのかね」

「そんなことは言っていないでしょう」

「琺瑠フオール──」ヨハンは呼び捨てにしかけて、すぐに訂てい正

せいした。「琺瑠フオール副長」

　羅ラ叉サや琺瑠フオール、それに死んだ焔ホムラ、釈シヤク拿ナとは、もうずいぶん長いつきあいになる。

　凰州難民の彼らは、エルデンにたどりついてすぐ、秩序の番人に保護され、当時はアサイラムもなかったので、団預かりとして銀の砦の中で育った。だいたい同年配の彼らとヨハンとは、当然、一いつ緒しよに時間をすごすことが少なくなかった。ヨハンは子供のころから他人に馴なれない性しよう分ぶんだったから、一いつ般ぱん的な意味の友人とは違ちがうだろうが、彼らに対してひとかけらの思い入れもないとはいわない。各人にそれぞれ複雑な感情も抱いだいていた。いや、今もある。ないといったら嘘うそになる。

　しかし、同郷であり、厳しい逃とう亡ぼう生活、生存競争をともに生き抜いてきた彼らは、血よりも濃こい特別な絆きずなで結ばれていた。そこにはヨハンが入りこむ隙すき間まなどなかった。入りこむべきでもなかった。

「私とて悲しいものを無理に悲しむなと言うつもりはない。できぬことをやれと言っても無む駄だだろうしね。ただし、それと、今やらなければならないこととは別だ。なすべきことを見失っていては、我々は自じ滅めつする。私は団を失うつもりはない」

「あなたらしい言い方ね、ヨハン」

　琺瑠フオールは少し責めるような目をして、だが、微笑ほほえんでいる。

　よせ。

　おれにそんな顔を見せるな、琺瑠フオール。

「私は生あるかぎり私でしかいられない。誰だれであれ、そうだろう」

「素す直なおになれない、嘘つきでいるしかないのが、あなたなの？」

「私は何一つ偽いつわってなどいない。自分に正直に生きているつもりだが」

「そういうことを言うから、皆に誤解されるのよ」

「認にん識しきに差があるようだ。私は誤解を受けているとは思っていないのでね。皆、正しく私を判断し、その結果、当然のごとく忌いみ嫌きらっているだけのことだと考えている」

「あなたはいつもそうやって、一人で割を食う役回りを引き受けて」

「不要な悪であるよりも、必要悪であろうとしているだけだ」

「あなたの御お養父ちち上うえは、そんなことを望んではいらっしゃらなかったと思うわ」

「その名を出せば、私が揺ゆらぐとでも？」

　表面上、ヨハンは軽く嘲あざ笑わらう表情を作ってみせたが、本当は今すぐ琺瑠フオールにつかみかかって引き倒たおしてやりたかった。

　琺瑠フオールも、それくらいのことはわかったのだろう。

「……ごめんなさい」

「ともに副長職にあるのでなければ、幼おさな馴な染じみのよしみだ。愚ぐ痴ちや八つ当たりくらいつきあってやってもよいのだがね。まあ、君の気持ちもわからないではない。何しろ、こうなる前から、妹を亡なくし、その亭てい主しゆでかつての思い人が死に──」

「ヨハン」

　切れ長の両眼をすぼめて、烈れつ火かの怒いかりを抑おさえつけるように唇くちびるを嚙かんでいる琺瑠フオールは、たとえようもないほど美しかった。肺はい腑ふが震ふるえるほどだ。ヨハンはふと疑った。おれは生の感情を剝むき出しにした琺瑠フオールを見たくて、あんなことを言ったのではないか。それには、怒おこらせるくらいしかない。琺瑠フオールがおれの前で見せるのは、せいぜい怒りくらいのものだろう。

　琺瑠フオールは子供のころから焔ホムラをずっと好いていて、釈シヤク拿ナは羅ラ叉サに思し慕ぼの念を抱いていた。

　それがどうして、どのようによじれたのか、ヨハンにはわからない。ただ、おそらく、羅ラ叉サが剣けんにのみ生きる根っからの武人で、決して特定の女を作ろうとしなかったことが、強く影えい響きようしたのだろう。

　いずれにせよ、釈シヤク拿ナは焔ホムラと結ばれ、琺瑠フオールは自身の恋こいを押し殺して忍しのばせた。

　だが、そのことで、彼らの間がぎくしゃくしていたという事実はない。焔ホムラは昔から釈シヤク拿ナのことしか見ていなかったし、琺瑠フオールも自分の思いを何らかの形で焔ホムラにぶつけたりはしなかった。ヨハンが琺瑠フオールの恋れん慕ぼの情に気づいたのは、彼女を注意深く見ていたからだ。

　だから、禁句だった。焔ホムラと釈シヤク拿ナが亡い今だからこそ、余計に口にするべきではなかった。

　しかし、養父ちちを持ちだすのも、それと同じくらいの禁じ手だ。

「先ほども言ったが、私は用があってここにきた。君と長話をする予定はなかった」

　ヨハンは琺瑠フオールから目をそらし、刀剣置台に手を伸のばした。

　鞘さやごとの日輪をつかむ。

　重い。

　ＳＩＸは、デニス・サンライズの遺体に、この日輪と月明を突つき刺さしてさらしものにした。目をつぶれば、あの正視に耐たえない惨さん状じようが浮うかぶ。たぶん、これから数千、数万回、あの光景が夢に出てきてヨハンを苦しめるだろう。デニス・サンライズの名とともに、日輪と月明の銘めいも地に落ちたが、こうして健在であれば、汚お名めい返上する機会もいつか必ず巡めぐってくる。

「日輪をどうするの」

「この前、君には話しただろう。剣は振ふるわれてこそ意味があるものだ。日輪は持つべき者に持ってもらう」

　ヨハンは日輪を持って踵きびすを返した。

　背中に琺瑠フオールの声がぶつかって、流れた。

「月明はあなたが持ちなさい。ヨハン・サンライズ」

　扉とびらを叩たたき、名乗って入室の許可を求めても、反応がなかった。いないのか。いや、それはあるまい。羅ラ叉サ隊の者を数人つかまえて訊きいたところ、全員口を揃そろえて羅ラ叉サは自室にいると言った。以前は非番の際に行方ゆくえをくらますこともあったが、副長職についてからの羅ラ叉サは、連れん絡らくがつかない状態を作ることはなくなった。それなりに大きな組織の上層に身を置けば、いついかなるときも私人ではいられないものだ。何を考えているのか、何か考えているのかいないのかさえ判然としないことの多い男だが、どうやら自覚はあるらしい。

　また、羅ラ叉サはデニス・サンライズに救われた恩義を忘れたりはしないだろうし、それに報むくいるためなら、ためらうことなく命さえ投げだすだろう。

　なおかつ、強い。死神の二つ名は伊だ達てではない。

　さらに、凰州を出てからエルデンに至るまでの間、悪漢どものせいでそうとう艱かん難なん辛しん苦くを味わったせいか、悪を激しく憎にくんでいる。

　それらすべてをひっくるめて、秩序モラルの番人・キーパーズ副長としての羅ラ叉サを、ヨハンは高く評価し、信用していた。

「羅ラ叉サ副長。いるのだろう」ヨハンは何度か呼びかけたあと、試ためしに扉のノブに手をかけてみると、抵てい抗こうもなく回った。鍵かぎはかけていないらしい。「入るぞ」

　足を踏ふみ入れた羅ラ叉サの部屋は、実に閑かん散さんとしている。備えつけの寝しん台だいと衣い装しよう棚だなの他ほかには、本当に何もない。一日の大半を副長用執しつ務む室ですごすヨハンでも、書棚だの、書き物をするための道具だの、細々とした生活用品だの、必要最低限の物は自室に置いているのに、この部屋はあま

りにもがらんとしている。

　そんな空くう虚きよな部屋の隅すみで、羅ラ叉サは床ゆかに座って壁かべに背をあずけ、剣を抱だいて片かた膝ひざを立てていた。

　羅ラ叉サの愛刀は、凰おう州しゆうの伝説的な刀かたな鍛か冶じ、狂きよう雲うん斎さい禍か勒ろくの作「雲くも切きり丸まる」。

　刀を打つ鍛冶士は、今ではもうモトローリィくらいにしかいない。狂雲斎禍勒は数百年前の人物だ。反りのきつい独特の作風で、彼の刀剣は水みな面もの月も斬きるといわれ、雲切丸も古刀の部類に入るが、その切れ味と耐たい久きゆう性は羅ラ叉サが存分に証明している。

　羅ラ叉サは開け放った窓の外へ目をやったまま、動かない。

　ヨハンは羅ラ叉サの前まで歩いていって、鞘ごとの日輪を差しだした。

「羅ラ叉サ副長。これを受けとれ」

　羅ラ叉サはちらりとヨハンの顔を、つづいて日輪を見て、短く息をついた。

「俺には過ぎた刀だ」

「では、日輪はいつまでも総長室に飾かざっておけと？」

「それは俺の判断が及およぶところではない」

「羅ラ叉サ副長。私は──」この男に対しては、単刀直入に切りだす以外ない。ヨハンは日輪を引き戻もどさず、羅ラ叉サの目の前に突きだしたまま告げた。「君に総長職を継ついで欲しいと思っている。団則により総長職の選任は前総長と副長の互ご選せんで決定する。これはすでに、琺瑠フオール副長とシュナイデル、それに他数名、隊長級の者にも話していることだし、君が受じゆ諾だくすれば手続き的にも問題はない」

「俺には無理だ」

「無理でも何でも、やってもらわねばならない」

「ヨハン」羅ラ叉サはいつものことながら、人の背筋を凍こおりつかせる物ぶつ騒そうな目つきでヨハンを見上げた。「──ヨハン・サンライズ。総長は貴様がやればいい」

「私が総長の器うつわではないことは、君もよくわかっているだろう」

「俺よりはよほど適格だ」

「何をもって君がそう言っているのか、私にはよくわからないが」

「貴様はデニス・サンライズの子だ」

「血の褒つながりはない」

「それが何だ。血がそれほど大事か。俺は実の親に捨てられ、生きのびるために凰州を離はなれる舟ふねに乗って逃にげた。俺は連中を親とは思っていない。俺は──」

「君はデニス・サンライズを父同然と思っているのだろう。デニス・サンライズもまた、君を我が子同然と思っていただろう。その意味でいえば、私にその資格があって、君にはないという理り屈くつはおかしい」

「俺にはできん」

　羅ラ叉サはしがみつくようにして、おのれの剣けんを抱く腕うでに力をこめた。これが死神と恐おそれられた男の姿か。まるで意固地になっている餓が鬼きのようだ。そこへ、さらに理をつくして説得しようとしている自分も、あるいは意地になっているのか。

「羅ラ叉サ副長。私にできるのなら、とうに私がやっている。だが、私には能力以上に人望がない。君も知っているだろうが、一号区で全軍に撤てつ退たいを指図したことも相まって、団内の私に対する反感、憎ぞう悪おは頂点に達している。私が総長職につけば、団が割れるどころか、自じ壊かいしてしまうよ。それはさけねばならない。我々は団結しなければならない。そのためには中心が必要だ。求心力のある中心が」

「なぜ、俺だ。貴様が駄だ目めなら、琺瑠フオールにでもやらせればいい」

「珐瑠フオール副長は団内での声望こそ高いが、要するにそれも、有能な美しい女だからだ。何より、彼女は君ほど強くない。これから我々が雪せつ辱じよくを果たし、再び義を立てるためには、何をおいても強くあらねばならない。その中心として、彼女はふさわしくない」

「──雪辱、だと」

「そうだ。我々は復ふく讐しゆうする。このまま銀の砦屯所に籠こもって、アサイラムの警護だけを淡たん々たんとこなしていても、先の展望はない。悪を討うたぬ義には存在意義がないからだ。可能か、不可能かではない。我々は何としてもやらねばならぬ。できぬのなら、滅ほろびるしかない。どうせ遅おそいか早いかの違ちがいだ」

「貴様らしくない思考だ」

「叩たたいて渡わたる石橋自体、すでにないのでね。背後に火の手が迫せまっているとなれば、濁だく流りゆうにのまれても泳ぐしかなかろう」

「だが、俺にはやはり無理だ」

「羅ラ叉サ……」

「貴様の能弁を聞いていて、あらためて思った」羅ラ叉サは唇くちびるの片かた端はしをつり上げた。この男にしてはかなり珍めずらしい表情だ。苦く笑しよう。しかも、自じ嘲ちようめいた苦笑いだった。「──俺は何も考えていなかった。総長が死んだ。もういない。ＳＩＸが憎い。ＳｍＣを殺しつくしたい。任務の間も、こうして一人でいても、頭の中はそのことだけだった。おのれを研とぎすまし、悪を憎悪して、斬きる。俺にはいつもそれしかない。それだけだ。俺は貴様が今、手に持っているその日輪になろうとしていたのかもしれん」

「日輪に？」

「総長の剣に、だ。剣は人を殺す道具だろう。所しよ詮せん、俺は一ひと振ふりの剣にすぎん。斬るしか能がない」

　初めて会ったそのときから、この男は抜ぬき身の剣のようで、眼光に殺気をはらませ、おのれの獲え物ものかどうか探さぐるような

目でヨハンを見た。

　十いくつの子供が、銀の砦で大人たちに守られているにもかかわらず、剣を抱だいて眠ねむるのだ。そして、わずかな物音で目を覚まし、剣の柄つかに手をかけて、音の源をぎろりと睨にらみつける。そんな少年を不ふ憫びんに思ったデニス・サンライズは、たまに剣ごと羅ラ叉サを抱かかえて寝ねた。それでも剣を抱いて眠る癖くせはついに抜けなかったようだが、羅ラ叉サがデニス・サンライズを慕したい、気を許していたことは間違いない。

　羅ラ叉サは、デニス・サンライズの剣になろうとした。

　ヨハンは、デニス・サンライズの影かげになろうとした。

　羅ラ叉サは、デニス・サンライズが自分の父であったならと願ったことだろう。

　ヨハンは、デニス・サンライズの養子であったが、その跡あとを継ぐ器量のない不ふ肖しようの子だった。

「羅ラ叉サ。君はおれが嫌きらいだろうな」

「ああ。大嫌いだ」

　羅ラ叉サは即そく座ざにそう答え、窓の外に視線を移した。

　これまで、この男と腹蔵なく何かを語りあったことなどない。いや、そもそも、ヨハンは誰だれともそのような関係を築いたことがなかった。養父ちちにさえ、これこれこう考えておのれはこうするのだと、いちいち話したりはしなかった。

　ヨハンは常に自分本位で、思いはいつも一方通行で、誰も受けいれず、理解も求めなかった。他人に対しては、分ぶん析せきと解かい釈しやくだけがあって、共感する能力などおのれにはなく、不要だとも思っていた。

　その考えは変わらない。

　ただ、羅ラ叉サがおのれを大嫌いだと言った気持ちは、なぜだかよくわかった。

「月明はおれが受け継つぐ」

　ヨハンはゆっくりと日輪を羅ラ叉サに近づけた。

　羅ラ叉サが日輪ではなく、ヨハンを見た。

　その目に、殺気はなかった。

「君が一振りの剣だというなら、何を斬るべきかはおれが示そう」

　羅ラ叉サはしばらくヨハンを見つめていたが、やがて無言のまま日輪をとった。

　果たして、羅ラ叉サが何を感じて、どう思い、この決断に至ったのかなど知りはしない。知りたくもない。そんなことには構っていられない。こうなってしまえば、ヨハンが考えなければならないことは、他ほかにいくつもある。

　考えつづけ、動きつづけていなければ、おのれの足が萎なえて止まってしまうことをヨハンは知っていた。

　だが、今はまだ、止まるわけにはゆかないのだ。

Omenage 897 9th revolution 22nd day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝モリー・リップス・アサイラム〞

chapter.9

僕の守るべきもの

　九巡じゆん月げつ下げ旬じゆんにしてはかなりあたたかい、晴れた昼下がりだった。

　少々遅い昼食となったのは、モリーの手があくのを待っていたせいだ。

　本日、弁当の製作を担当したのは、サフィニアと、ユリカがちょっと手伝って、マリアローズも材料を切ったり味見したり。カタリは買い出し＋つまみ食いをしてどつかれ係。珍しく動物園事務所に顔を出した髭ひげは、買い出し＋弁当運うん搬ぱん。

　カタリと髭がめちゃくちゃたくさん食材を買ってきやがったので、結局、約二十人分もの弁当ができあがった。まだ事務所にきていなかったトマトクンとピンパーネルのため、一応、四人分くらいの弁当と書き置きを残してきたが、それでもおよそ十六人分。

　マリアローズ、サフィニア、ユリカ、半魚人、髭、それと、モリー。半魚人はわりと早食い大食いだし、髭も体格からしてかなり食べそうだけれども、マリアローズをふくめた他のメンツは普ふ通つう以下の胃い袋ぶくろなので、どう考えても、あまりまくると思っていたのだが。

　見れば、中庭の芝しば生ふに広げた敷しき物ものの上に座って、弁当をつついているのは、一、二、三、四、五、六、七、八──Ｘ棟とうでモリーのそばにいたピンク色の髪かみの女の子と、黒髪の少女、それから、アサイラムの警護についていて、たまたま昼休みだったベアトリーチェ──だけならともかく、同じく休憩中だった七番突とつ撃げき隊の番人三名まで。

　ぜんぶで十二人。

「一部、敷物からはみ出てる人もいるし……」

「はんやひふんはほひゃほひゃふっはひほう（何やお前じぶんはごちゃごちゃうっさいのう）」

「口に物入れたまま喋しやべるな、半魚人。汚きたないだろ」

「しょうよ。カタリ。よしなしゃい」

「……はひ」

「まったく。黙だまっててもボロボロこぼすんだからさ。せめて口くらい閉じてろ。ボケ魚」

「はははははははひふはや！（魚魚ゆうなや！）」

「しっかし、このお弁当、おいすぃーわね」モリーが感心したように息をついて、オクラの肉詰づめに箸はしをのばした。「──んー。うちの食堂よりずっと美味。ちょっと、これ作ってくれたのは誰なの？　あら。その格好、魔ま術じゆつ士し？　もったいない。腐くされトンチキ魔術士なんかやめて、料理人になったらどう？　何ならわたしが雇やとってもいいわよ」

「……あ……いえ、お料理は……あくまで、ただの趣しゆ味みですし……」

「このレベルでただの趣味なんて、しょれはちょっと嫌いや味みだと思うわ、サしやフィニア……」

「そ、そんな……ほら……ユリカが作ったこの大学芋いもなんか、とってもよくできていて……ひ、髭さんも、そう思われませんか……？」

「うむ」髭とユリカはどこか父おや娘こみたいな雰ふん囲い気きがある。サフィニアもそれで髭に話を振ふったのだろうが、あいにくこの男は、あまり世辞が上手うまくなかった。「拙せつ僧そうはこれでも味には少々うるさい方だ。その拙僧が思うに、料理について申せば、ユリカはまだまだだな。そもそも大学芋とは、今から二百年ほど前、ラフレシア第三帝てい国こくの学術都市オーギュストにて、学生たちのつどう食堂アリデイサ・トッパの女主人エマニュエル・ボドレールが創作したメニューで、これが爆ばく発はつ的な人気を博したことによって……」

　しかも、意外と喋りたがりだ。でかい図体をして、どうでもいいことをべらべらと。

　それにしても、髭ってこんなヤツだったのか。あまり接する機会がなかったから、正直、この前、ユリカの話を聞かされるまで、髭のことはよく知らなかった。いまだに外見とのギャップが大きすぎて、どうも妙みような感じがする。

──てゆうか、ＺＯＯうちってこんなのばっかり……。

　どうやら、他にもまだ数人、あやしげなメンバーがいるらしいが、そいつらもどうせ、まともではないだろう。他人よりやや締しまり屋かもしれないが、まあ常識人の範はん疇ちゆうに属するマリアローズにしてみれば、頭が痛くなることばかりだ。今だって、結局、落ちこんでいるユリカを慰なぐさめるのはマリアローズの役目だし、まったく、非常時はこの上なく頼たのもしいが、それ以外では──

「あれ。ベアトリーチェ、食べないの？」

「……あ」見れば、敷物の端はしっこにいるベアトリーチェが、ユリカが渡わたした取り皿を手にしたまま、箸を動かしていなかった。食べずに、アサイラムの中を見み渡わたしていたらしい。ベアトリーチェは心ここにあらずといった様子で卵焼きを口に入れた。
「──うん……おいしい」

「サフィニアの卵焼きはプロ級だからね」

　だが、マリアローズの言葉も、耳に入っているのかいないのか。ちらりとベアトリーチェのそばにいるチェス・ピードに目をやると、彼も何かおかしいと思っているのか、少しだけ肩かたをすくめてみせた。

　もっとも、あんなことがあったばかりだ。

　秩序の番人の評判は、今や糞ふん転がしとどっこいどっこいで、銀色の鎧よろいは嘲さげすみと揶や揄ゆの対象になっている。アサイラムを警護していても、外来の患かん者じやにからかわれることがよくあるようで、そんな状じよう況きようでは、任務についているだけで気が滅め入いってしまってもおかしくない。

　ベアトリーチェは、デニス・サンライズをずいぶん尊敬してたみたいだし。

　──そういえば、トマトクンも、あれ以来、何だか沈しずみがちで。

　秩序の番人は、一号区会戦と泉セン里リ、アサイラム襲しゆう撃げきによって、百五十人も失ったらしい。

　その中には、総長デニス・サンライズや、アサイラムの警備を担当していた十七番警けい邏ら隊の隊長フレデリック・イヌテロなどもふくまれる。

　ベアトリーチェにしてみれば、恩人で大好きだった焔ホムラが死に、配属先の隊長が死に、同どう僚りようたちも死に、総長まで死んで、弱り目に祟たたり目の泣きっ面つらに蜂はちで踏ふんだり蹴けったりだろう。

　マリアローズも、あの日の結末を知ったときは、人並みにショックを受けた。

　しかも、ＳｍＣは制圧した泉セン里リに乗りこみ、連日連夜、祝勝会と称しようしたどんちゃん騒さわぎをしながら、番人をおとしめるための広報活動をエルデン中で行っている。そんなことをしなくても、銀の軍団ザ・シルバリイが「銀ピカ負け犬団」に成り下がった顛てん末まつは、エルデン市民なら誰だれだって知っているし、今やクソ野郎モウフオどもの間でＳｍＣの人気は天てん井じょう知らずだ。一部では偽にせの《ＳｍＣ》焼印まで流通しているらしい。

　ちょっと前までは、クァラナド歓かん楽らく街や闇やみ市いちならともかく、表通りや鉄てつ鎖さの憩いこい場で《ＳｍＣ》の文字が目について仕方ない、なんてことはなかったのに。

　マリアローズも、そのことを考えると気分が悪くなる。最悪だ。

　ＳｍＣ。

　やつらとは大小さまざまな因いん縁ねんがあるけれども、ＳＩＸ□□骨こつ龍りゆうを動かしてアサイラムを襲おそわせたのは、やつに違ちがいないのだ。幸いというか何というか、アサイラムはあっという間に復興し、こうして以前と同じように稼か働どうしているが、モリーは一度、殺された。あのときの痛みは忘れていない。絶対に忘れない。

　そんな中でただ一つの救いは、死んだことなんて屁へとも思っていないかのように、モリーが元気なことだった。

「あー、ピノア。友ユー花フアは食べさせようとしたらいくらでも食べるから、気をつけなさいよ」

「そんなこと言われなくったってわかってるもん。ピノアは友ユー花フアといっつも一いつ緒しよにいるんだから。きっともう、ピノアの方が友ユー花フアのことたくさんわかってるよ」

モリーにくっつきたいがくっつけない、という感じの微び妙みような距きよ離り感を保っている黒くろ髪かみの少女は、ピノアという名前らしい。見たところ、アサイラムにきてそんなに時間がたっておらず、モリーに完全になつく寸前のようだ。少しきつそうな性格がにじみでているが、整った顔立ちの子で、十三、四歳くらいか。あのくらいの年とし頃ごろでアサイラムにきたということは、ろくな目に遭あっていないに違いない。

で、そのピノアの横に座り、感情の波が一いつ切さいうかがえない硝子ガラス玉めいたピンク色の目でどこかを見つめている女の子が、友ユー花フアだろう。

友ユー花フアは、とてつもなく長い髪の毛も薄うすいピンク色だ。もちろん、こんな色が生まれつきだとは考えづらい。すぐに思いつくのは、魔術士育成の過程で用いる薬物の副作用か。顔の造作だけならピノアよりもきれいだが、どこか植物めいていて、年ねん齢れいもよくわからない不思議な印象の女性だ。

ピノアはそんな友ユー花フアを甲か斐い甲が斐いしく世話し、モリーが二人をあたたかく見守っている。

アサイラムに似合う光景だ。この前みたいな惨さん劇げきは、アサイラムに似つかわしくない。

「──でも、片付けとか、早く終わってよかったよね」

「外からも、ずいぶん人手が集まってきやがったお陰かげ様さまでね」

モリーは取り皿と箸はしを脇わきに置いて、足を伸のばしている。たいした量は食べていないけれど、もういいようだ。モリーは普ふ段だんからわりと小食で、よくもあのボディーを維い持じできるものだと思うが、彼女に言わせると一回の食事の量を減らし、食事の回数を増やした方がヘルシーなのだという。

「もちろん、君と君のところのクランもだけれど。それ以外にも、駄だ賃ちんも払はらいやしないというのに、手伝わせろ手伝わせて

ください足を舐なめさせてお願いしますと、わたしの前にひざまずく奴ど隷れい志願者の多いこと多いこと。物好きって、存外、膨ぼう大だいにいるものね」

「物好きってより、モリーの人徳なんじゃないの」

「褒ほめたって、無限アクメ地じ獄ごく招待券以外、何も出ないわよ」

「いらないから」

「もらうだけもらっておいて、使いどころはあとで考えればいいじゃないの」

「いや、絶対に使わないし」

「人生、何事も経験よ？　一度試ためしに経験してみたら、ハマるかもしれないでしょう」

「仮にハマるかもしれなくても、僕は遠えん慮りよしとく。誰か他ほかの人、誘さそえばいいでしょ。モリーならよりどりみどりじゃないか」

「まあ、それもそうね。最近見た中だと、君のクランの園長マスターなんて悪くないかも」

「──さ、サフィニア……お願い、視線でモリーを呪のろわないで。モリーは本気で言ってるわけじゃないし。いや、チャンスがあったら本気になるかもしれないけど……」

「……呪うだなんて……気のせいですよ……ふ、ふふふ……ふふふふふ……」

「あら。あなたとあの背の高い男、つきあっているの？　クラン内恋れん愛あい？　もしかして、仲間に隠かくれてアジトでしっぽりずっぽり？」

「ち、ちちちちちち、ちがいます……！　そ、そんな、わたしは、べべべべべつに……」

「モリー、サフィニアをいじめないであげて。倒たおれちゃうから」

「そうしたらわたしが治してあげるわよ。ちょちょいのちょいよ？　よく見たら、顔色は悪いけれどかわいいし、ついでにたっぷりかわいがってあげる。わたし、性別にはそれほどこだわらないの。わたしのテクは男女両用億万馬力よ」

「……わ、わたしは……こだわります……」

「あらそお？　残念」

　モリーは絶好調のようだ。そのあとも、ユリカの医術士としての腕うでを独特の表現で称しよう賛さんしつつアサイラムに勧かん誘ゆうしたり、カタリの魚顔をからかったり、友ユー花フアとピノアを気にかけたり。髭ひげに対しては、蘇そ生せい式を施ほどこしてもらったせいか、何だか微妙な態度だが──その姿を見ていると、多くの犠ぎ牲せい者しやには悪いが、マリアローズは本当に安心する。同時に、エルデンにのさばるＳｍＣやその傘さん下かに入っている連中が、いまいましく感じられてしょうがない。

　そう、ＳｍＣだけではなく、やつらに与くみしている者たちも同罪だ。

　──アジアン。

　噂うわさでは、泉セン里リを制圧したのはアジアン率いる昼飯時ランチタイムらしい。

　だが、泉セン里リの従業員には死者が出ておらず、泉セン里リを警備していた番人の遺体も回収され、ほとんどが蘇生したという。

　その前にもアジアンは、ベアトリーチェがＳＩＸの隠れ家、サックドールにつかまっていることをマリアローズに教えたりした。

　敵なのか。さすがに味方とはいえないだろうが。でも、アジアンは「今はＳＩＸに飼われている身だ」とはっきり言った。場合によっては、ＺＯＯとも敵対するかもしれない、と。そうなって欲しくはないが、そうならざるをえないのなら、仕方ない、と。

　あのとき、マリアローズの名を一度も呼ばなかったアジアン。

　あいつが敵になって、たとえば一号区みたいな戦場で出くわすようなことが、これから先、あったりするのか。

　絶対にない、とは断言できない。

　なぜなら、マリアローズの中で、ＳｍＣはすでに完全な敵だった。

　以前は、まあ、やつらに直接、危害を加えられたこともあるが、障害物というか邪じや魔まものというか。ＳｍＣにかぎらず、エルデンには石を投げれば悪党にあたるというくらい、悪党が大勢いる。やつらはそのうちの一種、一種族で、出会った悪党がたまたまＳｍＣだったというだけで。数が多いから、そのぶんウザさも数倍、数十倍だが、結局は大きな悪党という枠わくの中に収まっていた。

　今は違ちがう。やつらはやりすぎた。実際、頭ず蓋がいの中で皺しわなし脳みそが腐ふ汁じゆうに浮うかんでいるような馬ば鹿か悪党どもは、ＳｍＣをさかんにもてはやしているが、一いつ般ぱん人は内心、恐おそれている。

　ＳｍＣはもはや、悪党の中の一勢力ではない。有力な悪党勢力でもない。悪党の中の悪党でさえない。悪党の代名詞でもない。

　ジャンル・ＳｍＣ。

　いわばニュータイプの悪党だ。エルデンの圧力団体や富ふ裕ゆう層が利害の中立地帯として利用し、有形無形の保護を与あたえていた泉セン里リを占せん拠きよしたことが、その一つの象しよう徴ちようだ。

　彼らはこれで、実に多くの勢力を敵に回したことになる。

　エルデェＥイニオン機Ｍ術士匠合Ｕ、錬金士Ａ組合Ｇ、大Ｐ陸医Ｃ術士Ｍ会Ａ、第５五区Ｃ商業Ａ振興Ｓ会Ｔ、各有力デザイナーズブランド工こう房ぼう、等々――しかし、彼らはどこ吹ふく風で、毎夜、宴えん会かい三ざん昧まいだ。彼らは怖こわいもの知らずに見える。彼らには今までの悪党につきまとっていたある種の「セコさ」がない。弱者に強く、強者に弱いという弱いものイジメの性質からは縁えん遠どおい。だって、彼らはあの銀の軍団ザ・シルバリイを倒したのだ。生ける伝説、太陽鬼を、実に悪党らしい汚きたない手で殺し、鉄てつ鎖さの憩いこい場にその無残な遺体をさらしてのけたのだ。

ひょっとして、これはもう、誰だれも止められないのではないか。このままでは、ＳｍＣは誰にとっても無視できない、大きな存在となるのではないか。すでになりつつあるのではないか。

かつて、残忍公とクラン・その一党クリユーエルが築いた「血の時代ブラッデイ・エイジ」に匹ひつ敵てきする暗黒の時代が、ＳｍＣの手によって招きよせられるのではないか――

けれども、マリアローズごときが「どうしよう」「何もしなくていいのか」とあわてふためいたところで、何がどうなるわけでもない。

アジアンと敵対、だって……？

それだって大おお袈げ裟さすぎる話だ。一号区のような戦場にマリアローズが立って、敵側にアジアンがいて。そんな構図には、そもそも起こりうる可能性という点で大いに無理があるし、アジアンが何を企たくらんで何のために何をしようが、どうでもいいことだし。

あいつがＳｍＣに荷か担たんしているという現実は、ちょっとだけ、苦いけれど。

それは、まあ、顔も知らない、口をきいたこともない人間というわけじゃないから、まったく気にならない方が、かえっておかしいだろう。

要するに、マリアローズには、自分の生活とか自分のための平へい穏おんが当然あって、それが脅おびやかされることを危あやぶんでいる。というか、一度は脅かされるどころか傷つけられたわけで、二度目がなければいいと思っている。それだけのことだ。マリアローズの胸の有効ペイ搭載量ロードは狭せますぎて、実にありふれたちっぽけな願いがしまわれているだけなのだ。

仲間たちと一いつ緒しよに、アサイラムを訪おとずれて、大切な友だちのモリーと弁当を食べて。ベアトリーチェなんかもいたりして。

ずっと一人きりだった僕にとって、これがとっても素す晴ばらしくて素敵なことだって、他人にはわからないかもしれない。僕はもう、あのころには戻もどりたくない。今の僕は前よりもずっと臆お

く病びようで、弱い。いつもビクビクしてる。手に入れたものはいつか必ず失われるんじゃないかって、怖がってる。

　でも、強くならないと「今」を守れないかもしれない。

　だったら、ショボい雑ざ魚こにすぎない僕は、髭ひげが言っていたように一足飛びには進歩できないから、少しでも、少しずつでも。

　何かできることがあるなら、しよう、と思う。

　それで、トマトクンたちにも協力してもらって、アサイラムの復興を手伝った。

　こうして、仲間を引き連れて弁当を持ってくるのも、何かにこじつけてアサイラムにくれば、助けになれることがあるんじゃないかと思っているからだ。

　仲間たちも理解してくれている。トマトクンとピンパーネルは、作業がおおかた終わったこともあってか今日は不参加だが、かわりに髭がきてくれた。

　守りたい。

　どうすればいいか、どうするべきかなんてわからないが、この願いを守りたい。

　弁当はたいした時間もかからずに平らげられた。他の番人とともに持ち場へと帰るベアトリーチェの思いつめたような深い青の目は、何か迷っているようだった。「またね」と言ったマリアローズに、少しだけ微笑ほほえんでみせた表情も曖あい昧まいだった。もう少し話をしたかったが、昼休みが終わるとのことで無理だった。

　それから、空の弁当箱や敷しき物ものを残りの皆みなで片付け終えると、モリーが一つ伸のびをして、丸一日以上は洗っていないだろう髪かみの毛を引っかき回した。

「さあて、わたしも仕事に戻らないと」

「じゃ、僕たちも帰るよ。また──」

　マリアローズは、何となくユリカや、サフィニア、カタリ、髭を

見た。こうやっていちいち顔色をうかがうような視線が、仲間をほんの少し傷つけて、うざったいのかもしれない。

　今はまだ、やめられそうもないけれど。

「みんなを連れて、またくるから」

「そう」

「うん。あ、今度はト──」

　サフィニアがぴくんと体を震ふるわせた。ト、だけで反応するなんて、いくら何でも過か剰じようじゃないかと思うが、恋こいする女の子ってこういうものなのだろうか。

「……と、とにかく、またね」

「ええ」モリーはうなずくなり、いきなりマリアローズの肩かたに顎あごをのせるような体勢になり、耳みみ許もとに唇くちびるをよせて、ひっそりと言った。「──ありがとう、マリア」

　どうしてか、モリーは滅めつ多たにマリアローズの名前を呼ばない。そのせいもあったが、モリーの吐と息いきが耳たぶにあたって、くすぐったくて。香こう水すいとかではない、すごくいい匂においもして。マリアローズは思わず「あ」と声をもらして、身をすくめてしまった。

「ふふ。感じちゃった？」

「……感じてません」

「嘘うそつきは恋こい泥どろ棒ぼうの始まりよ」

「何かそれ、違ちがわない……？」

　モリーは嘘くさいことわざを残して背中を向けた。友ユー花フアの手を引いたピノアがそれを追う。あの二人は、このところモリーのそばから離はなれようとしないのだという。マリアローズは三人の後ろ姿を眺ながめながら、このあと自分たちが何を選せん択たくし、決断することになるかなんて、まったく予感していなかった。

Omenage 897 9th revolution 22nd day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区・第二王立銀行内

〝動物園事務所（ズーズオフィス）〟

chapter.10

手

夕方の第二王立銀行に帰りついて、銀行内でこれから巡じゅん回かいに出発しようとしていた魔ま導どう兵へいの一団とすれ違い、エスカレーターで二階へ。マリアローズは《ZOO'S OFFICE》のプレートが目印になっている動物園事務所のドアを開け、言いかけた「ただいま」を寸前で引っこめた。

直径約七メーテルの大だい円えん卓たくの座席に座っていたのが、トマトクンとピンパーネルだけではなかったからだ。

部外者はぜんぶで三人いる。そのうち一人とは、マリアローズも面識がある──はずだ。しかし、ちょっと雰ふん囲い気きが違う。なぜかと思ったら、銀ぎん縁ぶちの眼鏡めがねをかけているせいだった。

まあ、もともと外見にはこれといった特とく徴ちようもなく、印象の薄うすい男だったが、眼鏡をかけると、真ま面じ目めそうというか、厳しそうというか、全体的に締しまりが出た感じがする。

身にまとっているのは、紺こん色いろの詰つめ襟えり平服でも、銀の鎧よろいでもない。モトロール刀とおぼしき剣けんは持っていて、大円卓に立てかけているが、服装はジュスターヴとか７２５５４とか、それなりに名の知れたブランドでそつなくまとめていた。彼の両りよう脇わきをかためている男二人も、似たような格好だ。つまるところ、変装か。たしかに、ぜんぜん番人っぽくない。

秩序の番人副長、ヨハン・サンライズ。

ヨハンはマリアローズらをちらりと見て軽く目礼したが、返礼する気にはあまりなれなかった。というか、あの嫌いや味みな冷血漢の理り屈くつ屋が、何でこんなところに。

「おお。お前たち、いいところに帰ってきたな」トマトクンが、戸と惑まどっているマリアローズたちを手招きした。「座れ。どうせお前たちの意見も聞かなきゃならんことだ。べつに問題はないだろう、ヨハン」

「トマト殿どののよろしいようにしていただいて結構です」

「うむ。というわけだ。みんな適当に座ってくつろげ」

「……できれば、くつろぐのはあとにしていただきたい」

「そうか？　ああ、ユリカ、茶を淹いれてくれ。む？　何だ。茶もダメか」

「いいえ、駄だ目めというわけではありませんが……」

「じゃあいいんだな。ユリカ、悪いが、茶を全員ぶん頼たのむ。どうも喉のどが渇かわいてな」

「わかったわ。ハイアット茶にしようと思うけど、どなたか緑茶が苦手な方はいらっしゃいましゅ？」

　緑茶嫌ぎらいは一人もいなかったようだ。ユリカが窓まど際ぎわの棚たなへ向かってお茶の用意をしている間に、マリアローズ、カタリ、髭ひげはトマトクンの近くの座席に腰こしを下ろし、サフィニアは杖つえだけ置いてユリカを手伝いに行った。

　だが、いったい何事なのだろう。

　マリアローズはあやしむ気持ちを隠かくしもせず、ヨハンを上目づかいでジイッと見た。

「……それ、度は入ってるの？」

「伊だ達て眼鏡だが。それが何か」

「何ってこともないけどさ。訊きいただけだよ。悪い？」

「無意味な質問に答えるのは時間と労力の無む駄だと考えているのでね」

　ヨハンはまったく表情を変えないでそんなことを言った。何てむかつく野や郎ろうだ。

「だったら、意味のある質問をするよ。伊達眼鏡なんてかけて、あの目立つ服とか鎧も着ないで、秩序の番人の副長様ともあろう人が、わざわざこんなとこまできた理由は何？」

「君個人の問いに答える形で説明するのは非効率的だ。せっかく茶の用意をしてもらっている。全員が揃そろってから話した方がいいだろう」

「あーそーですね。仰おつしやるとーり」

「マリア、そう突つっかかるな」トマトクンがやれやれといった感じで軽くため息をついた。偉えらそうに。「すまんな、ヨハン。悪気があってやってるわけじゃないんだ。口と態度は悪いが」

「気になさらないでください。私は秩序の番人の副長職にありますが、団の外に出て私人となれば、一人の人間にすぎません。まして、相手が子供なら、多少礼節を欠く接し方をされたくらいで気分を害するのは大人げないというものでしょう」

「子供って言うな！」

「これは失礼。背格好から子供だと思っていたが、違ちがったか」

「むかぁっ！　人が気にしてることを……！」

「マリアローズ、やめとき。相手は一応、お客さんやで」

「うっさいダメ半魚人！　何ここぞとばかりに大人ぶろうとしてるんだよ？　無理に無理を重ねてそんなことしたって、きみの精神年ねん齢れいが乳ち飲み子と洟はな垂たれ小こ僧ぞうの中間くらいだって事実は変わりゃしないよ？」

「ダァホ、誰だれが赤ん坊ぼう並みの精神年齢じゃ！　わしのちっこいミクロ脳かて、三歳児相当の知能はあるがな！　って、三歳児相当かい！　精神年齢と知能の相関関係はどないやねん！」

「知るか！　一人で勝手にボケまくって未来永えい劫ごうボケボケしてろ、腐くされ稚ち魚ぎよ！」

「お。ニューパターンやん？　稚魚」

「あ。そうだね。嬉うれしいでしょ？　罵ののしられ言葉のヴァリエーションがまた一つ増えて」

「嬉しいわけあるかい！」

「……ずいぶんとまあ、にぎやかですね」

　ヨハンは銀縁伊達眼鏡の位置を右手の中指で直しながら呆あきれているようだが、それでも表情は動かしていない。筋金入りだ、こ

いつ。

「まあ、いつもこんな感じだが——と」トマトクンの前に、サフィニアがハイアット茶入りのカップを置いた。サフィニアはトマトクンに「すまんな」と声をかけられただけで、「……い、いえ……」と赤面してトレイで顔を隠している。

　こうした半魚人的劣れつ化か型自じ爆ばくボケ。知的で高度な悪口。淡あわい片かた想おもい。すべて当クランで繰くり返されている日常風景だ。番人みたいなお堅かたい連中にしてみれば、カルチャーショックを受けるのかもしれないが、何か文句があるか。

　ユリカが持ってきてくれたお茶を一口すすって、いつもどおり美味おいしいと思いながらも、マリアローズはヨハンをねめつけずにはいられない。

　この男は第一印象から超最低ＳＵＣＫだったが、やはりどうもダメだ。先天的に相あい性しようが最悪なのかもしれない。伊達眼鏡めがねがまたいっそうむかつく。顔立ち自体は平へい凡ぼんなのに、眼鏡をかけた途と端たん、やたらと頭が切れそうで、不敵で、傲ごう岸がん不ふ遜そんな印象になったし。マリアローズの目から放射される殺人光線デス・レイが、あの眼鏡のレンズにはね返されてしまっているような気もするし。

「それでは」実際、そう口火を切ったヨハンは、マリアローズの視線を完かん璧ぺきなまでに無視している。「——私から説明させていただいてよろしいですか、トマト殿」

「ああ、頼む。ごちゃごちゃ喋しやべるのは得意じゃないからな」

「相変わらずですね」

　でも、相変わらず、だって？

　もしかして、ヨハンとトマトクンは面識があったり——と考えかけたところで、思い出した。デニス・サンライズはトマトクンの昔の仲間だったのだ。だったら、その息むす子このヨハン・サンライズのことだって、知っていてもおかしくない。

　もっとも、このヨハンという男、あの太陽鬼には似ても似つかないが。

──だけど、その太陽鬼も死んで。いや、殺されたわけで。

　マリアローズが知るかぎり、総長を失った番人たちは、それぞれ苦く悶もんしたり、意い気き消しよう沈ちんしたり、痛々しい空元気を振ふりまわしたりしている。

　それなのに、総長と父親を同時に失ったはずのヨハンは、何らかの痛手を受けているようにはぜんぜん見えない。

「では、手短にお話しさせていただきます。まず、初めてお目にかかる方もいらっしゃるので、私の身分を明かしておきましょう。私は秩序の番人副長ヨハン・サンライズと申す者です。こちらの二名は私の直属の部下で信しん頼らいの置ける者たちですので、臨席をお許し願いたい」

　ヨハンの言葉につづいて、二名の変装番人が「三番副長直属隊隊長補コンラッド・アシャーです」「二十五番隊隊長ハインツ・クルエルフォートです」と次々と名乗った。アシャーは明るい色の巻き毛がやわらかそうで、人のよさそうな好青年。クルエルフォートは癖くせの強い銀色の髪かみを番人には珍めずらしく肩かたまで伸のばしていて、エメラルドグリーンの瞳ひとみにちょっと薄うす気味の悪い輝かがやきを宿し、顔立ちは美形だが、うさんくさい感じがプンプンする。まあ、ヨハンみたいなヤツとまともにつきあえるのは、お人ひと好よしか悪人だけ、ということだろうか。

　ヨハンは素す早ばやくＺＯＯの面々を見まわしてから、話をつづける。

「今日、私がトマト殿どのにお会いするため、この場にまかり越こした理由は二つあります。一つは、我々秩序の番人二代目総長襲しゅう名めい式しきに、立会人としてご参席いただく旨むね、これはすでにトマト殿に受じゆ諾だくしていただきました」

「立会人……？」

　マリアローズは眉まゆをひそめてトマトクンを見たが、答えたのはヨハンだった。

「トマト殿は我が団の創設に深く関かかわっておられる。トマト殿以外に、立会人としてふさわしい資格を有している者はいない」

「ちょ──創設、って……え？」

　びっくりしているのはマリアローズだけではなかった。カタリとユリカも、サフィニアも、おのおの目を瞠みはったり口をぽかんと開けたりして、トマトクンを注視している。平然としているのは、ピンパーネルと髭ひげくらいだ。だが、肝かん心じんのトマトクンはといえば、片方の眉をつり上げて不思議そうに首を傾かしげている。

「む？　どうかしたか？」

「どうかしたか、じゃないでしょ。だって、秩序の番人ができたのって──」

「えーと、せやな、わしのサーモンピンク色の脳みそにしまわれとるデータが確かやったら、もうかれこれ……」

「や、その魚脳内蔵データはすっごくアテになりそうもないから」

「我が団の創設はオーメネイジ八七六年だ」

　ヨハンが淡たん々たんと述べた。

　マリアローズの顔が久しぶりにハニワと化したことはいうまでもない。

　で、砕くだけ散った。

「──にじゅういちねんもたってるし！」

「わしはかろうじて生まれとるな……」と、指折り数えてカタリ。「……わたしも生まれてるわ……」ユリカも呆ぼう然ぜんとしている。「……うそ……でも……だけど、年なんて……わたしはべつに、そういうのじゃなくて……」サフィニアも大いに動どう揺ようしているようだ。一方、ピンパーネルはまったく興味がなさそうで、髭はさっきから椅い子すの上で座ざ禅ぜんを組んで瞑めい目もくしている。まさか、居い眠ねむりをしているわけではないと思うが。

　その様子を一いち瞥べつして、ヨハンが眼鏡の位置を直しながらトマトクンに尋たずねた。

「話しておられなかったのですか」

「昔のことだしな。わざわざ話すようなことでもあるまい？　誰だれにも訊きかれなかったしな。だいたい、面めん倒どうくさいだろう」

「てゆうか、きみってばいったい何歳なんだよ！　年！　年ねん齢れい！　生年月日！」

「年だと？　うーむ……」

　トマトクンは腕うで組ぐみをして大おお仰ぎように顔全体をゆがめた。皆みな、固かた唾ずをのんでその長考の結果が出るときを待ったが、この男に期待する方がどうかしていた。

「わからん。考えたこともない。普ふ段だん、あまり意識することもないしな」

「ないわけないだろ！　みんなで誕生日を祝おうとかさ！　ハッピバースデー・ディーア・トマトクーン、みたいな！　あるでしょ！　ありまくりじゃないか！」

「おお。誕生日は一応、四巡じゅん月げつ十一番日ってことにしてあるぞ」

「一応って！　誕生日は一応とかそういうのが許される日じゃないし！」

「だが、覚えとらんのだからしょうがなかろう？　とはいえ、誕生日がないというのも不便みたいだしな。俺はどうでもいいんだが」

　それを聞いたサフィニアが、顔面蒼そう白はくにしてズゴゴガゴーンと落ちこんでいる。きっと、以前、誕生日のプレゼントでも贈おくったことがあるのだろう。その誕生日が「一応」だと知れば、ショックを受けるのも無理はない。

　しかも、追い打ちをかけるようなことを、髭がボソリと言った。

「四巡月十一番日か……ＺＯＯを結成した日だな。どうせならばその日をトマトの誕生日にしてしまえと、リルコが勝手に決め――ンムグッ」

「……リィィィィルゥゥゥゥコォォってぇぇ……だぁぁれぇぇでぇぇすぅかぁぁぁー……！」

　サフィニアが猛もう然ぜんと髭に飛びかかって、その首を絞しめ上げた。ぶっとい首をした髭が苦しそうにしているくらいだから、よほどの馬ば鹿か力ぢからで絞められているのだろう。サフィニアの華きや奢しやな体のどこにそんな力が。

　しかし、リルコという名前からすると女性っぽいし、トマトクンにも過去にそんな相手がいたなんて――とか考えているうちに、さすがにヨハンが痺しびれを切らしたようだ。

「話をつづけさせていただきたいのですが」

「うむ」トマトクンがうなずいてサフィニアに顔を向けた。「サフィニア、髭を放してやってくれ。坊ぼう主ずが絞こう殺さつされちまったら、生き返らせるやつがいない」

「……はい……」

　サフィニアは髭を解放したものの、まだ恨うらみがましい目でトマトクンを睨にらんでいる。その態度をどう受けとっているのかは知らない。あるいは、そのリルコとかいう人物について、思いを巡めぐらせているのかもしれない。口をへの字に曲げて目を伏ふせ、顎あごを撫なでているトマトクンは、どこか物もの憂うげだった。

「まったく……」ヨハンが話を再開する前に、ひっそりとそう呟つぶやいたのをマリアローズは聞き逃のがさなかった。「――ともかく、トマト殿どのに立会人として二代目総長襲しゆう名めい式しきに参席していただくことは了りよう解かいいただけました。ここまでが第一の理由です。そして第二の理由は、トマト殿だけでなく、できうることならＺＯＯの方々にも、我々秩序の番人に与くみしていただきたい。むろん、対等の立場で、形としてはクラン同士の同盟ということになります」

「というわけだ」

　トマトクンが腕組みをといて、右手の人差し指で大だい円えん卓たくをコツコツと叩たたいた。

　それから、マリアローズをふくめたＺＯＯの面々に視線を一巡りさせる。

「当然、同盟を結んでただ仲よくしようってことじゃあない。そうだな、ヨハン」

「はい。むしろ、友好などどうでもいい。率そつ直ちょくに申し上げれば、ＳｍＣ□□いえ、ＳＩＸを討うつために、お力ちから添ぞえをいただきたい」

　ヨハンは伊だ達て眼鏡めがねの奥の目をすぼめてトマトクンを見み据すえた。今日、その顔に感情らしきものが浮うかんだのは、これが初めてだった。それが怒いかりなのか、苦しみか、悲しみか、それとも何らかの正の感情か、微び妙みようというか複雑すぎて、マリアローズにはわからなかったが。

「我々はデニス・サンライズの仇かたきを討つ。必ずや討つ。ですが、我々には力が足りない。口くち惜おしいが、まさにデニス・サンライズを失った我々だけでは、ＳＩＸを討ち果たすことができない。事ここに至れば、包み隠かくさず、私の目もく論ろ見みをはっきり申し上げた方がよろしいでしょうね。私は、トマト殿の手でＳＩＸの命をとっていただきたいと考えています。我々はそのための盾たてとなり囮おとりとなる所存です」

「ＳＩＸを俺が、か」

「左様です」

「ＳＩＸはお前たちが殺やりたいんじゃないのか」

「そのように思っている者は多いでしょう。ですが、重要なことは、誰がＳＩＸを討つかではない。ＳＩＸを討ち果たすことが叶かなうのなら、それが誰であっても構いません。いついかなるときも、目的を達するためにより可能性の高い方法を選ぶのが私のやり方です」

「二代目は〝死神〟羅ラ叉サが継つぐんだろう」

「彼は我々の義を象しよう徴ちようする剣けんです。剣の振ふり下ろす先は私が見ます」

「傀かい儡らいってやつか」

「デニス・サンライズは一人で背負っていた荷ですが、私たちには重すぎる。一人では背負えぬからといって、捨てるわけにもゆかない。無理をして分けてでも、どうにか担かついで進むしかない。それだけのことです」

「デニスなら――」トマトクンは少しためらうように視線を揺ゆらした。「五分と五分の条件でまともにやっていれば、ＳＩＸを殺れたはずだ」

「ですが、デニス・サンライズはもういない」

「そうだな。俺はやつの死に様さえ見てやれなかった。道の行く末くらいは見届けてやると、あのとき約束したのにな……」

　トマトクンは深々と息を吐はいて、握にぎり拳こぶしを作り、それを大円卓に押しつけた。その姿を見ていて、そうか、と、マリアローズは思った。太たい陽よう鬼きデニス・サンライズの死を知って以来、ずっと沈しずみがちだったのは、そういうことなのだ。

　トマトクンは昔の仲間の戦いを見守ると約束していて、それを果たせなかった。

　思い返せば、一号区からアサイラムへ向かう際、後ろ髪がみを引かれている様子だったのは、その約束があったせいだろう。

　マリアローズにしてみれば、複雑だった。アサイラムに行きたがったのは、マリアローズだ。その結果、モリーやベアトリーチェたちを助けることができた。ＺＯＯが駆かけつけなければ、ベアトリーチェはモリーの死体を抱かかえたまま、炎ほのおに巻かれて焼け死んでいたかもしれない。しかし、同時に、トマトクンはデニスの最さい期ごを自分の目で確かめる機会を永遠に失ったのだ。

　どちらが重い、軽い、大事だ、という問題ではない。

　仕方なかったとか、あの選せん択たくは正しかったとか、そうやって片付けてしまえることでもない。

　だから、トマトクンは決断するだろう。

　今となっては、そうする以外に決着をつける手段がないはずだから。

　マリアローズの予想はあたった。

「□□ＳＩＸ。まさか、やつとこんな形でやりあう羽目になるとはな」

　トマトクンは開いた掌てのひらで大円卓を軽く叩き、椅い子すから立ち上がった。

　それから、なぜかマリアローズと目を見あわせた。

　いや、なぜか、ではない。マリアローズがトマトクンをじっと見つめていたせいだ。

「あ……ええと……」

　ん？という顔で首を傾かたむけたトマトクンの視線にまともにさらされ、何だか少し気まずくなって、何か喋しゃべらないといけないような気がして、マリアローズは「そ、そうだ」と、もっともらしくうなずいてみせた。

「ほら、アサイラム！　アサイラムのこともあるしね。あれってやっぱ、ＳｍＣ――てゆうか、ＳＩＸなわけでしょ。おおもとの原因は。まったくさ、よりにもよってアサイラム襲おそうなんて、ふざけんなって感じだよ。うわ。思い出したら、マジで超ちようムカついてきた。頭にきすぎて、今日寝ねれないかも。うん。あれはダメだね。殺しとかないと。絶対殺さないとダメだよ。殺さないとわかんないって、あーゆー手合いは。いや殺してもわかんないだろうけど、とりあえず死んだらいなくなるしさ。アサイラムに手を出したやつはぶっ潰つぶされるんだってこと、ここでしっかり見せつけとかないと、またおかしな考えを起こすアンポンタンが出てこないともかぎらないし──ま、殺すとか言っても、実際、僕が殺せるわけじゃないんだけど……」

「しょのための手て伝ちゆだいくらいできるわ」

　ユリカの背後にメラメラと燃え立つ炎が浮うき上がっている。幻げん覚かくだろうか。

「せやな。わしらはべつだん正義の味方っちゅうガラやあらへんけど、ＳｍＣの奴やつ原ばらがしでかすことときたら、ホンマ、シャレになってへんわ。ここらできっちりとっちめとくっちゅうのもアリやろ」

　カタリも乗り気のようだ。サフィニアも──

「……ふふ……ふふふ……わたしも何か……普ふ段だんはあまり試ためす機会のない、大きな魔ま術じゆつでも使いたい気分です

し……ふふふ……」

　どうも、違ちがう動機が介かい入にゅうしているように思えるのは、マリアローズの気のせいか。

　ともあれ、ピンパーネルは当然、トマトクンに盲もう従じゅうするだろうし、何と今回は、日ひ頃ごろとことんつきあいの悪い髭ひげまでも賛意を示した。

「此こ度たびは拙せつ僧そうも無関係を決めこむわけにもゆくまいな。ＳｍＣだのＳＩＸだのといった屑くずどものことなど、正直、どうでもよいが、あのアサイラムという場、それにモリー・リップス殿どのの生き様には感じ入るところが多い。また、これでも拙僧とてＺＯＯの一員であるからな」

「ふむ」トマトクンはニヤリと笑った。「揃そろいも揃って、わざわざ厄やっ介かい事に首を突つっこもうとするとは、馬ば鹿かなやつらだ」

「そんなん、毎度のことやんか」

「しょうね」

「……そうですね……」

「そうだよ」

「はイ」

「拙僧は違うぞ」

　約一名、水を差す者がいないでもなかったが、これでＺＯＯの意見はまとまった。

　トマトクンがゆっくり歩いていって、ヨハンのそばまで行った。

　伊だ達て眼鏡めがねを外して、他ほか二名の番人とともに立ち上がったヨハンが、先に右手を差しだした。

　トマトクンはその手を握にぎった。

「まあ、よろしく頼たのむ」

「こちらこそ、身勝手な願いを受けいれていただいて、感謝します」

「水くさい、と言いたいところだが、昔とはもう状じよう況きようが違うな」

「はい。ですが──」

　そのあとにヨハンが小声で何か囁ささやいた。マリアローズの位置では聞きとれなかったが、唇くちびるの形から、たぶん「あなたの手は相変わらず大きい」と言ったのだと思う。そう言ったとき、ヨハンの目め許もとと口許がかすかに、本当に少しだけゆるんでいた。

　ほんのちょっとの懐なつかしさと、慕したわしさ。

　それらは、だが、すぐにヨハンの顔から消えてしまい、わからなくなった。

Omenage 897 9th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

〝銀の砦(シルバリイホールド)〟

chapter.II

虚実の式

　その日、銀の砦シルバリイホールド主塔一階大講堂につめかけたのは、警備任務にあたっている計六隊をのぞく百六十名足らずの番人だけではなかった。

　エルデェＥイニオン機Ｍ術士匠合Ｕ本部から大老師ＧＥＭレオナルド・〝パパ〟・デスパレード。

　錬金士Ａ組合Ｇエルデン支部から支部長代行ラ・ムー・ジュード。

　大Ｐ陸医Ｃ術士Ｍ会Ａエルデン支局から第二部長ホアン・グェン・エステバリオス。

　第５五区Ｃ商業Ａ振興Ｓ会Ｔ会頭ロベルト・ボッティエッロ。

　明るく楽しいクァラナドを作る会会長リンダ・Ｈ□エログローニャ。

　純血のピュア・ブラッド司祭・プリーストリード・デザイナーのＢ□ブルース・Ｅ＋Ｎ＋Ｄ□黒クロ羽ハ。

　モリー・リップス・アサイラム代表モリー・リップス。

　そして、秩序モラルの番人・キーパーズ二代目総長襲しゆう名めい立会人として、クラン・ＺＯＯ園長マスタートマトクン。

　以下、各要人の随ずい員いん＋おまけのマリアローズ、ユリカ、サフィニア、カタリ、ピンパーネル、トワニング。

　マリアローズたちは別として、そうそうたる顔ぶれだ。

　どういう交こう渉しようや取引の果てに彼らが一堂に会することになったのか、マリアローズには知るよしもないが、その事実が意味するところは明白だった。

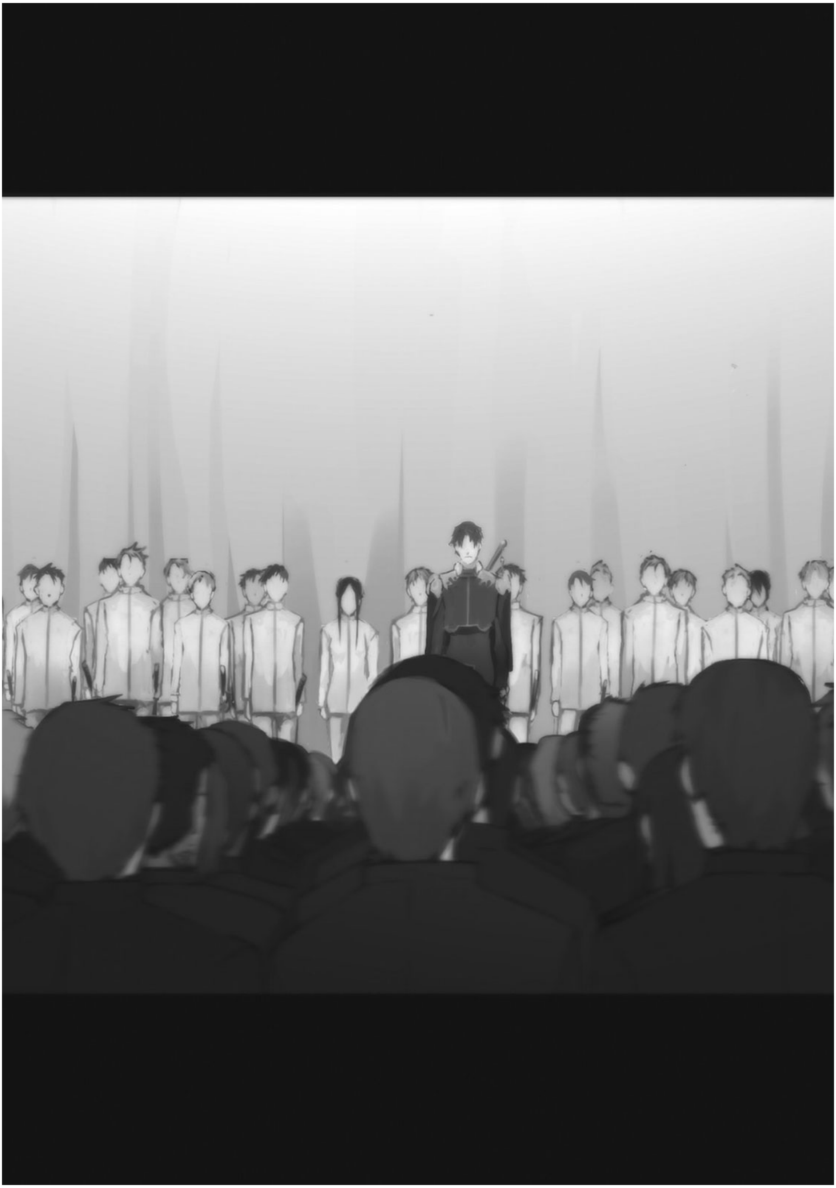
　彼らは秩序の番人を、少なくとも軽視はしていない。初代総長デニス・サンライズ亡なきあとも一定の重要性を認めて、ある程度の関係を保とうとしている。そして、秩序の番人と敵対しているＳｍＣに対しては、その反対の態度を表明したに等しい。

　もっとも、二代目総長襲名式は、外向けには一いつ切さい告知されなかった。列席者一同も人目を忍しのんで銀の砦に入った。場所も秩序の番人の本ほん拠きよ地ちなので、羅ラ叉サ副長が本日をもって総長に就任することを知る一いつ般ぱん人は皆かい無むだったろう。

　そのため、各組織が旗き幟しを鮮せん明めいにした事実も、一応、外部にはもれていないようだ。そうでなければ、列席者はもっと少なかったに違いない。何しろ、今、自分たちが秩序の番人に与くみすると公言してしまうと、ＳｍＣに何をされるかわかったものではない。ＳｍＣに禁忌タブーはないのだ。やつらはどんな無茶でもする。しかねないと思われている。

　ひょっとしたら、一号区会戦を通して作り上げたそのイメージが、ＳｍＣにとって最大の武器なのかもしれないが。

　ともかく、こうして集まった者たちを前に、演えん壇だんの上で秩序の番人二代目総長襲名式が行われた。



襲名式はこれが初めてとのことだが、式しき次し第だいはデニス・サンライズの故国ファー・セルジナ王国の典礼をモデルにして、銀の軍団ザ・シルバリイにふさわしく質しつ実じつ剛ごう健けんにまとめられたものらしい。

銀色と純白の布で飾かざりつけされた演壇にしても、二代目総

長、副長、各隊隊長、隊長補が着用している白一色の礼服にしても、過か剰じような華はなやかさはなかった。静せい謐ひつと潔いさぎよさ、清せい廉れんさ、ある種の激しさを伴ともなった簡素な美しさがそこにはあった。

　ただ、演壇の中央に異物がいた。

　その異物は、紺こん色いろに橙だいだい色いろの炎模様フアイヤーパターンがまぶしい──わけではないが、やたらと悪目立ちする全身鎧よろいを身にまとい、くそでかい琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つご大層な大剣を背負っている。

　トマトクンは鞘さやごとの日輪を持って、それなりに厳げん粛しゆくな面おも持もちでいるものの、あの格好では何もかも台無しだ。

　大講堂の最後部から式を見守っていたマリアローズは、ひっそりとため息をついた。

「……トマトクンも白い服、貸してもらえばよかったのに……」

「しょうね……何だか、これじゃトマトクンが主役みたいだわ……」

　ＺＯＯの中では常識人の部類に入るユリカがすぐさま同意してくれた。

　だが、サフィニアは思い人の晴れの舞ぶ台たいに見み惚とれているし、ピンパーネルは見ているだけだし、髭ひげは目をつぶっている。まさか、また居い眠ねむりか。そこまではまあいいとしても、カタリに至ってはやけに満足そうで嬉うれしそうだった。

「ええやないか。わしらの園長マスターが一番目立って、おいしいトコみいんな持ったったれば、ＺＯＯの株も上がるっちゅうもんや。お偉えらいさんもようけきとるし、印象的にはもうバッチシやで。これでちっとは名前も売れるやろ」

「べつにいいよ。名前なんか売れなくても。うち、オレストロの件で一部の侵入者クラッカーに評判悪くて、恨うらみも買っちゃってるんだよ？　きみのせいだけどさ。変に有名になったりしたら、また話が蒸むし返されて、余計おかしなことになっちゃうかもしれないし……」

「マリアローズ、お前じぶん、若くしてずいぶん心配性しようやなあ。しまいには毛え抜ぬけるで？　気にせんでもあないなこと、みんなすぐに忘れてまうがな。昔っから人の噂うわさも十二日っちゅうてな」

「それをいうなら七十五日でしょ」

「たいして変われへんやんか。たった六十三日違ちがいや。あっという間やで。ともかくやな、これでＺＯＯの知名度が爆ばく発はつ的にアップ・アップして、カワイコちゃんがわんさと──」

「今どきカワイコちゃんって。てゆうか、まさかそれが狙ねらいだっていうんじゃないだろうね」

「当たり前やん。漢おとことして他ほかにどないな狙いがあるっちゅうねん」

「……僕がＺＯＯに入ったとき、トマトクンが看板持って勧かん誘ゆうしてたけど」

「あー。あれもトーゼンわしの発案や。『爆ばく裂れつ！　ＺＯＯ！　カワイコちゃんメンバー激増大計画！』。何やわたわたしとるうちに、トマトクンが勧誘担当っちゅうことになって、看板もトマトクンが半分くらいデタラメ書きよったさかい、何がなんやらわけわからんくなってもうたけどな」

「……………………」

　今明かされる衝しよう撃げきの事実というやつだった。しかも、こんな場所で、こんなときに。それがきっかけでＺＯＯに加盟できたことを、カタリに感謝すべきかどうか。してたまるか。

　まったく、世の中、何がどう作用してどう転んでどうなるかわからない。

　実際、ちょっと前まで、秩序の番人と手を組んでＳｍＣと戦うなんて想像もしなかったし。

　マリアローズたちのひそひそ話をよそに、式はとどこおりなく進行していた。

　今、演壇上では、ヨハン・サンライズと琺瑠フオール、それに新

しく副長職についたマシュー・シュナイデルを中央に置いて、各隊隊長、隊長補たちがずらりと列をなして並んでいる。彼らはそれぞれ小刀で自分の人差し指を薄うすく切り、一人の番人が運ぶ盆ぼんの上で、誓せい文もんに自らの血で署名し終えたところだ。この場に居合わせていない隊長、隊長補については、前もって署名している旨むね、ヨハン・サンライズが詩でも吟ぎんじるような口調と堅かた苦くるしい言こと葉ば遣づかいで説明し、誓文は盆ごと琺瑠フオール副長が受けとった。

　トマトクンはその前で日輪を手に、直立不動。

　番人たちの列を割って、演壇に上ってゆく後ろ姿が、新総長の〝死神〟羅ラ叉サだ。

　そのころになると、さすがにマリアローズたちも完全に口をつぐまざるをえなかった。

　大講堂は水を打ったように静まりかえっている。

　静せい寂じやくのなか、登壇した羅ラ叉サがトマトクンの前で立ち止まり、その場にひざまずいた。

　ヨハンは「立会人」と言ったが、秩序の番人の団則によると、その役目は前総長が健在である場合とそうでない場合とで大きく異なるらしい。要するに、前総長がすでに亡いときは、そのかわりをする。トマトクンはその話をあとで知らされて渋しぶい顔をしたが、「あなたはひとたび受けると仰おつしやった。二言はないでしょうね」とヨハンに言われ、「まあ……やると言ったのは俺だからな。やむをえんか」

　つまり、まんまと嵌はめられたわけだが、トマトクンはがんばっていた。

「──剣を受sacs'eed-け継げto-s'ord.」

　そう言うなり、日輪をスラリと抜いて鞘をヨハンに渡わたし、正眼に構えた格好はかなりさまになっている。それも当然といえば当然だ。何せ、破天一流を極きわめていたデニス・サンライズのような正統派ではないかもしれないが、トマトクンも一流の剣士だ。隙すきなく構えただけで日輪の切っ先からほとばしる剣気のすさまじさは、凡ぼん人じんにはとうてい真ま似ねできるものではない。

　そして、トマトクンは日輪を振ふり下ろした。

　ぴたりと止めた。

　羅ラ叉サの右みぎ肩かたの数サンチ上で。

「魂をsacrif'ai捧げs-anima'n-義にd'ai-for'm死せor'arity.」

「承知」

　羅ラ叉サが短く答えると、トマトクンは日輪を引いた。

　それから数秒して立ち上がった羅ラ叉サは、トマトクンから抜き身の日輪を受けとり、それで人差し指を切って、琺瑠フオールが持つ盆の上の誓文に自らの血で署名した。

　ヨハンが羅ラ叉サに鞘を渡し、日輪がその中に収まると、簡素な式次第は終わりに近づきつつあった。

「ここに──」ヨハンが声を張り上げた。「団則に則のつとって副長互ご選せんにより選任された秩序の番人二代目総長羅ラ叉サの信を問う。異議のある者は名乗り出よ」

「異議なし」「異議な──し」「異議なし」「異議なーしッ」「異議なし」「異議なし」「異議な──し」「異議なしッ」「異議なし」「異議な──し」「異議なし」「異議なし」

　大講堂内の団員たちが次々と応じ、ヨハンが腰こしに差していた月明を抜いて天に突つき上げた。

「団総意により二代目総長羅ラ叉サを信認するものとする。魂をsacrif'ai捧げs-anima'n-義にd'ai-for'm死せor'arity.！」

「応！」「応ーッ！」「応！」「応ッ！」「応！」「応！」「応ーッ！」「応！」「応ッ！」

「応ーッ！」「応！」「応ーッ！」「応！」「応ッ！」「応ーッ！」「応！」「応──ッ！」

　番人は皆みな、ヨハンにならっておのおのの剣けんを振り上げ、腹の底から声を出して唱和した。

　ややあって、それを制止したのは新総長の羅ラ叉サだった。

「捧げェェェェェ刀とおォォッ！」

　羅ラ叉サの一声で、番人たちは一いつ斉せいに剣を垂直に捧げて持つ敬礼の形をとった。

　故デニス・サンライズがよくそうしていたように、羅ラ叉サは鞘さや先を床ゆかにつけた日輪の柄つか頭がしらに両手をかけ、肩かたの幅はばに足を開いている。姿勢や持っている剣が同じだからか、もはやその姿は総長然としているように見えた。

　まあ、あくまで部外者のマリアローズから見て、何となくという話だが。

「只ただ今いま、秩序の番人二代目総長を襲しゆう名めいした羅ラ叉サである」

　しかし、肌はだがピリピリするほど引き締しまった周りの雰ふん囲い気きも影えい響きようしているのかもしれない。羅ラ叉サが喋しやべりはじめると、その印象はどんどん強まっていった。

「本日今このときより貴様らの命は俺があずかる。俺が死ねと命ずればただちに死ね。戦場で己おのが死を定めた俺を止めることは許さん。ただし俺も貴様らも一身を捨てるのはただ義のためだけだ。肝きもに銘めいじよ。我らの生命は義のためにある。その義とは悪を討うつことである。悪とはおのれを利するために他を害するものである。悪なれば即すなわちこれを斬きる。我らの義とはまさしくこれである。俺が今日より貴様らとともに歩むは、己おのが父とも仰いだ前総長にお教えいただいた義を貫つらぬく道だ。しかし、俺は知っている。貴様らも知っているだろう。我らの道の行く手に立ちふさがるいまわしい害虫がいる」

　羅ラ叉サはそこで息を止め、ゆっくりと吐はきだした。

「□□ＳＩＸ。奴やつを斬らねば、我らは前に進めん。前総長の魂を安んじることはできん。俺はあえて貴様らに問うことはせん。問うまでもないからだ。我らはいかような手段を講じても斬らねばならん。我らは進まねばならん。この義を貫く道の涯はてに何があるか、俺は知らん。だが、往ゆかねばならん。貴様らはおそらく後こう悔かいするだろう。俺を信認したことを。しかし、俺はためらわ

ん。俺は迷わず貴様らを義の刃やいばとして費ついやすだろう。そして、俺もまた刃の一本としていつか果てるだろう。最後に一度だけ貴様らに尋たずねる。俺とともに死ぬか」

　空くう隙げきは一いつ瞬しゅんだった。

「応！」「応ーッ！」「応！」「応ッ！」「応！」「応！」
「応ーッ！」「応！」「応ッ！」

「応ーッ！」「応！」「応ーッ！」「応！」「応ッ！」
「応ーッ！」「応！」「応──ッ！」

　わき起こる声、声、声。

　それは羅ラ叉サの問いかけに対する返事というよりも、鬨ときの声だった。

　各団体のお歴々が、それぞれ厳げん粛しゅくな面おも持もちでその様子を見守っている。

　この襲名式は、羅ラ叉サが二代目総長に就任することを示すためだけの儀ぎ式しきではないのだ。

　前総長が討たれて以後、なりをひそめていたかに見えた銀の軍団ザ・シルバリイが、自分たちの義を貫くため、復ふく讐しゅうのために、ＳｍＣとの決戦にこれから再び臨むのだという宣言。そして、各団体はこの襲名式に要人を送りこむことによって、その決断を支持するという意思表示をしてみせた。

　いってみれば、ＳｍＣ包ほう囲い網もうができあがりつつあるのだ。

　羅ラ叉サは鬨の声を切り裂さく大声で叫さけんだ。

「我らはＳｍＣを、ＳＩＸを討つ！」

「応──────────ッ！」

「己おのが剣を研とぎ、虎こ視し眈たん々たんとその刻ときを待て！」

「応────────────ッ！」

「今日より三日後だ！　刻至って命を惜おしむことは許さん！」

「応――――――――――ッ！」

「義のために、俺とともに死ね……！」

「応――――――――――――ッ！」

　大講堂をすっぽりとつつみこんだ異様な熱ねつ狂きようの火はしばらくの間、消えそうもなかった。

　マリアローズはその興奮にのまれそうになりながら、あらためてこれから足を突っこもうとしている戦いの意味を考えていた。

Omenage 897 9th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区・東部風料亭

〝泉里（センリ）〟

chapter.12

嘘と本当の境界線

「──二代目は死神、か」

　明るく楽しいクァラナドを作る会会長リンダ・Ｈ󠄀エログローニャの使いからその情報を聞かされた裸ら形ぎようのＳＩＸは、鳳ほう凰おうの間に築かれた人間の玉座の上で、その蛇へびみたいな顔に怖おぞ気けが震ふるう邪じや悪あくな笑えみを浮うかべた。

　鳳凰の間は、泉セン里リにある客間の中では最上格だ。いや、だった、といった方が正しいか。

　広い泉セン里リの敷しき地ちの奥まった場所に、他の建物から完全に独立した五ご重じゆうの塔とうの姿を見せている鳳凰の間の最上階は、今やＳＩＸのプライベートルーム兼けんプレイルーム兼宴えん会かい場と化していた。

　外装にも《ＳｍＣ》や《６》の紋もん章しよう入りの布や鉄骨でめちゃくちゃに手が入れられているが、瀟しよう洒しやな東部風だった内装もほとんどＳＩＸ好みに変えられている。

　壁かべは光こう沢たくのある黒い布で覆おおわれ、色いろ鮮あざやかに巨きよ大だいな鳳凰が描えがかれていた天てん井じよう板は取っ払ぱらわれて、黒い網あみ目め状の金属板に替かえられていた。回転式の照明が天井裏に設置され、網目を通して光が射さしこんでくるため、奇き妙みような陰いん影えいがあって、どこか淫いん靡びだ。

　室内では、噎むせるような甘い香かおりのなか、そこらじゅうに全裸の男女が転がり、時に何か霊れい的てきなものに導かれでもしたかのように交合している。

　酒。麻薬ドラッグ。あらゆる種類の性せい行こう為い。殺人。

　すべてを是ぜとして、この鳳凰の間最上階だけでなく、一階から四階までで自由に、あるいは強制して行わせ、渾こん然ぜん一体となってとぐろを巻いたそれらの上にＳＩＸは君臨していた。

「死神に賭かけてたのは、俺と……誰だれだったか。そうだ、アジアン、お前だね？」

「ああ」アジアンは鳳凰の間の露台バルコニーで手すりに腰こしか

け、九巡じゅん月げつ下げ旬じゅんの冷たく湿しめった夜風に身をさらしていた。そうでもしていないと、胸が悪くなってたまらないからだ。「──たしか、ジェイはデニス・サンライズの養子、ヨハン・サンライズ副長。骨こつ龍りゅうのお二方は琺瑠フオール副長だったかな。ボルフェンゲーテは……そう、まるで興味がないし、どんな番人がいるのかさえ知らないと言っていたネ」

　ジェイは人間の玉座の左ひだり脇わきに、死霊術士ネクロマンサーボルフェンゲーテは右脇にそれぞれ突つっ立っている。ボルフェンゲーテに関しては、たまに人間の玉座の中で出る死者を死霊術ネクロマンシーで操あやつったりして暇ひま潰つぶしをしているようだが、ジェイは何か用事がないかぎり、その場を動かずに何時間でも黙だまっている。

　それでいて、アジアンが口を開くたびに、「そのうち殺してやる」という目つきでねめつけてくるのはお定まりだ。その視線を軽く受け流してジェイを苛いらつかせてやるのは、アジアンにとって貴重な退たい屈くつしのぎになっていた。

　だが、鳳凰の間最上階の隅すみで黒いソファに腰かけ、どす赤い酒を舐なめている媚メイ妻ルーと呉ウー戒ジエは、この環かん境きようと折りあいをつけることができずにいるらしい。

　というより、環境以前の問題で、彼らにとってＳＩＸの近くは居い心ごこ地ちが悪いようだ。

　アサイラム襲しゅう撃げきで、約三分の二に及およぶ人数の同どう胞ほうを失ったのだから、それもやむなし、だろうが。

「──で」その媚メイ妻ルーが空になったグラスを呉ウー戒ジエに持たせて足を組みなおし、ＳＩＸに魔ま性しようの目を向けた。「賭けに負けたあたしたちは何をすればいいの。負けた者が勝った者の言うことを何でも聞くって話だったと思うけど、今度は銀の砦でも襲おそわせる気？」

「Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕ……」ＳＩＸは含ふくみ笑いをもらしながら、媚メイ妻ルーの目を正面から見つめ返した。「媚メイ妻ルー。どうしたんだ。口調に棘とげがあるよ？　いくら何でも、大事な友だちにそんな危ないことをさせるわけがないだろう？　俺がそんなにひどいヤツだと思われてるんだとしたら、心外だねえ」

「あんたをひどいヤツだと思ってない人間が、この街にどれだけいるのかしらね」

「俺は常に愛をもって他人と接してるつもりなんだが。胸むねーいつ杯ぱいの愛を、さ。まあ、良薬口に苦しって言葉があるとおり、俺の愛はちょっぴり痛いかもしれないがねえ。それだって最初だけだ。すぐに俺じゃなきゃダメになるよ。俺なしじゃ生きていけなくなる」

「たしかに痛いわ、あんたの愛とやらは」

「媚メイ妻ルー」

　ＳＩＸは膝ひざの上に肘ひじをのせて顔を前に突きだした。

　それから、鬼おに火びのごときあやしい光を宿した両眼を見開き、ゆっくりと首を回して、禍まが々まがしく薄うすい唇くちびるをジュルジュル音を立てて舌先で舐めた。

「勘かん違ちがいしちゃいけないよ。アサイラムでお前たちが痛手をこうむったのは、俺のせいじゃまったくない。だいたい、いつまでもあんなことで拗すねてたって、何がどうなるわけじゃないんだ。いい加減、機き嫌げんを直したらどうだ」

「……あんなことですって？」

　媚メイ妻ルーはソファから立ち上がって目をすぼめた。もちろん、呉ウー戒ジエもそれにならった。

　どうやら、媚メイ妻ルーは本気のようだ。ずっと我が慢まんしていたが、ついに耐たえきれなくなったというところか。

「ＳＩＸ、あんたに頼たのまれた仕事のせいで、同胞が三十人以上死んだ。骨こつ龍りゅうは壊かい滅めつ寸前なのよ。それが、あんなことですって？」

「だから、そいつは俺のせいじゃないだろう」

「番人以外の援えん軍ぐんがくるなんて、あたしは聞いてなかった。それも、サックドールを攻せめてきたときにいたやつらだ。あたしと呉ウー戒ジエは、あの中にいた足の速いやつにずっと追いかけまわされて、逃にげ延びられたのがむしろ奇き跡せきだわ」

「それは俺だって予想してなかったことだ。またヤツが絡からんでくるなんてねえ。会わないでいれば忘れてられるが、いったん顔をあわせると、とことん祟たたるヤツだよ。そんなわけで、頭の中にないことを事前に教えてやれるほど、俺は器用じゃない。それくらいのことはお前だって理解できるだろう。少し冷静になれ、媚メイ妻ルー」

「冷静になったところで、あんたたちに対する気持ちが変わるとは思えない」

「感情論だけで物事を判断すると、致ち命めい的な間違いを犯おかしてしまうよ、媚メイ妻ルー」

「あたしの名を気安く呼ぶのもやめてもらいたいわ」

「媚メイ妻ルー。媚メイ妻ルーゥゥ。媚メイ妻ルーＵＵＵＵ」

　ＳＩＸは嫌いやがらせをするようにわざとらしく媚メイ妻ルーの名を呼んだ。いや、実際、それは低級な嫌がらせに他ほかならなかった。低級なぶん、やられた方は余計に腹立たしい。媚メイ妻ルーも、愚おろかなことにそれで堪かん忍にん袋ぶくろの緒おを切らしてしまった。

　魔性の目の妖よう術じゆつを使ったのだ。

　だが、凍こおりついたのはＳＩＸではなく、媚メイ妻ルー自身だった。

「……な、何で……」

「媚メイ妻ルー──」ＳＩＸは性しよう懲こりもなく彼女の名を呼んで、悲しげな表情まで作り、人間の玉座の上で肩かたをすくめてみせた。「馬ば鹿かだな、媚メイ妻ルー。劣れつ化か型の邪じや眼がん魔術なんて俺にはききやしないよ。東の原野の魔導王天正具象が生みだしたあの術には欠点があってねえ。邪眼を作るのとは別に、何重にも秘証魔術や限定魔術なんかをかけあわせて効果を強化する過程で、徐じよ々じよに条件が厳しくなっていく。だいたいの場合は、影えい響きようを及およぼせる対象がどんどん狭せばまっていくわけだ。お前程度の妖術師じゃあ、術がきくのはせいぜい人間だけだろう？」

「──あ、あんたは……」媚メイ妻ルーはあとずさってソファにつま

ずきかけ、呉ウー戒ジエに支えられた。全身を震ふるわせて呉ウー戒ジエにしがみついている媚メイ妻ルーは、おのれが無力で哀あわれな女にすぎないと悟さとったようだ。「に、人間じゃ……」

「ジェイ」

　そう呼ばれただけで主人が何を命じたのか察してしまうジェイは、まったく笑えるくらい忠実な猟りよう犬けんだった。

　ジェイはわずかに腰こしを落とし、両りよう腕うでを振ふって投とう擲てき用の釘ネイルを投げた。右腕を上から振り下ろして三本。左腕を下から振り上げて三本。さらにそれぞれの腕を逆方向に振って三本ずつ。計十二本の釘ネイルのうち、五本が媚メイ妻ルーに、六本が呉ウー戒ジエに命中して、一本だけ外れた。ところが、媚メイ妻ルーにあたった釘ネイルが彼女の体に突つき刺さることはなかった。弾はじかれた。しかも、弾いたのは黒地に紅の髑どく髏ろ柄がらの旗チー袍パオではなかった。媚メイ妻ルーの肌はだだ。いったい、どれだけ硬かたい皮ひ膚ふなのか。

　その謎なぞはすぐに解けた。

　両手に釘ネイルを持ったジェイが飛びだして、体に六本の釘ネイルを打ちこまれたままで大十手を抜ぬいた呉ウー戒ジエがそれを迎むかえ撃うつ。呉ウー戒ジエという男は、口がきけないようで、こんなときも声を出さない。ジェイもまた、無む駄だ口ぐちどころか無駄の一いつ切さいを省いた面おも白しろ味みのない戦い方をする男なので、二人の一対一は、迫はく力りよくのわりに奇き妙みように静かだった。

　それに比べて、とにかくやかましいのがＳＩＸだ。

「媚メイ妻ルーＵＵＵ……悪い子だァッ！　邪眼で禁きん呪じゆまで施ほどこしやがって！　おそらく、禁きん刃じんってやつだろうねえ。龍りゆう州しゆうのハヤ九ク三ザ上がりにしては、意外とヘボくなくて吃驚びつくりだが──ところで、ここで女の邪眼使い百人に訊ききましたァァ！　貴女は邪眼の効力を維い持じするために、どのやうな掟おきてを自分に課しているのでありませうかＡＡＡＡ……！」

　迫せまりくるＳＩＸに、媚メイ妻ルーはナイフを抜いて身構えたが、そんなもので威い嚇かくになるはずもない。

だいたい、所しよ詮せん、媚メイ妻ルーは妖術師だ。肉にく弾だん戦は不得手だろうし、そのためにいつもそばにいる呉ウー戒ジエも、ジェイの釘ネイルに追い立てられて、媚メイ妻ルーに近づけない。

呉ウー戒ジエが少しでも気を抜けば━━あるいは、媚メイ妻ルーを助けるために無理をすれば、必ず隙すきが生まれるだろうし、ジェイはそれを見み逃のがしてくれるような敵ではなかった。

当然、呉ウー戒ジエが致ち命めい傷しようでも負えば、媚メイ妻ルーを救う者は誰だれもいなくなる。呉ウー戒ジエとしては、焦あせりながらも慎しん重ちようになるしかない。かといって、目の前の敵に集中することもできない。ジェイもそれを見み越こして、呉ウー戒ジエが進みたがっている方向を的確にふさぎ、逆方向へと誘ゆう導どうし、二本の釘ネイルで脅おどかして、じりじりと追いつめるように立ち回っている。

そして、呉ウー戒ジエが邪じや魔まをしなければ、媚メイ妻ルーをつかまえることなど、ＳＩＸには朝飯前だった。

媚メイ妻ルーもナイフを振りまわして必死に抵てい抗こうしたのだが、いかんせん相手が悪い。ＳＩＸ独特の身のこなしと間合いのとり方、それに化物じみた瞬しゆん間かん的な速度は、アジアンでも目を瞠みはるくらいなのだ。ＳＩＸはやすやすとナイフをはたき落とし、媚メイ妻ルーをつかまえて抱だきよせ、その体を持ち上げた。

「Ｈｉ󠄀Ｈｙａｈａｈａｈａｈａ……！　高い高ァ━━━━い！」

「くっ……！」

「媚メイ妻ルーＵＵＵＵＵＵＵＵ！　ノー・ヒントで俺が答えてやろう！　Ｑキユウ・邪眼女は邪眼の効力を維持するためにどんな掟を自分に課すのかァァ！　Ａエエー・一いつ生しよう不ふ犯ぼんヌッ！　きっと百人中百人がそう答えるよ！　つまり、お前は汚けがれのな━━━い、立派な膜まくの清らかな処女おとめだ！　つづいてクエスチョン・トゥゥゥッ……！　その掟を破ったらどうなるのでせう……！」

「や、やめ━」

「やめてと言われてやめるファニー・ガイがいったいどこにいる！　ええ？　どこにいるんだ、媚メイ妻ルーＵＵＵ！　もし地上の野や郎ろうどもがみいんなやめてと言われてやめていたら、この世に強姦レイプなんて言葉は存在しないよ！　ついでに、男をじらすために『や・め・て』と言ってみる女の小こ技わざも通用しなくなってしまう！　Ｋｙａｈａ！　そんな世界はつまらないと思わないか！　まったくお前は馬鹿な女だよ、お仕置きが必要なやうだねえ、愛ゆえに……！」

　ＳＩＸはどういう技を用いたのか、一瞬で媚メイ妻ルーの衣類を引きちぎった。こうなると、呉ウー戒ジエも慎重にとか何とか考えていられなくなったのだろう。ＳＩＸに襲おそいかかるべくジェイを振りきろうとしたが、やはり無理があった。ありすぎた。ジェイはむしろ、このタイミングを狙ねらっていたかのように、背を向けた呉ウー戒ジエの右みぎ膝ひざに右手の釘ネイルを打ちこんだ。間かん髪はつを入れず、左膝に左手の釘ネイルをねじこまれ、後ろから股こ間かんを思いきり蹴けり上げられれば、いかに頑がん丈じような呉ウー戒ジエといえど、これはもうたまらなかった。

「まだ殺すなよ、ジェイ。彼には媚メイ妻ルーが俺のマグナムをぶちこまれてヒイヒイ言う姿をしっかりたっぷり拝ませてやらないとねえ！　それが豪ごう華か最上級冥めい土どの土産みやげってものだよ！　Ｇｙａｈａｈａｈａｈａｈａ……！」

「はい」

　ジェイはＳＩＸの言いつけを守り、さらに新しく太い釘ネイルを四本出して、呉ウー戒ジエの両りよう肩かたと両りよう肘ひじに素す早ばやく深々と埋うめこんだ。よほどの激痛だったのだろう。その瞬間、呉ウー戒ジエが口を大きく開けて、音にならないおぞましい咆ほう哮こうを上げた。

　肉体的な痛みのせいだけではなかったかもしれないが。

　ＳＩＸに陵りよう辱じよくされている間、媚メイ妻ルーがもらした声は、ただただ苦痛からくる悲鳴だけだった。時機を計り間ま違ちがえた愚おろか者がどうなろうと、アジアンには関係のない話だが、さすがに最後のすさまじい絶ぜつ叫きようには気分が悪くなった。ＳＩＸが仕上げとばかりに、媚メイ妻ルーを犯おかしながら、その邪眼を抉えぐりだしたのだ。

「□□哎アイ呀ヤア呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀呀ァァァッ……！」

「Ｆｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ……たまらねえ！　媚メイ妻ルー。お前は馬ば鹿かだがいい女だよ！　思わず熱血ヒーローみたいに、燃えて燃えまくってそのキュートな邪眼を抉っちまった。けどねえ。どうせもうお前は邪眼を使えない。俺は奪うばうのが大大大大好きだが、お前の大切なものはしっかりいただいた。その上、目玉まで奪うのは、ちょっとかわいそうだ。お前は今やただの女の子なんだからね？　だから、返してやるよ──ほおら……」

「ギイイイイイイイイイイイイイ」

　あまりに痛みがものすごいせいだろう。ＳＩＸの血にまみれた指で眼がん窩かに邪眼を埋め戻もどされた媚メイ妻ルーは、歯を食いしばって、強こわ張ばらせた全身を小刻みに震ふるわせている。精神力の強さが逆に災わざわいしたか。気絶してしまえればいっそ楽だろうに。

「よし、ジェイ、そいつを殺やれ。ちゃんと蘇そ生せいできるようにな？」

「はい」

　そして、おそらく媚メイ妻ルーと同じくらい苦しみに苦しみ抜ぬいただろう呉ウー戒ジエは、心臓の位置に何本もの釘ネイルを打ちこまれて、間もなく絶命した。そうなると、今度は死霊術士ネクロマンサーボルフェンゲーテの出番だった。

　ボルフェンゲーテが黒い杖つえを両手で握にぎって少しだけ持ち上げると、その白はく髪はつがざわりと揺ゆれた。ただ、死霊術ネクロマンシーによって動く死体リビング・デッドと化しても、肉体に受けた損傷が治ち癒ゆするわけではない。立ち上がることもできない呉ウー戒ジエが移動するためには、芋いも虫むしみたいに這はうくらいしか方法がない。

　すでに苦痛を感じることもない呉ウー戒ジエは、身をよじって少しずつ、少しずつ、媚メイ妻ルーに近づいていった。

　ＳＩＸに抱かかえ上げられた媚メイ妻ルーも、もはや抵抗する気力を完全に失ったらしい。

　それにしても、ＳＩＸが媚メイ妻ルーを呉ウー戒ジエの背中にのせてやったときの丁てい重ちようさ、厳おごそかさは、あの独自の愛とやらのなせる業わざか。あるいは、単なる悪ふざけか。

　いずれにしても反へ吐どが出る。

「媚メイ妻ルー、さよならだ」

　いかにも名残なごり惜おしい、別れがつらいといった表情を、血で股間を染めた裸ら形ぎようのまま作ってみせるのも。

「だが、最後にいい思い出ができた。俺はこの記き憶おくとお前への愛を胸に刻んで生きていくよ。お前にも是ぜ非ひそうして欲しい。だから、俺はお前たちを殺しはしない。俺を覚えておくんだ。俺の愛をその胸にしっかりと刻みこんで──いつか誰だれよりも幸せになるんだよ？」

　そんな台詞せりふを吐はいてみせるのも。

　ＳＩＸ。

　やつの鬼き畜ちく、外げ道どうは先刻承知の上だし、自ら選せん択たくした道ではあるが、あらためてこの魔ま人じんの下にいる自分の下げ劣れつさに肺はい腑ふを抉られるような思いがする。

　むろん、動く死体リビング・デツドとなった呉ウー戒ジエにも、ぐったりしたまま彼に運ばれてゆく媚メイ妻ルーにも、同情はしない。彼らに降りかかった不幸は、すべて彼ら自身の判断の甘さと力不足のせいだ。アジアンもそうだったように、あやまちを犯せば、相応の報むくいを受ける。媚メイ妻ルーと呉ウー戒ジエは、当然の結果としてあんな目に遭あった。それだけのことにすぎない。

　そうかといって、こんな光景を見せつけられて、ＳＩＸに対する好感度が上がるはずもない。

　しかし、いちいち眉まゆ尻じりをつり上げて不快感をあらわに

し、善人を気どる柄がらでもなかった。

　アジアンは月のない夜空に吹ふく風が泣く声を聞いた。

「──ひと雨きそうだ。いや、風が強い……嵐あらしになるかもしれないネ」

「嵐は嫌きらいか、アジアン」

　ＳＩＸは人間の玉座に戻り、女どもに下半身を舐なめさせ、清めさせている。ジェイもすでに定位置だ。ボルフェンゲーテは媚メイ婁ルーをのせた呉ウー戒ジエのあとをゆっくり追っていった。どうやら、死霊術ネクロマンシーは術者の目が届かない場所にまで影えい響きようを及およぼせるほど、便利な魔術ではないらしい。

「べつに好きでも嫌いでもないヨ」

「俺は好きだよ。昔、一度、雷かみなりに打たれたことがあってねえ。あれはよかった。あんな絶頂感エクスタシーはそうそう味わえない。何度イッたか覚えてないくらいだ。今でもあれを夢で見て夢精することがあるよ。まあ、さすがの俺も死にかけたがねえ。Ｋｕ□Ｋｕｋｕｋｕ……黒くろ焦こげさ。治るまでが本当にたいへんだった。一から体を作りなおさなきゃならなかったよ。おかげでえるものもあったが……」

「そう」

「三日後、か」

　ＳＩＸが急に話題を転じて持ちだしたのは、さっき明るく楽しいクァラナドを作る会会長リンダ・Ｈ□エログローニャの使者がもたらした情報のことだ。

「エログローニャとは前からつかず離はなれずでやっているが、あれは油断のならない女め狐ぎつねだよ。番人が接せつ触しよくしてきたのをいいことに、いわば二重スパイを装よそおう役を買って出たのも偽ぎ装そうで、実は番人につくつもりなのかもしれない。ただ単に、勝敗が見えるまで、両方にいい顔をしておこうって腹かもしれないしねえ」

「脅おどして吐かせますか」

「阿あ呆ほう」ＳＩＸは口を出したジェイに嘲さげすむような一いち瞥べつを与あたえた。「あの女はあれでも魔術士だよ。たいした魔力もない、若作りだけに精を出しているチンケな魔術士だが、そのあたりをわきまえているから滅めつ多たに第十区の空中楼ろう閣かくから出てこない。魔術が使えなけりゃあ第十区に入ることすらできねえってのに、どうやってヤツを脅すんだ」

「昼飯時ランチタイムに魔術士がいます」

　ＳＩＸの前では、求められなければ喋しゃべりもしないジェイが、珍めずらしく意見を具申した理由はそれか。本当にこの男ときたら、アジアンに嫌いやがらせをすることしか考えていないようだ。

　だが、ジェイの嫉しつ妬とと疑心にまみれた提案は、ＳＩＸがあっさり却きやつ下かした。

「ダメだな。クァラナドを敵に回すのはうまくない。ＥＭＵだのＡＧだのに喧けん嘩かをふっかけるのはクソ野郎モウフオどもにウケがいいし、連中は所しよ詮せん、商売人だから、頃ころ合あいを見計らって手打ちに持ちこむこともできるだろう。だが、エログローニャに手を出してクァラナドにそっぽを向かれでもしたら、士気に関かかわるよ。あの女はべつにクァラナドを支配してるわけじゃないが、立ち位置の定め方は絶ぜつ妙みようだし、実に慎しん重ちように抜け目なく立ち回ってる。それが、わざわざ番人の二代目襲しゆう名めい式しきに自分で出向いたって事実を、どうとらえるべきか。だがこれは、最低でも他ほかにもう一つ情報源を確保して、つきあわせてみないことには判断できないねえ……」

　こう見えて、ＳＩＸはいつもごちゃごちゃと思案を巡めぐらせながら物事を運んでいる。

　ただ、ＳｍＣの中でまともに物を考えられるのは、ジェイやボルフェンゲーテ、その他、数十人の幹部をふくめても、ＳＩＸだけだ。いや、もちろん、これだけの人数がいれば、頭の悪い者ばかりでなく、知ち恵えの回る者だっているだろうが、彼らが意思決定に関わることはまずありえない。

　ＳＩＸを殺やれば、ＳｍＣは確実についえる。

　ここでおのれのすべてを賭かけて、ＳＩＸとジェイをまとめて殺

してしまえば、何もかも終わらせることができる。

　特に、仲間にとって最大の脅きよう威いがジェイだと判明して以来、何度その誘ゆう惑わくに駆かられたことか。

　しかし、まだだ。アジアンは自重しなければならない。ＳＩＸ。この魔人がいったい何ものなのか、それがわからないうちは、軽けい挙きよ妄もう動どうを慎つつしまなければならない。何しろ、この化物は、普ふ通つうの手段で息の根を止めることができるのかさえ、判然としないのだ。

「──三日後、番人どもが総員でここを襲しゆう撃げきする、か……」

　ＳＩＸが人間の玉座に深々と腰こしを埋うずめて露台バルコニーの方へと顔を向けた。

「アジアン。昼飯時ランチタイムを全員、泉セン里リに入れろ。今すぐにだ」

「今すぐ？　ずいぶん急ぐんだネ」

　多少鈍にぶいふりをしてみせているアジアンの擬ぎ態たいを、ＳＩＸはどう受けとっているのか。まさか、まんまと騙だまされているとも思えないが、親切に手の内をさらすこともあるまい。

「念のためだよ。意図的か、そうじゃないかにかかわらず、情報が偽いつわりだって可能性は捨てきれない。だが、まったくの事実無根では意味がないからねえ。どっちにしても、用心しておくに越こしたことはないだろう？」

「デニス・サンライズを失った番人に、どれほどのことができるのか疑問ではあるけどネ」

「違ちがいないが、ヤツが絡からんでることも忘れちゃいけない。今は……トマトクンだったか。根っからの肉にく食しよく獣じゆうが野菜男を名乗るなんて悪い冗じよう談だんだが、襲名式の立会人をやるくらいだ。今回はヤツも出てくるだろう。それに、銀ぎん虱じらみどもは銀虱どもで必死だよ。何としてでも太陽髭ひげの仇かたきをとりたいって気持ちもあるはずだ。手負いの獣けものはクソウゼエものさ。いっそ銀の砦シルバリイホールドを攻せめて残らず血祭りにあげてやってもいいが、連中にはもう少し物笑いの種に

なっていてもらわないとねえ」

　アジアンはそれには答えず、露台バルコニーの手すりから離れて鳳ほう凰おうの間に入り、人間の玉座の前を横切った。ジェイの殺意に満ちたものすごい視線を感じっぱなしだが、いちいち構っていられない。さっき呉ウー戒ジエが這はっていった血の跡あとをなぞり、鳳凰の間最上階から下りる階段にアジアンが足をかけたとき、ＳＩＸが例の奇き妙みような抑よく揚ようの低い声で言った。

「問題は、誰だれが嘘うそつきか──だ、アジアン」

「正直者は馬ば鹿かを見る」

　アジアンは足を止め、肩かたをすくめて微笑ほほえんでみせた。

「ついこの間、キミがいった言葉だヨ、ＳＩＸ」

Omenage 897 9th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区
〝銀の砦(シルバリィホールド)〟

chapter.13

前夜

「──問題は、エログローニャがどの程度情報をもらすかより、ＳＩＸがそれをどう判断するか、だ」

　襲名式終しゆう了りよう後ご、銀の砦主しゆ塔とう四階の円えん卓たく会議室に集まったのは、秩序の番人総長と副長三名に加えて、各隊隊長、隊長補若じやつ干かん名、それからＺＯＯの七人だった。式が終わり、来らい賓ひんを送りだしてからすぐ駆けつけた番人たちは、まだ白い礼服姿だ。会議は着がえる間も惜おしんで慌あわただしく行われた。

　もっとも、内容自体は前もって打ちあわせていたとおりだった。今回の会議はその確かく認にんという意味あいが強い。

　九巡じゆん月げつ二十六番日四時、アサイラム警備担当の二隊をのぞいた総員で銀の砦を出発。すみやかに泉セン里リに到とう達たつして配置につき、五時をもって攻こう撃げき開始。細かい手順や留意点について琺瑠フオールの説明があり、時折ヨハンが補足した。いくつかの質疑応答も、長い議論に発展することはなかった。そうして会議が終わりに近づいたころ、明るく楽しいクァラナドを作る会会長リンダ・Ｈ□エログローニャの件を持ちだした隊長がいて、それにヨハンが答えたのだった。

「当然、ＳｍＣに一いつ切さい情報をもらさないとの確約はとりつけている。我々に分がありそうだとエログローニャが見ているのなら、約束は守られるかもしれない。しかし、現状だとその可能性はかぎりなく低いだろうな」

「彼女から提供された情報については──」ヨハンの話を受けて琺瑠フオールが付け足した。「まだ裏をとらないといけないけど、いくつか確度が高いと判明しているものもあるわ。クァラナドにあるＳＩＸの隠かくれ家は、あのベラドリアをふくめて、すでに三箇か所しよを特定。泉セン里リの内情に関しては確かめようがないから、信しん憑ぴよう性のあるなしも判断がつかないわね」

「いずれにせよ、エログローニャが知りうる情報をすべてそのままＳＩＸに渡わたしたとしても、支障はない。予定どおり、作戦はその前提で進める。ＳＩＸに伝わる我々の攻撃時期は三日後。実際に我々が動くのは明日早朝だ。ＳＩＸは情報を入手した段階で警けい戒かいするだろうが、そのくらいがちょうどいいと私は考える。あ

の男の性質を考こう慮りよすれば、何の心構えもなく奇き襲しゅうを受けた場合、さっさと身一つで逃とう走そうするかもしれない」

「ＳＩＸならやりかねんな」トマトクンがうなずいてみせた。「狡こう猾かつだが、自分の目もく論ろ見みどおりにいかないと、何もかも放ほうりだしてケツをまくる。責任感とか自尊心とか、そんなものは屁へとも思ってないやつだ」

「万が一、取り逃のがしても、隠れ家は押さえつつあります」ヨハンはトマトクンに向かうと言葉遣づかいが丁てい寧ねいになる。「また、もしＳＩＸが逃にげれば、利にさといエログローニャは完全にこちら側につくでしょう」

「そうはならんだろうさ」

「と、仰いますと」

「ＳＩＸは泉セン里リでしとめる。俺がこの手で、な」

　トマトクンが気負った様子もなくそう言った瞬しゅん間かん、明らかに円卓会議室内の空気が変わった。

　ＺＯＯを同盟者として受けいれることには、最初、番人の中で反発もあったようだが、今はむしろ一定の敬意すら払はらわれている。その最大の原因は、トマトクンが前総長の盟友だった事実をヨハンが公表したことだろうが、たぶんそれだけではない。

　何というか、むやみやたらと大物然とした雰ふん囲い気きが、トマトクンにはあるのだ。間の抜ぬけたことを言いさえしなければ、だが。

　特に、トマトクンが何かを「やる」と宣言したときは、無条件で信じてしまいそうになる。トマトクンが言うなら、きっとできる。できるに違いないと思わせる。

　どうしてなのか、マリアローズにはわからない。ただ、マリアローズだけがそう感じるわけではないらしい。現に、トマトクンの発言は、ＺＯＯの皆みなだけではなく、番人たちをも勇気づけて、活気づけたようだ。これまでほとんど言葉を発しなかった羅ラ叉サまでもが、少し身を乗りだして、相変わらずの剣けん呑のんな表情でトマトクンを睨にらみつけた。

「たしかに本命は貴公だが、我らとて囮おとりをやるだけで飽あき足らなければ容よう赦しやなくＳＩＸに迫せまる。機があれば、斬きらせてもらう」

「そうなったらそうなったで、べつに構わんが」

「その程度の覚かく悟ごなら、まだ遅おそくない。俺に譲ゆずれ」

「譲れと言われて譲るのも癪しやくだな。口で言うより、やれるものならやってみたらどうだ」

「上等だ」

　羅ラ叉サは物ぶつ騒そうな笑えみを口くち許もとに貼はりつかせて立ち上がった。

　皆、一いつ斉せいにそれにならう。

「俺は前総長のように貴様らの命を背負うことなどできん」羅ラ叉サは円卓会議室内の全員を見まわした。口調は峻しゆん厳げんだが、その眼まな差ざしにはこれから生死をともにする者たちへの率そつ直ちよくな信しん頼らいと共感がにじんでいた。「──しかし、貴様らに命を捨てよと命ずるとき、俺もまた捨てるだろう。だから、この一戦で安心して死ね。死ぬのは貴様らだけではない。敵も味方も大勢死ぬ。ただ、貴様らの死は尊くも何ともないが、義のための死だ。我らにとって決して恥はじにはならん前のめりの死だ。ＳＩＸを討うち、前総長の無念を晴らし、義を貫つらぬくための死と知れ。──以上、散会。死にゆく者同士、思い残すことがないよう、せめて酒でも酌くみ交かわすがいい」

　酒しゆ宴えんといっても大おお仰ぎようなものではなかった。先ほどまで襲名式が行われていた主塔一階大講堂に酒と料理が並べられ、各自、自由に飲み食いしながら雑談に興じる。明日があるので、酒量はひかえめだが、堅かた苦くるしさはない。むろん、個人差はあるけれども、適度に腹が一いつ杯ぱいになり、酒を飲める者はほろ酔よい加減で、全体的にはいい感じに緊きん張ちようがほぐれている様子だ。

　そこかしこで、床ゆかに座って酒をあおりながら話しこむ者たちがいた。

　くだらない宴えん会かい芸を披ひ露ろうして笑いをとるお調子者もいくらかいた。

　大講堂の隅すみで一人、酒を飲んでいた者が、仲間に手を引かれて談笑の輪に加わっていった。

　ＺＯＯの面々も、最初は七人でかたまっていたが、そのうちカタリが回遊魚のように移動しはじめた。サフィニアとユリカは、アサイラム救きゆう援えんで一いつ緒しよだった十二番遊ゆう撃げき隊隊長シャルロット・リンデに拉ら致ちられた。僧そう侶りよらしく酒を飲まない髭ひげは、モリモリ食べながら、たまたま近くにいた不運な者に、食材や料理に関するあやしげな蘊うん蓄ちくを喋しやべりまくっていた。

　だが、何といっても、トマトクンの人気はすごかった。

　どうやら、デニス・サンライズとの旧交だけでなく、サックドール襲しゆう撃げき戦での活かつ躍やくや、これはカタリが吹ふい聴ちようしたのだろうが、〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟リン霊レイを倒たおしたことなど、さまざまな武勇譚たんが番人たちの間に広まっていたらしい。基本的に男の子体質というか、血湧わき肉躍おどる系の物語が好きそうな番人たちは、こぞってそうした話を聞きたがった。

　もっとも、相手はトマトクンだ。

　追い払ったりはしないものの、いかにも面めん倒どうくさそうで、求められても、自分からすすんで語るわけがない。だいたい情報通を自じ認にんする番人の話に「ああ」とか「まあな」とか相あい槌づちを打つだけで、たぶんちゃんと聞いてもいないから、否定すべき箇所も「そうだったかもな」。おかげで話は次し第だいにエスカレートしてゆき、挙句の果てには「トマトクン＝数々のとんでもない偉い業ぎようをなしとげた伝説の剣けん士し」の図式ができあがって、何だかもう異様な盛り上がりを見せていた。

　そのあおりを食って、いろいろ話しかけられているピンパーネルは、共通語が苦手なので、受け答えにかなり苦労しているようだ。

　で、マリアローズはといえば、必要量のカロリーを摂せつ取しゅし終えると、やることもなくなった。

　髭みたいに何か理由があるわけではないが、酒も飲まないし。用もないのに知らない人と口をきくのも、得意じゃない。特に、こっちから話しかけるなんて、絶対に無理だ。

　番人たちの方も、ちらちらとマリアローズをうかがう者はたくさんいるのだが、誰だれも声をかけてこない。一度、ローストビーフを取り皿によそおうとしたとき、若い番人が「あ、俺──いや、私が……」と顔を真っ赤にして申し入れてきたが、丁てい重ちょうにお断りした。まったく、何を勘かん違ちがいしてるんだか。

「冗じよう談だんじゃないっての」

　頭にくる。

　何だか自分でも不思議なくらい、さっきから胸がざわついて、苛いらついている。

　仲間が近くにいるのに、そばにはいない、この状じよう況きようのせいだろうか。

　馬ば鹿かみたいだと思うが、考えてしまうのだ。

　このまま僕は誰からも見捨てられて、本当に一人きりになってしまうんじゃないか。僕なんて、いらないんじゃないか。だから誰も構ってくれないんじゃないのか。やっぱり、一人で生きていった方がいいんじゃないか。

　わかっている。心がねじくれているせいで、ちょっと何かあっただけで、こんなふうにひがんでしまう。仲間たちは別に僕を無視してるわけじゃない。わかってる。

　でも、いったんこんがらかってしまった糸は、なかなかほどけない。

「マリアローズ」

　と、知らず知らずのうちに大講堂の出入口へ足を向けていたマリアローズを、呼び止める者がいた。

「──ベアトリーチェ」

「どうしたんだ、一人で」

「え？　あ、うん」

　マリアローズが曖あい昧まいに答えを濁にごすと、平服姿のベアトリーチェは怪け訝げんそうに眉まゆをひそめた。

「……仲間と何かあったのか？」

「や？　何もないよ。まったく。ぜんぜん。さっぱり」

「強調しすぎると、かえってあやしいぞ」

「そう？　けど、ホントに何もないんだよね」

「そうか。それならいいけど……」

　ベアトリーチェは何か言いたげに壁かべ際ぎわの方へ目をやった。そっちに人でもいるのかと思ったら、誰もいない。マリアローズはベアトリーチェの意図を察して、壁際まで歩いて床に腰こしを下ろし、壁かべに背中をあずけた。ベアトリーチェも、マリアローズの隣となりで同じような体勢になった。

「──いよいよ……明日だな」

「うん」

　マリアローズがうなずいてから、ベアトリーチェが次の言葉を発するまで、ずいぶん時間がかかったような気がする。

「実は……」

「うん」

「このところ、ずっと考えていることがあるんだ」

「ああ──」

　ひょっとしたら、アサイラムで弁当を食べたとき、ベアトリーチェの様子が変だったのは、そのせいか。

「で、何を？」

「この先、わたしはどうするべきかって」

「難しいこと考えるんだね」

「そうだな。難しい。それで、迷ってる。いや、迷ってた」

「決めたの？」

「半分──かな。今は、迷っていても仕方ないと思ってる。わたしは明日、死ぬかもしれないし。だから、今やるべきことと、そのあとやるべきこと、やりたいことは別に考えないといけないって、わかったんだ」

「じゃ、明日が終わったら？」

「まだ決めたわけじゃないから、たぶん、だけど──」

　ベアトリーチェの横顔は決然としていたが、なぜか今まで見た中で一番女の子らしく見えて、はっとするほどきれいだった。

「わたしには、世界中で誰よりも守りたい人がいる。どうせなら、この命はその人のために使いたい」

「モリーのこと？」

「うん」

「モリーなら、わたしのことなんか気にしないで自分のために生きなさいとか、言いそう」

「だろうな。でも、母様のために生きることが、わたしのために生きることにもなる」

「孝行娘むすめだね」

「そんなのじゃない。本当に、わたし自身のためなんだ。わたしを生んでくれた母さんは、女手一つで一いつ生しよう懸けん命めいわたしを育てて、守ろうとしてくれた。だけど、わたしは小さくて、無力で、何もしてあげられなくて。今もまだ未熟だけど、剣けんは少しだけ使えるようになった。あの頃ころよりはマシだと思いた

い。そのちっぽけな力で、母様を守ってあげたい──こんな気持ちはきっと、昔、母さんが殺されたときに何もできなかった、あの悔くやしさをどうにか帳消しにしたいだけなんだ」

「そんなふうに考えることはないと思うけど」

「でも、事実だ」

「だとしても、実際、きみはモリーを守りたいと思ってる。そのためにモリーのそばにいたい。それで十分じゃないか」

「そうかな」

「そうだよ」

　マリアローズは少しだけ自分と似ている少女に微笑ほほえんでみせた。似ているけれども、ずいぶん違ちがう。ベアトリーチェはまっすぐで、真ま面じ目めで、自分に厳しい。だが、マリアローズもベアトーチェも、自分なりに少しでも前に進もうとしていて、その途と中ちゆうなのだ。

「何でかな。お前が言うなら、そう思ってもいいんじゃないかって気がしてきた」ベアトリーチェはちょっと照れくさそうな笑え顔がおを作り、そのはにかんだ笑みをごまかそうとするかのように立ち上がった。「──一つ、頼たのんでいいか」

「何？」

「もし、明日、わたしが死んだら」

　ベアトリーチェが持ちだした仮定は、だが、きわめて可能性の低い未来とはいえない。ベアトリーチェにつづいて立ち上がったマリアローズも、すでにそのことを自然に受けいれていた。

「母様に伝えて欲しいことがあるんだ」

「僕だって死ぬかもしれないよ」

「そうか。そうだったな。でも……お前に頼みたい。変、かな。よく考えたら、会ったばかりなのにな」

　ベアトリーチェは自分自身の心をはかりかねて、戸と惑まどって

いるようだ。もちろん、マリアローズだって、ベアトリーチェの気持ちなんてわからない。ベアトリーチェはマリアローズの過去を知らないはずだから、似た者同士とか、そんな感覚はないだろうし。

　ただ、マリアローズとしても、そこまで頼まれて断るだけの理由はなかった。

「モリーに、何を伝えればいいの」

「うん」

　ベアトリーチェは胸のまんなかに両手をあてて、目をつぶった。

「ありがとう、と──ごめんなさい、を」

　マリアローズは胸のうちで呟つぶやいてみた。

　ありがとう。ごめんなさい。

　何だかとても、ベアトリーチェらしい。

「わかった。覚えとく」

「お前にも、ありがとう、だな」

「いいよ。でも、僕が死んじゃったら、そのときはごめん」

「お前には」ベアトリーチェはマリアローズに手を伸のばしかけて、やめた。「──お前には、誰だれかいないのか。その……わたしにとっての母様と、同じような……」

「そうだね」マリアローズは考えこむふりをした。本当は考えるまでもなかった。「思いつかないな。モリーは大切な友だちだけど、そういうのとはまた違うだろうし」

「い、今、いないなら」ベアトリーチェの声にはやけに力がこもっていた。「これから作ればいいんだ。いくらでもできるさ。大だい丈じよう夫ぶだ、きっと。お前はまだ若いんだし、結構、悪いやつじゃない……というか、意外といいやつだとわたしは思う。だから、希望を捨てるな」

　希望とは、これまたなんて大おお袈げ裟さな表現だろう。

　だが、ベアトリーチェの真剣な表情を見ていると、笑う気にはなれなかった。

「捨てないでしまっておくよ、その希望ってやつ」

「そうだ。大事なことだぞ。じゃ、じゃあ、わたしはもう行くから！　何だかこれ以上お前と話してると、変なことを言いそうで……いや、変って、べつにおかしな意味じゃなくて……と、とにかく、明日だ！　明日！　お前も適当なところで切り上げて、しっかり休めよ！」

「うん。きみもね」

「当たり前だ！　わたしの心配なんかしなくていい！　どこでも、いくらでも寝ねられるのが、わたしの取り柄えなんだからな！」

　ベアトリーチェはそう言い捨てて、早歩きでマリアローズから離はなれていった。一度、立ち止まって振ふり向いたが、マリアローズと目があうと、すぐに顔をそむけた。二度目があったかどうかはわからなかった。見届けずに、マリアローズが大講堂を出たからだ。

「……ごめんね」

　でも、どうしてそんな呟きが口をついて出たのか。

　自分のこととはいえ、理由は考えたくなかった。

　考えない方がいいこともある。考えたって仕方ない、どうにもならないことも。

　マリアローズは深々とため息をついて、今、出てきた大講堂を振り返った。ここを出てどうするというあてはないが、戻もどる気にもなれない。ＺＯＯの面々にも、第三支し塔とうの部屋が割りあてられているので、そこに行って寝てしまおうか。

　そう思って主塔を出るべく足を進めると、階段の前で、長い黒くろ髪かみの東部美女と容姿に特とく徴ちようのない冷血男の組みあわせに出くわした。

「──それは君に……」ヨハン・サンライズは、物を見るような目でマリアローズを一いち瞥べつし、琺瑠フオールに向きなおった。

「その件については君に任せる。他ほかにも何か問題があれば呼んでくれ。私は執しつ務む室にいる。それと、酒を飲むなとは言わないが、ほどほどにな」

「酔ようほど飲んでないわ。わたしが強いのは知っているでしょう」

「自覚はなくとも、判断力は鈍にぶっているものだ。少なくとも、抑よく制せいがききづらくなる」

「あなたほど自分を抑おさえて生きてないから」

「よく言う」

　ヨハンは意味深な言葉を残して階段を上ってゆき、琺瑠フオールだけが残った。琺瑠フオールは目の保養になるくらいの美人だからぜんぜん構わないとしても、ヨハンと会ってしまったのは凶きよう兆ちようとさえ思える。ただでさえ気分がやや下降線をたどっているところに、またケチがついた感じだ。

　マリアローズは髪の毛を引っかき回して一つ息をつき、琺瑠フオールに軽く礼をして立ち去ろうとした。

「もうお休み？　マリアローズさん、だったわよね」

「──あ、はい……」

　けれども、声をかけられて無視するほど礼れい儀ぎ知らずではないし、ぶっ倒たおれそうなくらい眠ねむいわけでもない。ついでに、琺瑠フオールのようにきれいな人と話をするのは、少なくともカタリみたいな半魚人と人語魚語をまじえて会話するよりはずっと胸が躍おどる体験だ。

「ええと、べつに今すぐ寝ようとか思ってるわけじゃないんです、けど……って──琺瑠フオール……さん？」

　というか、比ひ喩ゆ的な表現の域を超こえて、心臓がドキドキしているような。

　だって、琺瑠フオールは不必要なくらいマリアローズに接近してくる。この距きよ離りは、いくら何でもちょっと近すぎるんじゃないかと思う。

　琺瑠フオールはマリアローズより十サンチ以上背が高く、手足も長くて、すらりとしているのだけれども、あまり体のラインが目立たない平服の上からでもわかるくらい胸が大きい。

　その胸が、もう少しでマリアローズの顎あごのあたりに触ふれそうだ。

「……あ、あの……？」

「かわいい！」

　で、埋うもれた。マリアローズは琺瑠フオールに抱だきしめられた。窒ちつ息そくしそうだ。

「初めて見たときから思ってたの！　かわいい！　やーん、もう、たまんない、何これ？　どうしてそんなにかわいいの？　どういう遺伝子？　欲しいわ！　あなたみたいな妹！　ねえ、わたしの妹にならない？　いいでしょう？　ちょっとでいいから」

「い、いや、ちょ、ちょっととか、そういう……」

「わかって！　うちって男の人ばっかりで、少しだけいる女の子もみんな男の子みたいなんだもの。かわいいなんて言ったら何されるか！　褒ほめてるのに！　銀の砦屯所では猫ねこも飼えない決まりだし、もう、かわいさが足りないの！　圧あつ倒とう的に！　補給したいの！　飢うえてるの！」

「だ、で、か……」

「かわいい」琺瑠フオールは急にマリアローズを離し、それで少し呼吸が楽になったと思ったら、今度はほっぺたにキスされて、なぜか匂においを嗅かがれた。「かわいい。ん――っ、久しぶりにかわいい！　かわいい匂いがする！　どうしよう、放したくないわ。持って帰っていい？　いいわよね？　少しくらい、いいでしょう？」

「や、す、少しって、何を……」

「あ、勘かん違ちがいしないでね？　わたしはただかわいい女の子が好きなだけ。たっぷりかわいがりたいだけなの。ゆっくりお風ふ呂ろにでも入って、体を洗ってあげて、髪をとかして、乾かわかしてあげて、だっこして眠るだけ。そういう趣しゆ味みはないし、変

なことはしないから。昔は妹が──」

「妹……？」



「釈シヤク拿ナ……ちょっとおてんばだったけど、昔はすっごくかわいかったのに……」

　今、気づいた。ヨハンにはああ言っていたが、琺瑠フオールはやっぱり酔っているのだ。頬ほおが赤らんだりはしていないが、おそらく顔に出ないタイプなのだろう。そういえば、酒臭くさい。

「羅ラ叉サのせいで、あの剣けん術じゆつ馬ば鹿かの影えい響きようで！　たまたま才能があったものだからメキメキ強くなるし！　それなのに羅ラ叉サったらぜんぜん釈シヤク拿ナのことなんか眼中になくて！　剣、剣、剣！　猿さるでももう少しいろんなこと考えて生きてるわよ！　釈シヤク拿ナ……かわいかったのに……あんなにかわいい子を振るなんて……そのせいで、女め夜や叉しやなんて呼ばれるようになって……挙句……」

　ひょっとして、泣く？　泣くのか？

　だが、琺瑠フオールは目をつぶり唇くちびるを嚙かんでこらえ、もう一度、マリアローズをぎゅっと抱きしめた。

「ごめんなさい。変なことを言ってしまって。あまりにもあなたがかわいいものだから。動どう揺ようしちゃったの。たぶん。でも、本当にかわいい。だけど、磨みがけばもっとかわいくなるわ。あら、髪がちょっと傷いたんでいるわね。ちゃんとトリートメントはしている？　週に何回くらい？　何を使っているの？」

「ええと、と、トリートメントとかは、べつに……普ふ通つうにシャンプーとリンスで……」

「ダメよ。その様子だと、お肌はだのケアもおろそかにしていない？　今はまだ若いからいいけれど、日ひ頃ごろからしっかりやっていないと、いきなりガクンとくるわよ」

「そ、そうなんですか……」

「そうよ。いいわ。わたしがいろいろ教えてあげる。こう見えてくわしいのよ。団の任務と寝ねて起きて食べるだけの毎日で、これくらいしか楽しみがないから。じゃあ、今からわたしの部屋にくる？　大だい丈じよう夫ぶ、何度も念を押すと余計にあやしいかもしれないけれど、本当にわたしはノーマルよ。恋れん愛あい経験だってないわけじゃないし━片かた想おもいだけど。ただかわいい女の子をかわいがるのが好きなだけだから」

「で、でも、僕」

「何？　このあと何かあるの？」

「そうじゃなくて、あの……僕、女の子じゃないんですけど」

　琺瑠フオールの全身が硬こう直ちよくした。

　そのまま約十秒経過した。

「──ごめんなさい」琺瑠フオールはゆっくりとマリアローズから一・五メーテル距離をとって、深々と頭を下げた。「知らなかったこととはいえ、本当にごめんなさい」だが、謝りながらも、まだ上目づかいでマリアローズの顔をうかがっている。完全には信じていないようだ。

「や、いくら疑われても、ホントに女の子じゃないんで。まあ……よく間ま違ちがえられますけど」

「でしょうね……」

「む。それ、どういう意味ですか？」

「あ──だから、ほら、悪い意味じゃないのよ？　それに、考えてみたら、こんなにかわいければ、女の子じゃなくても、べつに……でも、やっぱり、一いつ緒しよにお風呂に入ったりするのは問題あるかしら……」

「あ、あ、あああ当たり前でしょ！　ぼ、僕、もう寝るんで！　明日があるし！　じゃ、失礼します！」

　マリアローズは小走りでその場を離はなれた。琺瑠フオール。ちょっと神秘的な感じさえする東部美女で、副長なんかやっているくらいだから、きっと美び貌ぼうだけじゃなく知勇兼けん備びなはずで、それでいてどこかやさしそうな印象も受けていたのに。その正体があれとは。

　もちろん、女性がかわいいものを好むのはおかしいことではない。エルデンにだって、鉄てつ鎖さの憩いこい場やその周りの建物には小間物店フアンシーシヨツプがいくつもある。人形ドール専門店シヨツプもあるし、すべての製品にフリルとレースをふんだんに使っているミルキィ・スプーンとかいうブランドもあるし、他ほかにも女性たちが群がる多種多様な「かわいい」商品が巷ちまたにあふれている。琺瑠フオールも秩序の番人副長とはいえ、女だ。実は

そうした女性たちと同じ趣しゅ向こうを持っていて、少女趣味ばりばりのパジャマを愛用していたり、部屋はピンク一色で、ぬいぐるみだらけだったとしても、誰だれかに責められる筋合いはないはずだ。

　だが、よりにもよって、マリアローズをかわいいだなんて。

　そりゃあ、かわいいか、かわいくないかでいったら、内面はともかくとして、外見はおそらくかわいいだろうが。

　マリアローズだって、人並み程度に清潔感のある身だしなみは心がけているし、鏡も見るので、自分の容姿が他人にどう見えるかくらい承知している。

　──そういうことじゃなくて。

　マリアローズは銀の砦主塔と第三支塔とを褒つなぐ渡わたり廊ろう下かの途と中ちゆうで足を止めた。

　強化硝子ガラス越ごしに見た外はもう暗くなっていた。しかも、雨が降りだしたようだ。今日は朝から天気がよくなかったので、いつかはと思っていたが、風も強いようだし、これは荒あれるかもしれない。

　この悪天候は明日にどう影響するだろう。

　屋外では状じよう況きようを把は握あくしづらくなるので、襲しゆう撃げきする側にとって有利な材料か。一方で、味方の間でも連れん携けいがとりづらくなりそうだ。また、泉セン里リの内情については、鳳ほう凰おうの間と呼ばれる場所にＳＩＸがいるということ以外、敵の配置などはほとんど判明していない。それらの視し認にんにも差し障さわりが出るはずだから、不利な部分もある。だとすると、単純に喜んでばかりもいられないだろう。

　要するに、よくわからない。先行きはあくまで不ふ透とう明めいだ。

　明日、死ぬか、生きのびられるかさえも。

「……何か、妙みようなことになっちゃったな……」

　頭では理解しているのだ。こうなった理由。経けい緯い。自分だ

けでなく仲間の動機。納なつ得とくもしている。何も、トマトクンの旧友だったデニス・サンライズがＳＩＸに殺されたから、その仇あだ討うちをするというだけではない。ＳｍＣは許しておけない。あんなやつらをのさばらせておいたら、またモリーに、アサイラムに危険が及およばないともかぎらない。ＳｍＣは討つべきだ。ここまで関かかわってしまった以上、自分が何らかの役割を果たすことができるのであれば、この戦いに加わって、やれるだけのことはやってみせる。

　たいしたことができるとは思えないけれど。

　というか、自分ごときが役に立つのか。

　敵。

　一号区では結局、両軍がぶつかりあう場面を見る機会がなかったものの、アサイラムの惨さん状じようはまだ脳のう裏りに焼きついている。泉セン里リでは、あれよりもっとひどいことになるだろう。

　マリアローズは明日、その中に身を置くことになるのだ。

　戦場。

　まさしく、そう呼ばれるにふさわしい場所で、何が起こってどうなるのか、マリアローズにはさっぱり予測がつかない。

　悪意と敵意と害意をみなぎらせた、たくさんの人間たち。それだけではない。ＳｍＣは一号区会戦で巨人族ギガントやら夜ナイト魔メア・犬ハウンドやら、アンダーグラウンドの異界生物フリークスに近い生き物さえも投入してきたという。そして、味方。銀の軍団ザ・シルバリイの戦士たち。ＺＯＯの皆みな。その全員が、誰かの命令に従ったり、自分の判断だったり、さまざまな要因で動いて、動きまわって、殺して、殺されて、殺しあって。

　マリアローズはかつて一人きりで何かと戦っていた。

　それはイシュタル・アガメムノ・ゴードン子し爵しやくだったり、野や盗とうだったり、親切を装よそおって人を騙だます悪党だったり、アンダーグラウンドの異界生物フリークスだったりしたが、マリアローズはほとんどいつも一人だった。

　それから、ＺＯＯに入って仲間ができた。

　髭ひげはだいたいトマトクンの家に籠こもっているので、自分を入れて六人。慣れないながらも、最近、六人で大勢の敵と戦うすべをようやくつかんできた。

　その矢先に、今度は十人、数十人どころか、百人以上だ。

　単なる人数以外にも、考えたくなくても考えてしまう要素が多すぎる。

　たとえば、死ぬのが怖こわい。嫌いやだ。冷静になってみると、やはり死にたくなんかない。

　そして、アジアン。

　やつにはやつの事情があるのだろうし、マリアローズにとって、やつはただのうざったいストーカーだし、どうでもよくはあるのだが──それでも、仮に敵味方の立場でやつと出くわしたとき、自分はどう思うのか。どうするのか。もっとはっきりいえば、やつと戦えるのか。

　もちろん、戦ったところで、勝てるはずがない。

　それはさておいても、アジアンが自分に泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを突つきつける場面なんて、どうしても想像できない。

　だが、そんなことより、もっと大きな不安がマリアローズにはあった。

　相手は誰だれか、あるいは何か、という以前の問題だ。

　──僕は、ちゃんと戦えるだろうか。

　仲間たちの役に立てるのか。

　何もできなくて、仲間たちをがっかりさせる結果にならないだろうか。

　ＺＯＯの皆が、そういう連中じゃないということはわかっている。怖おじ気けづいたり、しくじったりしたマリアローズに「おい

おい、いいかげんにしろよ」とか「この役立たず」とか「邪じや魔まだ消えろ」とか、そんなことを言ったりしない──と思う。内心で思うかもしれないが。状況が厳しくなれば、それが態度に出てしまうかもしれない。いちいちマリアローズに気をつかっていられなくなるかもしれない。

　そう。

　マリアローズはいつも守られているのだ。毎度毎度、仲間たちが助けてくれる。マリアローズは明らかにＺＯＯ最弱だ。仲間がいないと何もできない。自分でも思う。何で僕みたいなやつに、あんないい仲間が？

　少々とぼけたところはあるものの、顔が広くて、強くて、頼たより甲が斐いのあるトマトクン。

　凄すご腕うでの元アッサシン、目にもとまらぬ速度で雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを振ふるうピンパーネル。

　閃せん光こうの魔女マチルダの弟で子しにして、〝世界をザ・デスト滅ぼす者ロイヤー〟、とんでもない魔術をポンポン繰くりだす薄はつ幸こうの魔術士サフィニア。

　聞いただけで胸が張り裂さけそうな過去を背負っていて、でも、それをおくびにも出さず、小さいけれども、努力家で、美少女で、医術式だけでなく鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術まで使うユリカ。

　馬ば鹿かで、間ま抜ぬけで、半魚人だが、根こん性じようはあって、ムードメーカーのカタリ。

　一人で蘇そ生せい式を行ってしまうお掟きて破りの僧そう侶りよで、ユリカに鵺流古式戦闘術を教えた師し匠しようでもある髭のトワニング。

　で、僕は──僕は……何も。何もない。誇ほこれるものが本当に何もない。

　きっと、そのせいだ。

　僕があまりにもちっぽけだから、みんな、本当は僕のことなんかどうでもよくて、僕を気にかけてもくれないで。

　僕は、こうして、今、一人で。

　──心臓が止まるかと思った。

「うわ。いじけてるよ、僕……」

　渡わたり廊ろう下かの照明のせいで鏡になった強化硝子ガラスには、驚おどろいた表情の自分が映っている。

　硝子の上の唇くちびるに指を触ふれて、引っぱるように動かしてみた。

　ニイ、と笑ってみる。

　引きつった、不自然な笑顔になった。

「お！　おったおった！」

　と、聞き慣れた魚っぽい声がして、主塔の方へ目をやると、カタリが渡り廊下を駆かけてくる。

　もちろん──そう、もちろん、カタリだけではない。

　ユリカがちょこちょこと駆け足でカタリを追っている。サフィニアはその後ろをふらふらと走っているのだか、歩いているのだか。髭は大おお股またで歩いているだけだが、体がでかいのでそうとう速い。トマトクンは少し疲つかれたような顔で、同じく冴さえない表情のピンパーネルを引き連れて最さい後こう尾びを歩いてくる。

「マリアローズ、急にお前じぶん一人だけおらへんくなったさかい、何や神かみ隠かくしにでも遭おうたかと思たやないか。どないしたん。腹具合でも悪うなったんか」

「ち、違ちがっ……べつにお腹なかなんて痛くないよ！　きみと一いつ緒しよにするな！　この雑ざ魚こ！」

「お？　雑魚っちゅうのも実は新パターンやん？」

「はいはいそーだね。罵ののしられ言葉のバリエーションが増えて嬉うれしーでしょー」

「棒読みはやめいや……ごっつうテンション下がるわ……」

「それはいいこと聞いちゃったな。きみってすっごくやかましいからさ。静かにしてもらいたいときは、棒読みで返事すればいいんだね」

「どこがやかましいねん！　こんくらいものごっつ普ふ通つうや！　マキシマム普通やで！」

「あーそーですか。きみの国ではきっとそれくらいで普通なんだろーね」

「もぐひっ……テンション下がりまくりや……何なんや、このダメージ……」

「でも──」ユリカが心配顔でマリアローズを見上げた。「本当に何でもないの？　大講堂でも、マリア、ちょっと元気がなかったみたいだから、気にはなっていたんだけど」

「そう……ですね……」サフィニアの表情はさらに気づかわしげだ。顔色が悪く、声も弱々しいせいで、そう見えるだけかもしれないが。「不安そう、というか……ただ、マリアさんは、あまり知らない人とお話しするのが好きではないようなので……わたしも、ですが……そのせいかと……」

「おおかた、明日の戦いくさで己おのれの職分を果たせるか否いなかを考えるあまり、自信を喪そう失しつしてでもいたのであろう」

　髭ひげのくせに、髭をしごきながら、わかったようなことを。いや、外れてはないのだが、普段はクランの皆みなと行動をともにすることさえ少ない髭に図星を指されると、ちょっと腹立たしい。

「……うっさいな。そんなんじゃないよ」

「どうだかな」

　トマトクンがヒヒヒと下げ卑びた笑い声を上げた。ピンパーネルも目め許もとと口許をゆるめてひっそりと微笑ほほえんでいるし、何だかもう、見み透すかされているみたいで、嫌いやな感じだ。

　ぜんぜん見ていないようで、見ているし。

　気づかわれていないようで、気づかわれているし。

　──仲間、か。

「そんなら、みんな揃そろったことやし、あとは部屋に戻もどって
わしらだけ水入らずで一いつ杯ぱいやろか」

　カタリが大講堂からくすねてきたらしい酒さか瓶びんを一本とり
だして見せた。まったく、酒を飲まないメンツが多いというのに。

「だけど、お酒だけじゃあ……」

「つまむものが入り用ならば、拙せつ僧そうが少々頂ちよう戴だい
してきたぶんを分けてやってもよい」

　たしかに、髭がぶら下げているフロシキ包みの中身は、かなり大
量の料理を盛った大皿のようだ。加えて、ピンパーネルが手品師の
ようにどこからか数本の瓶を出現させてみせた。瓶の中身は果か汁
じゆうそのまんまジュースや、お茶、炭酸水など。というか、何で
ピンパーネルが。

「まあ」トマトクンが顎あごを撫なでながら酒、食料、その他飲み
物を見まわした。「どうせ早々に寝ねなきゃならんし、これだけあ
れば足りるだろう。ただ、明日のことはもう一度、打ちあわせてお
かんとな。俺はやるからには必ず勝つつもりだし、お前たちの中か
ら死人を出すつもりもない。そのためには、全員にしっかりと役割
を果たしてもらう必要がある。むろん──」

　と、トマトクンは馬鹿でかい手でマリアローズの頭をがばりとつ
かみ、真しん紅くの髪かみの毛をぐしゃぐしゃにした。

「お前もだぞ」

「──わ、わかってるよ！　か、髪を触さわるな！　汚きたない手
で！」

「うむ。さんざん番人どもと握あく手しゆさせられたから、若じや
つ干かん汚いかもしれんな」

「ホントに汚いんだったら余計にマジで今すぐやめて」

　マリアローズはトマトクンの手を払はらいのけ、髪を整えるふり
をして顔を隠かくした。そんなことで耳まで火ほ照てった顔を隠せ
るものか定かではなかったが、ありがたいことに、誰だれもそこに

はツッコまなかった。

　親しき仲にも礼れい儀ぎあり、というやつか。

　まさか、そんな言葉が当たり前のように通用する仲間たちに囲まれて生きることになるなんて、少し前までは想像もしていなかったけれど。

Omenage 897 9th revolution 26th day

サンランド無統治王国首都エルデン第八区・東部風料亭

〝泉里(センリ)〟

chapter.14

僕を呼ぶ声がする

　まだ暗い地上は、降りそそぐ大おお粒つぶの雨に食い荒あらされているかのようだ。

　横よこ殴なぐりの風もかなり強いが、とにかく雨の勢いが半はん端ぱではない。

　もし秩序の番人から貸たい与よされたレインコートがなかったら、きっとたいへんだったろう。さすがは純血のピュア・ブラッド司祭・プリースト製。高いだけあって、この撥はつ水すい性にすぐれた黒い薄うす手でのレインコートは、軽量なのに若干の耐たい刃じん性能もあるという。いつも身につけている外がい套とうの上に羽織っても、ほとんど邪じや魔まにならない。

　まあ、マリアローズの場合、外套にオプションのフードを装着する手もあるが、女性用ナース・医術士帽キヤツプ、女性用ナース・医術士服ユニ姿のユリカなどはそうもいかない。濡ぬれ鼠ねずみでは、行動にもいろいろな面で支障が出るだろうし。

　ただ、ＺＯＯ、七番突とつ撃げき隊、十二番遊撃隊、二十五番無名隊の中で、トマトクンだけはレインコートをつけていなかった。

　トマトクンは覆いになるような物を頭にかぶることを嫌きらう。

　それに、トマトクンが身につけている炎模様フアイヤーパターンが特とく徴ちよう的てきな濃のう紺こん色いろの全身鎧よろいは、水を弾はじくようだ。というか、この間、ＳｍＣのジェイに膝ひざを破は壊かいされたあとで判明したのだけれども、卑ひ怯きようなことに、この鎧は損傷しても勝手に修復されてしまうらしい。稀少物レア・収集家ハンターを自じ認にんする半魚人カタリさえ、そんな性質の代しろ物ものが現存するなんて聞いたこともないという話だが。

　そのトマトクンが指揮をとる部隊は、ＺＯＯ＋番人で総勢五十二名。ファー・セルジナ王国に伝わる「前門の虎とら後門の狼おおかみ」という言葉からとって、識別名コードネームはチーム・ウルフ。泉セン里リを後背から衝つく。

　一方、秩序の番人二代目総長羅ラ叉サ率いる番人百五十名は、チーム・タイガー。こちらは正門から泉セン里リに攻せめ入ること

になる。彼らも今ごろ、泉セン里リ正門からそう遠くない場所で各員配置について、そのときを待っていることだろう。

　時刻は午前四時五十八分。

　番人の十八番らしい時間差二面攻こう撃げきを仕し掛かけるため、チーム・タイガーの五分後に行動を開始する予定のチーム・ウルフは、泉セン里リの高く厚い塀へいから十メーテル以上離はなれた建物の陰かげに身をひそめている。

　さっきからピンパーネルや二十五番無名隊の者たちが斥せつ候こうに出て様子を探さぐっているが、歩ほ哨しようの姿さえ見かけない。

　無防備すぎる。かえって警けい戒かいしてしまいたくなるほどに。

　しかし、泉セン里リの塀は高さが五メーテルもあって、その手前には幅はば六メーテル超ちようの堀ほりもある。大型の攻城兵器シージ・ウエポンでもあれば別だが、いくらエルデンが無法都市だといっても、そんな物にはお目にかかれない。番人たちが屯とん所しよと呼ぶ銀の砦シルバリイホールドが難なん攻こう不ふ落らくとされているように、泉セン里リも正面の門さえしっかりかためておけば、守りやすく攻めにくい要よう塞さいだ。

　一いつ般ぱん人じんが常識的に考えればそのはずだった。

　もっとも、チーム・ウルフには常識をくつがえす破壊能力を有する者がいる。

　サフィニア。

　彼女の魔術を完全にあてにする形で作戦を立てることには、異論もあったという。

　だが、最終的にはトマトクンがサフィニアの能力を保証して、これを秩序の番人側が受けいれた。魔術士を一いつ切さい採用せず、意図的に魔術を排はい除じよしているかのような秩序の番人にしてみれば、きっとこれは思いきった決断だったはずだ。

　そうはいっても、サフィニアにはサックドール襲しゆう撃げき戦やアサイラム救きゆう援えん戦での実績もある。また、サフィニア

がいなければ、門が一つしかない泉セン里リに対して、虎と狼による二面攻撃は成立しづらい。さらには、番人の頭脳ともいうべきヨハン・サンライズが、ほぼ全面的にトマトクンを信用しているようだった。

　こうして、泉セン里リ襲撃戦において戦術的な中ちゆう核かくに位置づけられてしまったサフィニアは、マリアローズの隣となりで小刻みに震ふるえまくっていた。

「……大だい丈じよう夫ぶ？」

　サフィニアは一メーテルと離れていないのに、声をかけても反応しない。雨音がうるさいせいか。あるいは、極度の緊きん張ちようのせいか。その両方か。

　一方で、緊張しているサフィニアを前にしたマリアローズは、奇き妙みように落ちついていた。

　おかげで、サフィニアを気づかう余よ裕ゆうさえあるし、さっきからいろいろなことにごちゃごちゃと考えを巡めぐらせたりもしている。

　冷静、みたいだ。

　おかしい。トマトクンにＺＯＯの統とう率そつを任されたときは、きっと重圧に押しつぶされてしまうに違ちがいないと思ったのに。

　そう。

　今回はトマトクンがチーム・ウルフ全体を指揮するため、どうしても誰かがＺＯＯをまとめる役割を果たさなければならない。

　で、その役に任命されたのが、誰あろうマリアローズだ。

　いったいぜんたい、どうしてこんなことに。

　しかも、昨夜、トマトクンがそう言いだしたとき、反対した者は一人もいなかった。トマトクンが言うならとか、他ほかに適任者もおらへんしええんちゃうとか、マリアならうまくできると思うわとか、拙せつ僧そうの足を引っぱるでないぞとか、そんな感じであっさり決まってしまった。夕食はどうしよう、カレーがいいとか、そ

ういう次元の問題とは違うのに、何てでたらめな。

　──もう、どうなったって知るもんか。

　マリアローズは憤ふん懣まん、呆あきれ、不安それぞれ三分の一ずつを抱かかえたまま、こうしようああするべきかどうしようとウダウダグダグダ考えているうちに眠ねむってしまい、今日を迎むかえたのだが。

　もちろん、緊張はしている。昂たかぶっている部分がないといったら嘘うそだ。心しん拍ぱくも平常時より速いに違いない。それでも、めちゃくちゃな天気とは裏腹に頭の中はくっきりと晴れている。開きなおっただけかもしれないが、混乱はしていなかった。

「サフィニア、聞こえてる？」

「……は、はい……」

　サフィニアは顔をくっつけるようにして声をかけたマリアローズに、ガクガクガクンと首を縦に振ふってみせた。

　いや、ガクガクガクンって。明らかに変な動作だ。

「この状じよう況きようで気を張りすぎないでって言っても無理だろうけど、みんながついてるから。僕も精せい一いつ杯ぱいやるし、万一しくじっちゃっても、トマトクンがいるしさ。大丈夫、トマトクンが絶対に何とかしてくれるよ。そのことは僕なんかより、サフィニアの方がよくわかってるんじゃない？」

「……そ、そうですよね……」

「うわ。現金。トマトクンの名前出した途と端たんそれだもん」

「や……やめてください……そんなわけじゃ……」

「じ冗よう談だん冗談。や、冗談でもないけど──っと、もうあと五分か。じゃ、サフィニア、がんばって──じゃなくて、一いつ緒しよにがんばろうね」

「はい……あ、あの……」

「はい？」

「……ありがとうございます……」

　サフィニアの表情は暗くてわからなかった。だが、ほどよく肩かたの力が抜ぬけたいい感じの笑え顔がおだったと思いたい。マリアローズも、どうせ見えないだろうが、微笑ほほえんでサフィニアの背中を軽く叩たたいてあげた。それから、髭ひげ──はあくまでマイペースだから心配無用だし、ピンパーネルも問題なし。ユリカは悪党が相手だと、やや意気込みすぎるきらいがある。

「ユリカ、いつもどおりサフィニアをお願い。あまり前には出ないでね」

「了りよう解かい。連中をこの手でバッタバッタとやっちゅけたい気持ちはあるけど、自分の役目は忘わしゆれないから心配しないで」

「たぶん誰だれも心配はしてないよ。ユリカがちゃんと役割以上のことをやってくれるってことは、みんなわかってるから。僕だっていつも助けてもらってるし。あと、僕の方が少し前に出ると思うけど、何か気がついたことがあれば遠えん慮りよなく言ってね」

「わかったわ」

　ユリカは基本的に世話好きだ。悪党に対してはどうしても憎ぞう悪おの方がまさってしまうようだが、本来は誰かの面めん倒どうを見たり守ったり補ほ佐さすることで本領を発揮する。だから、ある程度までは頼たよってしまった方が、ユリカにとっても、マリアローズにとってもいい。トマトクンはああ見えて、そのあたりをちゃんと承知している。それで、普ふ段だんからユリカにサフィニアの護衛を委ゆだねると、あとは任せっきりにするのだ。

　サフィニアには、少しだけ勇気と元気をわけてあげること。いつも仲間がそばにいるんだと教えてあげること。

　ユリカは信しん頼らいすること。こまごまと口を出す必要はない。ユリカは、ここぞというときには独自の判断で大だい胆たんな行動をとることさえしてのける。

　そして、半魚人は──

「きみは僕を守って」

「……ほえ？」

　カタリは意表をつかれて仰ぎよう天てんしたようだ。それはそうだろう。マリアローズだって、まさか半魚人風ふ情ぜいにこんなことを命じる日がくるとは思っていなかった。しかし、これが最善なのだ。

「はっきりいって僕は弱いし、そうでなくても今日は周りを見ないといけないから、戦ったりとか余計、無理。というわけで、命がけで僕を守れ。これが最優先。きみにしか頼たのめないし、僕の命はきみにあずけた。いい？」

「お？　おお……ま、任しとき！」

　豚ぶたもおだてりゃ木に登る。それでは、魚をおだてた場合、果たしてどうなるのか。

　とにかく、我らがＺＯＯの半魚人は気分次し第だいで性能が乱高下する。要するに、調子に乗ったときは実力以上のパフォーマンスを披ひ露ろうするが、テンションが低いとさっぱり使えない。

「よっしゃーッ。マリアローズ、見たったれよ。お前じぶんの判断がこれ以上ないくらい正しかったっちゅうことを、このわしがイノイチ、ロノニーに賭かけてきっちり証明したるさかい。わしも漢おとこ一いつ匹ぴき餓が鬼き大だい将しようやからな。漢の道っちゅうモンをこう、バシッとな！」

「うっさいよ、腐くされ半魚。雨だからって、騒さわいでいいシチュエーションじゃないでしょ？　そんなこともわかんないの？脳ないんじゃないの？」

「……すんまへん」

「ま、いーや。よくないけど。せいぜい反省してね。さて、あと三分、か……」

　ＺＯＯはチーム・ウルフの先頭集団の一角を形成している。番人たちは、チェス・ピードの七番突とつ撃げき隊がＺＯＯの横で同じく先頭、その後ろにシャルロット・リンデの十二番遊撃隊、後こう尾びにハインツ・クルエルフォートの二十五番無名隊がつく。

　ただ、ハインツの無名隊は、泉セン里リ侵しん入にゅう後ごの索

さく敵てき、情報収集、さらにはチーム・タイガーとの連れん絡らくが主な任務となる。その意味では純じゅん粋すいな戦せん闘とう要員ではない。彼らのような人員の存在は、悪党討とう伐ばつの戦闘集団として高度に組織されている番人ならではかもしれない。

　そして、このチーム・ウルフをたばねるトマトクンは、豪ごう雨うのなか、建物の陰かげから顔を出してじっと泉セン里リをうかがっている。

　あと二分。

　すでにチーム・タイガーが泉セン里リ正門から攻こう撃げきを開始して三分経たっているはずだが、ここからではその様子はまったく感じられない。

　地上は依い然ぜんとして暗い。

　地表を叩く雨の量と強さは増減しながらも、やむ気配は微み塵じんもなかった。

　風はやや弱まったか。

　そうかと思えばいきなり天空に光の筋が走り、少しの間を置いて、轟ごう音おんがきた。

「━抜ばつ剣けん……！」

　雷らい鳴めいにつづいて、トマトクンが振ふり返って右手を挙げた。番人たちはただちにおのおの剣を抜いて盾たてを構えたが、ＺＯＯはまちまちだ。同型の変形斧おのイノイチ、ロノニーを腰こしから抜いたのはカタリのみで、ピンパーネルは動かず、ユリカは極限クライマックス九手棍ナインポールを握にぎる手に力をこめただけだった。髭の武器はおのれの肉体なのでそのままだ。マリアローズは偽にせ劫ごう火かの柄つかに手をかけるだけにとどめた。

　一分前。

　再び、雷かみなり。

「サフィニア」

　トマトクンに手招きされて、サフィニアが前に進みでた。

立ち止まったのは、トマトクンの隣となりだ。

サフィニアがローブのポケットからとりだしたいくつもの触しよく媒ばいの意味は、魔ま術じゆつ士ししか知りえない。意味どころか、それが何なのかさえわからない物も多い。触媒の種類は無限に近く、市場価格はピンキリで、貴重な物は高価なだけでなく、入手すること自体が困難のようだ。おかげで、使いたくても使えない魔術がたくさんあるらしい。

また、今、サフィニアが両手で持っている銀色の杖つえは、以前、喪そう神しん街オレストロで壊こわしてしまった水晶様材クリスタリンのそれと比べれば、玩具おもちゃのような代しろ物ものなのだという。そのため、いくつかの大きな魔術が使いづらい状態なのだとも聞いた。

それでもやはり、サフィニアは有能きわまりない魔術士だ。

「Ｓｅａ櫓Ｇｅａ虞Ｒｅａ出Ｎｅａ芯Ｌｅａ怒Ｃｅａ宴Ｋｅａ辯Ｍｅａ尽Ｓｅａ」

サフィニアがつむぐ上古ハイロ高位語メオンは、各種の要素精せい霊れいにあわせて、韻いん律りつ重視の暗号化を施ほどこされている。人間の耳には意味をなしているようにはとうてい聞こえない。しかし、それらを完かん璧ぺきに理解した上で詠えい唱しようしなければ、要素精霊が呪じゆ文もんに耳を貸すことは決してない。

もちろん、例外はあって、俗ぞくに精霊憑きと呼ばれる特とく殊しゆな性質を先天的に持って生まれる人間も、中にはいるらしい。精霊憑きは、何と魔術を用いなくても要素精霊の力を借りられてしまうようだが、むろんサフィニアは違ちがう。

サフィニアは特別、要素精霊たちに好かれているわけではない。

多くの要素精霊たちは、サフィニアの呼びかけを無視することができないのだ。

無視できないほどにサフィニアの魔力が圧あつ倒とう的なのだ。

「ＹｄｅｏＬ観星冥凌ＧｕｎｄａｅＬ陰性ＭａｘｉＧＺＧ驗廟乘迺稟坤靜匪ＱｙＱｙＢｅＬ」

　かつて、黄昏たそがれの魔導王の一人にして〝原子のアトミック・極大マキシマム・魔術士ドレツドスター〟、サンランド無統治王国開祖キング・グッダーI世が次のように言ったという。

　魔力とは本質的な力である。

　後世、さまざまな解かい釈しやくがなされるこの言葉だが、一つだけはっきりしていることがある。

　ほとんどの場合、魔力の多た寡かは生まれつき決まっている。魔力を上手に利用する技術を向上させることはできても、潜せん在ざい的な魔力の量自体は何をしても変わらないというのが定説だ。

　たとえば、マリアローズはお話にならないレベルの魔力しか持ちあわせていない。

　べつに、マリアローズだけがとんでもなく劣おとっているわけではない。魔術士として必要十分な魔力を持つ者は、全人類の１％に満たないとの説もある。その中で実用的なレベルの魔術を使いこなせる魔術士となると、割合はさらに低くなる。

　要するに、魔力とは個人が有している本来的な、独自の性質、属性だ。

　そういう意味でいえば、魔力はまさしく本質的な力だといえるだろう。

「銑翫ＨｉｄｅＬ拇Ｒｕ狗ＹＬＹＬＶｏｕｓＲａｙｅｓ蹈暉喘快楽ＧｙＧｙＤｙＬ怨霊ＶＡ」

　サフィニアには、その力がある。

　今まさに、それが一つの魔術として発揮されようとしていた。

　サフィニアが銀の杖を差し向けた先には、泉セン里リの堀ほりと塀へいがあった。

「ＧｅＢａＬＴ」

　呪文の最後のワンフレーズ以外、前兆はなかった。

　雨音を突つき破やぶって破は裂れつする音がした。

吹ふっ飛んだ。

およそ十メーテル四方に及およんだだろうか。堀と塀が、巨きよ大だいな風船が割れたみたいにバンと弾はじけた。それで、飛び散って、周囲一帯に降りそそいだのは、膨ぼう大だいな量の瓦が礫れきと土ど砂しやと水だった。もはや雨どころの騒さわぎではない。むしろ槍やりが降ってきたようなものだ。いや、降るというか飛んできた。チーム・ウルフは全員、建物の陰かげに隠かくれていたので何とか平気だったが、通行人でもいたらたいへんなことになっていただろう。実際、周りの建物には甚じん大だいな被ひ害がいが出ていた。

「──突とつ撃げき！」

そして、土砂雨がやんだ頃ころ合あいを見計らって号令を下すなり、トマトクンが大剣の柄に手をかけて駆かけだした。遅おくれる者は誰だれ一人いなかった。皆みな、走った。それでいて隊列は乱れなかった。ＺＯＯはピンパーネルと髭ひげが前に出て、マリアローズとカタリ、ユリカとサフィニアの順でつづいた。隊長のチェス・ピードと他二名の番人を先頭に置いた七番突撃隊が、三列縦隊を作って左隣を併へい走そうしている。全員、トマトクンを追う形だ。行く手には粉ふん塵じん混じりの汚よごれた雨が降る。

また、雷。

トマトクンが堀に飛び降りた。堀はそう深くない。深さは二メーテルかそこらで、水深がせいぜい一メーテル。相対的に塀を高くして、同時に塀にとりつきづらくするための堀だ。サフィニアの魔術は、塀の真下あたりに炸さく裂れつした。その結果、炸裂点を中心とする半径五、六メーテルの球状空間内にある物体が、外側に向けて撒まき散らされていた。

数種類の気霊と土霊を使し役えきして、土中の空気を強きよう烈れつに圧縮し、もとに戻もどる反動で破は壊かいを引きおこす高位要素魔術、大地爆裂無情。

威い力りよくのほどは見てのとおりだ。十メーテルくらいの馬ば鹿かでかい鉄球を落として、何もかもぶっつぶしてから、鉄球をとりのぞいたような状態といえばわかりやすいか。

水をはね上げて堀の底に着地した段階で、体勢を崩くずす者が大

勢出たものの、泉セン里リの敷しき地ち内まではもうすぐだ。塀とその下の地面がごっそりなくなって、そこに堀の水が流れこんだ窪くぼ地ちを突き進み、トマトクンに従って驀ばく進しんして、邁まい進しんするだけでいい。足あし許もとはまったく見えないし、泥でい水すいと溜ため水と土砂水がマリアローズの腰こしより高い位置まで張っているし、足場は最悪だが、それが何だ。今は誰も愚ぐ痴ちをこぼさない。超最低ＳＵＣＫの文字が頭の中に浮うかぶことさえない。

　ザブザブザブザブ汚きたない水をかきわけて進め。足を動かせ。ひたすら目指せ。堀があった地点を越こえろ。トマトクンが長い脚あしの利点をぞんぶんにいかして飛ぶように駆け上がってゆく坂を、抉えぐられた地面を、這はうようにして上るのだ。マリアローズも身長からすると脚はかなり長い方なのだが、さすがにトマトクンには敵かなわないのでしょうがない。ピンパーネルほど身軽でもないし——と、その途と中ちゆうで一度、振ふり返った。まずい。忘れていた。

　ユリカ。小さいユリカは大だい丈じよう夫ぶだったか。背の低いユリカにとってはあの程度の堀でもきつかったはずだ。

　幸い、ユリカはちゃんとついてきていたが、迂う闊かつだった。いけない。僕は自分のことだけで精せい一いつ杯ぱいになっちゃいけない。頭を冷やせ。無我夢中になるな。状じよう況きようを絶えず確かく認にんして把は握あくするよう努めろ。身の安全についてはカタリに任せればいい。カタリはちゃんとマリアローズにぴったり寄り添そっている。この魚さかな野や郎ろうを信じろ。カタリはいざとなれば自分の命さえなげうって仲間を守る男だ。現にマリアローズはそうやってカタリに守られたことが一度ある。まだＺＯＯに加盟する前の話だ——が、そんなことはどうでもいい。今は一いつ瞬しゆんたりともボサッとしてはいられない。マリアローズはすぐ前を行く髭に遅れまいと、泥どろまみれになりながら坂から這い上がって、ついに足を踏ふみ入れた。

　泉セン里リだ。

　ここはもう泉セン里リの敷地内だった。

　もっとも、正門に対して裏側にあたるこの一帯は竹林になっている。竹の隙すき間まから、雨に煙けむった遠くに明かりらしきものが見えるが、あそこまではまだ百五十メーテル以上あるはずだ。目

的地。鳳ほう凰おうの間と呼ばれる五ご重じゆうの塔とう。前もって頭に叩たたきこんでおいた泉セン里リ敷地内の地図と照らしあわせれば、間ま違ちがいない。あれがＳＩＸのいる鳳凰の間だろう。

「脱だつ落らく者しやは出てないな！」

　トマトクンが少し進んだところで、いったん立ち止まって怒ど鳴なった。周囲に敵の気配がないので、ここで一度、隊列を整えるつもりなのだろう。マリアローズも念のためにＺＯＯの面々を確認した。大丈夫そうだ。「ＺＯＯは全員いるよ！」「七番欠員なし！」「十二番欠員ありません！」「二十五番欠員なし！」

「よし、行くぞ！　二十五番は索さく敵てきに──いや、待て！」

　トマトクンに命じられるまでもなく、散開しようとしていた二十五番無名隊の番人たちが足を止めた。ピンパーネルが素す早ばやく周囲を見まわしている。敵か。マリアローズには見えもしないし、雨音のせいかそれらしい音も察知できないが、トマトクンやピンパーネルの感覚を疑う根こん拠きよはない。彼らが感じるのなら、それはいるのだろう。心臓が暴れだす。敵。敵か。どんな敵だろう。落ちつけ。怖こわがったって、戦いを回かい避ひできるわけじゃない。

「何かくるぞ！　二十五番も俺たちから離はなれるな！」

「お言葉ですが、トマト殿どの、我々は──」

　すかさずハインツ・クルエルフォートが反論しようとしたが、トマトクンは認めなかった。

「同じことを二度言わせるな！　今回かぎりとはいえ、お前たちは俺の下についたんだ、無む駄だに死なれるのは御ご免めんだ！　行くぞ！」

「──はっ！」

　ハインツも逆らうことはせず、二十五番無名隊は再び隊列に戻った。そうして「左右に注意しろ！」とトマトクンが叫さけび、竹林に飛びこんでから間もなくだった。

　竹は密生していない。だいたい人間が通り抜ぬけられるくらいの間かん隔かくはあいている。とはいえ、さすがにまっすぐ走るのは

無理だ。竹と竹の間を縫ぬうようにして進まなければならない。

　やつらも同じだった。

　ジグザグに駆かけてくる。どんどん接近してくる。ＺＯＯは隊列の右前に位置しているので、左の方はよくわからないが、右斜ななめ前方から、一──いや、三、四、もっといる。速い。あれは、でも、人間じゃない……？

「夜ナイト魔メア・犬ハウンド！」

　誰かが叫んだ。夜ナイト魔メア・犬ハウンドといえば、ＳｍＣが一号区会戦に投入した大型の肉にく食しよく獣じゆうか。

　まあ、だが、夜ナイト魔メア・犬ハウンドについては想定内だった。トマトクン情報によると、暗黒大陸原産らしく、α大陸には棲せい息そくしていないはずで、えらく凶きよう暴ぼうで、食欲旺おう盛せいで、人でも何でも喰くらうという夜ナイト魔メア・犬ハウンドを泉セン里リの敷地内で放し飼いにしていれば、わざわざ人間に見回らせる必要もないわけだ。そういう可能性も当然、考こう慮りよはされていた。どのみち腕うでずくで突とつ破ぱするしかないのだが。

「ばらけるなよ！　所しよ詮せんは獣けものだ！」

　で、そういう展開になれば、トマトクンほど頼たのもしい男もそうはいない。

　トマトクンは大たい剣けんを抜き放ちざま、最初に襲おそいかかってきた夜ナイト魔メア・犬ハウンドを、近くにあった竹ごとすくい上げ気味に一刀両断した。返す刀でもう一頭、今度は大剣を脳天に打ち下ろしてやや斜めにまっぷたつにした。そのとき脇わきをすり抜けてきた夜ナイト魔メア・犬ハウンドは、ピンパーネルが無造作に解体した。「ええい、拙せつ僧そうにもやらせい！」破は戒かい僧そうの血がたぎるのか、髭ひげがそんなことを叫ぶくらい、第一波は呆あつ気けなく片づけられた。

　一号区会戦では番人たちをずいぶん手こずらせたという夜ナイト魔メア・犬ハウンドが、あっという間にこうだ。

　これで士気が上がらないわけがない。

「トマト殿につづけ……！」チェス・ピードの声か。シャルロット・リンデやハインツ・クルエルフォートも似たようなことを叫んで部下をたきつけ、番人たちも応、応、応、応と声を揃そろえてこれにこたえた。構えた盾たてごと敵にぶちあたり、急所に剣をぶちこむ集団突とつ貫かん攻こう撃げきは、こういう雰ふん囲い気きのときはめっぽう強い。しかも、相手は武装した人間ではない。いくら硬かたい獣毛に覆おおわれていようが、剣は通る。確実に息の根を止めないと何度でも起き上がってくる恐おそるべき猛もう獣じゅうでも、トマトクンの言うとおり所詮は獣なのだ。

「よく見ろ！　やつらはまっすぐ突つっこんでくるだけだ！」そのことを実証するかのように、トマトクンは大剣で夜ナイト魔メア・犬ハウンドを次々と屠ほふりながら、皆みなに的確なアドバイスを送る余よ裕ゆうさえ見せている。「──どうせろくに餌えさもやってないんだろう！　飢うえすぎて余計に動きが単調だ！　怖い相手じゃない！」

　そうはいっても、夜ナイト魔メア・犬ハウンドは大おお柄がらな人間と同じくらいの体格で、つまりマリアローズよりはずっと大きい。身体能力だって文明化された人類を遥はるかに凌りよう駕がしている。怖い相手じゃないはずがないのだが、人間の力も捨てたものではなかった。

　知ち恵えと、道具と、勇気と、理性と、根こん性じようと。

　ぜんぶ駆く使しして立ち回ることを知っているからこそ、人間はアンダーグラウンドの異界生物フリークスにさえ対たい抗こうできる。くそでかい竜りゆうだって倒たおせる。一人で無理なら何人もが盾を並べて夜ナイト魔メア・犬ハウンドの突撃を受けとめ、一いつ斉せいに剣を突きだし、グザグザ刺さしまくって、別の誰だれかが頭骨をかち割って二度と起き上がってこないように、殺す。その隙すきをついて襲いかかってくる別の夜ナイト魔メア・犬ハウンドがいれば、他ほかの仲間がまた盾ごとぶつかって吹ふっ飛ばし、覆いかぶさるように殺さつ到とうして、ぶっ刺して、殺す。声を出す。心を一つにする。連帯で恐きよう怖ふを追い払はらい、闘とう志しを補強する。

　トマトクンやピンパーネルのような突出した個でなくても、戦うすべはあるのだ。

　彼らの所業を見ていると、少しばかり自分が馬ば鹿か馬ば鹿かし

くはなるが。

　とりわけマリアローズを驚おどろかせたのは、見慣れているトマトクンやピンパーネルではなく、髭の破戒僧トワニングの戦いぶりだった。

　端たん的てきにいって、髭はイカれてる。

　だって、髭ときたら素手なのだ。得物は両手だ。蹴けりさえ繰くりださない。すべて手だ。握にぎりかためた拳こぶしで、殴なぐる。掌しよう底ていを打ち下ろす。指を、手刀を突き入れる。もちろん、体たい捌さばき、足捌き、何もかもアホみたいに無駄がなくて、ケチのつけようがないくらい見事だが、圧巻はやはり髭の手が生みだす破は壊かい力だろう。

　極限クライマックス九手棍ナインポールを使いこなすユリカも、すごいすごいと思っていたが、あんなものじゃない。

　鵺ぬえ流古式戦闘術。これが本物なのか。さすがはユリカの師し匠しようだ。

　ピンパーネルと髭がいるおかげで、マリアローズは偽劫火を抜く必要さえなかった。カタリは一頭だけ夜ナイト魔メア・犬ハウンドを倒したが、ユリカも何もしなかった。サフィニアも当然、邪じや魔まにならないようにしているだけでよかった。

　それでも、マリアローズは一応、夜ナイト魔メア・犬ハウンドがどこからどれだけくるかには注意を払はらい、「一時の方向から二匹ひき！　三時からも一匹くるよ！」とか声を出してはいたが、どれだけ意味があったのか。正直、役に立っていたとはあまり思えない。

　結局、マリアローズが数えることができた範はん囲いでは、十九頭の夜ナイト魔メア・犬ハウンドが始末されたところで、あたりは雨音に押しつつまれた。

「被ひ害がいはどうだ！」トマトクンが訊きくと、次々に報告があがってくる。「七番、死者なし、負傷者三、いずれも軽傷！」「十二番、死者、動けない者はいません」「二十五番、死者、負傷者ともになし！」

「ＺＯＯも大だい丈じよう夫ぶ！」最後にそう付け加えながら、マ

リアローズは少々意外でさえあった。始終、完全に優勢だったとはいっても、激戦ではあった。第一関門を死者ゼロで乗り越こえることができたのは、幸さい先さきのよい滑すべり出しだ。

　ただ、これで気を抜いてはいけない。ほっとした瞬しゆん間かんには必ず隙ができる。そこにつけこまれると、どんな強者でもコロッとやられてしまう。

　そんな状じよう況きようを防ぐためにできることは、ただ一つしかない。

　決して、油断しない。

「よし、まだ何も始まってない。行くぞ！」

　指揮官のトマトクンにしてみれば、皆にできるだけ気をゆるめる暇ひまを与あたえない。いったん集中が切れてしまうと、またテンションを上げなおすのはたいへんだ。それ専門の訓練を受けている魔ま術じゆつ士しなら話は別だが、凡ぼん人じんは自分の精神状態を自在に制せい御ぎよしたりできない。そのあたりをうまく管理してあげるのも、指揮官の仕事ということになりそうだ。

　そうした点からいっても、トマトクンみたいに、皆をぐいぐい引っぱってゆけるだけの力があれば一番いいのだろうが。

　ないものねだりはみっともない。すでにチーム・ウルフは進撃を再開している。マリアローズはマリアローズなりに、自分にできることを目め一いつ杯ぱいやるしかない。トマトクンだって、皆だって、それ以上のものは期待していないはずだ。

　彼らは知っているのだから。

　マリアローズの醜しゆう態たいを。非力さを。だが、そんな中で、たまにはがんばってみたりもした。うまくいったり、いかなかったりしたが、仲間を守ろうとしたこともあった。恥はずかしい話だけれども、どういうわけか、自分を犠ぎ牲せいにして仲間を救おうとしたことさえあった。

　間ま違ちがいなく、僕はＺＯＯのドンジリだ。みんな、僕のずっと前を走ってる。追いかけても追いかけても追いつけない。僕が走ってる間にみんなだって走っているし、この差は一生縮まらないかもしれない。

でも──ミソッカスにはなりたくない。

そのためにも、マリアローズは竹林を駆かけ抜ぬけながら、それぞれ違った意味で感覚の鋭するどいピンパーネルとトマトクンの様子に気を配っていた。何かあれば、最初に気づくのはたぶん彼ら二人だ。ときおり後ろのサフィニアとユリカを振ふり返って、遅おくれていないか確かく認にんした。特にサフィニアは、他の皆みなと比べれば、走ったり跳とんだりが得意ではない。ただ、地面がややぬかるんでいる。重装備の者も多い。ここで息が上がってはどうしようもない。トマトクンもそのへんを考えてかなり速度を抑おさえている。これならサフィニアもユリカも、今のところは何とか大丈夫のようだ。

というか、そうこうしているうちに、もうすぐ竹林を抜ける。

最後の竹まで、あと二十メーテルくらいか。

そして、その向こうに広がる千ち鳥どりヶが池いけ。

その中央の浮うき島しまにそびえ立つ、いかにも東部的な建築物、五ご重じゆうの塔とう、鳳ほう凰おうの間。

あそこまで──約六十メーテル。

「二十五番、散れ！」トマトクンが走りながら命じた。「──承知！」ハインツが即そく座ざに応じて、後こう尾びにつけていた二十五番無名隊の番人たちが左右に散開してゆく。場所的には竹林が切れるほんの手前だ。これから無名隊の者たちは、半分が正門を目指してチーム・タイガーとの合流を目指し、もう半分はその動きを支し援えんしつつ、広く展開して情報収集にあたる。番人の中に無名隊は三つあり、彼ら独自の相そう互ご認識法や情報伝達法のおかげで、離はなれた部隊同士が互たがいの情報を共有することができるのだという。

で、そうした仕組みを編みだしたのはヨハン・サンライズらしい。マリアローズにしてみれば、あーそーですか結構でございますねー（棒読み）といったところだし、特に今回はさして意味がないだろう。チーム・ウルフの第一目標は、そんなものが有効性を発揮する前に、勝負をつけてしまうことだからだ。

竹林を出て、千鳥ヶ池のふちまできたところで、トマトクンが手

を挙げてチーム・ウルフを止めた。

「サフィニア！」

「……はい……！」

　ここでまたサフィニアの出番だ。いや、二度目のこっちこそ本番といった方がいいか。

　サフィニアがマリアローズの横をすり抜けてトマトクンの真横まで進み出た瞬間、稲いな光びかりが天空を引き裂さいた。

　近い。

　間を置かず、雷らい鳴めいが轟とどろき渡わたって天地を揺ゆるがした。

　サフィニアはレインコートを脱ぬぎ捨て、ローブの中からたくさんの宝石をはめこんだ長い銀ぎん鎖さをとりだした。

　その両りよう端たんを結んで環わとなし、千鳥ヶ池に向けて放ほうった。

　特殊なチヤネ精神集中リングがやたらと長く感じられる。

　サフィニアのまっすぐな銀ぎん髪ぱつも、銀と白を基調として各所に緑色をちりばめたローブも、両手で握にぎりしめた銀色の杖つえも、雨に濡ぬれそぼっていた。

　空はまだ暗いが、千鳥ヶ池の中や周りには灯とう籠ろうが設置されているので、あたりはぼんやりと明るい。

　呪じゆ文もんの詠えい唱しようが始まった。

「罪ＷＯ罪ＴＯ思ＷＡＺＵ罪悪ＷＯ快楽ＴＯＳＩ膿ＮＤＡ軀ＮＩ猥ＲＡＮＡ愛撫ＷＯ受ＫＵＲＵ事ＷＯ恥辱ＴＯＭＯ思ＷＡＺＵ淫楽ＮＩ溺ＲＥ腐臭ＷＯ好ＭＩ死者ＷＯ愛ＳＩＴＥ犯ＳＩ天ＹＯＲＩ放逐ＳＡＲＥＳＩ王女」

　と、千鳥ヶ池の底から黒い光がわき上がってきた。

　むろん、黒い光なんてこの世界に存在しない。千鳥ヶ池に沈しず

めた銀鎖の環が発している光は、この世界と物理接続された異界からもたらされたものだ。

「来ＴＡＲＥ禍禍ＳＩＫＩ王女来ＴＡＲＥ醜ＫＩ王女然ＳＩ汝既ＮＩＳＯＮＯ位ＮＩ在ＲＡＺＵ汝ＷＡ堕ＳＥＲＩ汝ＷＡ狂ＥＲＩ汝ＷＡ乱ＲＥＲＩ汝ＷＡ貪ＲＩ汝ＷＡ腐ＲＩ腐ＲＩ尽ＫＵＳＩ蠅集ＲＩ穢ＲＡＷＡＳＩＫＩ姫」

　その黒き光がバアァッと広がって円を描えがき、さらにはその円の中に複雑な紋もん様ようが次々と浮うきでた。

「汝ＫＯＲＥ贄也今ＫＯＳＯ此処ＮＩ来ＴＡＲＩＴＥ償ＩＷＯ為ＳＥ」

　そして、それは、黒き光の輪から這はいだしてきた。

　最初は巨きよ大だいな、巨大な、真っ白い右手だった。

　厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞。

　おぞましい叫さけび声とともに、手が黒き光の円のへりをつかみ、一気に全身が引き上げられた。

　体高は十メーテルをゆうに超こえている。

　彼女は──そう、それは人型で、しかも女性だった。

　真っ黒い花を咲さかせる奇き怪かいな植物を全身に植えつけられ、縄なわのような物で体のあちこちを縛しばられて、白い皮ひ膚ふは特に首から胴どう体たいまでがグジャグジャに切り裂かれ、血液とも膿うみとも何ともつかない液体を傷から垂れ流しているが、顔立ちは無残なほど美しく整っていた。黒い双そう眸ぼうは潤うるみ、何かを訴うつたえかける悲ひ哀あいと寂せき寥りように満ちていた。ただ、頭髪は一いつ切さいなく、それどころか頭皮さえも剝はがれ、頭骨も取りのぞかれ、ぐずぐずに腐った脳みそが露ろ出しゆつして、数百本の長く太い針が突つき刺さっていた。そこに、

数千とも数万ともそれ以上ともつかない数の蠅はえがたかっているのだった。いや、蠅は彼女の傷のすべてに卵を産みつけていた。よく見ると、実は彼女の体ときたら蠅と蛆うじだらけだった。

　蠅たかり姫。

　異界〝贄サクリのフアイス園・プレーン〟の高貴にして下げ賤せんな罪ざい業ごう多く罪深い姫ひめ君ぎみ。

　贄にえの園に堕おとされる前は「花の恋こい乙おと女め」とたたえられ、たくさんの神々に求愛された王女神メイクレール・ティアドルァＫＺＫだったともいう。

　だが、彼女がなぜ贄の園に追放され、蠅たかり姫と成り果てたのか、知る者はいない。

　彼女を前にすると、知りたいと思う者もあまりいないだろう。

　というか、鼻が曲がりそうなくらい臭くさいし、見た目も怖こわいし、それどころじゃない。厭亞亞亞亞、厭亞亞亞亞、厭亞亞亞亞、厭亞亞亞亞と蠅たかり姫が千鳥ヶ池の上でジャンプするたびに、こっちが厭亞亞亞亞亞亞と叫びたくなってくる。だって、そのたびに縄が、真っ黒い花の棘とげが、体に食いこむらしいのだ。見るからにすさまじく痛そうだ。苦く悶もんの表情を浮かべて叫んでいる彼女も、何度目かのジャンプのあと、とうとう耐たえきれなくなったのか──それなら最初からやらなきゃいいのに、とにかく両手で頭を抱かかえた。そのせいで、脳から無数に突きだしている状態の針が、両手に刺さった。厭亞亞……！

「──や、それは自業自得でしょ……」

　マリアローズはＺＯＯのツッコミ役としての矜きよう恃じに賭かけて、鼻をつまんだ小声でそうツッコんでみたが、おそらく誰だれも聞いていないだろう。

　サフィニアの召しよう喚かん魔ま術じゆつは、前にも何度か見ているが、今回はずば抜ぬけてすごい。

　まあ、あの銀鎖の環は蠅たかり姫を召喚するための人工触媒カタリステイツク魔道具アーテイフアクトで、簡単に作製できるではな

いから、滅めつ多たに手に入らないようだ。触しよく媒ばいであるからには、当然一回こっきりだし、もしかしたら、蠅たかり姫の姿を拝めるのはこれが最初で最後かもしれない。もう一度見てみたいとは、決して思わないが。

　蠅たかり姫はひとしきり両手の痛みで身み悶もだえたあと、やるせないおのれの苦痛と悲しみを表現する方法を見つけたらしい。

　破は壊かいだ。

　目につくものをぶっ壊こわす。

　ちょうど目立つ物体が、彼女のすぐそばにあった。

　五ご重じゆうの塔とう、鳳ほう凰おうの間だ。

　蠅たかり姫は髪かみを振ふり乱し──いや、超ちよう絶ぜつ迷めい惑わくなことに、蠅や蛆やどす黒い血液や真っ黒い花弁を撒まき散らしながら、鳳凰の間に躍おどりかかろうとした。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……！

　その寸前だった。

　鳳凰の間の前に黒い光があふれ、それが円をなし、さまざまな紋様が描きだされた。

　蠅たかり姫はその上を通過して鳳凰の間に手をかけようとしていた。

　できなかった。

　何ものかが黒き光の輪から出てきて、下から蠅たかり姫にしがみついたのだ。

　惡惡惡。

「……うげ……」

　マリアローズはちょっと吐はいてしまいたくなった。

　そいつの姿形が、蠅たかり姫よりもさらに生理的に受けつけない感じだったからだ。

　何せ、そいつは人型で男性らしく全ぜん裸らなのだが、身体からだ中に小さな切れこみが無数にあって、唇くちびるみたいにパックリ口を開いたそれらすべての中から、赤子のものらしい手やら足、さらには目玉や舌や歯、ついには×××や×××まで━とてもではないが、文字どおり口にはできないような物体がのぞいていたり、ニュッとはみ出していたりした。

　これだけでもそうとう嫌いやなのに、やつの顔面には皮膚が一切なく、筋肉が剝むき出しだった。ついでに、髪の毛の代わりに、数えきれないほどの細い手足が生えていた。もちろん、それらがぜんぶ意思あるもののように動いているのはお約束だ。

　いや、何がお約束だ。冗じよう談だんじゃない。

　というか、出現の仕方といい、見かけといい、こいつもまさか。

「━万眼王……」

　トマトクンが呻うめくようにもらした。万眼王。それが、蠅はえたかり姫の腰こしから背中に両りよう腕うでを絡からみつかせて、黒き光の輪の中に引きずりこもうとしているヤツの名か。

　万眼王はまだ黒き光の輪から出きっていない。それどころか、蠅たかり姫に振り払はらわれたら、黒き光の輪に落っこちてしまいそうな体勢だ。二人（？）で一いつ緒しよに落ちれば、仲よく贄の園に逆ぎやく戻もどりなのかもしれないが、蠅たかり姫は、いったん設定した目標は達成しなければ気がすまないタチらしい。

　厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……！

　蠅たかり姫は進もうとする。

　惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡……！

　万眼王は押しとどめようとしている。

　両者の体格はだいたい同じくらいだ。力も互ご角かくか――と思ったら、いきなり蠅たかり姫が万眼王の瞼まぶたのない眼球に右手の指を突っこんだ。蠅たかり姫のファイトは全開だった。待ったなしだった。容よう赦しやなく二つの眼球を矢や継つぎ早ばやに抉えぐりだして握にぎりつぶし、さらに眼がん窩かに突き入れた指をグリグリした。惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡。だが、万眼王だって負けていなかった。万眼王は蠅たかり姫にしがみついたまま、ついに黒き光の輪から体を這はいださせた。それから、蠅たかり姫を押し倒たおそうとした。抵てい抗こうされると、蠅たかり姫の全身に絡みついた縄なわに手をかけた。それを引っ張った。グイグイグイグイ引っ張りまくった。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。

　それは実際、人外の対決だった。化物同士のタイマンだ。やっていることは単なるとっくみあいの喧けん嘩かにすぎないのだが、何たってスケールが違ちがう。

　万眼王が念願叶かなって千鳥ヶ池に蠅たかり姫を引き倒すと、数十メーテル規模の蛆うじだの血だの何だのが混じった水しぶきが上がった。そうして組み伏ふせられそうになった蠅たかり姫が万眼王の顎あごに頭ず突つきを食くらわすと――というか、蠅たかり姫はもう少し考えて戦った方がいいと思うのだが、腐ふ敗はいしたおのれの脳みそとともに、砕くだけた万眼王の顎骨が飛び散った。厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞。惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡。これで逆ギレした蠅たかり姫は、暴れて、大暴れして、爆ばく暴れして、万眼王の全身を引っ掻かくわ、叩たたくわ、嚙かみつくわで、もう何がなんだか。万眼王も黙だまっておらず、やり返して、やり返され、攻こう撃げきが攻撃を呼び、逆ぎやく襲しゆうが逆襲で仕返しされ――

「……てゆうか、あんなもの誰だれが召喚したんだよ！」

　マリアローズは顔の前に手をかざしながら根源的な問いを発してすぐ、自力で回答にたどりついた。それは単なる思いつきではなく、わりあい論理的な思考の果てにたどりついた答えだった。

　召しよう喚かん魔ま術じゆつは誰でも使える魔術ではない。それどころか、召喚魔術を使えてしまうような超ちよう高位の魔術士がゴロゴロいるはずがない。とはいえ、世界は広いので、捜さがせば結構いるのかもしれないが、ここで可能性として浮うかぶ人物は一人だけだ。

　ＳｍＣに与くみしているクラン昼飯時ランチタイムの魔導士ウイザード。

　この間、龍州人たちのアジトにとらえられたマリアローズを救いだす手助けをしてくれた。

　その際、彼女は瞬間移動テレポートなどという離はなれ業わざを用いてみせた。

　閃せん光こうの魔女マチルダの弟で子しで、つまり、サフィニアの兄弟子にあたる。女性なので、姉弟子でもいいが。

　ちなみに、彼女がサン・ティエンヌ・ドゥ・シボーの胸むな元もとが大きく開いた蠱こ惑わく的な魔術士衣で強調していた胸の谷間は、思いっきり嘘うそくさかった。

　名前はたしか、ベティ。

　彼女くらいしか考えられない。

　で、彼女がこの近くに──おそらく、あの鳳ほう凰おうの間にいるということは、当然、そういうことなのだろう。

　きっと、アジアンもいる。

　──それがどうしたっていうんだ。

「くそ……がんばれ、蠅たかり姫」

　サフィニアに召喚されたとはいえ、贄の園の住人を応おう援えんするのは何となく気が進まないが、そんなこともいっていられない。ここで蠅たかり姫が万眼王を押しきって鳳凰の間をぶっつぶしてしまえば、やつと顔をあわせなくてすむかもしれない。

　いや、それも希望的観測というか、あまり根こん拠きよのない予想だ。そもそも、実際に出くわすかどうかにかかわらず、やつが敵

だということはもうはっきりしている。今まさに障害となって立ちはだかっているのは、たぶん、やつの仲間なのだ。

　でも、こうなるんだったら、どうしてあのとき、僕を助けたりした……？

「そうやすやすとはいかんようだな」

　トマトクンが背中に戻もどしていた大たい剣けんを再び抜ぬいて、少しだけ腰を低くした。

　それはすなわち、蠅たかり姫は決め手にならないと、トマトクンが判断したということだ。

　この状じよう況きようではマリアローズも同意せざるをえない。だって、サフィニアはそうとう苦しそうだ。肩かたで息をしているし、蠅たかり姫の方へと向けている杖つえの先が、時折、ぶれる。召喚魔術の仕組みなんて、マリアローズごときにわかるはずもないが、持続するためにはかなりの集中力や魔力が要されるのだろう。

　蠅たかり姫は、相変わらず万眼王と上になったり下になったりの激げき烈れつな大立ち回りを演じているが、サフィニアは限界に達しつつある。

　しかし、サフィニアは賢けん明めいだった。何事も、にっちもさっちもいかなくなってからでは遅おそいのだ。サフィニアがふらふらと足を進め、千鳥ヶ池に銀色の杖を突き立てると、そのときたまたま万眼王に馬乗りになっていた蠅はえたかり姫の足あし許もとに黒い光があふれた。

　厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡厭亞亞亞亞厭亞亞亞亞亞亞亞亞惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡厭亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞惡惡惡惡惡惡惡惡惡厭亞亞亞亞亞亞亞惡惡惡惡惡……！

　二人（？）して、落ちてゆく。

　もといた異界、贄の園へと還かえっていった。

　そこで一息つくかと思いきや、サフィニアは別の触しよく媒ばいを用意して次の魔術を詠えい唱しようしはじめた。

「無花果地軸音楽東軸Ｋｕｇｅｌｄ□真土本土久土過渡人示度Ｚｅｔｅｎ□ＩＮＤａＮＭａＮＫａＮＬａＮＳｅＮ□ＣＬＡＳＨ拝真名焼尽光ＶＭＢＬ□□Ｓｈｏｏｔｅｍ」

　サフィニアの髪かみが強風にあおられたようにひるがえった。

　銀色の杖全体から放射されたのは光の線だった。

　光の線は千鳥ヶ池をまっすぐ切り裂さいて突き進み、だが、鳳凰の間の手前で、見えない手に振ふり払はらわれたかのように拡散して消えた。

　その結果がサフィニアの意図したものだとは思えない。

　蠅たかり姫が万眼王によって阻はばまれたように、あの光線もまた防がれたのか。

「──つ、疲つかれました……すみません……」

　がっくりと膝ひざをつきそうになったサフィニアを、すかさず髭ひげが支えた。

　その瞬しゅん間かん、まるで今まで雨がやんでいて、また降りだしたかのようだった。

　天候をも圧あつ倒とうする蠅たかり姫と万眼王との──いや、サフィニアと、おそらくベティとの対決だったわけだが、これから始まる決戦はどのような様相を呈ていするのか。何が、誰が待ち構えているのか。いったいどうなってしまうのか。自分はそのときどうするのか。マリアローズはフードをとって両手で頬ほおをぴしゃりと叩いた。気合いを入れる。余計なことは考えない。忘れろ。そのときはそのときだ。

「髭、サフィニアを抱かかえて僕の後ろに！　あとはそのまま！　トマトクン、ＺＯＯはいつでもいけるよ！」

「七番突とつ撃げき隊！　焔ホムラ隊長、前総長、その他、多くの同志たちの弔とむらい合戦だ！　死ぬときは背中を向けるな！　前のめりで死ね！」

「十二番遊撃隊！　義のために生きて戦い、死に花は義の名のもとに咲さかせなさい！」

　七番突撃隊隊長チェス・ピード、十二番遊撃隊隊長シャルロット・リンデが激しく部下たちを叱しつ咤た激げき励れいした。

　トマトクンはちらりと全員を振り返って大剣で前方を示した。

「──よし、千鳥ヶ池を押し渡って鳳凰の間に突入する！　全員俺につづけ……！」

　まず先頭のトマトクンが千鳥ヶ池に足を踏ふみ入れた。ＺＯＯではピンパーネルがそれにつづいた。マリアローズとカタリがその次だった。番人たちも、ぞくぞくと蠅の死し骸がいやら蛆うじやら妙みような液体やらで汚よごれた千鳥ヶ池に進入していった。

　千鳥ヶ池は広いが浅い。深さはせいぜい八、九十サンチだ。鳳ほう凰おうの間が建っている浮うき島しまには橋も渡されているが、ここからでは遠いし、池が浅いので使うまでもない。

　およそ五十メーテル。

　長い距きょ離りではない。

　マリアローズはザブザブバシャバシャ汚お水すいをかき分けはね上げて走りながら、正面、鳳凰の間だけでなく、ときに右斜ななめ前方から右斜め後方にも目を配った。

　それが人間なのか、夜ナイト魔メア・犬ハウンドなのか、数がどれくらいかは判然としないが、敵てき影えいらしきものはあった。それはそうだろう。敵の本丸はすぐ目の前にある。ずいぶん目立つこともした。

　だが、見たかぎりでは、鳳凰の間周辺をＳｍＣの連中が埋うめつくしているという感じではない。それどころか、鳳凰の間の周りにはひとけがないようにさえ見える。奇妙に静かだ。敵影にしても、チーム・ウルフの存在に気づいて近づいてこようとしているのか、遠ざかろうとしているのか、どうも動きがはっきりしない。指揮系統が乱れているのか。それにしても、もう少し厳重に警備されていてもおかしくないような気がする。

　一瞬、何とも表現しがたい嫌いやな感じがしたのは、口の中に池の水が入ってしまったせいだけではないだろう。マリアローズはペペペッと水を吐はきだして唇くちびるの周りをぬぐった。ＳＩＸは本当に、あの警備の薄うすそうな鳳凰の間にいるのか。

しかし、杞き憂ゆうだったようだ。

チーム・ウルフは鳳凰の間の裏手から侵しん攻こうしつつあるので、建物自体の玄げん関かんなどは反対側まで回りこんだ場所にあるはずだ。

たぶん、彼らは建物の中で待機していて、そこから出てきたのだろう。

さっきサフィニアに対たい抗こうした魔ま術じゅつは、一階の窓か二階の露台バルコニーからでも使ってみせたのか。

鳳凰の間の左右から、まったく統一感のない格好をした一団がばらばらと裏手側に出てきた。

二十、いや、三十人以上いるだろうか。

もうトマトクンは千鳥ヶ池を渡りきろうとしている。

鳳凰の間までは十五メーテルといったところだ。

マリアローズは唇を嚙かんだ。畜生シツト。やっぱりか。やっぱりこうなるのか。

こうなるような気がしていなかったわけではない。この予感はどうしても否定できなかった。そのことに対する自分の思い、感情も、結局、今の今まで整理しきれていない。なるようになる。わからないものはわからない。実際、そうなったときに、状じよう況きようにあわせて対処するしかない。そうやって、深く考えることを回かい避ひしてきた。

雨。

強い雨だ。

空は東の果てが少しだけ、ほんのわずかに明るくなっただけだ。

やつの黒衣は闇やみに溶とけこみながらも、やけにくっきりと周りの風景から浮うき上がって見えた。

あの薄うす青あお色の瞳ひとみは、今、僕を映しただろうか。

やつは微笑ほほえんでいた。

マリアローズにはかつて一度も向けられたことのない、冷たい笑えみだった。

そして、やつは飛び上がるように駆かけだして──

消えた。

速い。

とっさにトマトクンとピンパーネルが反応しようとしたが、そのときにはもう、やつはチーム・ウルフの左斜め前まで移動していて、そこからさらに、跳とんだ。

くる。

たった一人で。

マリアローズはとっさに叫さけんだ。

「──耳をふさいで……！」

即そく座ざに自分の耳を両手で押さえたが、考えてみれば利き手に剣けんを、反対の手に盾たてを持ち、兜かぶとをかぶって完全武装している番人たちには無理な相談だ。やつもそれを考こう慮りよに入れていたのかもしれない。せめて、ＺＯＯの皆みなは指示に従ってくれたと思いたいが、確かく認にんできたのはトマトクンとピンパーネルだけだった。トマトクンが右みぎ肩かたで右耳を、左手で左耳をふさぎ、ピンパーネルが雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を持ったままの手を耳にかぶせ──カタリはトマトクンと同様にやつの武器の正体を知っているので、おそらく大だい丈じよう夫ぶだと思うが、ユリカは。髭ひげは。まだ髭に抱かかえられているはずのサフィニアは。

確かめる前に、やつは七番突撃隊の外側、前から三番目くらいにいた番人の肩の上に飛び乗っていた。

やつの左手が番人の兜をあっという間に剝はぎとり、右手の泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーが無情に振ふり下ろされた。

番人の頭頂部に。

　今、捧ささげられたのだ。〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟リン霊レイが手ずから千人の戦せん闘とう奴ど隷れいムサドを殺して作り上げたという魔導王時代の秘宝、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーに、彼の命が。

　マリアローズは耳をふさいでいたし、距きょ離りもあったので聞きとれなかったが、やつは囁ささやきかけたはずだ。

「Scream, baby.」

　甘く愛を語らうように。

　泣き叫べ、と。

　泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーは、あまねく地上の名前のある負の感情、名前のない負の感情を溶かしてかため、声という形で表現した千人分の断末魔の叫びで、それにこたえた。

　その声は空気を振しん動どうさせ、鼓こ膜まくを震ふるわせて、脳を揺ゆるがし、心臓をわしづかみにして、涙るい腺せんを刺し激げきし、吐き気を催もよおさせて、不快感と嫌けん悪お感と驚きよう愕がくと衝しよう撃げきと絶望とで聞く者の胸をいっぱいにする。

　マリアローズは思いきり耳をふさいでいたので、かろうじて耐たえられた。だが、この生け贄にえを泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーはいたくお気に召めしたらしい。以前、二度ほど聞いたときより、その声はずっとひどかった。ひどいとしかいいようがなかった。ムサドたちが何を抱え、それらをどう奪うばわれて、すべてを失い、最大限の破は滅めつの果てに、どうやって命を絶たれたのか。ぜんぶとはいわないまでも、掌てのひら越ごしにその声を聞いているだけで、いろいろと伝わってきた。知りたくなどなかった。知らないでいた方がいいことが、世の中にはきっとたくさんあるのだ。

　不運なことに、知りすぎてしまった者たちが大勢いた。

　というか、番人は万ばん全ぜんの装備が不利に働いて、全ぜん滅めつだった。

　思わずその場にうずくまった者はまだマシな方だ。剣も盾も捨て、頭を抱えてのたうち回る羽目になった者がもっとも多い。死ん

だ者まではいないと思うが、気を失って千鳥ヶ池に倒たおれこんだ者、忘我状態に陥おちいって座りこんだ者はいくらかいたようだ。

　その災さい厄やくをもたらした黒衣の男は、生け贄にした番人の肩から飛び下がり、三回連続の後方宙返りの果てに、チーム・ウルフの先頭に位置するトマトクンから五メーテルほど離はなれた場所に降り立った。

　空を雷らい光こうがめちゃくちゃに引き裂さいて、天の怒ど号ごうが鳴り渡わたる。

　アジアンは泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーの切っ先をトマトクンに突つきつけた。

「──今、確信したヨ。やはりキミはボクにとって疫やく病びよう神がみだ。いずれにせよ、ここから先に行かせるわけにはいかない。退ひくか、死ぬか、選んでもらおう」

「どっちも好みじゃないな」トマトクンは前に出ようとしたピンパーネルを手で制して、大剣を担かつぐように構えた。「──選ぶとしたら、それ以外だ」

「それ以外とやらを選べると思っているのかい」

　アジアンが唇くちびるの端はしに酷こく薄はくそうな笑みを閃ひらめかせた。

　その表情を目にした瞬しゆん間かん、マリアローズは彼の異名の由来を知った。

　虐殺人形カーネイジ・ドール。

　精せい緻ちな作り物のように、不自然なほど端たん整せいで、ぞっとするほど美しい。

　彼の微び笑しようが恐おそろしいのは、残ざん忍にんさがにじみ出ているからではない。彼の体内に流れている血が冷たいわけでも、性質が無む慈じ悲ひなわけでもないのだ。

　彼はただ殺す。ピンパーネルのように殺すことで快楽を覚えるように条件づけられ、作られた殺人者ではない。明確な目的があれば、邪じや魔ま者ものを排はい除じよするために剣を振るうことを

ためらわないトマトクンとも違ちがう。彼はたぶん、殺すことを何とも思っていない。虫けらを駆く除じよするときほどの感傷も抱いだかずに殺す。少なくとも、見る者にそう思わせる。

　だが、人形の薄うす青あお色の双そう眸ぼうに、ある感情が揺らめいた。

「おめでたい男だ。本当に、心底、気に食わないヨ。その余裕ぶった口のきき方も。顔も。悪あく趣しゆ味みで無む駄だに仰ぎよう々ぎようしい格好も。これはボクの勘かん違ちがいかな……？　キミが消えれば、すべて丸く収まるような気がしてならない。最初からキミなど現れなければ──」

　マリアローズは我知らずかきむしるように胸を押さえていた。

　トマトクンがいなければ。

　あのとき、鉄てつ鎖さの憩いこい場で、トマトクンが現れなかったら。

　──どうなっていた？

　当然、ＺＯＯには入っていなかっただろう。もちろん、ＺＯＯの仲間たちと出会うこともなかった。それがいいか悪いかは別として、今ごろきっとまだしがない孤こ独どくな侵入者クラッカーで。メリクル迷めい宮きゆうあたりを中心に、毎日、アンダーグラウンドに潜もぐって、赤字だ黒字だと一いつ喜き一いち憂ゆうして。たまにむなしさに襲おそわれながらも、生きるためにはやむなしとあきらめて。

　だが、きっと、ちょっとヤケ気味になって地中砦とりでアヴァシーに挑ちよう戦せんしたりはしなかっただろう。もちろん、その帰り道にＳｍＣの馬ば鹿かどもに襲われるなんてヘマをすることもなく、アジアンに助けられることもなかったはずで──そのアジアンは、なぜかＳｍＣに与くみしていて、それなのに、ＳｍＣと褒つながりがあったらしい龍りゆう州しゆう人たちから、マリアローズを救おうとしたりして、事態は混迷していて、いったいどうして、何で、こうなってしまったのか。

　ただ、ＺＯＯに加盟していなければ、マリアローズが今日、この場に立つことだけは絶対になかった。

　それだけは紛まぎれもない事実だ。

　アジアンは心持ち顎あごを上げて、両目をすぼめた。

「キミさえいなければ、こんなことにはならなかった。キミは元げん凶きようだ。このあたりで禍か根こんを断たっておくべきかもしれないネ」

「お前が何を指してそんなことを言ってるのか、いまいちよくわからんが」

　トマトクンの重心がぐっと低くなった。

　本気だ。

　トマトクンは、やる気だ。

「俺にも背負っているものがある。抱かかえている思いもある。悪いが、はいそうですかとやられてやるわけにはいかんのでな」

「やられてもらおうとは思っていないヨ。キミを甘く見るつもりもない」

「ほう」

「手て抜ぬきでは自分に勝てない。たしかキミはそう言ったネ。忌いま々いましいが、ボクも同感だ。とっておきを一つだけ見せてやろう──」

　アジアンは泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを左手に持ちかえた。まさか、実は左利ききだったとか？

　そんなはずがない。アジアンは、何と、左手に持った泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーを、自分の右掌に突き刺したのだ。それも、ちょっと切っただけではない。刃はを貫かん通つうさせて、柄つかのところまで突き入れた。

　むろん、めちゃくちゃ痛そうだ。血もドバドバ出ている。けれども、アジアンは少し眉まゆをひそめただけだった。痛そうにしているのは、むしろアジアンではなく、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーだ。

　だが、剣けんが痛そうにするって？　でも、実際、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーは苦痛に身をよじっている。変形、というべきか。ＧＹＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＹＵＵＵＵＵＵＵＵＵＨと苦く悶もんの声をもらしているのは、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーの柄に浮うきでている、いくつものゆがんだ顔か。

　そいつらが、アジアンの血をすすっているかのようだった。

　その血を栄養分として、急速に成長するかのように、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーが形を変えてゆきつつあった。

「断末魔デスクライの剣・ソード……！」カタリの声は興奮のあまりうわずっていた。「泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーは、実は世を忍しのぶ仮の姿なんや！　断末魔デスクライの剣・ソードこそが真の姿……！　せやけど、あの剣は使用者の命を喰くろうてさらに敵の命を喰らう、魔剣中の魔剣！　まさしく諸もろ刃はの剣つるぎ……！」

「解説ありがとう、魚男」

　そう言ってアジアンが掲かかげた右手と泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーが、今や半ば同化していた。

　泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーがアジアンの右手をむさぼり食っているようにも、アジアンの右手自体が泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーと化しているようにも見える。

　どちらにしても、泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーはもう原形をとどめていない。とてもではないが短剣とはいえない、二メーテルを超こえる長さとなり、しかも、その毒々しい深紅色クリムゾンに染まった刃は何節にも分かれて、節ごとで自在に折れ曲がるようだ。

　それはもはや剣とさえ呼べないかもしれない。

　断末魔デスクライの剣・ソード。

　数多くの秘宝を自ら作り上げたというレディ・麟リン霊レイ、不死者となりそこねてＺＯＯに葬ほうむられた哀あわれな夢追い女王の最高傑けつ作さくの一つ。

　その真価を発揮する形態がそれだった。

「ボクは、ネ……」アジアンが右みぎ腕うでを振ふりまわすと、断末魔デスクライの剣・ソードはその動きにあわせて、鞭むちのようにしなった。「正直、戦いを心から楽しんだことは数度しかない。だが、キミが相手なら楽しめそうだヨ。なぜならボクはキミがとても嫌きらいだし、憎にくい。なおかつキミは手て強ごわそうだ」

「俺はべつにお前が嫌いなわけでも、憎いわけでもないんだがな」そう言いながらも、トマトクンは徐じよ々じよに間合いをつめにかかっている。「できることなら、戦いたくもない。俺の敵は、お前じゃない」

「そういう態度が……！」

　雷らい光こうとともに、先手を打ったのはアジアンだった。

　雷鳴。

　アジアンは一いつ瞬しゆんでトマトクンを射程にとらえ、断末魔デスクライの剣・ソードを横よこ薙なぎに一いつ閃せんさせた。トマトクンはこれを大剣で受けとめた。が、断末魔デスクライの剣・ソードは可変だ。あの剣身波打つ大剣の刃との衝しよう突とつに耐たえうる強度もあるようだった。断末魔デスクライの剣・ソードの剣先がグンッと曲がってトマトクンの顔面を襲おそおうとした。トマトクンは大だい胆たんにもこれを肩かたの装そう甲こうで弾はじいた。しかし完全には防ぎきれなかった。トマトクンの頰ほおに裂れつ傷しようが走り、血の筋が流れた。

「──嫌いだと言っている！」アジアンはトマトクンに息つく間も与あたえず、今度は腰こしを思いきり低めて断末魔デスクライの剣・ソードで足を狙ねらった。トマトクンはそれを予測していたようだ。跳とび上がって紙かみ一ひと重えでよけた──だけではない。あえて前に突つっこんでゆき、アジアンの頭めがけて膝ひざ蹴げりを繰くりだした。外れた。かわされたのだ。アジアンはトマトクンと位置を入れかえるようにぐるりと前転し、すぐに身を起こして、すくい上げるように断末魔デスクライの剣・ソードを振るった。下から突き上げてくる、しかも変化してくる斬ざん撃げきだ。ついでに、トマトクンは背を向けている。まずい。いくらトマトクンでも、あれはやばいんじゃないのか。

　だが、トマトクンは何とか地面に左足をついて体を振り向かせ、右手一本で振りまわした大剣を断末魔デスクライの剣・ソードにあ

てた。ただ、いかにも体勢が不十分だった。大剣がぶれる。断末魔デスクライの剣・ソードが伸のびてくる。トマトクンはのけぞった。髪かみの毛の数本くらいは持ってゆかれただろう。ギリギリの回かい避ひだった。そして、アジアンの攻こう撃げきの手はまだゆるんでいない。断末魔デスクライの剣・ソードは曲がるのだ。アジアンがすくい上げた右腕を今度は振り下ろせば、たった今、トマトクンの鼻先を通りすぎていった断末魔デスクライの剣・ソードが、今度は上から襲いかかってくる──そんな状じよう況きようで。

　トマトクンは躊ちゆう躇ちよせず前に踏ふみこんだ。

　断末魔デスクライの剣・ソードをよけるより、攻せめることを優先したとでもいうのか。

　トマトクンは左の拳こぶしでアジアンの頬をぶん殴なぐり、左足の回し蹴りを右の脇わき腹ばらあたりに叩たたきこんだ。

　それと同時に、断末魔デスクライの剣・ソードの刃がトマトクンの左肩にあたって曲がり、背中にザックリ食いこんでいる。

　馬ば鹿か力ぢからで蹴飛ばされた勢いで、アジアンがその右手と同化している断末魔デスクライの剣・ソードごと吹ふっ飛び、トマトクンの破れた外がい套とうが血にまみれた。

　断末魔デスクライの剣・ソードは、トマトクンの鎧よろいを破は壊かいするほどの威い力りよくを秘めているのだ。

　アジアンが左手で頬をさすりながら起き上がった。

「……だんだん面おも白しろくなってきたヨ。痛い思いをするのも久しぶりだ」

「痛いのが面白いのか。変わった趣しゆ味みだな」

　トマトクンは負傷を気にするそぶりも見せず、再び大たい剣けんを担かつぐように構えなおした。

　まだやるのか。

　当たり前か。

　途と中ちゆうでやめるはずがない。だって、これは戦争の一部

で、アジアンはＳｍＣ側についている。マリアローズたちＺＯＯは秩序の番人側で、トマトクンはデニス・サンライズの仇かたきを討うとうとしているのだ。

　でも、このままやらせておいていいのか。

　二人が戦いつづければ、必ずどちらかが勝って生き残り、どちらかが負けて死ぬ。あるいは、相討ちで二人とも死ぬかもしれない。それで本当にいいのか？

　マリアローズは周りを見た。

　番人たちはまだ悶もだえ苦しんでいる者が多く、どうにか動ける者は、気絶して千鳥ヶ池に沈しずんでいる同志を介かい抱ほうしようとしている。

　ＺＯＯは――ピンパーネルは身構えてはいるものの、最初、トマトクンに制止されたこともあってか、手出しはしないと決めているようだ。だいたい、ピンパーネルがトマトクンの命令に逆らうことはまずないし、主人の勝利を確信しているのかもしれない。

　カタリは黙だまって見守るというより、断末魔デスクライの剣・ソードと二人の決けつ闘とうに圧あつ倒とうされている様子だ。

　極限クライマックス九手棍ナインポールをきつく握にぎりしめているユリカは、何かきっかけがあれば飛びだしかねない。

　髭ひげは腕うで組ぐみをして静観の構えか。

　そのかたわらで、杖つえにしがみつくようにしてほとんどしゃがんでいるサフィニアは、ぶるぶる震ふるえている。あれだけ大きな魔ま術じゆつを立てつづけに使ったあとで、この状況だから、心身ともにかなりつらいだろう。

　だが、誰だれも止めようとしない。

　それは鳳ほう凰おうの間の前に展開している三十数名、おそらく昼飯時ランチタイムの連中も同じだ。その中には瞬間移動テレポート魔術の使い手、サフィニアの姉あね弟で子しにあたる魔導士ウイザードベティの姿もある。彼らも態度はさまざまながら、じっと自分たちの頭領マスターの戦いを見ているだけで、何もしない。アジアンにそう命じられているのか。あるいは、ただこの雰ふん囲い気

きにのまれているだけか。マリアローズだって、今の今まで観戦モードだったわけだが。

　おとなしく観戦している場合じゃないのに。

　──じゃあ、どうしろって？

「すぐに減らず口を叩けなくしてやるヨ」

　アジアンがゆっくり、じわじわと前進してくる。

　トマトクンは下がらない。前に出ることもしない。間合いに入った瞬間、大剣の一撃でしとめるつもりか。

「どちらかといえば、減らず口を叩いてるのは俺よりお前の方だと思うが」

「いいかげん冷静ぶるのはやめたらどうだ。ボクにはわかる。はっきりと見えるヨ。キミが心の奥底に閉じこめて、飼い殺しにしようとしている凶きよう暴ぼうな野や獣じゆうの姿がネ」

「幻げん覚かくでも見てるんじゃないか」

「怖こわいんだネ」アジアンは喉のどを鳴らすように低く笑った。「──自分自身がサ」

「ぬかせ……！」

　トマトクンが先に動いたのか、アジアンが先か。マリアローズには見えなかった。

　しかし、もしトマトクンが先だったとしたら、らしくないといわざるをえない。トマトクンは完全に待ちの態勢だった。とにかく素す早ばやいアジアンが出てくるのを待ち構え、居合いのように後の先をとって一撃でしとめる。トマトクンの狙ねらいはそれだったはずだ。

　アジアンの挑ちよう発はつに乗って戦術を変えたのか。つまり、自分自身が怖い云うん々ぬんのくだりが図星だったということか。そんなことなんて、今はどうでもいいが、トマトクンが大きく踏みこんで繰くりだした右上から左下に振ふり下ろす斬ざん撃げきは、ものすごい音を立てて空気を叩きつぶすように切きり裂さいたもの

の、アジアンに読まれていた。アジアンは一いつ瞬しゅんがら空きになったトマトクンの右側に身を滑すべりこませ、そこから断末魔デスクライの剣・ソードを──いや、違ちがう。

アジアンは何も持っていない左手を振った。そこから何か飛びだした。マリアローズは瞬間的に地中砦とりでアヴァシーでの出来事を思い出した。あの黒くて細い糸みたいな正体不明の物体が頭に浮うかんだが、そうではなかった。投とう擲てき用の小刀か、何か。暗器というやつか。殺傷力はたいしたことがないかもしれないが、フェイントとしては十分だった。トマトクンも引っかかった。というか、いくら何でも、顔面めがけて投げつけられたものをよけないわけにはゆかない。トマトクンはこれをかわすために前へ倒たおれこみ、その勢いのまま、アジアンがつづけざまに繰りだした断末魔デスクライの剣・ソードからも逃のがれた。が、前方に転がって、横に転がり、起き上がろうとしたところに断末魔デスクライの剣・ソードが飛んできて、また横っ飛びで逃にげる。その繰り返しだ。アジアンは反はん撃げきに転じる暇いとまをトマトクンに与あたえない。反撃どころか、少しでも反応が遅おくれれば、断末魔デスクライの剣・ソードはあやまたずトマトクンの急所をとらえるだろう。

このままでは、さすがのトマトクンも、いずれ疲つかれ果てて断末魔デスクライの剣・ソードの餌え食じきになってしまうのではないか。

マリアローズの胸を押さえる手にますます力が入った。歯は軋ぎしりみたいな音がする。自分が立てている音だった。もう見ていられないと思うのに目が離はなせない。何かするべきだと思うのにどうしたらいいのかわからない。

トマトクンが、負ける……？　アジアンに？

嘘うそだ。トマトクンが誰かに、何かに負けるなんて、今まで一度も考えたことがなかった。トマトクンだって人間だから、勝つこともあれば負けることもあるはずなのに。不思議と、そういう次元を超ちよう越えつした存在なんじゃないかと思わせるところが、トマトクンにはあった。いつからか知らないが、何の抵てい抗こう感もなくそう信じこんでいた。

間違いだったのか？　それとも、あの鬼き畜ちく変態のアジアンは、そのトマトクンをも超こえるほど、実はとんでもなく強かった

のか？　それこそ信じられない。

　でも、現実にアジアンはトマトクンを押している。押しまくっている。断末魔デスクライの剣・ソードは何度かトマトクンをかすめている。左の太ふと腿ももを。腰こしのあたりを。左の上じよう腕わんを。どれも致ち命めい傷しようではなさそうだが、かすり傷とはいえそうもない。トマトクンは徐じよ々じよに傷だらけになって、泥どろにまみれてゆく。アジアンはさらにトマトクンを痛めつけようと動きを速める。移動が。断末魔デスクライの剣・ソードが。時折、放たれる暗器による牽けん制せいが。どんどん速度を増してゆく。

　しかし、マリアローズはふと気づいた。

　一見、アジアンがトマトクンを追いつめつつあるように思える。けれども、さっきまでたまにトマトクンをとらえていた断末魔デスクライの剣・ソードけんが、あたらなくなってきてはいないか。今や暗器は先読みされたように楽々と回かい避ひされている。トマトクンは慣れてきているのだ。というよりも、トマトクンも速くなってきている。そして、ついに──

　頭を狙ってきた断末魔デスクライの剣・ソードを、それまでより遠くに跳とんでよけたトマトクンは、着地するなり大たい剣けんをぐっと引きつけて、鋭するどくコンパクトに振り下ろした。

　標的は、すぐさま追撃してきた断末魔デスクライの剣・ソードだった。

　命中した。

　しかも、トマトクンは叩たたき落とした断末魔デスクライの剣・ソードを、何と左足で踏ふんづけた。その瞬間、あたり一面を照らしだした稲いな光びかりで、トマトクンの横顔がはっきりと見えた。ズガガガガゴオオンと轟とどろいた雷らい鳴めいより、トマトクンの表情の方がマリアローズを驚おどろかせた。

　トマトクンは黄玉トパーズの目を見開いて、歯を剝むき出し、唇くちびるの端はしをつり上げて、笑っていた。

　心底から楽しそうに。

　だが、「楽しい」という言葉があてはまるとはどうしても思えな

い。

　むしろ、快。

　狂きよう喜き。

　そういった表現の方が似つかわしい。

　トマトクンはそれから、さらに右足で断末魔デスクライの剣・ソードを踏みにじり、大剣を下から上へ振りまわした。むろん、ただ振りまわしただけではない。トマトクンの大剣は雨を吸ってやわらかくなった地面をとらえていた。土を抉えぐり、それを打ちだしたのだ。

　当然、でかい土のかたまりが襲おそったのはアジアンだった。右手と同化している断末魔デスクライの剣・ソードをトマトクンに押さえられているアジアンは、対応しきれなかった。いや、アジアンが身をかわそうとした瞬しゆん間かん、トマトクンが左足を一度浮かせ、また断末魔デスクライの剣・ソードを踏んで、その動きを妨ぼう害がいしたのだ。

　まあ、土があたったくらいではどうということもないわけだが、トマトクンは断末魔の剣の上を一歩一歩進みながら、土のかたまりをアジアンに浴びせつづけた。これは真剣勝負だとわかっていても、その光景はどこか滑こつ稽けいで──そのぶん、アジアンにとってはさぞかし屈くつ辱じよく的だったろう。同時に、トマトクンはやはり楽しんでいるようにしか見えなかった。

　何かの拍ひよう子しでどちらかが死んでしまうような戦いのさなかで。

　命のやりとりをしているのに。

　こんなもの、単なる殺しあいにすぎないのに。

　トマトクンはあっという間にアジアン自身を大剣の間合いにとらえた。

「──アジアン……」

　マリアローズは思わずやつの名前を呟つぶやいてしまい、そのときやつがとった行動に目を瞠みはった。

アジアンは左手の暗器で自分の右手を切り落としたのだ。

そうして断末魔デスクライの剣・ソードを失うかわりに自分の体を自由にし、瞬しゆん時じにトマトクンの懐ふところに飛びこんで、その顎あごに強きよう烈れつな頭ず突つきを見み舞まった。

ただ、トマトクンの顎はかなり頑がん丈じようだったようで、アジアンの額もパックリ割れた。しかも、トマトクンはぐらりとすることもなかった。すかさずアジアンをつかまえようとしたが、アジアンだってそこまでノロマじゃない。ほとんど密着した状態から、トマトクンの頬ほおを左手の暗器で斬きりつけようとしてかわされ、すかさず鳩みぞ尾おちのあたりに膝ひざ蹴げりを入れて、反動をつけて飛び下がってすぐ、暗器を捨てて断末魔デスクライの剣・ソードを左手で拾い上げた。それを、横よこ薙なぎに振ふるった。

断末魔デスクライの剣・ソードは絡からみついた。

今まさに、アジアンに振り下ろされようとしていたトマトクンの大剣に。

アジアンは唇に伝い落ちてきたおのれの血を舌先で舐なめとった。

そして、笑った。

それはさっきトマトクンが見せた表情と同じ種類の笑えみだった。



「とうとう本ほん性しようを現したネ。キミも好きなんだろう、殺しあいが……！」

「それがどうした」

　トマトクンがアジアンの問いかけを否定しなかったとき、マリア

ローズの中で何かが決けつ壊かいした。

　たしかに、二人は楽しいんだろう。実際、二人は嬉き々きとして戦っている。マリアローズは彼らほど強くないから、強さ比べをしてスリルを味わう楽しさがわからないだけなのかもしれない。戦うことに愉ゆ悦えつを覚えるのは、彼らのような強者だけに与あたえられた特権なのかもしれない。マリアローズはたぶん、そんな境地には一生達することはできないだろうし、その意味では彼らを理解することは絶対にできないのかもしれない。でも、だけど。

　きみたちが楽しいのは結構だけど、僕はまったく、これっぽっちも楽しくなんかない。

　だって、戦って、どっちかが勝って、どっちかが負けたら、死ぬんだ。死んじゃうんだよ。

　トマトクンか、アジアンか。

　もちろん、トマトクンが死ぬなんて嫌いやだ。トマトクンは仲間だ。大切な、決して失いたくない、仲間だ。

　けど、アジアンが死ぬのだって──本当は、嫌だ。

　どうしてとか、なぜとか、理由とか、よくわからないけど、とにかく嫌だ。

　特に、この二人が殺しあってどちらかが、もしくは両方死ぬなんて、僕はごめんだ。

　だから、マリアローズは偽劫火を抜ぬいて走った。

　そもそも、互たがいの武器を封ふうじあって、今は睨にらみあっている二人をふくめ、誰だれも動かないこの状じよう況きようが、何だかとっても不自然で異常じゃないか。

　マリアローズが全力ダッシュで二人の間に突っこんでゆき、トマトクンの大たい剣けんをとらえている断末魔デスクライの剣・ソードに向かって偽劫火を振り下ろすと、「マ……え……？」アジアンが断末魔デスクライの剣・ソードを手て許もとに引きよせて、「──お」トマトクンも大剣を引き、両者、飛びすさって三メーテル以上の距きよ離りをとった。

　マリアローズはその中間に立って、まずトマトクンを睨みつけた。

　トマトクンはきょとんとしている。

　つづいて、アジアンに向きなおった。

　アジアンはポカンとしていた。

　マリアローズはそのアジアンに偽劫火の切っ先を突きつけた。

「これ以上やるっていうなら……僕が相手になるよ」

「な──」「おい、マリア、お前──」

「トマトクンは黙だまってて」マリアローズはアジアンから目を離はなさなかった。「──もうやだ。我が慢まんの限界だ。きみたちが戦ってるところなんて見たくない。心臓に悪くて悪くてたまらないよ。きみたち二人も死にそうだけど、僕だって死んじゃいそうだ。何で僕がこんな思いをしなきゃならないのさ？　きみたちみたいなバトルマニアのせいで、どうして僕が胸を痛めなきゃならないわけ？　僕はね！　きみたちみたいに図太くないんだ！　繊せん細さいなんだ、心やさしい良心的な一小市民なんだ、メンタル的にしごくまっとうなんだ、きみたちみたいに頭がイカれてないんだ！　でも……そんなきみたちが戦ってるのを見てると、何かもうよくわからないけどつらいんだ！　こんな思いをするくらいなら、いっそのこと、僕が戦ってやる！」

「だっ……いや、マ……って、ちょ、ちょっと待ってくれヨ、ええと、アレ……？」アジアンは目を白黒させて、マリアローズとその後ろのトマトクンを交こう互ごに見た。「だ、だいたい、戦うといったって、だヨ……いくら何でも、キミじゃあ……」

「僕じゃ力不足だって？　そうだね。僕がきみと戦って勝てるはずがない。だったら、僕を殺せばいいよ。僕はきみの敵なんだ。きみだって言ってたじゃないか。お互い別々のクランにいれば、敵対することもあるって。そうなって欲しくないけど、そうならざるをえないなら仕方ないって。仕方ないっていうのはつまり、こういうことなんだろ」

「それは──」

　アジアンは絶句して苦く悶もんするように顔をゆがめた。

　その表情を見た瞬間だった。

　マリアローズはようやく自分が何をしようとしていたのか悟さとった。

「でも」

　そうだ。

　できない。

　そんなこと、僕には無理だ。

　マリアローズが地面に放った偽劫火を、アジアンが目で追った。

「──僕は、やっぱり……きみとは戦えない。明日はどうかわからないよ。一時間後だって知らない。だけど、今の僕は、たとえきみに殺されるだけだってわかっていても、戦ったりできない。僕の剣にはきみを傷つける力なんかないかもしれないけど、そんな剣でもきみに向けたくない」

　アジアンだって、きっといろいろこみ入った事情があって、ＳｍＣに荷か担たんしているのだろう。それに対して、自分は感情論で物を言っているにすぎない。自分の行動は何の解決にもならなくて、かえって事態をしっちゃかめっちゃかにするだけかもしれない。そのことは、たぶん、マリアローズもわかっていた。

　しかし、少なくとも、ぶちキレてついついやってしまったわけではない。

　薄うす青あおい瞳ひとみで偽劫火をじっと見つめているアジアンが、何を考え、何を決断するのか。黙って待っている間も、マリアローズの中に後こう悔かいの念はひとかけらも浮うかんでこなかった。

　そうかといって、これでよかった、正しかったとも思わない。

　ただ、間ま違ちがいだったとしても、マリアローズにできることは他ほかになかった。

　━━こんなことしかできない僕が。

　馬ば鹿かみたいだと思う。笑ってしまうどころか、泣きたい気分だ。

　でも、涙なみだをこらえて僕は答えを待ってる。できることが一つしかないなら、それをやるまでだ。やってみてダメだったら、そのときは泣けばいいし、悔くいればいい。

　雨は降りしきり、風も強いのに、なぜか静かだった。

　どれくらい時間が経過しただろう。マリアローズにはよくわからない。気にもならなかった。

　不意に、遠くの方で何かが動く気配がした。

　それは歓かん声せいなのか、怒ど号ごうなのか、足音なのか、剣けん戟げきの音なのか、もっと漠ばく然ぜんとした空気の動きか、そのすべてか。

　泉セン里リの正門がある方向だろうか。いや、正門より近いかもしれない。

　突とつ然ぜん、アジアンが右みぎ腕うでを抱かかえてしゃがみこんだ。

「イタタタタタタタタ」

「……え。あっ……」

　マリアローズは思わずアジアンに駆かけよりそうになったが、さすがにそれはやめた。

「━━いや、これはそうとう痛ァァいヨ？　少し調子に乗ってしまったかな？　いくらボクでも、右手なんかぶち切れば痛いに決まってる」アジアンはしゃがんだまま顔を上げて、マリアローズを上目づかいでちらりと見た。「痛いんだけどなァ。すっごく痛いヨ。痛くてたまらない。是ぜ非ひとも誰だれかに介かい抱ほうしてもらいたいところだネ、これは……」

「アジアン！」

　すると、昼飯時ランチタイムの中から、やたらと背が高くて黒いフリフリの女性用ナース・医術士服ユニ（？）を着ている金きん髪ぱつの医術士（？）と、皮革製らしいぴったりした白の女性用ナース・医術士服ユニ（？）を身にまとっている小こ柄がらだがやけに肉感的な医術士（？）が飛びだしてきた。

「──ヴィクトリアにナツコか。キミらに介抱してもらいたかったわけじゃないんだが」

「ご、ごめんなさい……わたし、気がきかなくて……」

「何言ってるのぉ。こぉんなヒッドーイ怪け我がしてさぁ。きゃあぁ、マジ痛そーなんだけどぉ。血が出てまくっちゃってるしぃ。あー、ダメダメ、姉さん、ナツコがやるからぁ。これはちょっと姉さんに任せらんないかもぉ」

　どうやら、背の高い方がヴィクトリアといい、肉感的な方がナツコというらしく、二人は姉し妹まいなのかもしれず、二人とも医術士のようだ。

　だが、アジアンは治ち療りようしようする二人をむげに振ふり払はらって、事もなげに立ち上がった。

「とにかく、そういうわけで、ボクはもう戦えそうにない。とはいえ、頭領マスターのボクが後ろに引っこんで、他の連中にだけ働かせるのはいかにも心苦しいし──」

「よく言う……」「てめえ、いつも厄やつ介かい事は他人任せのくせしやがって！」「うむ」「嘘うそつきよくないル！」「そうだそうだ！」「アジアン、一回でいいからナツコとやろー！」「ちょ、ちょっと、ナツコちゃん……」「どういう脈みやく絡らく？　穴女はこれだから……」「んだコラァ？　ナイチッチが調子こいてんじゃねえぞ？」昼飯時ランチタイムの連中から激しいブーイングが起こったが、アジアンは気にするそぶりも見せず、マリアローズの後ろに視線を送った。

「この超最低ＳＵＣＫな猿さる芝しば居いも、そろそろ幕切れが見えてきたみたいだしネ」

「──そういうことか」

　答えたトマトクンは、すでに大剣を背中に戻もどして顎あごを撫

なでていた。

「それならそうと、最初から言っておいてくれれば、俺も手心を加えたんだが」

「手心……？　そんな必要がどこにあるんだヨ」

　アジアンは冷れい笑しようして首を振る仕草をしてみせた。それにうなずいてこたえたのは、ベティと、左右非ひ対たい称しようの奇き妙みような服を着ている白はく髪はつで悪相の男、それに、上半身裸はだかで仮面をかぶった巨きよ漢かんだった。

「─ボクはキミが本当に大だい嫌きらいだ。キミさえいなければと本気で思っている。だいたい、キミはまだ力を出し切ってない。目覚めかけていた野や獣じゆうは、結局、眠ねむったままだ。その意味でいったら、キミは手加減していたじゃないか」

「そういうわけじゃないんだがな。それに、これを手加減というなら、お互たがい様だろう」

「フフッ。とことん気に食わない男だヨ」

　アジアンが顎をしゃくってみせると、呆あつ気けにとられるほど迅じん速そくに、しかも整然と昼飯時ランチタイムが動きはじめた。数秒で隊列を組み、チーム・ウルフを迂う回かいして、竹林の方向へ進もうとしているようだ。完全に、前もって想定されていた行動としか思えない。

　そして、いきなり鳳ほう凰おうの間の二階から飛び降りてきて、隊列に襲おそいかかろうとした何ものかの出現についても、彼らは予測していたのか。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　アジアンと同じく、隊列に加わっていなかったベティが、腰こしから剣を抜ぬいて呪じゆ文もんを詠えい唱しようした。

　爆ばく雷らい索さく。サフィニアも得意としている要素魔ま術じゆつだ。剣から発せられた幾いく条もの雷いかずちが、何ものかをとらえた。それは人間のようだった。全員、黒っぽい装そう甲こう服を着ていて、一人ではなかった。たくさんいた。ベティの爆雷索が感電させたのは、そのうちの三分の一くらいで、残りは昼飯時ラ

ンチタイムの他の連中があっという間に薙なぎ倒たおしてしまった。

　だが、この戦場から、どういうわけか立ち去ろうとしている昼飯時ランチタイムに危害を加えようとした者は、それだけではなかった。

　突然、アジアンが左手に持った断末魔デスクライの剣・ソードを、頭上に向けて振りまわした。

　何かを弾はじく音がして、地面に落ちた物を見ると──あれは、何本もの、釘……？

「怖こわい怖い」アジアンは振り返って、鳳凰の間の最上階を仰あおぎ見た。「だが、さすがにこの状じよう況きようでは、キミもＳＩＸのそばから離はなれられまい」

　マリアローズには、アジアンが何を言っているのか、いまいちわからなかった。ただ、最上階の露台バルコニーには、スーツ姿の老ろう獪かいな鷲わしめいた人でなし──ジェイがいて、ものすごい形相でアジアンを見下ろしていた。

　要するに、キミとはジェイのことか。

　ジェイは忌いま々いましげに何か呟つぶやきながら手すりを蹴けって、露台から建物の中へと姿を消した。

「さよならだ、ジェイ。できればキミとは二度と会いたくないネ」

　その姿を見送ったアジアンは、どこか楽しげにそう呟くと、昼飯時ランチタイムの隊列を追ってゆっくりと歩きはじめた。

　ベティがアジアンの後ろにつこうとして、思いなおしたようにサフィニアに近づいた。

「サフィニア。もう少し上手に魔力を使うすべを覚えなさい。でも、蠅はえたかり姫と万眼王を送そう還かんしたあとに、お姉様直伝の白魔術をぶっ放してきたあたりの判断はなかなかだったわよ。あたしだから防げたけどね。せっかく才能があるんだから、それに溺おぼれずに精進なさいな」

「……は、はい……」

「今度、ヌー・ベイルに行ってケーキでも食べましょう」

　ベティはそう言って軽くサフィニアの肩かたを叩たたいてから、マリアローズに向きなおった。その視線が、なぜだかチクリと痛かった。ベティは微笑ほほえみさえ浮うかべているのに。

「たまたま今回は、土ど壇たん場ばで状況がうまく転んだからよかったけど──いつかあなたとあたしたちを天てん秤びんにかけなきゃならなくなったら、あいつ、どうするのかしらね」

　唐とう突とつすぎて、一いつ瞬しゅん、よく意味がわからなかった。

　何とか理解して、何か答えようとし、でも、返事のしようがないじゃないか。ベティは困こん惑わくするマリアローズに「See-Ya.」と手を振ってみせ、小走りでアジアンについていった。

　遅おそまきながら、番人たちが昼飯時ランチタイムに追いすがってゆこうとしたのはそのときだった。

「よせ」だが、これはトマトクンが制した。「去ろうとしているやつらを相手に、無む駄だな犠ぎ牲せいを出す必要はない。それに、連中は手て強ごわいぞ」

「ですが」チェス・ピードが反論しようとして、すぐにやめた。「……わかりました。指揮官はあなたです、トマト殿どの」

　そんなやりとりがあって、チーム・ウルフがすみやかに態勢を立てなおそうとしている間も、マリアローズはちらちらとアジアンの背中に目をやっていた。理由、というほどのものはない。何となく気になっただけだ。まあ、拍ひよう子し抜けしたような部分もあった。その気持ちを言語化すれば、僕に挨あい拶さつくらいしていってもいいのに、という感じにでもなるだろうか。

　べつに、声をかけて欲しかったというわけじゃなくて。礼れい儀ぎというか。

　まったくの見も知らない他人ではないのだし、戦いを止めるきっかけを作ったのはマリアローズで、あのままやりあっていたら、やつは死んだかもしれないし、そうすると、マリアローズが命の恩人ということになるわけで。

　そういう次し第だいで、マリアローズはアジアンの後ろ姿が小さくなってゆく過程を何度にもわたって確かく認にんしていたのだが、馬ば鹿か馬ば鹿かしい。もういいかげんやめよう。

　そう心に決め、最後にもう一度だけ目を向けたときにかぎって、なぜかやつは狙ねらったように立ち止まって振ふり返った。

「またネ。マリア」

　久しぶりに名前を呼ばれた。

　だからどうした、ということもないが。

　マリアローズは短くため息をついて、拾い上げた偽劫火を鞘さやに収めながら、誰だれにも聞こえないように口の中で呟いた。
「……またね」

　これでうまく収まったのか、そうでもないのか、よくわからないが。

　今は退ひいたとはいえ、アジアンの昼飯時ランチタイムが泉セン里リを制圧して番人を殺したのは事実だし、さっきだって泣き叫ぶスクリーミング短剣・ダガーの生いけ贄にえにされた番人が一人いたのだ。番人にしてみれば、今後も昼飯時ランチタイムと友好的な関係を築くことは難しいだろう。また、その頭領マスターであるアジアンと、個人的に親しい──いや、そんなことは断じてないのだが、そう見えても仕方ない行動をとったマリアローズも、あまりいい感情は持たれていないに違ちがいない。

　かといって、そんなことをくどくど考えていてもしょうがない。

　情勢も変化していた。

　アジアンがイタタタタとしゃがみこんだときに感じた気配が近づいてきている。

　それも、急速にだ。

　あのときは余よ裕ゆうがなかったこともあって、はっきりとはわからなかったが、あれは紛まぎれもなく大規模な戦せん闘とうの気配だろう。チーム・タイガーが正門を突とつ破ぱして泉セン里リになだれこみ、鳳ほう凰おうの間に迫せまろうとしているのだ。

　アジアンが言った。「この超最低ＳＵＣＫな猿さる芝しば居いも、そろそろ幕切れが見えてきたみたいだしネ」と。それを受けてトマトクンが「そういうことか」と返した。つまり、そういうことなのだ。

　アジアンはこの戦いは秩序の番人が勝つと判断した。だから、土壇場でＳｍＣを裏切った。その裏切りを許すまいと、ＳｍＣが昼飯時ランチタイムを攻こう撃げきし、ジェイがアジアンに釘を投げた。昼飯時ランチタイムはこれをしりぞけ、逃にげていってしまった。

「よし」ユリカの治ち療りようを拒こばんだトマトクンが、一名の死者をのぞいて隊列を整えなおしたチーム・ウルフの全員を見み渡わたした。「指示がないかぎり、俺より前には絶対に出るな。何があるかわからんからな。ピンプは俺の横につけ。あとは各隊に任せる」

「七番、承知！」「十二番、了りよう解かいしました」

「了解！」マリアローズはサフィニアが自力で歩けそうなので、髭ひげに前へ出るよう身振りで示した。ピンパーネルがトマトクンの補ほ佐さに回ったぶん、髭には馬鹿でかい体をいかして、せいぜい盾たてになってもらわなければならない。そうした考え方ができるのは、マリアローズが平常心をとりもどしつつあることの証しよう拠こだろう。

　実際、ずっともやもやしていた部分が晴れたような気分だった。あとはもう余計なことは一いつ切さい考えなくていい。目の前の戦いに集中するだけでいいのだ。

「行くぞ……！」

　トマトクンが力強くそう告げて走りはじめたとき、千鳥ヶ池の向こうから番人が一人駆かけよってきた。重装備の番人にしてはずいぶん足どりが軽い。どうやら二十五番無名隊の者のようだ。その番人はトマトクンと併へい走そうして何事か耳打ちすると、またどこかへ走り去っていった。おそらく、チーム・タイガーの動向を報告しにきたのだろうが、内容はどうあれ、もう連れん絡らくがつく距きよ離りにいるのだ。

　敵の本丸、この鳳凰の間の近くに。

　当然、味方だけではなく、やがて敵もこの場所に集結することになるだろう。しかし、やはり、ＳｍＣはまるで統とう率そつがとれていない。それに、一号区会戦以後、連中は昼夜を問わず飲めや歌えの大おお騒さわぎをずっと繰くり広げていたという。この奇き襲しゅうを予想していたにせよ、そう簡単に気持ちを切りかえられるとは思えない。

　何しろ、やつらは所しよ詮せん、悪たれで不ふ摂せつ生せいでろくでなしのならず者どもなのだ。対人戦闘の専門家ではあるが、それは番人たちだって同じだ。

　そして、多くの悪党に共通する性質が一つある。

　基本的にやつらはいじめっ子体質で、弱きに強く、強きに弱い。勝っている間は強気だが、劣れつ勢せいになると脆もろい。もちろん、そうではない連中もいるだろうが、一号区会戦に参加したＳｍＣ七百人のうち、刺いれ青ずみ組と呼ばれる加盟一年以上の古参は半数にも満たない。他ほかは、いわばＳｍＣブームに乗ってエルデンーの悪党を気どりたいがために、ちょっと熱いのを我が慢まんして焼印を押してもらっただけのクソ野郎モウフオどもだ。吹ふけば飛ぶような烏う合ごうの衆しゅうにすぎない。

　そうした雑ざ魚こどもは、きっとチーム・タイガーに押しまくられ、命惜おしさに逃げまどって、いい具合に戦場を混乱させていることだろう。

　そのせいもあって、ＳｍＣの中ではマシな部類に入る連中も、戦線を維い持じできなくなる。最終的には、鳳凰の間まで退いてこざるをえなくなるはずだ。

　ただ、それはそれで厄やっ介かいなことになる。一箇か所しよに戦力が集中してしまえば、数の差でＳｍＣが有利だからだ。

　今回の作戦の主眼は、そうなる前にチーム・ウルフがＳＩＸを討うってしまうことにある。

　本当は、蠅たかり姫で鳳凰の間ごとＳＩＸをぶっつぶしてしまえれば一番よかったのだが、残念ながらそれは叶かなわなかった。

　あとはもう、鳳凰の間に乗りこんでＳＩＸを斬きるしかない。ＳＩＸを殺やれば、ＳｍＣは確実に崩ほう壊かいする。

そう。これが最後なのだ。

僕の剣はさして役に立たないかもしれないけど、きっと何かできることがある。僕にも手があって、足があって、頭を働かすことができる。この胸にはちっちゃな勇気だってしまってある。仲間たちに少しずつわけてもらった勇気が、僕を突つき動かしている。

「突入……！」先頭のトマトクンが鳳凰の間一階の窓に大剣を叩たたきつけて、格こう子し状の窓まど枠わくから硝子ガラスから何から、すべて粉々に破は壊かいした。「──行け、ピンプ！」鋭するどく命じられたピンパーネルは、壊こわれた窓から建物の中に突っこんでゆき、トマトクン自身もそれにつづいた。髭もひょいと中に飛びこんでいったが、窓の下か端たんは地面から一・二メーテルくらいの高さにある。全備重量が重い番人たちが多少苦労しているなか、猫ねこのように軽けい捷しようなマリアローズと、半魚人なのに猿さるみたいに身軽なカタリは軽々と鳳凰の間に侵しん入にゅうして──拍ひよう子し抜ぬけした。

もぬけの殻からだった。

仕切りの障子を取っ払ぱらわれているせいで、広さは十二メーテル四方ほどもあるだろうか。そこかしこに器うつわや酒さか瓶びんなどが散乱し、壁かべや床ゆかや天てん井じようは溶剤塗料ペンキやら血のようなものやらで汚よごされているが、トマトクンたち以外の人間の姿は見あたらない。

「上に行くぞ！」トマトクンは、だが、止まらなかった。ピンパーネルを引き連れて三段飛ばしで階段を上ってゆき、すぐに髭がつづいて、カタリがその後ろについた。マリアローズはユリカとサフィニアがちゃんと建物の中に入ってきたのを確かく認にんして、「階段は一段飛ばしまでだよ！」念のため、ユリカにそう注意してから皆みなを追った。番人はやや遅おくれている。マリアローズのあとに七番突とつ撃げき隊のチェス・ピード他数人、そして、ユリカ、サフィニア、それからまた七番突撃隊といった感じだ。

そうしていち早く二階に到とう達たつしたトマトクンが、上から怒ど鳴なった。「いない！　上だ！」マリアローズも自分の目でがらんとした二階を確認して、すぐさま三階へと向かった。そろそろ三階まで上がったはずのトマトクンは何も言ってこない。だが、足音以外の物音もしない。事実、三階にも敵はいなかった。じゃあ、四階は。まさか──どういうことだ？　マリアローズは足を動かしな

がら眉まゆをひそめ、掌てのひらで顔をぬぐった。ちょっとだけ心臓が苦しい。これは全速力で階段を駆け上がっているせいだけだろうか。「上だ！」四階から響ひびいてきたトマトクンの声は、若じゃつ干かん苛いら立だっているように聞こえた。

　これで残すは五階のみ。

　トマトクンはまったく速度をゆるめることなく、そのままの勢いで五階に達したようだ。

　静かだった。

　やはり、ＺＯＯと番人たちの足音や息づかい以外は何も聞こえない。

　マリアローズもカタリを追い抜いて五階に上がり、十二メーテル四方の部屋を見まわした。

「……いない」

　どうして？

　ＳＩＸは最初から鳳ほう凰おうの間にはいなかったのか？　情報は間ま違ちがっていた？　だが、ジェイは間違いなく最上階の露台バルコニーからアジアンを見下ろしていた。ついさっきのことだ。あの露台も、ちゃんとある。最上階は、正門がある方向とその逆の裏側、壁の二面に露台があって、ジェイがいたのは裏側の方だ。裏側の障子は開け放たれていて、そこから風雨が吹きこみ、正門側の障子は締しめきられている。

　また、ＳＩＸが好みそうな気色の悪い内装に変えられた室内には、明らかに少し前まで人のいた形けい跡せきがあった。どのくらい前か、判然とはしないが、酒瓶や飲みかけのグラス、床についた正体不明の液体のしみなどは、そう古いものではないだろう。

　さらに、トマトクンが匂においを嗅かぐ仕草をして、うろんげに部屋の中に目を配っている。

「──糞くそ忌いま々いましい匂いが、たしかにするんだが……」

　その匂いとやらは、たぶんいわゆる匂いとは違う。トマトクン独自の感覚に由来するものだと思うが、今回についていえば、マリア

ローズも何となくわかる。近くにいるという感じがする。

　あるいは、この部屋の雰ふん囲い気きがあやしすぎるせいだろうか。

　まず、照明が下の階とは異なっている。天井は格こう子し状で、その上に天てん井じよう板を張る構造のようだが、四階までの天井板には美しい装そう飾しよく絵えが描えがかれていた。ところが、五階の天井板ときたら、網あみ目め状の金属か何かの黒い板だ。照明装置はその向こうに設置されているらしい。しかも、その照明が、揺ゆれ動いているというか、回転しているのか。そのせいで、網目を通して射さしてくる光が絶えず変化しつつ奇き妙みような陰いん影えいを形作り、目はちかちかするし、何だか変な気分になってくるしで、もう最悪だ。吐はき気がする。

　カタリは部屋の隅すみに置かれたソファをひっくり返したりしているが、そんな場所に隠かくれられる程度のミニチュアサイズの人間が相手なら、そもそも苦労はしていないだろうし。

　だいたい、そうじゃない。

　気にするべきは、おそらく、そこじゃない。

　ゆっくりと部屋の中央くらいまで進んでいったトマトクンも、マリアローズと同じことに思いあたったようだ。

　トマトクンは床をじっと見つめてから、天井を振ふり仰あおいだ。

「──トマトクン、上……！」

　マリアローズはとっさに叫さけんだが、たぶん役には立たなかっただろう。正直、上と言ってはみたものの、何が起こるか予想もつかなかった。ただ、そこに何かがいるということだけはわかった。天井裏に誰だれかがいる。マリアローズとトマトクンは、そいつの影かげに気づいたのだった。

「ＢＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ……！」

　そして、そいつは、奇き声せいを発しながら網目状の天井板をぶち抜き、トマトクンめがけて落ちてきた。

何だ？　黒い。人？　でかい。たぶん、人だろうが、逆立ちしているような体勢で━回転している？

そいつの着ている黒い服か鎧よろいか何かの模様だろうか、黄色い線が螺ら旋せんを描いていた。やつは巨きよ大だいな錐きりだった。超ちよう高速で落下してくる黒と黄色の凶きよう暴ぼうなドリルだった。ドリルは猛もう然ぜんとトマトクンに襲おそいかかった。トマトクンに突つき刺ささり、貫つらぬき、五体バラバラのグチャグチャにしようとしていることは明白だった。やつには明確な意志があった。殺意といいかえてもいい。やつは最初からトマトクンを狙ねらっていたに違いない。殺そうとしていた。壊こわそうとしていたのだ。

本当に紙かみ一ひと重えだった。ギリギリすぎて、トマトクンは大たい剣けんを振りまわしてやつをぶった斬ぎることはできなかった。突きだして串くし刺ざしにする余よ裕ゆうもなかった。かろうじて大剣を立てて胸もとに引きよせ、剣の平でやつを受けとめただけだった。

それはドリルの最さい先せん端たんだった。やつの、手━ではないだろう、やつは両手に何らかの武器を装着していて、それがドリルの先端と化していたのだと思うが、とにかくバチバチバチバチ火花が散った。人間を金属の鎧ごと軽々とまっぷたつにしても瑕きず一つつかない、トマトクンの大剣が、だ。トマトクンの強固な鎧をあっさり斬り裂さいたアジアンの断末魔デスクライの剣・ソードとぶつかりあっても、刃はこぼれした様子のない大剣が、今、削けずられていた。

人間ドリルによって。

いや、人間なのか？　あれが人間業わざなのだろうか？

「━おおおおぉぉっ……！」

それでもトマトクンは、何とか大剣ごと体をよじってドリル野や郎ろうを後ろにそらした。ただ、やつは上から落ちてきたので、後ろというと床ゆかだ。ドリル野郎は床に突っこんだ。回転は止まらなかった。急には止められないものなのかもしれない。もしくは、止まる気がないのか。いろいろな物がドズガガガガガガンと抉えぐられて、バリガリバリガリねじり壊されて、飛び散った。ドリル野郎は一いつ瞬しゆんで床に大穴をぶちあけた。穴の直径はゆうに二

メーテル以上あった。トマトクンのすぐ足あし許もとだった。もっと正確にいえば、トマトクンの足場もふくんでいた。これではさすがのトマトクンも立っていられない。ドリル野郎の突とつ撃げきをどうにか受け流したあとで、そもそも体勢が十分ではなかったせいもあった。「――トマトクン……！」

　トマトクンは穴に落ちた。

　むろん、ドリル野郎はトマトクンより先に落ちている。

　というか、ドリル野郎は、ドリルとして生まれついてドリルとしての生をまっとうすべくドリル生命に賭かけて突とつ貫かんしつづけ、ドガドガガシャバリズガガガガガンと下の階の床も次々とぶち抜ぬいているようだった。そんな音が聞こえた。

　でも、ドリル野郎？　――って、何がドリル野郎だ。考えるまでもないじゃないか。あんな馬ば鹿かげた芸当、普ふ通つうの人間には不可能だ。普通じゃない人間、焔ホムラに首をちょん切られても平然としていた化物が、ここにはいるはずで、そいつを殺やるためにきたわけで。

　そうだ。

　□□ＳＩＸ……！

　マリアローズは慌あわてて穴に駆かけよろうとした。ピンパーネルも、髭ひげも、カタリも、ユリカも、サフィニアも、ほとんど同時に動いた。番人たちは一いつ拍ぱく置いてＺＯＯにつづこうとした。皆みな、口々にトマトクンを呼んだり、何かよくわからないことを叫んだりしていたと思う。

　だが、マリアローズはすぐに足を止めた。ものすごくびっくりして、焦あせってはいたのだが、どこか冷静な部分が残っていたのかもしれない。それは、たぶん、使命感とか義務感に似ていた。剣や魔ま術じゆつではろくすっぽ敵を倒たおすことのできない僕が、何も考えられなくなって、頭の中が真っ白になってしまったら、本当に役立たずだ。それはやだ。ダメだ。絶対にダメだ。

　だから、こんなときこそ、マリアローズは目を見開いて、耳の穴をかっぽじって、何が起こっているのか、何が起ころうとしているのか、できるだけ正確に知らなければならない。

「みんな下がって！　上だ！　まだくる……！」

　網あみ目め状の天てん井じよう板は一枚板ではないようだ。

　それらが持ち上げられて外され、あるいはずらされようとしていた。

　天井裏にはまだ誰かがいるのだ。まだいるどころか、かなりの人数がいそうだ。

　そいつらが、部屋に下りてくる。

　黄と青と紫むらさきの防護服を着ている者たちや、黒い防護服で全身をすっぽりと覆おおっている者たちが、天井板を支えていた木製の格こう子しを蹴け破やぶって、どんどん飛び降りてくる。

　その中に、やつがいた。

　ジェイ。

　やつは音もなく床に降り立つ直前に、目にもとまらぬ速度で両手を振った。飛んでくる。釘ネイルだ。一本ではない。十本。それ以上。わからない。「……伏ふせて！」マリアローズはそう叫びながら床に身を投げだしたが、効果があったかどうか。遅おそかったかもしれない。さすがに被ひが害い状じよう況きようを確かめる余裕はなかったけれども、いくつか悲鳴も上がった。

　もっとも、悠ゆう長ちように反省なんかしている場合ではない。マリアローズは反撃を優先した。床に転がりながら、五、六メーテル先にいるジェイの顔面に狙いをつけて、右みぎ籠こ手ての矢を放ったのだ。三連射。もとより命中するとは思っていなかった。回かい避ひされるに決まっている。そんな迂う闊かつな相手ではないだろう。実際、そうなった。ジェイは首をひねって一射目をかわし、二射目はたまたまそっちの方向へ飛んだので、少し体全体を曲げてよけた。三射目は大きく外れた。

　だが、マリアローズはそれで稼かせいだわずかな時間を有効利用して身を起こし、すぐ近くにいた髭の巨体の後ろに逃にげこんだ。
「ピンパーネル！　ジェイを……！」

　すかさず素す早ばやく周りを見ると、一いつ緒しよに床に伏せていたらしいユリカとサフィニアが立ち上がりかけたところだった。

カタリはちゃんとすぐそばにいた。ピンパーネルは他のＳｍＣには目もくれないでジェイに飛びかかっていった。番人たちの中で釘ネイルを食くらって負傷した者は五人か、六人か、それ以上か。あとはもう、ＳｍＣが突っこんできているし、応戦する番人たちの隊列もめちゃめちゃだしで、状況を把は握あくするといっても、これでは限界がある。トマトクンがどうなったのかも気になる。

　何だか頭の中がグチャグチャになってしまいそうだが、落ちつけ、落ちつくんだ、さまざまなことがいっぺんに、たくさん起こっているだけで、一つ一つをとってみれば、べつに複雑じゃない──はずだ。こんがらかった結び目みたいなものだ。ほどいてしまえば一本になる。

　ゆっくり、少しずつほどいてゆく時間なんかどこにもなくて、時間が経たてば経つだけ、もっともっと絡からみあってしまいそうなのが、難点ではあるけれど。

「──って、髭！　血が出てる……！」

「粉フンッ！」と気合い一発、掌しよう底ていの一撃で一人のＳｍＣを塵ごみ屑くずみたいに吹ふっ飛ばした髭の腕うでや胸に血がにじんでいる。髭は鳳ほう凰おうの間に入ってからレインコートを脱ぬぎ捨てていたので、暗青灰色スチールブルーと黒の僧そう服ふくを汚よごす赤が痛々しかった。ジェイの釘ネイルがあたったのか。

　しかし、髭は意に介かいする様子もなく、別のＳｍＣに鉄てつ拳けんを見み舞まって顔面を粉ふん砕さいし、さらに別のＳｍＣの頭頂部に手刀をめりこませ、挙句の果てには低い姿勢から「──覇ハァッ……！」とすさまじい勢いで両掌を相手の腹部に叩たたきこみ、ぶっ飛んだそいつに何人ものＳｍＣが薙なぎ倒された。それでさすがにＳｍＣどもも怯ひるみ、髭の周りが無人になった瞬間だった。

「拙せつ僧そうの筋肉を舐なめるでない！」

　いや、誰だれも舐めてないって──と、ツッコミを入れる間もなかった。髭は叫さけぶなり胸の前で左右の手をあわせ、両足でダンッと床ゆかを踏ふみしめた。

　すると、飛びだした。

　左ひだり上じよう腕わんと右胸の傷から、釘ネイルが一本ずつ。

　二本の釘ネイルはきれいな放物線を描えがいて床に落ちた。

「健全なる精神は健全なる筋肉に宿る！　スーパーハイレヴェルな知性もまた然しかり！　マッスル、マッスルッ！　グワハハハハハハハハハハハアァァッ！」

「ダメだ、こいつ……」マリアローズは再びＳｍＣに躍おどりかかってゆく髭はもう放ほうっておいて、ユリカとサフィニアの無事を確かめた。ユリカはサフィニアの安全を考えてのことだろう、やや位置を下げている。髭ひげの暴走もあって、ＳｍＣは押され気味だし、大だい丈じよう夫ぶそうだ。ただし、マリアローズ自身はそれほど安全でもなかった。

　横合いから、殺気。

　一いつ瞬しゆん、肝きもが冷えたけれども、「──ボケッ！　ボサッとしとらんと……！」そうだ。マリアローズには半魚人のボディガードがいるのだった。マリアローズに突つっかかってこようとしていた黒ずくめのＳｍＣは、あと一歩のところでカタリのイノイチ、ロノニーを側頭部と肩かた口ぐちに食らって床に沈しずんだ。「ちっとは気ぃつけえ！」

「うっさい、それはきみの役目だろ！　僕には僕のやることがあるんだ！」

　でも、あるのか？　本当に？　この混こん沌とんとした状況で、僕なんかに何が？

　はっきりいって、勝っているのか負けているのかもよくわからない。髭は敵のまっただなかに突っこんで暴れまくっているが、何しろ最初の印象よりも相手の数が多いようだ。三十、四十ではたぶんきかなくて、それ以上。こっちも三十人以上いるわけで、部屋は十二メーテル四方くらいだから、かなり混雑している。姿の見あたらないピンパーネルとジェイは、どこに行ったのか。二人で心おきなく戦える場所を求め、露台バルコニーにでも出たのか。

　だが、そもそも勝ち負けを考えるなら──

「こんなことやってても……！」

　意味がない。たとえこの場所を制圧したとしても、それでただちに勝負が決まるわけではないのだ。大おお袈げ裟さにいえば、今、ここで行われている戦せん闘とうなんて、番外編みたいなものだ。

　ＳＩＸだ。

　やつを殺さなければ終わらない。

　それなのに、ＳＩＸを巡めぐる戦いの行方ゆくえがさっぱりわからない。

　どうする？　どうしたらいい？　ＳＩＸはトマトクンに任せておけばいいのか？　しかし、下の階に落ちたトマトクンがどうなったのかも判然としない。どこまで落ちたのかさえ不明なのだ。まあ、ＳＩＸも戻もどってこないので、二人はどこかで戦っているのだと考えたいが、それだって推測にすぎない。

「──えーい、決めた！　髭！　カタリ、ユリカとサフィニアも！　下に！　トマトクンを追うよ！」

　マリアローズは言うが早いか踵きびすを返して駆かけだした。いつも最前列には出ないで指揮をとる十二番遊ゆう撃げき隊のシャルロット・リンデとすれ違ちがいざま、「ここはお願い！　僕らはＳＩＸを殺やるから！」そう伝えたつもりだが、了りよう解かいしてくれたかどうか。返事も待たずに階段に飛びこみ、カタリが横に、ユリカとサフィニアがすぐ後ろについていることだけ確かく認にんすると、三段飛ばしで降りた。次は四段飛ばした。「ユリカとサフィニアは無理しないで……！」注意を与あたえながらも、瞬またたく間に四階。「髭は！」「──おるぞ！」ちらりと四階を見まわしたが、天てん井じようと床に穴があいているだけで、誰もいない。じゃあ、三階だ。三階にもいなければ、二階へ向かうまでだ。途と中ちゆうでカタリがこけて二階までガダダダダダダンと滑すべり落ちたが、マリアローズはすぐにその襟えり首くびをつかまえて引っぱり起こした。「この馬ば鹿か魚ざかな！」二階にもいない。ということは、一階か。ちらりと振ふり返ると、髭が右腕でユリカを、左腕でサフィニアを抱かかえて、ひょいひょい階段を降りてくる姿が目に入った。「……馬鹿力」そんなことはどうでもいい。一階だ。マリアローズは体の柔じゆう軟なん性とすばしっこさにだけは少し自信がある。体力だって、伊だ達てに地上百五十四メーテルの高層寺院屋上に住んじゃいない。マリアローズはそれほど息も切らさずに一階にたどりついた。

「──外だ……！」

　一階は天井と床に大穴があいているだけでなかった。そこらじゅうが瑕きずだらけだった。血の跡あとらしきものもあった。さっきは散らかっていたものの、破は壊かいされた形けい跡せきは窓以外なかったので、トマトクンとＳＩＸがここで戦ったのは間違いないだろう。

　しかし、ＳＩＸ、ドリル野や郎ろうは、あの勢いのまま一階の床までぶち抜ぬきやがったのか。

　とんでもなくふざけた話だが、それはそれとして、玄げん関かんの扉とびらが開け放たれていた。

　というか、打ち壊こわされて扉の残ざん骸がいと化していた。

「トマトクン……！」

　マリアローズはその残骸から飛びだした。捜さがすまでもなかった。

　トマトクンは、いた。

　ＳＩＸもいた。

　二人は、泉セン里リの各所から退ひいてきたのだろうＳｍＣ兵どもと、それを激しく攻せめ立てている番人たちを前にして、一いつ騎き打ちを演じている最中だった。

「Ｒａａａａａ！　Ｕｒａａａａａａ！　Ｈｙａａａａａａａ……！」

　黄色の稲ライ妻トニン模グパタ様ーンが悪あく趣しゆ味みな黒いボディスーツを身にまとったＳＩＸは、両手首のあたりから垂れさがっている何本もの長いすだれのような物体をさかんに振りまわしていた。見た目はただの紐ひものようだが、そうではないらしい。それらはむしろ、巨きよ大だいな爪そう牙がのごとき威い力りよくを秘めているようだった。実際、前後左右へ逃にげまわるトマトクンをとらえられず、地面をかすめた紐は、ぞっとするような爪つめ痕あとを残していた。

　しかも、左右あわせて十本以上あるだろう紐は、長さが不ふ揃ぞ

ろいだった。中にはＳＩＸの身の丈たけより遥はるかかに長いものさええある。あれだとそうとう軌き道どうや間合いが読みづらいはずだ。おそらくそのせいで、ＳＩＸが攻めて、攻めて、攻めまくり、トマトクンは反撃に転じることができずにいるのに違いない。

　だが、どうだろう。

　見たかぎりでは、ＳＩＸよりアジアンの方が速かった。トマトクンは最初、アジアンに翻ほん弄ろうされかけていたけれども、徐じよ々じよにその高速に適応していった。

　マリアローズは信じて疑わなかった。

　トマトクンはいくつもの手傷を負いながら、読みづらいＳＩＸの攻こう撃げきを読むために、じっと耐たえているに違いない。

　そのときは必ず訪おとずれる。絶対に。

　そう遠くないうちに――

「うむ」

　そして、まるでマリアローズに同意を示すように、髭ひげがうなずいた瞬しゆん間かんだった。

　それまで最小限＋αくらいの動きでＳＩＸの紐をかわしつづけていたトマトクンが、タッ、タッ、タッ、と大おお股またの三歩で十メーテルほども距きよ離りをとった。

　そこから今度はＳＩＸにまっすぐ突つっこんでゆく。

　これっぽっちの躊ちゆう躇ちよも感じられない、捨て身の特攻とも思える突とつ進しんだ。

「ＨＡ……！」当然、ＳＩＸはトマトクンを迎むかえ撃うつために、両りよう腕うでを振り上げて、振り下ろした。「何のつもりだァッ！　バ――――カァァッ！」十本以上の紐はそれぞれが意思を持つ別の生き物みたいに動き、一いつ斉せいに、といってもバラバラに、さまざまな角度から、いろいろな速度で、トマトクンに襲おそいかかる。

　これは、とうていよけきれない。

　マリアローズは生なま唾つばをのみこんだ、といいたいところだが、ただ目を見開いて見ていることしかできなかった。

　ちゃんと見ていたのだが、正直、はっきりとは見えなかった。

　ただ、そのとき、トマトクンの全身鎧よろいを飾かざっている炎模様ファイヤーパターンがぼんやりと光り、波打つ大たい剣けんの刃はが輝かがやいたことだけは間違いない。

　トマトクンは、ＳＩＸの手前約三メーテルの位置で急停止したかに見えた。ＳＩＸの紐がトマトクンの体に触ふれたようにも見えた。

　が、目の錯さつ覚かくだったようだ。

　次の瞬間、トマトクンは空中にいた。とうとうＳＩＸの間合いを完全につかんだのか。「があああああああぁぁぁ……！」トマトクンは咆ほう哮こうし、間合いのギリギリ外側で獲え物ものに襲いかかる猫ねこ科かの獣けもののように跳とび上がって、回転し、速度と重量のすべてを大剣にのせて、振り下ろしすというよりも叩たたき下ろした。

　爆ばく発はつしたような音がした。

　──外れた。

　トマトクンの大剣がとらえたのは地面だった。ＳＩＸは斜ななめ後ろに飛び下がって、トマトクンの渾こん身しんの一撃をかわしていたのだ。「──Ｋｕ……！」しかし、まだだった。トマトクンは即そく座ざにＳＩＸを追って大剣をはね上げた。ＳＩＸは尻しり餅もちをついて何とかこれをやりすごしたが、その横っ面つらにトマトクンの豪ごう快かいな左の回し蹴げりが炸さく裂れつした。「Ｂｕ！」ＳＩＸの巨きよ軀くが吹ふっ飛んでゴムマリみたいに弾はずんだ。もちろん、トマトクンはそれで終わりにせず、さらに追撃し、ＳＩＸは転げまわって逃げた。臆おく病びよう風かぜに吹かれたみたいに「ヒィッ！」と情けない悲鳴すらもらした。

　それにもかかわらず、ＳＩＸはどこか不ふ真ま面じ目めというか、必死さが感じられない。トマトクンに背中を向けて四つん這ばいで逃げまどうときでさえも、何だか他人をおちょくっているような風ふ情ぜいがある。

　だが、そんなＳＩＸを、トマトクンは倦うむことなく、手を抜ぬかず、追いかけ、ときに追いつめ、取り逃のがしながらも、執しつ拗ように攻せめつづけた。

　はたから見ればトマトクンが圧あつ倒とう的に優勢だ。

　もしかしたら、この一騎打ちの様子も影えい響きようしたのかもしれない。

　ようやく明るくなってきた鳳ほう凰おうの間前で、今の今まで秩序の番人のチーム・タイガーを支えていたＳｍＣ兵の一角が崩くずれ立った。それも、鳳凰の間がある浮うき島しまに渡わたされた橋の真ん前、ＳｍＣ側にしてみれば、ちょうど戦せん陣じんの中央部分だ。

　その先頭に立って、デニス・サンライズから受け継ついだ豪ごう刀とう「日輪」も、銀色の鎧も、短い黒くろ髪かみも、傷きず痕あとのある顔も、全身返り血まみれになっているのは、二代目総長〝死神〟羅ラ叉サだった。

「ＳＩＸ……！」羅ラ叉サは軽々とＳｍＣの首をはね飛ばした日輪の切っ先で、怨おん敵てきＳＩＸを示した。「──同志たちよ！　ここが死に場所と知れ！　悉ことごとく殺して死ね……！」

「応！」「応──ッ！」「応ッ！」「応！」「応──ッ！」「応！」「応！」「応──ッ！」

　羅ラ叉サの呼びかけにこたえて、番人たちが一気に大攻勢をかけた。それはもう、番人が得意とする集団突とつ貫かん攻撃の域を逸いつ脱だつしていた。わけのわからない雄お叫たけびを発しながら、前後の見境なく、剣と盾たてをおのれの体の一部とし、死に物狂ぐるいでとにかく体当たりを食くらわせる。はね返されても、再度体当たりを敢かん行こうする。バランスが崩れても、転んでも、たとえ敵の剣で貫つらぬかれても、お構いなしだ。ぶつかって、突き崩して、踏ふみにじって、ひたすら前進して、猛もう進しんする。恐おそれをなして逃にげ腰ごしになった敵も容よう赦しゃしない。かといって、正面から向かってくる敵と区別もしない。目の前にいるすべての敵に死を。

　ただ死を。

　死だけを。

　すぐに、秩序の番人の中央に右う翼よく部隊がつづいた。左翼の部隊もＳｍＣの陣列をぶち抜いた。ただ、番人たちが払はらった犠ぎ牲せいも少なくはなかった。ＳｍＣを突破できた番人の数はそれほど多くない。死は一方だけにもたらされたわけではなかった。双そう方ほうにおびただしい死傷者が出ていた。

　しかし、秩序の番人の優位はおそらく揺ゆるがないだろう。

　ＳｍＣはすでに潰かい走そうしかけていた。

　それもやむをえまい。肝かん心じんのＳＩＸが、トマトクンに追いまわされてヒィヒィ言っている始末だ。首領マスターがこのざまでは、必死になって戦うのも馬ば鹿からしい。同じことが秩序の番人で起きたらどうかわからないが、ＳｍＣの悪党連中ならきっとそう考える。

　しかも、彼らは袋ふくろ小こう路じに追いこまれているわけではない。逃げ場はいくらでもある。要するに、ＳＩＸを見捨てて、鳳凰の間から離はなれてしまえばいいのだ。

　そうして蜘く蛛もの子を散らすように逃げてゆくＳｍＣどもの間から、羅ラ叉サをはじめとする番人たちが、ぞくぞくと飛びだしてきた。

　戦場はまだ両軍入り乱れて混こん沌とんとしているが、番人たちは皆みな、仇きゆう敵てきＳＩＸに殺さつ到とうしようとしていて、ＳｍＣは首領マスターＳＩＸから遠ざかろうとしている。意思と進行方向がまったく逆に向いているため、ぶつかったり、すれ違ちがうことはあっても、もうほとんど斬きりあいには発展しない。その中で、たまに他の者を突つき飛ばしたりぶった斬ったりして周りを巻きこみながら、トマトクンとＳＩＸがもつれあうように戦っている。

　正直、この状じよう況きようで何をするべきか、どう動けばいいのか、マリアローズには判断がつかない。だが、トマトクンとＳＩＸはかなり広こう範はん囲いにわたって動きまわっている。鳳凰の間の入口近辺で黙だまっていられる気分ではなかった。

「チーム・タイガーと合流しよう！」そう仲間たちに告げて、一番

目立つ羅ラ叉サがいる方へ走りだしたとき、頭の隅すみに引っかかりを感じた。何だろう。走りながらも、すごく気になる。忘れていることがあるような──と、頭上を何かの影かげが横切った。それは少し離れた場所に落ちた。五ご重じゆうの塔とうの一番下の屋根あたりから落下してきたのか。

「──ピンパーネル！」

　忘れていたことって、これだったのか。

　落ちてきたといっても、ちゃんと片かた膝ひざをつくような姿勢で着地を決めたピンパーネルは、レインコートはズタズタだし、いつも後ろで縛しばっている髪はほどけているし、額や頬ほおだけでなく、身体からだ中傷だらけだった。

　おそらく、今までずっと、露台バルコニーやら屋根やらでジェイと戦っていたのだろう。ピンパーネルは珍めずらしく険しい面おも持もちで、今、自分が落ちてきた屋根の方へ目をやっている。ということは、ジェイをしとめたわけではないのか。

　見れば、たしかに、屋根のへりに立ってピンパーネルを見下ろしている男がいた。

　ジェイ。

　やつもまた、自じ慢まんのスーツが台無しだった。それどころか、これまた自慢の鷲わし鼻ばなはひん曲がり、左ひだり腕うでにはかなりの深手を負っているようだ。その負傷のせいか、下に降りてくる様子はない。

「ピンパーネル、もうジェイはいいから……！」マリアローズが呼ぶと、ピンパーネルはすぐに駆かけつけてきて、ユリカとサフィニアの後ろについた。「じゅいぶん怪け我がをしているわ。大だい丈じよう夫ぶ？」「はイ。動けマス・問題ナい」「ピンプは我が慢まん強すぎやで……」

「──マリアローズ！」

　さらに、息つく間もなく新しい出来事が起こる。

　女の声がして、振ふり返ると、混戦を抜けて橋を渡ってきたベアトリーチェだった。

「無事だったか！」

「きみも」答えながらも、マリアローズは周囲に目を配ることを忘れない。ベアトリーチェは数人の番人と一いつ緒しよで、羅ラ叉サの姿も十メーテルくらい向こうに見える。ヨハンもその近くにいた。琺瑠フオールらしき番人の姿も確かく認にんできた。雨は依い然ぜんとして降りつづいているが、あたりは次し第だいに明るくなってきている。こうしてある程度、遠くまで見み渡わたせるようになってみると、累るい々るいと横たわる屍しかばねの数に慄りつ然ぜんとせざるをえない。

　しかし、とにかく、トマトクンとＳＩＸだ。

　トマトクンとＳＩＸは互たがいに攻こう守しゅを入れかえながら、とはいえだいたいトマトクンが優勢で、今は戦いの場を千鳥ヶ池の中に移している。

　羅ラ叉サたちの一隊が二人に近づこうとしているようだが、さすがにＳＩＸも大人数で囲まれたくないのか、逃げる。「──Ｈｉ□Ｈｙａｈ……！」どんどん逃げる。まるで水みな面もを駆けているかのようだ。トマトクンはどうにかついていっているものの、番人たちは突き離はなされる一方だ。「おのれ……！　追え！　やつを逃がすな！」羅ラ叉サが、ヨハンが、琺瑠フオールが、その他の隊長らが大声で叫さけび、生き残りの番人たちが橋の向こうから、またはこちら側から、あるいは橋から千鳥ヶ池に飛びこんで、何とかＳＩＸを包囲しようとしているが──極きよく端たんな言い方をすれば、俊しゅん足そくの豹ひようを多数の亀かめが追いかけているようなもので、どう考えても無理だ。つかまえることなんてできそうもない。

　結局、トマトクンしかいないのか。

　だが、足の速さでいえば、トマトクンがＳＩＸを凌りよう駕がしているわけではなさそうだ。

「……わたしが……！」

　と、サフィニアがローブから何やら触しよく媒ばいをとりだし、杖つえを両手で握にぎった。一時は立っているだけでもつらそうだったが、ようやく魔ま術じゆつを使えるくらいまで回復したらしい。

　マリアローズたちは、ベアトリーチェらと一緒に橋の前まできている。千鳥ヶ池の中にいるＳＩＸまでは、どれくらいだろう。二十メーテルといったところか。もっと離れているかもしれない。

　とにかく、サフィニアの魔術のあと、全員でトマトクンを掩えん護ごして──そうだ、ピンパーネルなら、敏びん捷しようさでいえばトマトクンより上だし、こうなると、厄やつ介かいそうなジェイに手傷を負わせておいたことは──

「あ」

　違った。

　そうじゃなかった。

　忘れていたことは、ジェイじゃなくて。

　ちょうどマリアローズがそのことに思い至ったときだった。

　ＳＩＸが急に方向転てん換かんし、猛もう然ぜんと鳳ほう凰おうの間めがけて駆けだした。それから一秒もしないうちに、サフィニアが呪じゆ文もんを詠えい唱しようしはじめようとして、マリアローズは鳳凰の間を振り仰あおぎ、忘れていた人物を見つけた。

　やつは。

　五重塔のてっぺん、一番上の屋根の上から、何らかの魔術によるものか、白はく髪はつをなびかせながらゆるやかな速度で降下してきた。

　降り立った先は、ジェイの隣となりだ。

　ジェイはまだ一番下の屋根のへりに立っていた。

　──死霊術士ネクロマンサー。

　だが、マリアローズはあの死霊術士ネクロマンサーがもともといた場所、つまり、五ご重じゆうの塔とうの一番上の屋根に目を奪うばわれていた。会議のときに確認した図面では、そこには梯子はしごを使わなければ登れない小さな鐘しよう楼ろうがあるだけだったはずだ。大陸東部には、正月の前夜に百いくつだか鐘かねをつく風習があるらしくて、そのためだけに設しつらえられた鐘楼で、他ほ

かには何もないはずで。

　だったら、あれは何だ。

　屋根の上に、筒つつみたいな物体を抱かかえた人間がいる。何人もいる。たぶん、十人はいる。

　鳳凰の間は結構高いので、しかとは見えないのだが。

　しかし、彼らの中に混じって、右手を高々と挙げている、スーツを着た灰色の髪かみの男は──

「盾たて、構えぇぇ──────っ……！」

　マリアローズはとっさに声を限りに叫んだ。何度か耳にしている番人の命令の出し方を自然と真ま似ねしてしまったようだ。直後に恥はずかしくなって赤面してしまったが、恥ずかしがっている場合ではなかった。「……マリアローズ？」不思議そうに首を傾かしげたベアトリーチェを怒ど鳴なりつけた。「早く！　急いで！　鳳凰の間の上から──」途と中ちゅうでたいへんなことに気づいた。

　盾なんか、僕は持ってない。それはもちろん、マリアローズだけではなく、ユリカもサフィニアもカタリもピンパーネルも髭ひげも同じだ。「……やば、どうしよ……」

「みんな、盾を鳳凰の間の頂上に向けろ！」マリアローズがうろたえている間に、ベアトリーチェも事情を察したようだ。「マリアローズ、わたしの後ろに！　他の人たちも──」マリアローズはありがたくベアトリーチェの厚意にすがることにした、と思う。ＳＩＸはどこまで移動しただろうとか、トマトクンは気づいているだろうかとか、ＺＯＯの皆みなはちゃんと番人たちの盾に守ってもらえるだろうかとか、瞬しゅん間かん的にさまざまな事こと柄がらが頭の中を駆かけめぐったが、現状を目で確かく認にんする余よ裕ゆうはとてもなかった。自分が意図したとおりに動くことができたかどうかもよくわからなかった。

　雨とともに、回転式ラニング連発弩フアイヤの矢が降りそそぎはじめたからだ。

　マリアローズは気がつくとベアトリーチェの腰こしのあたりにしがみついていた。バツバツバツバツバツンバツン。盾に矢があたる音だろう。それが恐おそろしくて恐ろしくてたまらなかった。マリ

アローズにいろんな恐きよう怖ふを味わわせる音だった。ただ、なぜか、自分が死ぬかも、とは考えなかった。ベアトリーチェは大だい丈じよう夫ぶなのか。しのぎきれるのか。けれども、マリアローズはベアトリーチェに庇かばってもらっているだけだ。見まわして仲間の無事を確かめることくらいできるはずだ。でも、目をつぶってしまう。開けようとする。怖こわい。目をつぶっていても、怖い。いっそ耳もふさいでしまいたい。その逡しゆん巡じゆんは、だが、実際には一瞬だったに違ちがいない。

「ユリカ……！　サフィニア、カタリ、ピンパーネル、髭……！」「はい！」「おう！」「はイ」「うむ……！」サフィニアの声が聞こえなかった。心臓が止まるかと思ったが、横に目をやると、大おお柄がらな番人の背中に、ユリカと絡からまるようにしてちゃんとサフィニアが身をよせていた。声が小さかっただけか。カタリはユリカとサフィニアの足にしがみつく格好でいる。体勢的にちょっとどうかと思うが、人間的にどうかと思うのは、髭とピンパーネルだった。

　だって、髭もピンパーネルも、鎧よろいすら着ていないのに、矢の雨の中で平然としていたのだ。

　もちろん、ただ突つっ立っていたわけではない。

　ピンパーネルは、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザで、襲おそいくる矢をすべて正確に斬きり払はらっていた。矢どころか、雨あま粒つぶでもぜんぶ斬ってしまいそうな勢いだ。

　だが、髭はもっとイカれていた。この男は両の掌てのひらや手の甲こうで払うだけでは飽あきたらず、ときにはガシッとつかんで捨て、果ては顔面に飛んできた矢を歯で嚙み止めて、嚙かみ砕くだいてみせた。見世物でもあるまいし、そんな芸当を披ひ露ろうする意味がどこにあるんだか。

　髭の無む駄だな曲芸を目もく撃げきして呆あつ気けにとられている間に、射撃がやんだ。

「──ベアトリーチェ……！」平気かと尋たずねるつもりで名前を呼びながら、マリアローズはベアトリーチェから離はなれた。「……ああ」ベアトリーチェは何本もの矢が突き刺ささった盾を投げ捨てたが、様子がおかしい。怪け我がでもしているのか。しかし、ベアトリーチェには悪いけれども、多少傷を負っていようが、立ってい

られるかぎりは気にしていられない。マリアローズの予想どおりだと、これからが本番なのだ。

「気をつけて！　死霊術ネクロマンシーが──」

　だが、マリアローズの見通しは甘かった。マリアローズが警けい戒かいをうながしつつ、屋根の上のジェイと白髪の死霊術士ネクロマンサー──それから、いつのまにあそこまで上ったのか、彼らを両りよう脇わきに従えているＳＩＸの姿を見たときには、もう本番は始まっていたのだ。

　できたてほやほやの射殺体も、番人の剣けんに倒たおれたＳｍＣの死体も、ＳｍＣによってたかってぶち殺された番人の死体も、皆で仲よく起き上がっていた。

　その数──とてもじゃないが、数えきれない。

「Ｇｉ□ＨｙａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨｙａａａａａｈ……！　踊おどれ、踊れ、踊りやがれェェェＹｅａｈ！　ポンポコ虫ども！　俺好みの粋ＣＯＯＬでＦ×ＣＫな糞くそ舞ぶ台たいでなァ……！　ＧｅＨｙｏＨｙｏＨｙｏＨｙｏ……！」

　そして、ＳＩＸがジェイの肩かたを抱だきながら体をのけぞらせ、とんでもない大声をあたり一帯に響ひびき渡わたらせた。

「聞けェェイ！　我がエェェス・エェェェム・シィィィの愛いとしい愚おろか野や郎ろうども……！　我わが輩はい海より深く広い愛！　愛ッ！　アァァ───イッ！　愛に充みち満ちた御み心こころ持ちたる大君主オーヴアーロードなりィィ！　逃にげ散ったキン●マなしの馬ば鹿かマラども！　今すぐ戻もどってきて銀ぎん虱じらみどもをぶちのめせば、しょうがねえから許してつかわそう！　勿もち論ろん戻もどってこない阿あ呆ほうは、一人残さずあとできっちりキチキチ捜さがしだして、八つ×八つ＝六十四つ裂ざきだァァァ！　Ｇｙａ□ＨａＨａ……！」

　効果は絶大だった。

　散り散りになって鳳ほう凰おうの間から遠ざかろうとしていたＳｍＣどもが、大挙して戻ってくる。

　さらに、上の屋根から下の屋根へを伝って降りてくる黒ずくめの者たちは、回転式ラニング連発弩フアイヤをぶっ放した連中か。

　もちろん、大勢というべきか、大量というべきか、動く死体リビング・デツドも襲いかかってくる。

　というか、やはりこいつらが一番の問題だろう。ちょっと前まで肩を並べて戦っていた仲間が、いくらすでに死んでいるとはいえ、死霊術ネクロマンシーに操あやつられているとはいえ、剣と盾を手に向かってくるのだ。一号区会戦に参加した番人たちは、味方の動く死体リビング・デツドに苦しめられた経験があるようだが、かといって慣れるものでもないだろう。マリアローズたちにとっても、事情はたいして変わらない。普ふ通つうの敵を相手にするより、遥はるかにずっとやりにくいに決まっている。



　事実、マリアローズたちの周りで起き上がった動く死体リビング・デッドが、五、六、いや、七か。

　ＳｍＣもふくんでいたが、一いつ斉せいに押しよせてきた彼らにどう対処すべきか。

一瞬、迷ってしまったのは、マリアローズだけではなかった。本来であれば、彼らを一いつ蹴しゆうできるはずのピンパーネルや髭ひげですら、すすんで前に出ようとはしなかった。ベアトリーチェともう一人の大柄な番人に至っては、動く死体リビング・デツドの中に同じ隊の者が混じっていたらしく、「ランデルー！」と、たぶんそいつの名を呼んであとずさった。

で、そのランデルーは本当にものすごく近くにいた。ランデルーはベアトリーチェと一いつ緒しよにマリアローズたちと合流した番人の一人だった。彼は不幸にもこれまでの戦いの中で盾たてを失っていて、回転式ラニング連発弩フアイヤの斉射から身を守るすべを持たなかったのだ。それでも、剣だけはちゃんと握にぎっていた。

その剣を、大柄な番人に振ふり下ろした。斬ざん撃げきは鎧に弾はじかれたが、ランデルーは怯ひるんだ大柄な番人に突っこんでいって押し倒した。「──ええい！」髭がランデルーを後ろから抱かかえ上げ、千鳥ヶ池に放ほうりこんだのはようやくそのときだった。

しかし、ランデルーはすぐに池の中から顔を出して、またこっちへ向かってこようとしている。その前に他の動く死体リビング・デツドたちが襲いかかってくる。千鳥ヶ池の向こうからも、ＳｍＣどもが戻ってきつつある。鳳凰の間から黒ずくめ連中もくる。

周りは敵だらけだ。

ＳＩＸにさんざんかき回されたおかげで、マリアローズたちだけでなく、味方は分散し、孤こ立りつして、包囲されている。

最初からＳＩＸはこれを狙ねらっていたのか？　まんまと嵌はめられた？　僕たちはＳＩＸの策略に踊らされていただけのポンポコ虫とやらにすぎないのか？

ただ、それでも、まだ、絶対的な真理のように変わっていない事実がある。

トマトクンは回転式ラニング連発弩フアイヤの斉射を浴びせられ、それを防いでいる間にＳＩＸに置き去りにされたらしい。まだ千鳥ヶ池の中にいたが、鳳凰の間へとまっしぐらに突き進もうとしている。その全身鎧よろいの形が変わっていた。鎧の背中の部分が盛り上がって頭を覆おおい隠かくし、全体的な印象も猛たけ々だけ

しさを増していた。

　前にも一度、Ｄ９喪そう神しん街オレストロでレディ・麟リン霊レイと戦ったときに見たことがある。

　あとで、あれはいったい何でどういう仕組みなのかとカタリがしつこく尋ねていたが、トマトクンは「俺もよく知らん」の一点張りでちゃんと答えなかった。

　その言葉が本当なのかどうかはわからない。

　とにかく、トマトクンは今、あのときと同じ格好になって、群がる動く死体リビング・デッドを飛び越こえ、蹴け飛とばしながら、鳳凰の間を目指していた。

　結局、何があってもこれだけは変わることがないのだ。ＳＩＸを殺せば、この戦いは終わる。だからトマトクンは、とにかくＳＩＸをしとめようとしているのだ。勝利するために。マリアローズたちは、トマトクンを掩えん護ごしなければならない。どうやって……？

　そうして考えを巡めぐらせているわずかな間にも、動く死体リビング・デッドが襲おそいかかってきていた。

「──くうっ！　すまんなあ、恨うらまんといてくれよ！」マリアローズの左側をカバーしてくれているカタリは、イノイチ、ロノニーで動く死体リビング・デッドに斬きりつけるたびに詫わびている。後ろでサフィニアを庇かばって極限クライマックス九手棍ナインポールを振りまわしているユリカも、「ごめんなしゃい……！」と謝りながらだから、いかにもやりづらそうだ。髭でさえ「むむむ！　何と罰ばち当たりな！」といった具合で、接近してくる動く死体リビング・デッドを投げ飛ばすだけに終始している。大おお柄がらな番人を助け起こしたベアトリーチェはマリアローズの右側についたものの、剣けんを構えるだけで何もできないでいた。

　そんな中でピンパーネルだけは、動く死体リビング・デッドだろうが黒ずくめのＳｍＣだろうが、近づいてくる者は容よう赦しやなく解体していた。

　ただし、あくまで近づいてくる者だけだ。ピンパーネルは迷っているようだった。きっと、マリアローズと同じことを考えているの

だろう。トマトクンの手助けをしないと。だが、ピンパーネルにしてみれば、マリアローズたちのことも気になっているのかもしれない。

　その証しよう拠こに、最前列のピンパーネルは、マリアローズたちの方をちらりとうかがって、トマトクンの方へと目をやり、さらにＳＩＸがいる鳳凰の間を見た。

　ＳＩＸがトマトクンを右手の人差し指で示したのはそのときだった。

「ＨｙａａａＨａａａａａａａｈ……！　でもねえ、お前だけはァァァ――――ッ！」

　ＳＩＸは突つきだした右手に左手を重ねあわせ、高くかかげた。

　すると、あの紐ひもが絡からみつき、巻きついて、ＳＩＸの両りよう腕うでは一本のどでかいドリルと化した。

「お前だけは俺がジキジキに殺ォォォ――――スＵＵＵ……！　お前さえ始末してしまえば、あとは何とでもなるからねえ！　何のつもりが知らないが、お前が昔のデインジャルォスでサヴィッジなお前をさらけ出す前に、俺が！　このＣＯＯＯＯＯＯＯＬなＤＲＲＲＲＲＲＲＲＲＩＬＬで！　ＫＩＬＬ　ＹＯＵ！　Ｆ×ＣＫ　ＹＯＵ！　ＬＯＶＥ　ＹＯＵベイベェ！　見ろ！　進化したこの俺を！　俺はもうあの頃ころの俺じゃねえ……！　そして食くらうがいい！　かなり体にヘヴィだからやりたかァないが、しぶといお前はこうでもしねえと殺せまい！　いくぞ！　ラァァイトニィィィ――ンスパァァァクッ！　Ｓ．Ｉ．Ｘピィィ――――ィィィンン……！」

　ＳＩＸの髪かみの毛が逆立ち、全身からバチバチバチバチ細かな稲いな妻ずまが放出された。

　それが呼び水になったとでもいうのか。

　雨はすでに小降りになり、風も弱まりつつあったのに、最後の力を振りしぼったように雷らい光こうが閃ひらめいて―落雷した。雷かみなりがＳＩＸを直撃したのだ。完全に、まともにあたった。これは、死ぬ。死なないはずがない。いくら何でも死んでしまうはずだ。

　しかし、ＳＩＸは雷撃をおのれの力に変えたかのように、高く、高く、高く、高く、高く、高く飛び上がり、超ちょう々高速で回転しはじめた。

　本当にドリルだ。空飛ぶドリル。フライングＳＩＸドリル。

　フライングＳＩＸドリルは、すでに鳳ほう凰おうの間を目前にしていたトマトクンめがけて急降下してゆく。

　トマトクンも、だが、よけようとはしない。大剣で迎むかえ撃うつ。

　激げき突とつした。

　弾はじけ飛んだ。二人ともだ。ＳＩＸは空中へ。トマトクンは十メーテルほども吹ふっ飛ばされて、千鳥ヶ池へ。しかし、ＳＩＸはすぐにまたフライングＳＩＸドリルとなって、トマトクンに襲いかかる。トマトクンも瞬しゆん時じに飛び起きて、また激突。「ニュイイィィ――――ンン！」「があああああああぁぁぁっ……！」フライングＳＩＸドリルの先せん端たんとトマトクンの大剣とが押しあい、せめぎあって、ついには反発した。が、一瞬後にはまた同じ衝しよう突とつが繰くり広げられる。

　呆ぼう然ぜんとするしかなかった。トマトクンの手助けをする、だって？

　無理だ。できるわけがない。ピンパーネルでも、あの二人の戦いには介かい入にゆうできないだろう。

　もっとも、トマトクンとＳＩＸが超自然現象めいた激げき闘とうを演じていようと、マリアローズがほうけていようと、人間はともかく、動く死体リビング・デッドには関係なかった。

「――みごっ！　た、こなくそっ！」カタリが謎なぞの言葉を発して、左手側から突っかかってきた動く死体リビング・デッドの懐ふところに入りこみ、突き倒たおしざまにイノイチで首を叩たたき落とした。たぶん、マリアローズと同じく、トマトクンとＳＩＸの戦いに気をとられていたのだろう。かなり慌あわてていたように見えたが、マリアローズはカタリ以上に焦あせった。

　ふっと右を向いたら、目と鼻の先で番人の動く死体リビング・デッドが剣を振ふり上げていたからだ。

　マリアローズはほとんど棒立ちになった。瞬間的に、あ、もうだめだ、と思ってしまった。

　実際、その瞬間は、髭ひげもピンパーネルもユリカもサフィニアさえも、動く死体リビング・デッドやらＳｍＣやらの対処に大わらわだった。誰だれもマリアローズを助けられない。というか、所しょ詮せん、誰かに助けてもらわないと、僕はダメなのか。まったく、本当に情けない。死ぬしかない。あきらめよう。

　だが、まさに今、マリアローズに剣を振り下ろそうとした動く死体リビング・デッドの右腕を、後ろから誰かがつかんで止めた。

「……マ……リアローズ……！」「━あ……！」マリアローズは即そく座ざに状じよう況きようを把は握あくして、その動く死体リビング・デッドに体当たりを食らわせ、押し倒して、兜かぶとを引き剝はぎ、奪うばいとった剣をそいつの首に押しあてて体重をかけた。番人のモトロール刀は片かた刃ばだったから、峰みねに左手をかけて、さらに押した。それでもうまく切れないので、足をかけた。早くしないと。早く。早く。「うああ」とか「あああ」とか声も出していたと思う。途と中ちゆうで自分が何をやっているのかわからなくなりかけたが、ゴリゴリした硬かたい部分を突破すると、ようやく動く死体リビング・デッドは動かなくなった。

　そうして手も顔も血まみれになったマリアローズは、ハアハア荒あらい息つきながら、これくらいで息を乱してどうすると思い、こみ上げてくる吐はき気を抑おさえつつすぐさま立ち上がって、命の恩人であるベアトリーチェに「ありがとう」を言いかけ、そんなことを言ってる場合じゃないと思いなおし、あたりを見まわそうとして、崩くずれ落ちるように倒れるベアトリーチェの姿を視界の隅すみでとらえた。

「え……？」

　どうして？

　ベアトリーチェは横向きに、少し体を折って倒れている。

　何で？

　ベアトリーチェの左太ふと腿ももの表側と胸と腹部から斜ななめに突きでている棒は、何？

　矢だ。鎧よろいの隙すき間まから血液が流れだしている。そういえば、回転式ラニング連発弩フアイヤの斉せい射しやが終わったあとだった。盾たてを投げ捨てたベアトリーチェの様子が変だった。怪け我がでもしているのかと思った。でも、立っていられる程度の怪我なんだろうと。

「ベアトリーチェ……！」抱だき起こそうとしたが、ベアトリーチェの体には力がなかった。兜の面めん頬ぽおを上げると、青白い顔があらわになった。半開きの目がマリアローズを見た。唇くちびるが動いた。なぜ、彼女は微笑ほほえんでいるんだろう？

「……お前の……ため、に……わたし、の命が、使え……なら……」

「何……何、ばかなこと……言ってるんだよ、何を──」

「……かあさ、ま……も、きっ……褒ほめ、て……れ…………る………………」

　ベアトリーチェそっと目をつぶって、それきりだった。

　途切れた。

　命が。

　これが、ベアトリーチェが選んだ、命の使い途みち……？

　マリアローズは正確に二回、深い呼吸をしている間、何も考えていなかった。頭の中は完かん璧ぺきなまでに真っ白だった。その間に殺されずにすんだ幸運に感謝すべきだろう。いや、仲間たちが守ってくれていたのだ。カタリ、髭、ピンパーネル、ユリカ、サフィニア。もう周囲にいる味方はＺＯＯの皆みなだけだった。間もなく、とって返してきたＳｍＣが押しよせてくる。トマトクンはまだＳＩＸと一いつ騎き打ちの最中だった。今、このとき、僕に何ができるのか。僕たちは何をするべきなのか。ベアトリーチェに守ってもらったこの命を、どう使うべきか。

　答えは出ていた。

「──僕が合図したら、髭が先頭、ピンパーネル、僕の順でまっすぐ鳳ほう凰おうの間を目指す！　カタリとユリカ、サフィニアは血路を開く手伝いを！」

　返事は待たなかった。マリアローズはベアトリーチェを地面に寝ねかせると、両手で印を結び、半眼で焦しよう点てんをぼかした。「僕は強い。強い。強い。強い。弱くなんかない。強い。誰よりも強い。強い。強い。強くなる。絶対に強くなる。強く……強く……」自分の中のどこかで、何かの歯車が噛かみあった。倍化完了ブーステツド。あふれてくる。力だ。際限がない。僕は強い。強いんだ。

　そうだ。何でもできる。たとえそれが暗示術のおかげで、一時的なことだとしても。

　マリアローズは叫さけんだ。

「ＧＯ……！」「□□爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」マリアローズの号令にあわせて、サフィニアが爆ばく雷らい索さくを発動させた。サフィニアの杖つえから放たれた幾いく条じようもの雷いかずちが、右側からつめかけてこようとしていたＳｍＣどもをとらえ、感電させて、足止めする。「どりゃあ……！」カタリは後ろからサフィニアに襲おそいかかろうとしていた動く死体リビング・デツドをめった斬ぎりにし、ユリカは「破は汰た！　破汰汰ぁ！　離りゃぁ……！」と極限クライマツクス九手棍ナインポールを縦じゆう横おう無む尽じんに振ふりまわして、近づいてくるものを次から次へと転てん倒とうさせた。

　そうして作った道を、髭が突つき進む。髭の巨きよ大だいな背中をピンパーネルが追い、その後ろにマリアローズがぴったりついてゆく。髭の大おお股またも、ピンパーネルの俊しゆん足そくも、今のマリアローズにとっては物足りないくらいの速度だ。

「どけどけどけどけどけ……！　拙せつ僧そうを邪じや魔すること罷まかり成ならぬ……！」

　だが、髭の巨きよ体たいが生みだす突とつ進しん力は有効だった。髭が数体の動く死体リビング・デツドをはね飛ばし、立ちはだかった黒ずくめを唸うなる鉄てつ拳けんの一いち撃げきで「粉フンッ……！」と殴なぐり殺すと、敵は明らかに怯ひるんだ。もともとたいした距きよ離りがあったわけでもない。鳳凰の間まではすぐだった。張りだしている屋根の下。マリアローズはまた叫んだ。「髭、踏ふみ台になって……！　ピンプはジェイを！」

「あいわかった……！」少しだけ身をかがめて立ち止まった髭の腰

こしを、背中を、肩かたを足場にして、まずはピンパーネルが跳とんだ。マリアローズも髭の腰、背中、肩、それから最後に頭頂部で弾はずみをつけてつづいた。「──ぬお！　拙僧の頭を……！」

　体が軽い。羽みたいだ。

　でも、これがいつまでもつか。

　そんなことは考えなかった。体を動かしている感覚もなかった。勝手に動いているかのようだった。マリアローズは自動的に五メーテル近くありそうな屋根のへりに両手をかけた。反動をつけてくるりと体を回転させた。華か麗れいに屋根の上に着地した。先行しているピンパーネルを追った。やつらはいた。ジェイがこちらに気づいたようだ。右手を振って何か投げてきた。ピンパーネルはよけるそぶりもなかった。雄おすのグレアデと雌めすのリレッザを抜ぬいてそのまま突っこんだ。マリアローズも同じだった。右肩を何かがかすめていったが気にしなかった。ピンパーネルは死霊術士ネクロマンサーを庇かばうように進みでてきたジェイとの間合いをあっという間につめた。雌のリレッザとジェイの右手に握にぎられた釘ネイルが交こう錯さくし、雄のグレアデがジェイの右みぎ膝ひざに突き立てられた。抉えぐって、引っかき回した。その雄のグレアデを持っている腕うでを、ジェイの釘ネイルが刺さし通したが、もう遅おそかった。「──ッ……！」バランスを崩くずしたジェイの首に、雌のリレッザがめりこんだ。ジェイはピンパーネルにのしかかられるような体勢になった。それでもまだねばった。半分ちぎれかけている左手でピンパーネルの左手をつかみ、雌のリレッザを何とか止めようとした。

　でも、終わりだ。ジェイ、あんたはもう動けない。

　ジェイとピンパーネルの脇わきをすり抜けたマリアローズは、まず左ひだり籠こ手ての矢を三連射して、頰、こめかみ、首、ぜんぶ死霊術士ネクロマンサーに命中させた。

「……何を……」

　死霊術士ネクロマンサーはようやく死人めいた顔をこちらに向けた。声も死人みたいだった。まあ、死人が喋しゃべるとしたらの話だが、もうすぐ彼は喋ることのできない本物の死人になるだろう。

　それはたやすいことだった。

　マリアローズはもう偽劫火を抜いていたし、走っていた。

　あと三歩だった。

　そこで、なぜか止まった。

　最初、理由がわからなかった。

　すぐに、もしかして倍化ブーストが切れたのかと思った。

　だが、それでは説明のつかないことがたくさんあった。第一、マリアローズの体が宙に浮ういた。マリアローズの視線は屋根の瓦かわらに落ちていて、少し下を見ると、自分の腹から何かが生えていた。いや、そうじゃない。逆だ。逆、といえるのかどうかわからないが、違ちがう。あれは突き刺さっているのだ。

　腕だった。

　たどってゆくと、そいつはマリアローズのすぐ横にいた。

　マリアローズはそいつの腕一本で、貫つらぬかれ、支えられていたのだった。

「お前ねえ。おかしな真ま似ねして、せっかくの勝負を邪魔するんじゃないよ。そういうのを無ぶ粋すいというんだ」

「──し……」

　ＳＩＸ。

　声を出そうとしたら、かわりにあたたかい液体が喉のどの奥からあふれてきた。

　何だか、全身が痺しびれているような、自分の体のはずなのに、そうじゃないような。

　そんなわけがないと無理をして力を入れようとしてみたが、偽劫火はもう手の中になかった。

　仕方なく、ＳＩＸの腕をつかもうとしたが、うまくゆかない。

「まったく、ジェイの片割れも死んじまいそうだし、この上、ボルフェンゲーテまで──」ＳＩＸがそこまで言ったとき、突然、死霊術

士ネクロマンサーが身体からだ中を痙けい攣れんさせたかと思うと、まともに立っていられなくなり、よろめいて、屋根のへりから落ちていった。「……何だそりゃ」

「……ざ、ざまあ……みろ……」

　我ながら、血を吐はきながらそう言ってやったのは、いい根こん性じようを見せたと思う。でも、本当にそんな気分だった。

　ざまあみろ。

　死霊術士ネクロマンサーがいなくなって、ジェイまで始末してしまえば、ＳＩＸにとってはさぞかし大だい打だ撃げきだろう。ピンパーネルだけでなく、ＺＯＯの皆みながいてはじめて可能な作戦だったとはいえ、マリアローズはよくやった。大金星だ。自分を褒ほめてやりたい。ＳＩＸに「ざまあみろ」の一言くらい言ってやりたい。

　ただ、おかげで余計にＳＩＸを怒おこらせてしまった。仕方ないが。

「ざまあみろ、だって……？　お前か。オイオイオォォイ、お前なのかよ？　お前みたいなチンケくせえヤツが？　ボルフェンゲーテを殺やったのか？　俺の計画をぶちこわして……！　何てことしてくれるんだ、このチビあばずれビツチめ……！」

　体の中からズルッと何かが抜けた。

　そのせいか。マリアローズは自分の体がやけに自由になるのを感じた。

　自由？

　いや、そんなにいいものじゃない。

　雲に覆おおわれた空と、線みたいな雨だけが見える。ここは空中だ。マリアローズは放ほうり投げられたのだ。

　ということは、落ちるのか。

　──勘かん弁べんしてよ。

　だいたい、僕、あばずれビッチなんかじゃないって……。

　しかし、落下はしたが、地面に叩たたきつけられることはなかったようだ。

　誰だれかに抱だきとめられたのか。砂の匂いがする。砂の？　それって、どんな匂いだろう。知らないが、何となくそんな感じがしたのだ。

　わかっていた。

　ピンパーネル。

　だから、そんな匂いを感じたのだろう。

「大だい丈じよう夫ぶデすか？」

「……うん……」

　いや、大丈夫じゃないけど。

　そう答えたあとのことはおぼろげにしか覚えていない。

「□□ＳＩＸ……！　貴様、マリアをやったな……！　許さん！　殺してやる……！」

　トマトクンの声がして。

「ナァァァァ――ニが許さんだァッ！　そいつはこっちの台詞せりふだよ！　ようやくこれからってときに、台無しにしくさりやがってＥＥＥＥ……！」

　ＳＩＸがまたフライングＳＩＸドリルと化し、トマトクンに襲おそいかかっていって。

　トマトクンは―でも、もうボロボロだった。鎧よろいはいつもの姿に戻もどっているどころか、あちこち瑕きずだらけで、トマトクン自身もかなりの負傷を負っていたはずだ。

　それでもトマトクンは、真正面からフライングＳＩＸドリルを迎げい撃げき―はしなかったようだ。トマトクンはＳＩＸの速度と軌き道どうを見きわめて、横に体を捌さばき、大たい剣けんで斬きる

のではなく、叩き落とした。「──Ｆｕ□Ｇｏ……！」

　ぼんやりと、それを見切るのに、トマトクンでさえ今までかかったんだろうと思った。

　それに──トマトクンも弱っていたが、実は、ＳＩＸも弱っていた。

　だから、撃げき墜ついされたＳＩＸは、悲鳴を上げる間も与あたえられず、即そく座ざにトマトクンの大剣でまっぷたつにされた。四つにされ、六つにされた。最終的に、八つに斬り刻まれた。

「──サフィニア！　こいつを燃やせ！」

　そして、トマトクンはそんな命令を出した。何もそこまでやることないんじゃないの。そんなふうに思わないでもなかったが、何か──考えがあるのだろう。きっと──

　で、サフィニアが呪じゆ文もんを詠えい唱しようする前、だった。

　彼が、鳳ほう凰おうの間から飛び降りてきた。

　そいつは、たしか──マリアローズが……回転式ラニング連発弩ファイヤの斉せい射しやの──

　そう、あのとき、見た男で──なぜかあのジェイとうり二つというか……そのままだった。

　皆が呆ぼう然ぜんとしている間に、どうやらそいつが──ＳＩＸの体の一部を持ち去ったらしい。

　何で、そんなこと──

　する……のかな。

　──わかんない……な。

「おい、マリアローズ……！」「マリアローズ！」「マリア！　マリアったら！」「……マリアさん……！」「マリアローズ！」「マリアローズ・さン……！」

どうして、みんなで僕を呼ぶの……？

僕は、ここにいるのに。

ちゃんといるよ。

でも、どうして暗いんだろう。

みんなの顔が見えないよ。

見たいなぁ。

みんなの顔を、もう一度、見たい。

――見たい、よ……。

それぞれの居場所

a sequel

　もうずいぶん前の話だが、水泳の練習をさせられたことがある。ラフレシア第三帝てい国こくでは多くの貴族の館やかたに屋内プールがあって、優ゆう雅がに泳ぐ技術も貴族の嗜たしなみなのだ。

　長い時間、泳いだあとで水から上がると、ものすごく体がだるくて、体重が倍以上になったかのように感じた。

　あの感覚に似ている。いや、もっとひどい。どうしちゃったんだろう。もしかしたら、ずっと眠ねむっていたのかもしれない。全身の筋肉がすっかり衰おとろえてしまうくらい、ずっと。

　とにかく重くて、重すぎて、瞼まぶたを押し上げることさえままならない。

　それでも、苦労してどうにかこうにか少しだけ目を開けると、人間の顔らしきものがぼんやりと大写しになった。

　きれいな顔だ。目をつぶっている。睫まつ毛げがとても長い。鼻筋がすうっと通っていて、肌はだは驚おどろくほどきめ細かい。落ちかかる黒くろ髪かみが頬ほおにくすぐったかった。

　それにしても、以前から思っていたが、どうしてこいつは何の匂においもしないんだろう。まるで生き物じゃないみたいだ。

　それより、どうしてこいつの顔がこんなに近くに？

　しかも、さらに接近してこようとして──

「……おい」

「ハッ？」

　やつは目をぱっちり開けると、そのまま数秒間、かたまっていた。やつの右手が左耳のすぐ横に、左手が右耳の横にある。寝しん台だいに寝ねかされ、無防備だった人間に覆おおいかぶさるような体勢で、こいつはいったい何をしようとしていたのか。

「──フッ」

　それからやつはゆっくりと体を起こして、前髪をかき上げた。

「いや、念をネ？　早くキミが目を覚まして元気になるように、念を送っていたんだヨ。こう、強く願い、祈いのるうちに、つい、サ……本当に、それだけだ。信じて欲しい。嘘うそなんかじゃないヨ？　だいたい、ボクはこれまで一度もキミに嘘をついたことがないだろう？」

「……さあ……どうだったかな……」

よくわからない。考えるのも億おっ劫くうだ。右手を額の上にのせてみたが、それだけでも重労働だった。瞼を開けつづけているのがつらい。意識がどこかに沈しずんでゆきそうだ。

「でも—」

やつがため息をつく音がした。

音。

ということは、自分はもう目をつぶっているのか。

「魚男からいろいろ聞いたけど、キミがこんなふうになるまで無理をするなんて、思っていなかったヨ。こんなことなら、ボクも仲間を安全な場所まで逃にがしたあと、泉セン里リに戻ればよかった。というか、結果的にキミに無理をさせることになった、あの野菜野や郎ろうの不ふ甲が斐いなさが一番の問題だネ。もっとやるだろうと見込んだのにサ。とんだ期待はずれだヨ。やっぱりあの男にキミを任せておくのは不安だな。ねえ、マリア、どうだろう。これを機会にクランなんか抜ぬけて—マリア？」

「……なに……」

「あ、いや。聞いてるのかな、と思ってネ」

「きいてない……」

「聞いているじゃないか」

「ねむい……」

「そっ—か……そうだよネ。ごめん、ボクが悪かった」

やつは少しめくれていた薄うす手での羽はね布ぶ団とんとタオル

ケットをかけなおしてくれたようだ。

　そして、額の上にのせていた右手を、そっと握にぎられた。

　それがとてつもなく嫌いやだったというわけじゃなくて。

「……僕……」

　がんばってどうにか薄うす目めを開け、やつを見た。

「……抜けないよ、ＺＯＯは……」

　なぜか、やつは微笑ほほえんだ──ような気がする。

　右手は静かに、やさしく、丁てい寧ねいに、羽布団の中に収められた。

「とにかく、よかったヨ。ちゃんとキミにまた会うことができて──」

　まあ、そうだね。

　そこで意識が深い穴に落ちこんでいった。

　何もない、かぎりなく無に近い眠りが、どれくらいつづいたのか。

　わかるわけもないが、次に目が覚めたときは、だいぶマシになっていた。

　少なくとも、目を開けるのに苦労することはなく、自分が絹みたいにさらさらした生き地じのパジャマを着ていることも、ここがトマトクンの家の一室らしいことも、すぐに理解した。

　中央に寝台が置かれ、あとは高そうなサイドボードとチェストと椅い子すがあるだけの──といっても、十分すぎるほど広く、日当たりのいい部屋だ。

　寝台の脇わきの椅子に、暗青灰色スチールブルーと黒の僧そう服ふくを身にまとった髭ひげが腰こしかけて、腕うで組ぐみをしていた。

　目が、あった。

　しかし、髭はただじっとこちらを見つめているばかりで、声を発しようとしない。

　仕方ないので、こっちから挨あい拶さつしてみた。

「……おはよう」

「うむ」髭は腕組みをといて髭をしごいた。「──どうだ。体の具合は」

「どう……だろ。うん。さっきよりは、何となく」

「さっきと申すのは、アジアンとかいう男が会いにきておったときのことか」

「あー……そうかな？　あんまりはっきり覚えてないんだけど」

「あれは夜中であったからな。もう半日以上たっておるのだぞ。だが、まあ、あわせて三十時間くらいか」

「僕」一いつ瞬しゅん、逡しゅん巡じゅんした。「──もしかして……死んだの？」

「馬ば鹿かを申すな」髭は少し眉まゆ根ねをよせた。「拙せつ僧そうとユリカ、医術式を使える者が二人もおったのだぞ。むざむざと死なせるものか。とはいえ、お前が自分にかけた暗示術のせいもあってか、ずいぶんと衰すい弱じゃくが激しかった。最初の数時間は生死の境をさまよっておったと申しても過言ではない。また、目覚めるまで少々時間を要したのは、麻ま酔すいの影えい響きようもあったであろうな」

「そっか。やばかったんだ、かなり」

「何、死んだら死んだで、拙僧が腕によりをかけて蘇そ生せい式を施ほどこすまでだ──と、言いたいところだが」髭は不意に表情をひきしめた。「本来、死した生命を復活させるは世のこ理とわりに反した行こう為いであり、罪ざい業ごうなのだ。たとえば、蘇生式では、どうにも理解しようのない失敗が時に起こる。そのような事例は非常に稀まれで、たいがいは何らかの過誤が原因なのだが、完かん璧ぺきに行われたはずの蘇生式が、なぜか成功しない場合も現実にあるのだ。まさしく、神──高次の存在による悪戯いたずらとしか思えぬ。それゆえに、拙僧らのごとき僧そう侶りよは神に仕え、

日々贖しよく罪ざいの祈りを捧ささげておる。しかし、次の蘇生式で神の裁きが下りないとはかぎらぬ。カタリなどには、日ひ頃ごろからよく言い聞かせておるのだがな。あれは懲こりぬ男ゆえ」

「脳が魚レベルだしね」

「まったくだ」髭は少しだけ笑った。「いずれにせよ、死なずにすむのであれば、それに越こしたことはない。思えば、拙僧が医術式を学んだ動機もそこにあった。祭さい壇だんなどという仰ぎよう々ぎようしい装置を用いる蘇生式では、たとえ戒かい律りつを破ったとしても死に瀕ひんしておる生者は救えぬからな」

　それから髭はゆっくりと立ち上がり、自分で肩かたをもみながら首を回した。もしかしたら、そうとう長い時間、座っていたのかもしれない。

「さて、皆みなを呼んでくるとしよう」

「あ──」マリアローズは寝しん台だいの上で上半身を起こし、部屋から出てゆきかけた髭を呼び止めた。「あの、さ……」

「どうした」

「え、と……僕、ほら、これ」視線で示したパジャマはめちゃくちゃでかくて、袖そでと裾すそを無理やりまくって折ってある。サイズ的に、さすがにトマトクンや髭のものではないだろうが、当然、マリアローズのものでもない。

「それはきゅーの寝ね間ま着きだが」

「……あの生き物、パジャマなんか着るの？」

「寒い季節だけのようだがな。で、それがどうかしたのか」

「あ、や、その……」どう訊きいたものか迷った。だが、どうもこうもない。マリアローズは羽はね布ぶ団とんを引きよせて顔を半分隠かくし、上目づかいで髭を見た。「──着がえ、誰だれがやったのかなー、って……」

「拙僧だ」髭は答えたあと、目を伏ふせて、短くため息をついた。「ユリカより拙僧の方がよいかと思ったのだ」

「そ、それは……そう、かな。あ、あはは……」

　でも、下着までかえることはないのに。いや、お腹に穴をあけられたのだ。ひどい出血だったはずだし、雨にも濡ぬれていたし──仕方ないのか。

　マリアローズが唇くちびるのかわりに布団の端はしを噛かんでいると、髭はばつが悪そうに一つ咳せき払ばらいをした。

「医術式を行う者にも、神に仕える者にも、守秘義務というものがある。安心するがよい」

「……うん」

「皆を呼んでこよう」

　そうして髭が出てゆくと、入れかわりでトマトクンが部屋に入ってきた。どうやら、たまたまマリアローズの様子を見にきたところだったらしい。

　トマトクンは珍めずらしく鎧よろいを身につけていなかった。いい具合に色落ちしたジーンズを腰ではき、体にフィットした黒いタートルネックのセーターを着ている。

「もう起きて大だい丈じよう夫ぶなのか」

「え？　うん、まあ……」

「そうか」トマトクンはさっきまで髭が座っていた椅子に腰を下ろし、膝ひざに肘ひじをついて、組んだ両手の上に顎あごをのせた。「それならいいが……」と思ったら、落ちつかなげに手をほどいて口をへの字に曲げ、片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつり上げて後ろ頭をかいた。「いや、よくもないな。一時は本当にやばかったんだぞ。もとはといえば、俺がＳＩＸのやつをさっさとしとめられなかったせいだが、それにしたって──」

「……ごめん」

「べつにお前が謝る必要はない」トマトクンはむっとしたようだった。もっとも、その怒いかりはマリアローズに向けられたものではないだろう。「お前にＺＯＯを任せたのは俺だしな。お前は自分で考えて、判断して、行動したんだ。それが間ま違ちがってたわけ

じゃない。ただ、俺は……何だろうな。よくわからんが……そうだ。要するに、俺は、お前があそこまでやるとは思ってなかったんだろう。つまり──」

　トマトクンは「ああ、くそ！」と自分の後頭部を両手でバシバシ叩たたいてから深呼吸をした。

　それから、身を乗りだしてきて、マリアローズの頭を強めに撫なでた。

　トマトクンの肌はだは浅黒いからわかりづらかったが、ほんの少しだけ頰ほおに赤みがさしているように見えた。

「よくがんばったな、マリア」

　そんな言葉はまるで予想していなかった。

　がんばった？　僕が？　たしかに、がんばったけど。

　でも、面と向かって言われると、照れくさくてしょうがない。

「──や、やめてよ、こ、子供じゃないんだからさ！　僕は役目を果たしただけで、そんなのぜんぜん当たり前のことだし……」

　マリアローズはトマトクンの手を振ふり払おうとした。だが、トマトクンは悪戯いたずら心に火がついたのか、ヒヒヒと笑いながら、両りよう腕うでで抱かかえるようにして頭を撫でまくる。マリアローズの髪かみの毛けはぐしゃぐしゃだ。「ちょっと！　痛いって！　放せ、この……！」「痛いってことはないだろう。ちゃんと力は加減してるぞ」「きみは無む駄だに体がバカでかいから、加減も大おお雑ざつ把ぱなんだよ！　放せってば！」「おいおい、あまり暴れるな。すっかり元気みたいだが、いきなり無理をするとよくないんじゃないか」「きみのせいだろ！　あー、もー、お風ふ呂ろにも入ってないのに、髪の毛汚きたないのに」「気にするなよ」「気にするよ！　放せってば……！」

　ドアが開いたのは、マリアローズが布団をはね上げてトマトクンの顎に蹴けりをお見み舞まいしようとして、見事にかわされた瞬しゆん間かんだった。

「……何しとるん」

　部屋に入ってきたカタリの魚顔が強こわ張ばって、目が点になっている。その後ろのユリカは持っていた洗面器を取り落としそうになり、それを間かんーいつ髪ぱつ、ピンパーネルが受けとった。一番後ろの髭ひげは無反応だったが、その前のサフィニアは何とも表現しがたい微び妙みような表情をしていた。

　まあ、それもやむをえないかもしれない。

　何しろ、マリアローズはほとんど寝台の上でトマトクンにのしかかられているような状態だったし、さらに悪いことには──あくまで蹴りをかわされた結果だけれども、トマトクンの左ひだり肩かたにマリアローズの右足がかかっているという、どうにもおかしな体勢になっていた。

「うむ」トマトクンは丁てい重ちようにマリアローズの右足を外して寝しん台だいから離はなれ、人差し指の先で鼻の頭をかいた。「寝ねてばかりいたせいで体がなまってるから、ストレッチの手伝いをしてくれとマリアが頼たのむもんで──」

「頼んでません」

　マリアローズは寝台の上に正座して、おそるおそるサフィニアの顔色をうかがった。でも、どうしておそるおそる？　当たり前だが、やましいことは何もない。それなのに、サフィニアと見つめあう格好になると、何となく気まずくて、かといって目をそらすこともできず、マリアローズは困り果てた。

　その様子がおかしかったのだろうか。結局、サフィニアが小さく吹ふきだして、前に進むようユリカやカタリをうながしてくれたので、助かった。

「マリア」ユリカがピンパーネルから渡わたされた洗面器を椅い子すの上に置き、ぬるま湯にひたしたタオルをしぼってマリアローズに差しだした。「とりあえじゅ、これで顔だけでもふいて」

「あ、うん、ありがと」

　マリアローズが言うとおりにしている間に、ユリカは寝台の布団をめくってたたんだり、枕まくらの位置をなおしたり、ぱたぱたきびきびと立ち働いている。顔をふき終えたタオルも、素す早ばやくやさしくひったくられた。変な言い方だが、大きくなったら、ユリ

カはきっとすごくいい奥さんになるだろう。これで料理がもうちょっと上手だったら、言うことなしなのだが。

「──で」カタリが行ぎよう儀ぎ悪く寝台に腰こしかけた拍ひよう子しに、マリアローズの体がちょっとだけ浮うき上がった。「もう大丈夫なんやな？」

「まあね」

「だが、拙せつ僧そうとしてはあと一日ばかり安静にしておることをすすめるぞ」

「しょうね。わたしも同感よ。じゅっと横になっていなくてもいいけど、今日くらいはここでゆっくりしていた方がいいわ」

「ほんなら、どや。夕方まで一ひと眠ねむりするなり何なりして、そのあとみんなでぱーっとやるっちゅうのは」

「……あの……それでしたら、わたしが夕食の用意を……」

「わたしも手伝うわ──といっても、サしやフィニアの邪じや魔まになるだけかもしれないけど……」

「そ、そんな……邪魔だなんて、ユリカも少しずつ上達していますよ……本当に……」

「せやな。少ぉーしずつやけどな」

「きみはいつになってもぜーんぜん人間に進化しないけどね」

「せやな。所しよ詮せん、魚類やからな。人間には──って、誰だれが魚類やねん！」

「アナたデス」と無表情のピンパーネルに指さされて、カタリは頭を抱えた。

「がーん。ピンプにまでゆわれてもうた……ピンプに、ピンプに、ピンプにぃぃ……！」

「や、今さらでしょ。誰が見たってきみは魚だもん」「しょうね」「……そうですね……」



「うむ。拙僧の故郷には転生信しん仰こうがあってな。拙僧は信じておらなんだが、お前の顔を見ておると、そのようなこともあるのかもしれぬと思われてくる。つまり、お前の前世は魚であったに違ちがいないと──」

「やかましいわボケ！　何が前世じゃ！　そしたらアレか、お前じぶんの前世は髭か！　それとも筋肉か！」

「ふむ。髭はともかく、筋肉ならば悪くはないな。ムフフ」

「前世ってそういうものなわけ……？」

　マリアローズが呆あきれながらそう言ったとき、部屋に風が吹きこんできた。

　見れば、トマトクンが開け放った窓を背にして、穏おだやかな笑え顔がおを浮かべていた。

　その風が心ここ地ちよくて、マリアローズは心底からほっとして、ふと、だが、はっきりと思った。

　ここだ。ここが僕の居場所なんだ。

　泉セン里リ襲しゅう撃げき戦における秩序モラルの番人・キーパーズの死者は九十三名にのぼり、そのうち三十二名は蘇そ生せい式の手も及およばなかった。決して小さな被ひ害がいではなかったが、彼らの犠ぎ牲せいは勝利という形で報むくわれた。少なくとも、番人たちはそう考えるだろう。

　ＳｍＣはＳＩＸが死亡。一人目のジェイは死亡。二人目のジェイはＳＩＸの遺体の一部──左ひだり腕うでを持ち去って行方不明。死霊術士ネクロマンサーボルフェンゲーテも死亡。その他の死者が二百六十四名。残りは、焼印組数十名が降こう伏ふくした以外、逃とう走そうした。

　もちろん、ジェイが中心となって、ＳｍＣが再編されるのではないかという懸け念ねんはあるものの、あの男にはＳＩＸほどのカリスマ性はないだろう。ＳｍＣがＳＩＸ時代の栄えい華がをとりもどすことはないのではないか。それが番人側や街の事情通たちの見解らしい。

　ちなみに、ジェイが二人いたことについては、ピンパーネルが面おも白しろい証言をした。

　ラハン大陸では、同じくらいの背格好の者を、アッサシンとして同じように訓練し、容姿を整形して、二人一組で運用するケースが稀まれにあるというのだ。その場合、互たがいに入れかわりながら一人は表に出て、もう一人は裏方に徹てつし、二人いることを周りに察知させないのが原則なのだという。

　あのジェイがまさにそうだったのかはわからない。ただ、ジェイがラハン大陸出身だという話はわりと知られていた。実際、ジェイと戦ったピンパーネルも、やつが元アッサシンかどうかについて、断定はしなかったが、否定もしなかった。

　ともかく、ＳｍＣはひとまず壊かい滅めつした。

　大Ｐ陸医Ｃ術士Ｍ会Ａに登録していないモグリの医術士の間では、《ＳｍＣ》の刺いれ青ずみ、焼印を消す商売が流行しているとの噂うわさもある。

　かわりに、ＤＩＥ、赤子同盟ＢＵ、ギャプ・ド・レエが幅はばを

利きかせ、さらには何と、あの王おう龍りゅうとＳ＊Ｋの龍州連合がＳｍＣなきあとの闇やみ市いちを手中に収めたという話も聞くが、秩序の番人の市中巡じゅん回かいも復活した。現金なもので、あのＳｍＣを倒たおした銀の軍団ザ・シルバリイに是ぜ非ひ入団したいと、入団希望者が激増しているらしい。

　ＺＯＯもすっかり有名になってしまった。

　特に、ＳＩＸを一いつ騎き打ちの果てに討うちとったトマトクンは、道を歩けば指をさされるわ、サインをねだられるわ、腕うで自じ慢まんに決けつ闘とうを申しこまれるわで、もともと目立つ格好をしているぶん、かなりたいへんなようだ。

　だが、マリアローズはそんなこともない。これでも一応、死霊術士ネクロマンサーを華か麗れいにぶっ倒したのだが、知る人ぞ知る活かつ躍やくにすぎないようだ。変化といえば、アサイラムを訪おとずれたとき、警護の番人に愛あい想そよく挨あい拶さつされることくらいだろうか。

「ま、その方がいいんだけどね。トマトクンなんか、すっごく窮きゅう屈くつそうだし」

「でも──」診しん療りよう室の窓まど際ぎわで椅い子すに座って煙草たばこをふかしていたモリーがそっと笑った。「見ている人はちゃんと見ているわよ。短い間で君は成長したわ。本当に」

「よしてよ。お世辞なんか言ったって、何もさせてあげないよ？」

「あら。世辞じゃなく本音だからこそ、本物の口説き文句になりうるのよ」

「口説かれても」

「わかったわ。だったら、こうしましょう。軽いキスは三千ダラー、ディープ・キスで五千ダラー、タッチモミモミありで一万ダラー、舐なめ舐めありで二万ダラー、何でもありありで三万ダラー」

「う。キスで三千……って、迷うわけないでしょ」

「じゃあ、せめて──」

　空のカップに煙草を押しつけたあとのモリーは、やたらと素す早ばやかった。

　気がつくとマリアローズは抱だきすくめられていて──やわらかくて、それでいて力強くて、あったかくて、いい匂においがして。

　どうしてだろう。

　涙なみだが出そうになった。

「これくらいなら、タダでいいでしょう？」

「……うん」マリアローズは目を閉じて、モリーの背中に手を伸のばした。「──じゃ、僕からも、おかえし」

　いつだったか、思ったことがある。モリーだって、誰だれかにやさしくつつんでもらいたいときがあるに違いない、と。

　あのとき、マリアローズはモリーを抱きしめてあげたかった。でも、できなかった。自分にはそんなだいそれたことなんかできないと思った。けれども、今ならできる気がした。

　マリアローズはぎゅっとモリーを抱き返して、しばらくそのままでいた。

　やがてゆっくり体を離はなすと、モリーの顔が真っ赤で、何だかとてもかわいらしかった。

「もしかして……照れてる？」

「……かしらね」

　モリーは髪かみの毛をさかんに指でつまんだり引っぱったりしながら、窓際の机の前に戻もどった。いつもみたいに冗じよう談だんか何かで返してくると思ったのに、やけに正直なものだから、調子が狂くるう。こんなとき、それとなく話題を変えたりできればいいのだろうが、あいにくマリアローズはそこまで器用ではない。

　もっとも、くすぐったいような、ちょっと息苦しいような沈ちん黙もくは、そう長くつづかなかった。

　ドアがノックされて、純白の女性用ナース・医術士帽キヤツプを

かぶり、同じ色の女性用ナース・医術士服ユニを着た若い女性が診療室に入ってきたからだ。

　ただ、その女性は医術士の格好をしているくせに、腰こしに剣けんをぶらさげていた。

　女性用ナース・医術士帽キヤツプからくすんだ金きん髪ぱつがこぼれている。

　瞳ひとみは深い青。だが、今はもう、あの何かを思いつめているような目つきではない。泉セン里リ襲しゆう撃げき戦で戦死して蘇そ生せい式を受けたあと、秩序の番人を辞やめてアサイラムに戻ってからの彼女は、全体的にやわらかい印象になった。

「何だ。まだいたのか、マリアローズ」

　硬かたい口調は変わらないが。

「……いちゃ悪い？」

「悪いさ。お前がいるかぎり、母様の仕事が停てい滞たいする」

「モリーは働きすぎだよ。ちょっと長めに休きゆう憩けいするくらい、べつにいいでしょ」

「心配しなくても、母様のスケジュールはわたしがちゃんとしっかり管理して、無理は絶対にさせない。わたしも医術式を教えてもらわないといけないからな。本当は幼い頃ころから学ぶものだから、今からだと、一人前になるまで十五年かかるかもしれないと言われてるんだ。その前に倒れられでもしたら困る」

「十五年……」

　気の長い話だ。

　でも、十五年後が当たり前のようにあって、そこにモリーがいて、ベアトリーチェがいる。

　それって、とても素敵なことなんじゃないか。

　マリアローズは少しだけ笑った。

「そっか。がんばってね。十五年」

「お前に言われるまでもない。それに、真ま面じ目めに努力を重ねれば、十五年が十四年になるかもしれない。十年で何とかなるかもしれないしな。さ、いいかげんお前は帰れ。母様、休憩はおしまいです。もうすぐＥＭＵのソマーズ技術部長がいらっしゃる時間じゃないですか」

「はいはい」

　モリーはため息をついて髪を引っかき回した。医術式の師し弟てい関係でいうと、モリーが師し匠しようでベアトリーチェが弟で子しだが、これではどっちが上かわからない。

　ただ、マリアローズにしてみれば、剣もそれなりに使えるベアトリーチェがモリーのそばにいてくれるのは、安心ではあった。ベアトリーチェはしっかり者で努力家で責任感も強いから、そのうちきっとモリーの仕事をいくらか肩かた代がわりするようになるだろう。そうしてモリーの負担が少しでも減り、ベアトリーチェも充じゆう足そく感をえるのなら、いいことずくめだ。

「じゃあ、ベアトリーチェがおっかないし、僕は帰るよ。モリー、また」

「またいらっしゃい」

　マリアローズはひらひら手を振ふるモリーに見送られ、ベアトリーチェとともに診しん療りよう室を出た。ベアトリーチェはこれから客人を出で迎むかえるらしく、正門まで一いつ緒しよだった。

　その間、何となくベアトリーチェが話しづらそうにしていたので、とりたてて会話はなかった。

　ベアトリーチェがようやく声をかけてきたのは、Ａ棟とうを出て正門の手前まできたときだった。

「──あ、そ、そうだ」

　足を止めたベアトリーチェにつられて、マリアローズも立ち止まった。

「え、っと……いや……」

だが、うつむいたり、口をぱくぱくさせたりしながら、なかなか意味のある言葉が出てこない。それでも待っていると、ベアトリーチェは意を決したように顔を上げた。

「こ、今度、昼でも一緒にどうだ？」

「昼って――お昼ご飯？」

「いや！　べつに！　二人きり、とかじゃなくて……ほら、お前の仲間と一緒でもいいし、母様も……わたしだって弁当くらい作れるし、これでも結構、上手なんだぞ？　あんまりちまちましたものは作れないけど、味はそんなに悪くない、と、思う、たぶん。だから……わたしは、お前以外、その……同年代の……そう、友人がいないし――」

「うん」

ベアトリーチェの自分への気持ちが本当はどういうもので、自分のベアトリーチェに対する気持ちが友情なのかどうか、マリアローズには判断がつかなかった。

あるいは、そうやって逃にげているだけかもしれない。おそらく、そうなのだろう。でも、ベアトリーチェとモリーには当たり前のようにある十五年後が、僕にもあって欲しい。十五年後、彼女たちと一緒にご飯を食べている。そんな光景が存在していて欲しい。

「わかった。今度、一緒にお昼でも食べよう」

「そ、そうか！　じゃあ、昼休みなら、いつでもいいから――」

求められても応じることのできない僕にとっては、贅ぜい沢たくな望みなのかもしれないけれど。

ベアトリーチェの嬉うれしそうな顔を見ていると、マリアローズの胸が少しだけ痛んだ。

致ち命めい的な痛みではないことだけが、唯ゆい一いつの慰なぐさめだった。

『薔薇のマリア　III．荒ぶる者どもに吹き荒れろ嵐』了

next A previous notice of the next volume

薔薇のマリアⅣ

十文字青 イラスト／BUNBUN



A BRAVE HEART OF REDROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

街に出現する異界生物たち。平穏が戻ったかと思われたエルデンに多発する怪事件。異様な雰囲気に街がざわめき立っていたころ、同様に色めき立っていたアンダーグラウンドでは大騒動が巻き起こり、その中心にはマリアたちの姿が！
何かがおかしい——!?
みんなが感じ始めた“胸騒ぎ”。
その正体とはなんと——!?

誇り高き仲間たちの物語、急展開の第4弾

スニーカー文庫

あとがき

昼すぎに起きてカーテンをしめきった暗い部屋でギターをかき鳴らして歌を作り、夜になると家を出て地下鉄で繁はん華か街がいに向かいました。それから、夏は溝ドブの匂においがして冬は氷点下まで気温が下がるいつもの場所で、たとえ誰だれ一人ひとりかえりみてくれなくても深夜まで、ときには朝方まで声を張り上げて歌いました。

僕は一人でした。歌を聴きいてくれる人がいても、結局、僕は一人でした。

僕の歌が誰にも届かなくなって、もしかしたら最初から届いていなかったのではないかと思うようになって、僕は歌をやめて小説を書きはじめました。『I』のあとがきで「気がつくと、ギターを弾ひくかわりにキーボードを打っていた」と書きましたが、本当は嘘うそです。僕は本当に嘘つきです。

僕は誰かに何かを届けたかったのです。受けとってもらいたかったのです。

僕の小説は誰かに届いているようです。そのことが僕にとっては救いです。

誰かに届いているかぎり、僕は小説を書くことをやめないでしょう。

十文字青です。『薔薇のマリア』の話を少しだけします。

実は、この『III』で、『Ver0』から始まって、『I』、『II』とつづいてきた一つのエピソードが終わることになります。

といっても、もちろん物語はまだ終わりません。むしろこれからが本番で、『IV』以降は新展開ということになります。僕の頭の中にある『薔薇のマリア』をすべて書ききることができるどうかわか

りませんが、何とか完走したいと思っています。僕はマラソンが苦手で、学校のマラソン大会はぜんぶ仮け病びようでさぼるか、だらだら歩いて最下位でしたが、今回はちゃんと最後まで、道があるかぎりは走るつもりです。

　それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして、今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、胸むねーいつ杯ぱいの感謝をこめつつ。

　またお会いしましょう。次は━たぶん、年内になんとか。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

III．荒あらぶる者ものどもに吹ふき荒あれろ嵐あらし

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　III．荒ぶる者どもに吹き荒れろ嵐』平成17年9月1日初版発行

平成20年1月30日8版発行